NYONINTAISHU

女人藝術

三週記念七月號

附録

女人大衆

日活超特作

慶安異説

素浪人忠彌

原作脚色監督　伊藤大輔

撮影　唐澤弘光

丸橋忠彌	大河内傳次郎
由比正雪	光岡龍三郎
奥村八郎右衛門	久米譲
松平伊豆守	葛木香一
忠彌の妻榮	伏見直江
冴の戀人七重	山田五十鈴
冴左右三郎	新入社　伊庭駿三郎
頭巾の男	高勢實
金井半兵衛	寺島貢
隱密彦次	尾上華丈



女人藝術第三卷七月號目次

—禁轉載—

讀者通信……(一〇九)　彙報……(一六二)　6號欄……(五三)

諸家芳箋……三十一氏…(九六)

本誌三週記念講演會豫告……(四七)

小說

行く者・歸る者……松田解子…(一四〇)

消え殘る生活……平林英子…(一三〇)

秘密命令……松村シズ子…(一一八)

私のはしがき……窪川いね子…(五九)

最初の保險詐欺—日本篇—……時雨…(五三)

雷雨—放浪記—……林芙美子…(六六)

結婚地獄……望月百合子…(一五一)

實話四篇

脫出—地獄の反逆者の績—……松村喬子…(一〇六)

裸を賣る……堀川登女…(九六)

おきんさんの死……園田蔦枝…(一一一)

不足税六錢……森温子…(一一四)

職場をめぐる(一九二八年のソビエット)……アンナ・カラワーエワ著　園田時子譯…(二)

最新

ソビエット・グラフ三十四枚



反動希望社一覧……素川絹子…（三六）

海の喚聲―歌……山鹿勁子…（一七）

明快な渦―川柳……井上信子…（五一）

煤けた部屋の集りで―詩……北山雅子…（七二）

出帆―詩……岩崎二二子…（七三）

論文

解放されたロシアの婦人……神近市子…（四八）

何を爲すべきか……中嶋幸子…（四三）

支配階級の攻勢―社會時評……永嶋暢子…（七四）

未開社會に於ける性と抑壓―3……B・マリノースキー 小林すみ子譯…（八〇）

映畫漫評……尾崎翠…（八六）

英國婦人の活動諸相―應接室……宮嶋新三郎…（九三）

廣島女人聯盟支部講演會……大谷藤子…（一六〇）

カット―深澤紅子・熱田優子・伊藤眞・H・Y

附録

女人大衆……

首が怖い―小説……中島芳枝…（二）

ソビエット・ロシアの婦人……神近市子…（六）

一生―長編小説4……時雨…（一〇）

追ひつく貧乏―歌……山川きよ…（五）

時の問題……（一四）

新しき日本のエレンブルグ
心朗かに強き新人

群司次郎正著

古き衣を脱ぎ捨てる勇氣のない女は馬鹿だ。破天荒の二作を未だ讀まざるものは古い衣をまとへるまゝの女だ。

卅五版

ミス・ニッポン

プチ・ブルジョアの女の苦惱を描いて嘗つてなかつた新しい傑作である。

定價一圓六〇錢
装幀村山知義



近刊

ミセス・ニッポン

プロレタリアの女と大都會と彼女達の職場に於ける受難を描いて必ずや大破紋を描く大作

定價一圓二〇錢
装幀未定

東京市京橋築地ビル
振替・東京八一三二二

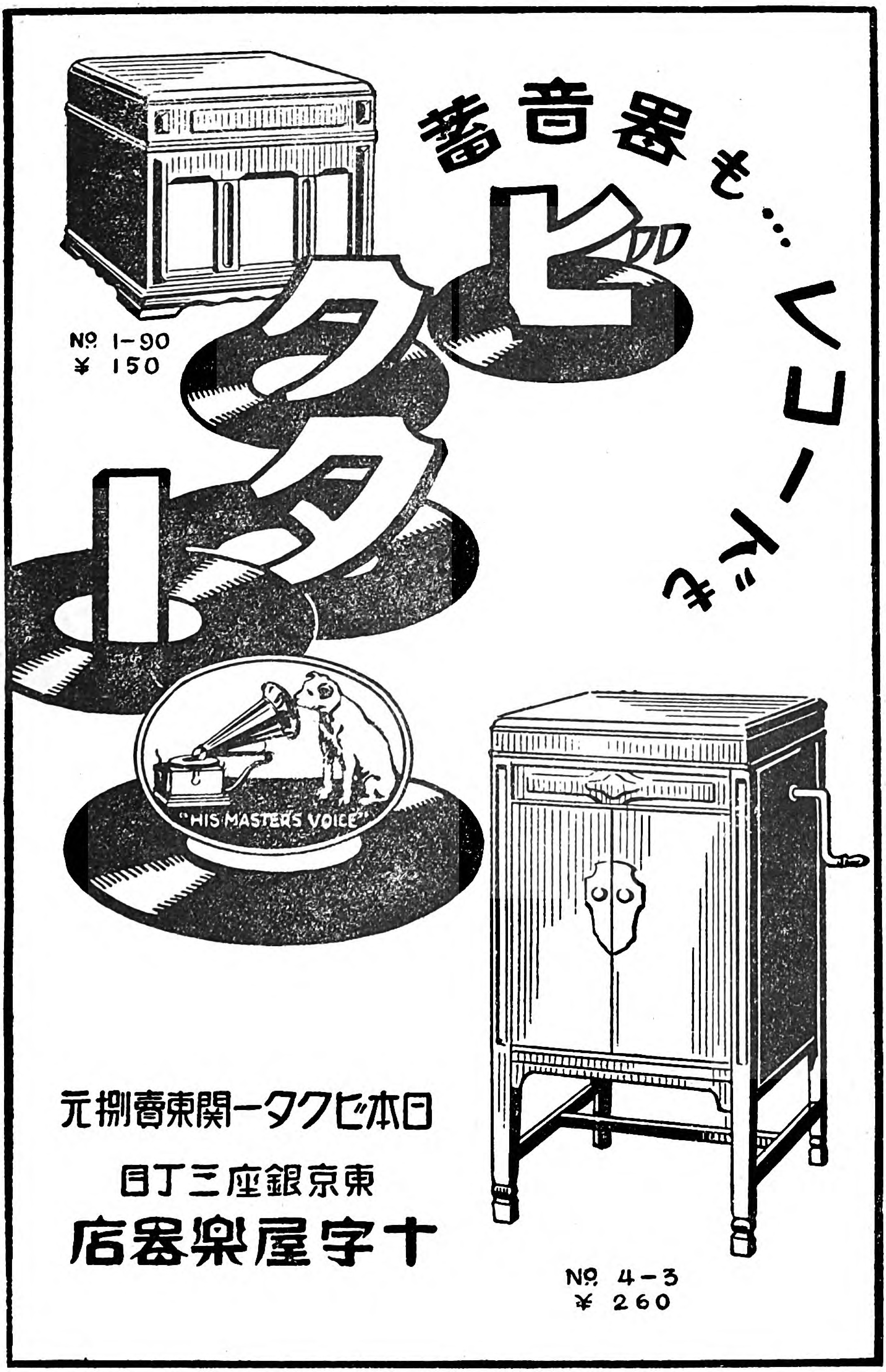
世界の動き社



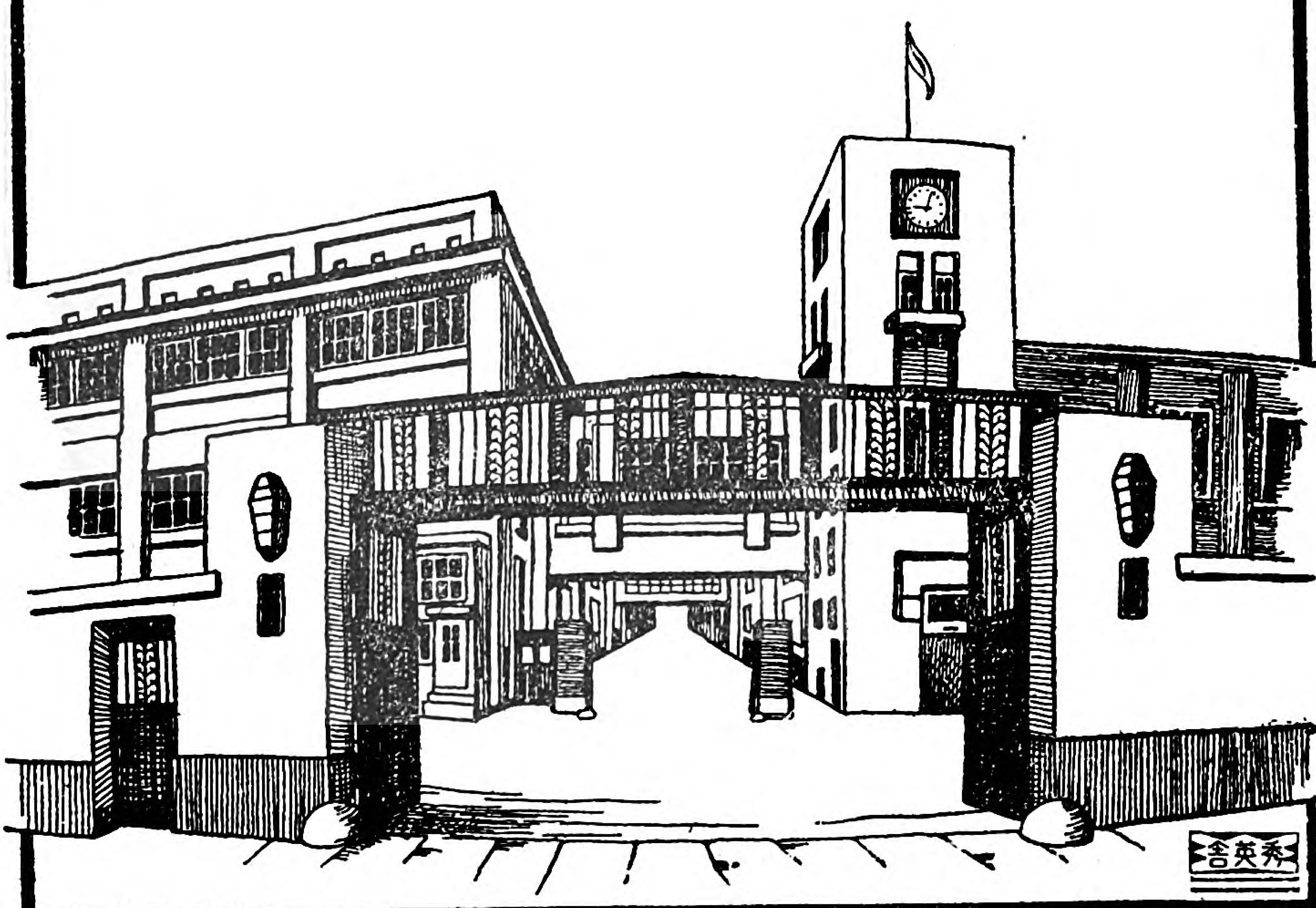
種蒔トラクターで仕事に出かける婦人勞働者——ソビエツト農場GIGANT(1930年3月)



五月二十六日東京市電従業員は
解雇者復職デモに市役所へ押しかけた
検束される市バスの女車掌さん――上
横暴な正服が用ひた催涙ピストルの目つぶし――下

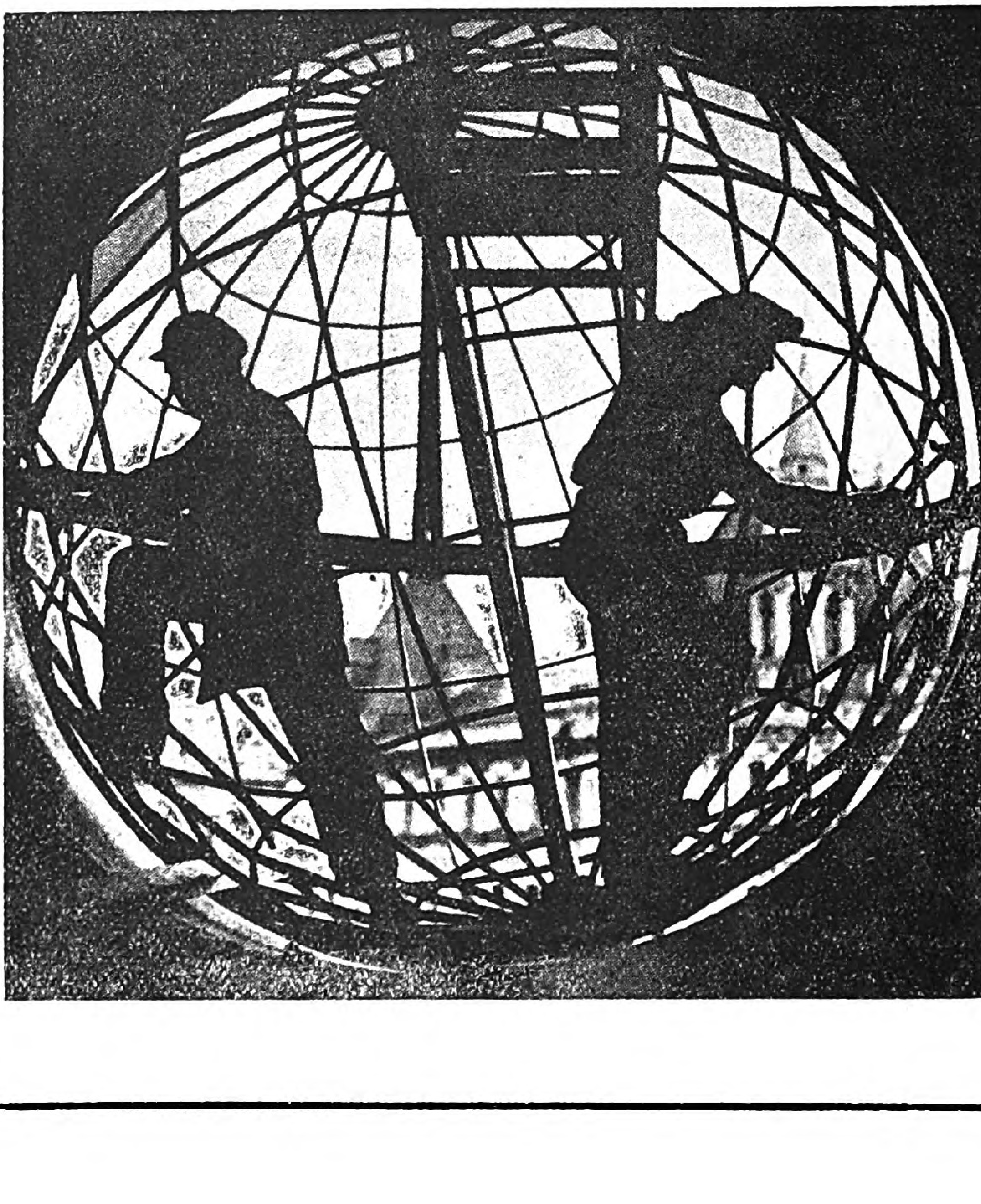

蓄音器も…レコードも
ビクター
No. 1-90
¥ 150
"HIS MASTERS VOICE"
No. 4-3
¥ 260
日本ビクター関東賣捌元
東京銀座三丁目
十字屋楽器店

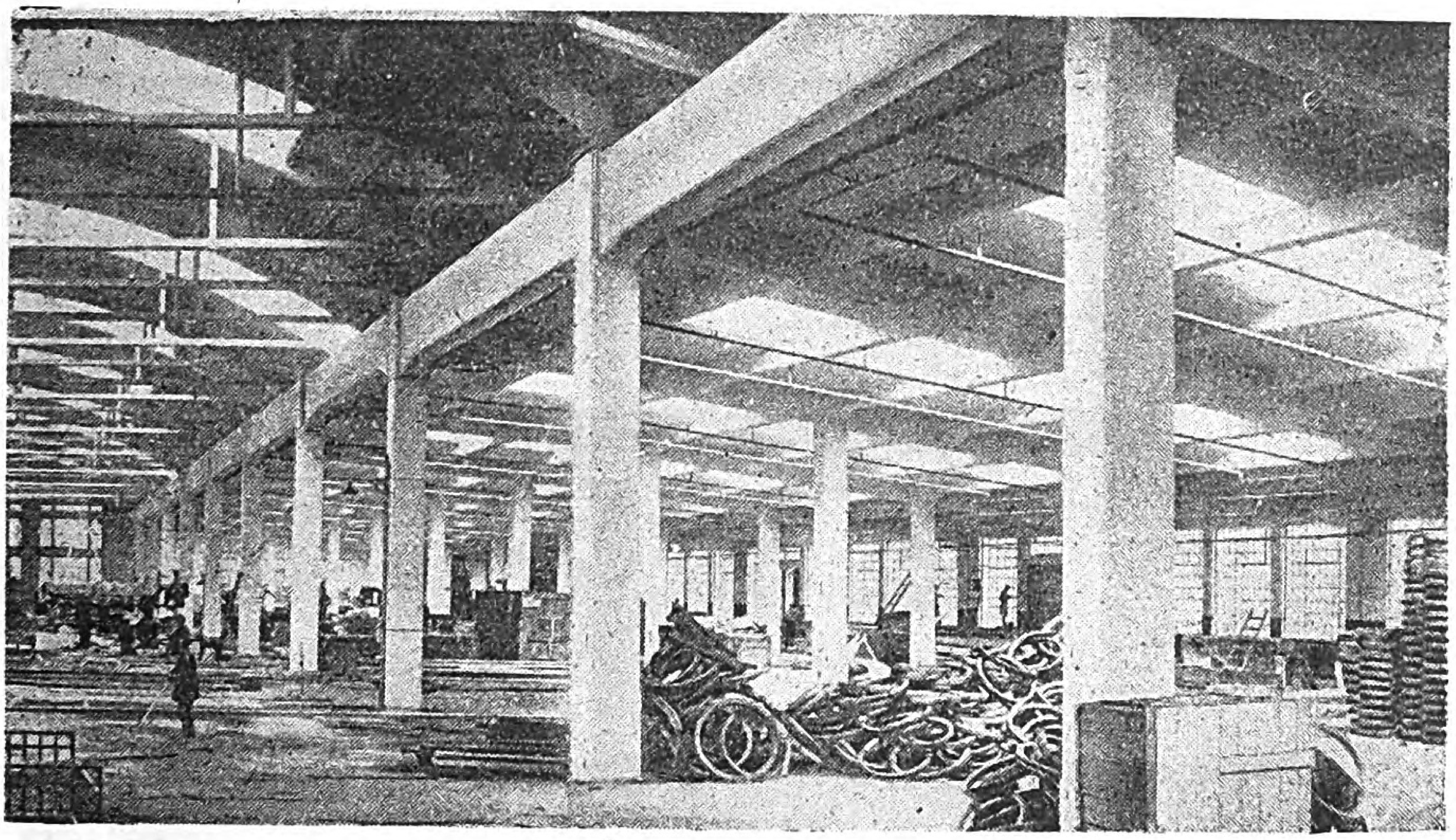



秀英舎

女人藝術

七月號





1

職場をめぐる

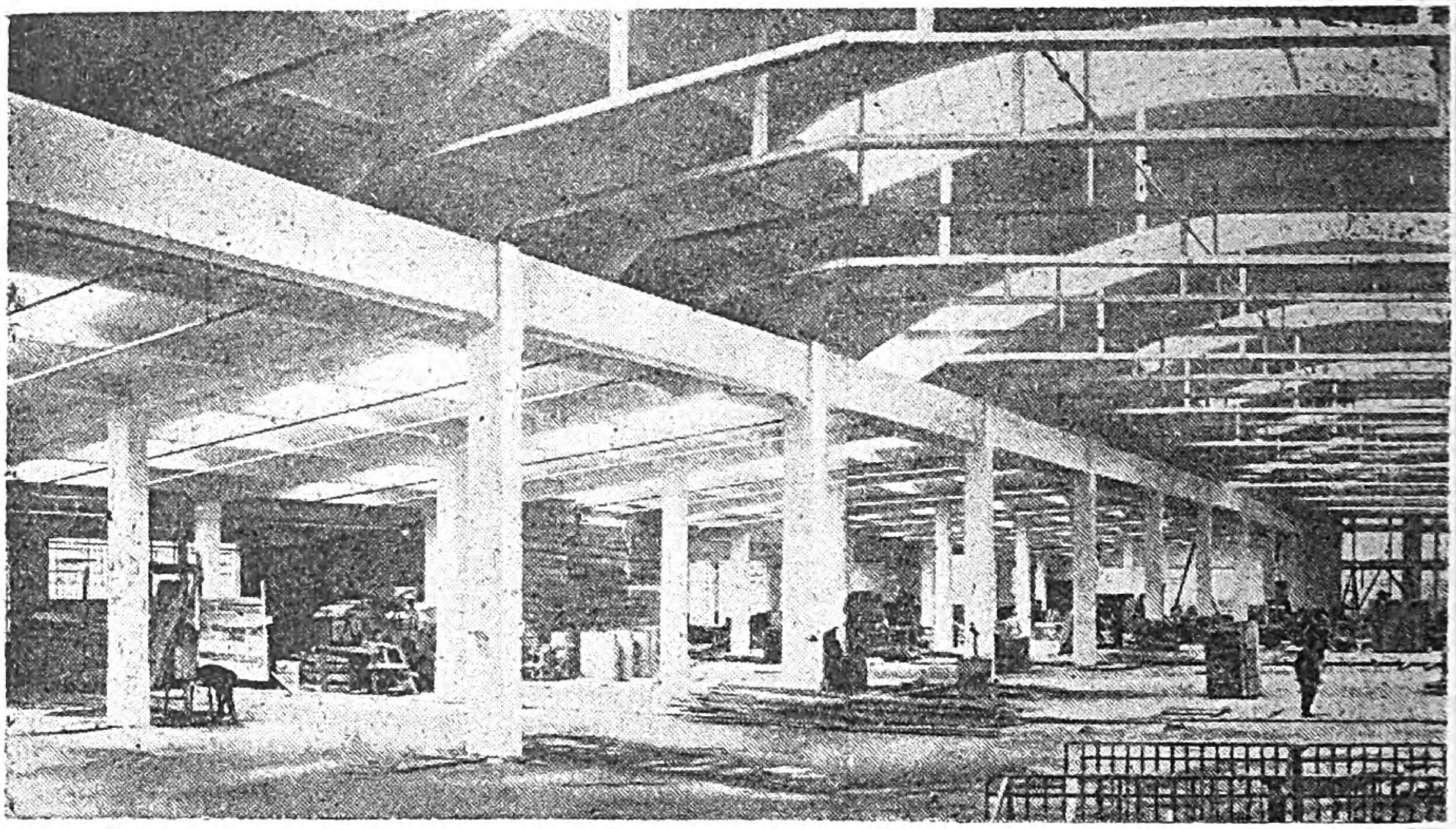
——一九二八年のソヴエート——

アンナ・カラワーエワ

園田時子譯

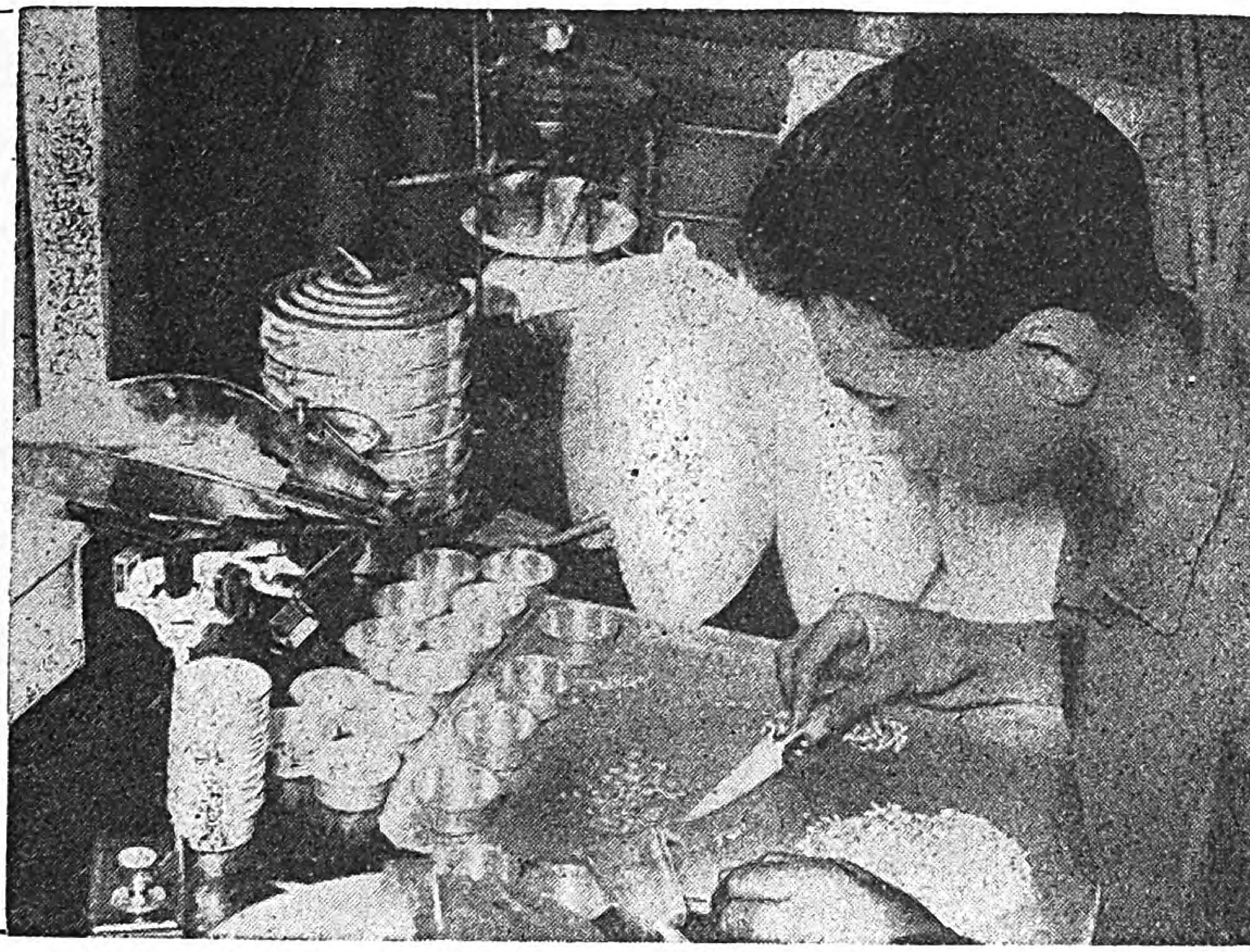
作者、アンナ・カラワーエワは、ソヴエート・ロシアの最も新しい女流作家であつて、最近數年間の彼女の文學的活動は素晴しいものである。既に近く國立出版所から彼女の今迄の全著作を集めた著作集が出ることになつてゐるほどである。プロレタリア文學として彼女の藝術には、イデオロギイ的な缺點が認められるものとして批難されてはゐるが、その文學的達成に於いては、たしかに見るべき功績をあげてゐるやうである。この一篇は、有名なソルモヲの鐵工場參觀記であるが、この工場に於ける生産の過程、勞働者の生活等が、相當高き觀點からヴイヴイドに揚げられてゐるところが興味がある、最近プロレタリア文學の最も新しき一形式として現はれつゝある報告文學の一例とも見得るこの手記は、またソヴエート文學の一つの方向を指示するものであると考へられる。(園田)

薄汚ない河蒸汽船がウオルガ河を上方へと上つて行く。清朗な眞晝である。そして遠くにはもうソルモヲの煙突が浮び出てゐる。われ〳〵は、古い汚れたバラ色をした石油坑の側を通つて工場へと行く、この石油坑と云ふのは株式組織時代(卽ち革命前)から存在するものであつて、この事は、半ば磨滅した文字が詳しく物語つてゐる。道は嶮岨で谷間へつゞいてゐる。足の下にはじめ〳〵した粘土がある。そこに石油坑の脇腹の丸



い營舍が無かつたならば、赤茶けた色や、緑の色の坂道の間にある此のよぼ〳〵の軌道は、まだ完成され切らない村の大道とは、あまり見分けがつかないであらう。

入場證を見せてわれ〳〵は工場へ入つて行く。其處はまだ通り慣らされてゐない――石があつたり、滑るやうな砂石があつたり、又は燒けた鐵滓の敷かれたとげ〳〵した小路があつたりする。地面には、まるで大腸のやうに鐵道の軌道が延びひろがつてゐる。これらの軌道は、奇妙な風に四方八方へ交叉して行つてゐる――機關車のための廣い軌道や、或は狹い軌道、又は玩具の組立てのやうに全く小さなレールが敷設されてゐるのであつた。時々、廻轉する裝置になつてゐる曲り場に――その曲り場と云ふのは、地の中に鐵板を埋め込んで出來てゐるのであるが――に出逢はす。トロッコが、その狹い鐵板の引返し場の上に轉がつて來て、その引返し場と一緒に必要な方向に廻り、それから更に向ふへと轉んで行く。これら多くのトロッコは、汚い大きな機關車の車體や、客車や、プラットホームの間を縫つて滑り乍ら、いろ〳〵な方面へと往復してゐるのである。到るところ何處にでも「列車を大切にせよ！」と云ふスローガンがかゝげられてゐる。機關車は屢々此處を通過する、しかしそこ迄來ると、その速力は弱まつて、廣い野原を走る程に速くはない。これらの煙つぽい營舍は、その規則によつて彼の行動を限定してゐる。そして、輕快に蒸氣を吐きながら、恰もいゝ足を持つた町の飛脚のやうな速度をもつて行動してゐるのである。鑄鐵工場では、規則的な音響をたてゝ、旋盤ベルトの鋸が軋り音をたてゝゐる。そこでは、木屑の花がフウワリと膨らんでやさしげなバラ色をしており、木の強い香氣を放つてゐる。黒い髮の毛をした腰の曲つた男が、その鋸の前に立つてぢつと見戍つてゐる――今鋸にかゝつてゐる太い松の角材の上には、型の外廓が細くしるされてゐる。



2

ソヴエートグラフ説明

1 極力農村の工業化を計る可く國立農具工場の製作。
2 國營農場、及び協同農場で使ふ穀物種子の檢査。
3 素晴らしい麥打ち機械。

——鋸が線から外れたが、かまはないかね？

——そりやいけないよ——と嗄がれた低音で彼が云つた——よく見ないか、そら君、きづものぢやないかね、型と云ふものは正確といふ事が大事なんだからね、

——この型は……これは粘土を入れる型ですね？

——そうですよ、粘土の塊がありますあね、そこへ、こいつがその型をつけるんです、それからこの型で鑄造するんです——と彼は仕事から眼も放さないで一本調子に説明してくれるのである。この男の頬は青くて、顏は膨れてゐた、紫色になつた鼻はてら〳〵と光つてゐる。むくんだ瞼は赤くなつて、その眼の中には、冷たい醉ふやうな憂鬱が浮んでゐた。彼は生氣のない唇をかんでゐる。どうやら煙草がのみたいらしい、しかしベルト鋸は不注意者を容赦しないのである。そして壁には喫煙者にとつて怖ろしい警告が貼り出されてゐるのであつた。

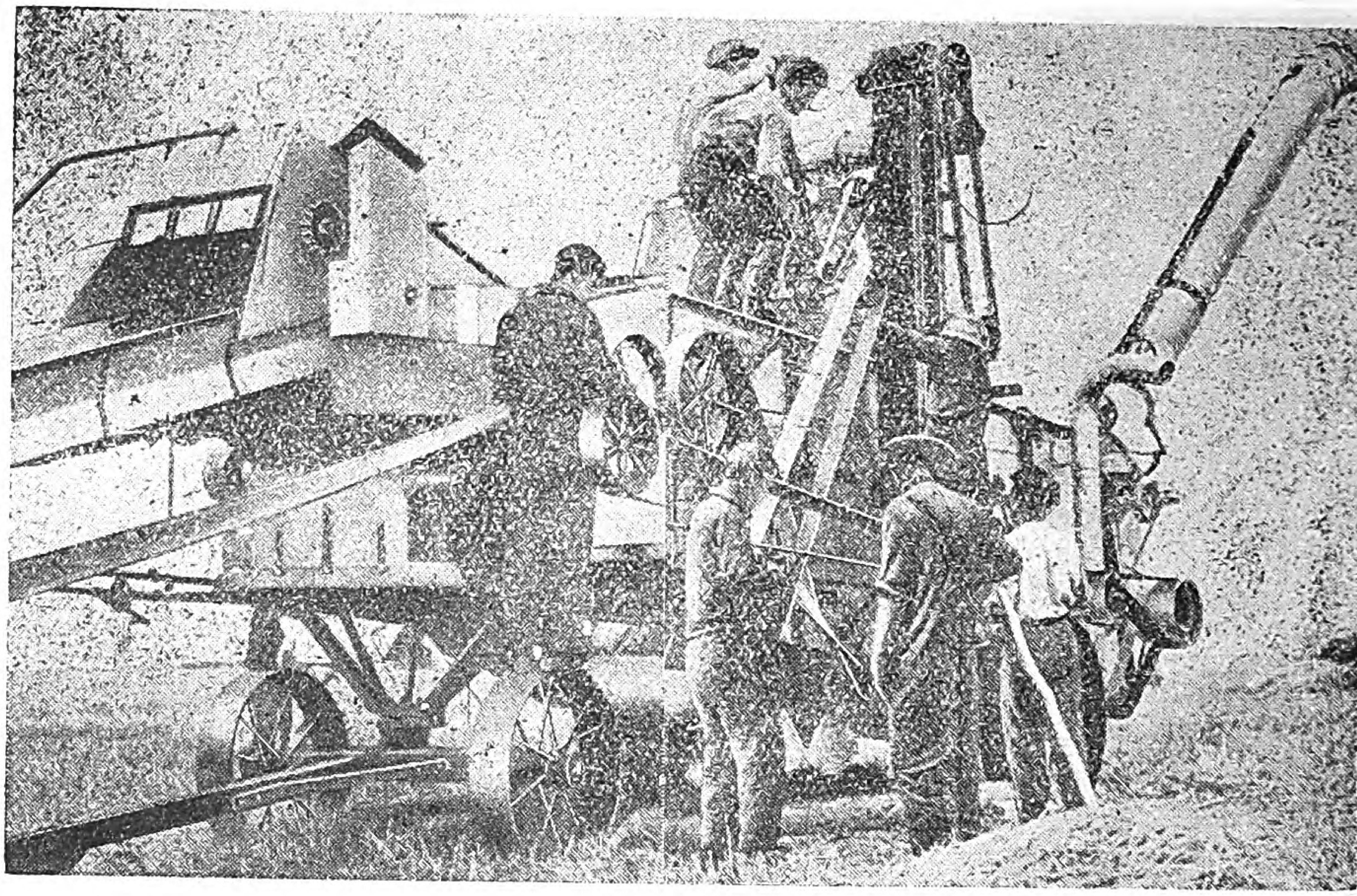
若い勞働者が、金髮の頭を綺麗にかき上げながら、その機械の能力に就いて私たちに説明してくれた。その青年は溌溂たる健康をもつてゐる。彼の大きな赤い毛の生えた兩手が、滑かな梁材にふれる。

——鑄型女工はこの工場にはゐないんですか？

すると肥つた背の低い、尖つた鼻をした聖像寫しのやうな容貌をした男が皮肉に嘲笑し乍ら云つた。

——女はね、まだ〳〵こんな精密な仕事に手を出す時代ぢやありませんやね、奴さんたちの資格つてのがまだ足らないんでさ。

——あいつはどうしても女工つてものを信用しないんですよ——と淡色の毛をした男が云つた——私はいつもあいつとこの問題で議論をするんですがね。



3

彼は再び綺麗に、美しい髪をふり上げた。彼の顔は狡猾に笑つてゐる、この男は女の鑄型工つてのを信用してゐるのである。私たちの案内者は、女工についてつけ加へて云つた。

——實際、この工場では、女は全く役に立たない分子なんですよ、と云ふのは第一に女は生理的にこれに耐へられませんからね、たとへば溶鑛爐に就業させることは出來ませんからね。それに資格も持つてないんですよ。あの工場學校つてのは何をしてるんですか、何の役にも立つてはゐませんよ。此處ぢや女は、飾りつけ係や、灼入れ係や、漏斗係やで成り立つてゐるんですよ。

——その漏斗係つてのはどんなんですか？

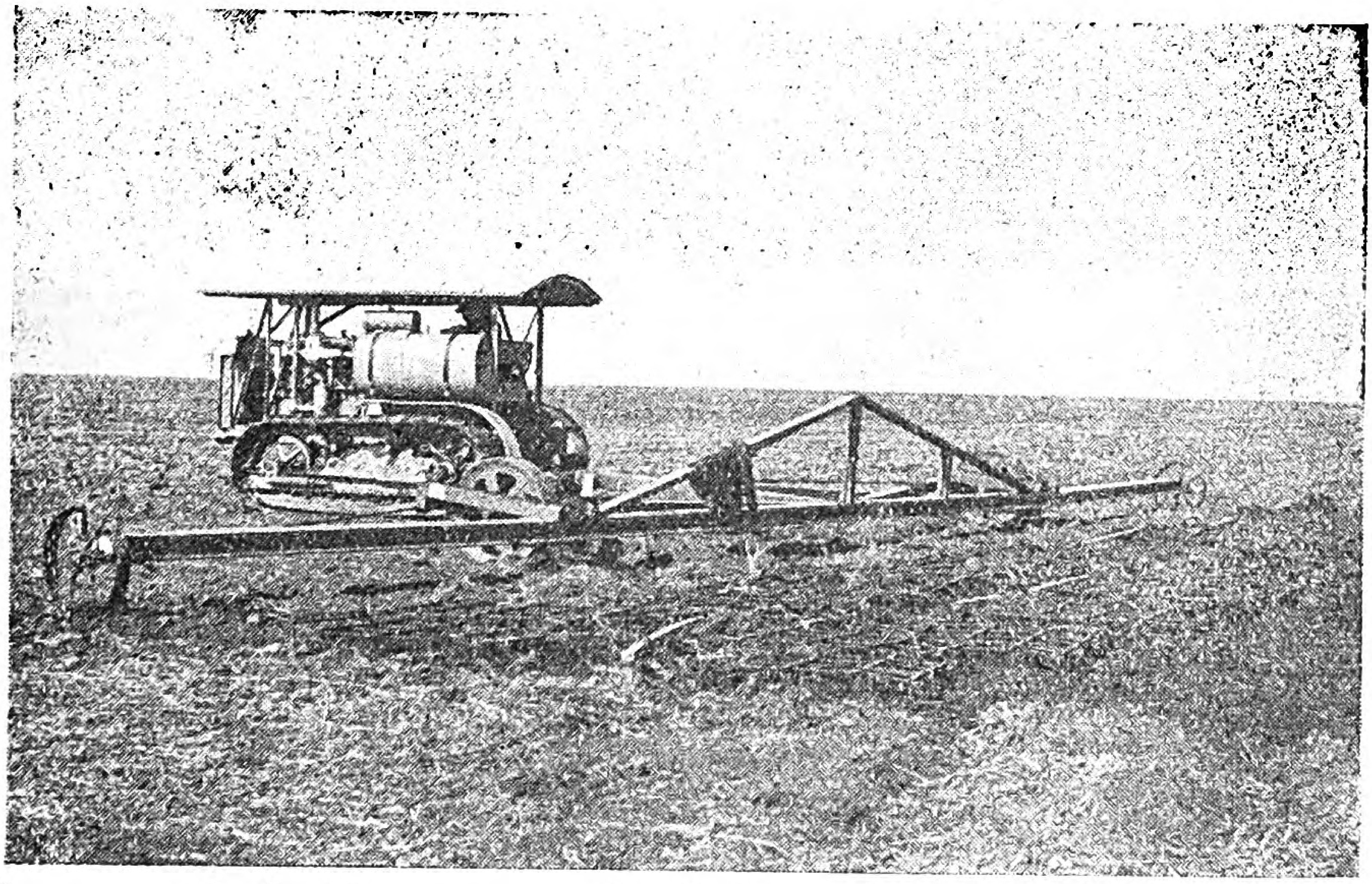
——それは變形鑄造部で御覽になりますよ。

明るい型工場の後では、鑄造部は廣くて、そして薄暗かつた。起重機の鎖と支柱は、貪慾に曲つた嘴をもつてゐる禿鷹のやうな奇妙な影を投げかけてゐる。黒い穴になつた粘土の型——即ち鑄型の上では黄がかつたすみれ色をした弱々しい光の斑點がおどつてゐる、同じく粘土で打ち出して造られた褐色の漏斗がちやんと鑄型の方に立つてゐて、幾十からの砂の咽喉元が溫かい飲みものを受けとるばかりにして立つてゐる。

——かうした漏斗は女がするんですか？

——さうですよ。これから直きに、われ〳〵は粘土の仕事をお目に掛ますよ。

私たちは鐵製の庇の下へ行つた、そこのうす暗いところには、何だか、黒いうち紐のやうな狹い軌道が融け消えるやうに見えてゐた、大きな松の丸太のうしろには二人の女が坐つてゐた。二人とも埃つぽい靴をはいた裸の足を投げ出し、兩



4

袖をまくり上げてゐる。そして、でこぼこした茶碗からお茶をのんでゐた。紙片の中には、バタと新鮮な小麥麵麭の大きな切片がのつてゐた。

——わたしたちのところでは、漏斗の仕事の標準は定められてないんです、いゝえそれを定めることは仲々難かしいんですよ——と赤い頭巾を頭に被つた年とつた方の女が快く説明した——いろんなことがありますからね、それはいつも上の方の鑄造にかゝつてゐることですからね。

次の女が砂糖をがり〳〵とかみながら、うまさうにお茶で飲み込んだ、そして大膽な褐色の眼をまたゝいた。

——いゝえ實際、標準通りには行くもんではありませんよ。或るときなどは、いくら漏斗を廻したつて足らないんですよ。鑄造されて來たものが、ごつちやになる程たまつてしまふんです。さあ〳〵早く早くと云はれるんです、何のかんのつてね。たゞやかましく罵つてゐるのだけしか耳に聞えないんですよ。

麵麭にバタを塗りながら彼女は惡意なく快論した。

——この世にはやかまし屋はいくらでもゐるんですからね。

——仕様がないぢやありませんか——と年とつた方の女が濃い黄色い眉の上の頭布を直し乍ら考へ深く云つた——爐の前で唄を唄ふつてぢやなし。それに鑄造を待つてゐるのが好きだと云ふでなし、惡いとすれば、それはわたしたちが手で働いてゐるつて事ですよ。

——そうら、私たちの武器が出たわ！——と勇敢な方が齒をむき出した。

——それ、この桶の中にはね——と年とつた方が云ふ——シヤモット（譯註——耐火煉瓦を作る原料）と一緒に特種な混合物を入れるんです。石鹼のやうなこう云ふ粘

ソヴエートグラフについて

勞農ロシヤの國民經濟五ケ年計畫といふのは、聯邦共產黨十五回大會によつて決議された、一九二八―九年から一九三三年にわたる經濟建設で、やうやく二年目ですが、最初の計畫豫想以上の好成積を納めつゝあるといふ。つまり、國內の工業化、社會化が重な目的で、具體的には國內電化事業（四十の發電所を新設して電氣エネルギーの生產）、農村の工業化（農場國營、協同農場速進による大規模の工業化）生產機械の製作――云ひかへれば熔鑛生產と機械製作等を確立して、勞働時間の低減と、能率の增進を圖つてゐます。いはゆる高速度な徹底的な產業合理化が行はれるわけですが、勞働者がます〳〵生活難に押し込められる資本主義社會の合理化と違つて、ソヴエートの合理化は勞働者と農民の生活を高めるためにのみ役立つわけです。

寫眞はその五年計畫の素晴らしい發展成積を撮つたもので、極めて最近のものばかりです。殊に最も經濟的に遲れてゐた農村の發展は以外に迅速で國營農場ＧＩＧＡＮＴの他、協同農場は初めの一ケ年に二十萬人加入の見込みであつたが、實際には約三倍の加入者があつて續々、協同化が實行されつゝある。したがつて機械の使驅が比較的自由で、地虫のやうに無際限の勞苦を强ひられてゐた農民の生活は日々明るいものになり文盲撲滅運動等と待つて農村の工業化、農民の自覺は素晴らしいものがあるといふ。

土なんですがね、それからこの塊りにこれを突つ込んで力いつぱい底まではすんでです。――と云つて彼女は圓錐形のあまり大きくない荒削りの鑄型を指し示す。

――かうして廻しつゞけてゐるんですよ。――手で急激な廻轉運動をし乍ら第二の女が云つた――忙しい日には休憩時間だつて坐つてはゐられないんです。今かうして私たちが坐つてゐられるのは、あそこにそれが、いくらと知れない程つまつてゐて、充分貯へがあるからですよ。漏斗は長い板床の上に全く堆積になつて立つてゐた。更に下の方には、もつと大きな浴槽の釜程の大きさのが立つてゐる。

――これもあなた方は同じように手ではます方法でやつてゐるんですか？

――でも、仕樣がないぢやありませんか？　まあこの槽を持ち上げてみてごらんなさい。それからこの攪拌棒を同じやうにやつてごらんなさい、さあ、さあ。

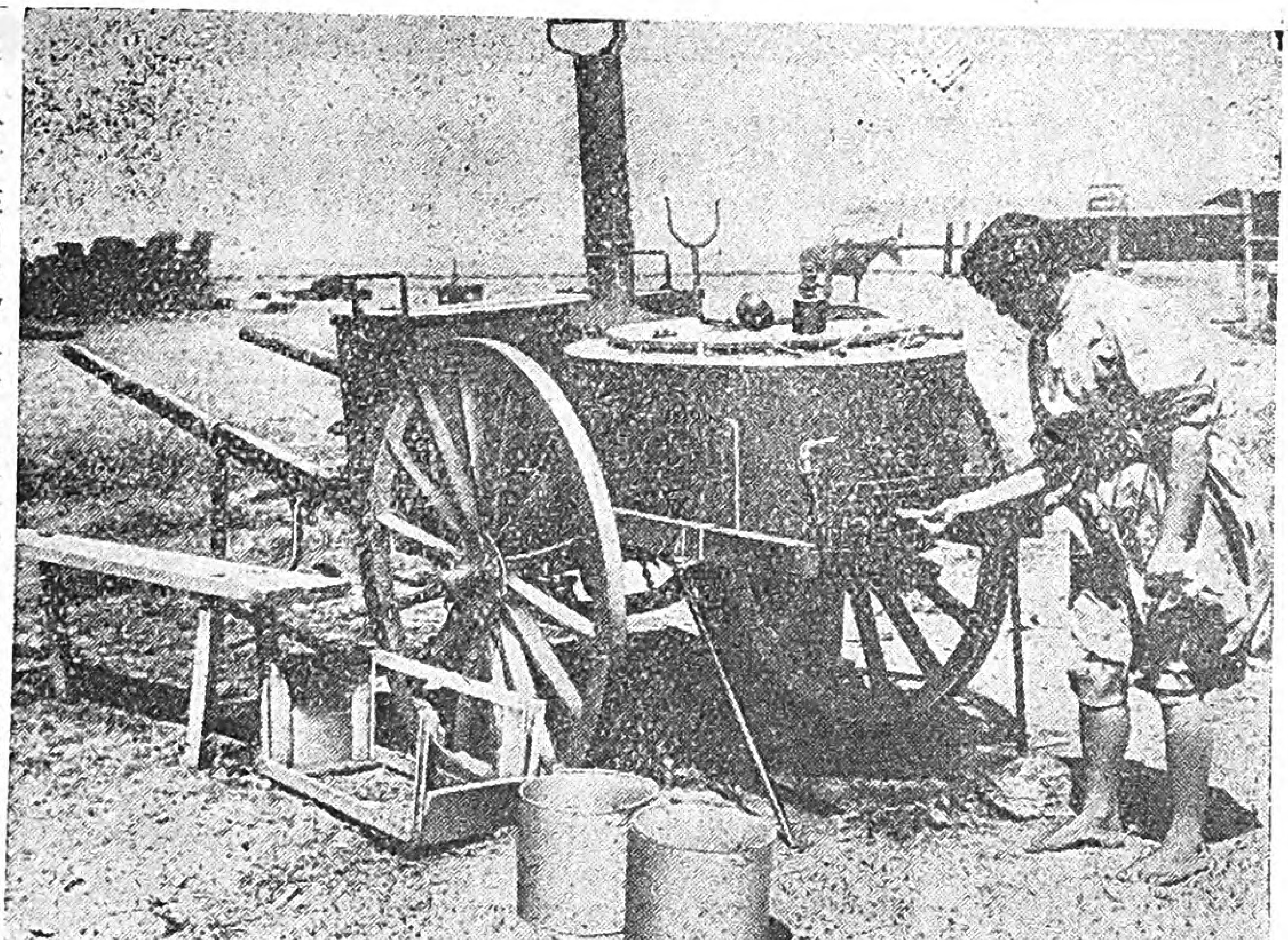
私は、「槽」の端をとつて、そしてやつとこさとそれを土地の上から持ち上げた、攪拌するための丸太も同じやうに相當な重量だつた。勇敢な方がわたしに、まるでふざけてほめそやしてゐるかのやうな樣子である。

――どうですかね、えゝ？　わたし達はこれを製造してゐるんですからね、手でね

そして彼女は自分の手を見せた。その手はやせた體に比べてまことに不つり合ひな大きなものであつた。太い指と、かけた爪をもつてゐた。掌の關節のそばの塊は殆んどつゞけざまにつみ重なつた褐色の胼胝である。

――それハンドルを握りますからね――と年とつた女が説明した。

私は默つてうなづく――實に明瞭の限りである。わたしたちは再ひ漏斗の側を通つて行く。そしてわたしは、どうも彼女らの脊と頭とがいかにまだプリミチブな手工業的な工作の上に曲げられてゐるかを見る。そしてこのやうな勞働が、婦人にとつて如



4 今年三月ソビエット農場の播種時に二十四ノ盲の仕事をした種蒔トラクター。

5 ソビエット農場（GIGANT）でお晝の仕度をする料理車と愉快に肥つたおかみさん勞働者。

6 晝飯が濟んで、日向ぼつこし乍ら一休みしてゐる農場テント生活の婦人勞働者達。

娠の時期には、その上半期に於いてさへ可能なものであるのかどうか疑はしいものである。私は突然、この鐵の庇の下で流し漏斗の機械を想像して見た。何だかおぼろげなその機械の外廓さへ浮び出して來る。圓錐型の鐵塊と桶が金屬壓搾機の可動的部分品に變る。そして人間はたゞ電流を止めたり通じたりしておればいゝのだ。

――御用心願ひますよ――とわたしたちの案内者が云つた――そこの階段は、どうも具合が惡いんですから、滑りますからね。

わたし達は登つて行つて、左手へ入つた。すると一度に、頑固な流れに突き當つた

――これが灰穴ですよ。

灰穴は音をたてゝ吹き荒んでゐる。そして長い鑄鐵の竿が、鐵の床にガチヤ〳〵と音をたてゝゐる二三十人のせか〳〵した聲と足音が、騷々と鳴る響を卷起してゐる。

――出來た――と脊の高い顏を剃つた男が掌をぽんと叩いた、そして青い眼鏡をかけた。彼の裸の膨れ上つた脊中に、皮の前掛の皮帶が十文字にかゝつてゐる。

保護するやうなやさしい嚴しさで――あつちへ行け――と云つて彼は肘でもつて、彼と同樣半裸體の華奢な人間をおし退けた。

その男は、自分のだぶ〳〵したズボンにひつかゝりそうになつて後すべりをした。滑車がキイ〳〵と鳴り、つんざくやうな音響が硝子の屋根に叩きつけられた――そしてあたり全體には、容赦もなく紫や金色をした光りが注がれてゐた。誰かゞ私の袖にさわつた、さつきの華奢な男が自分の眼鏡をさし出した。

――眼鏡をおかけになりませんか、でないと眼をいためますよ。

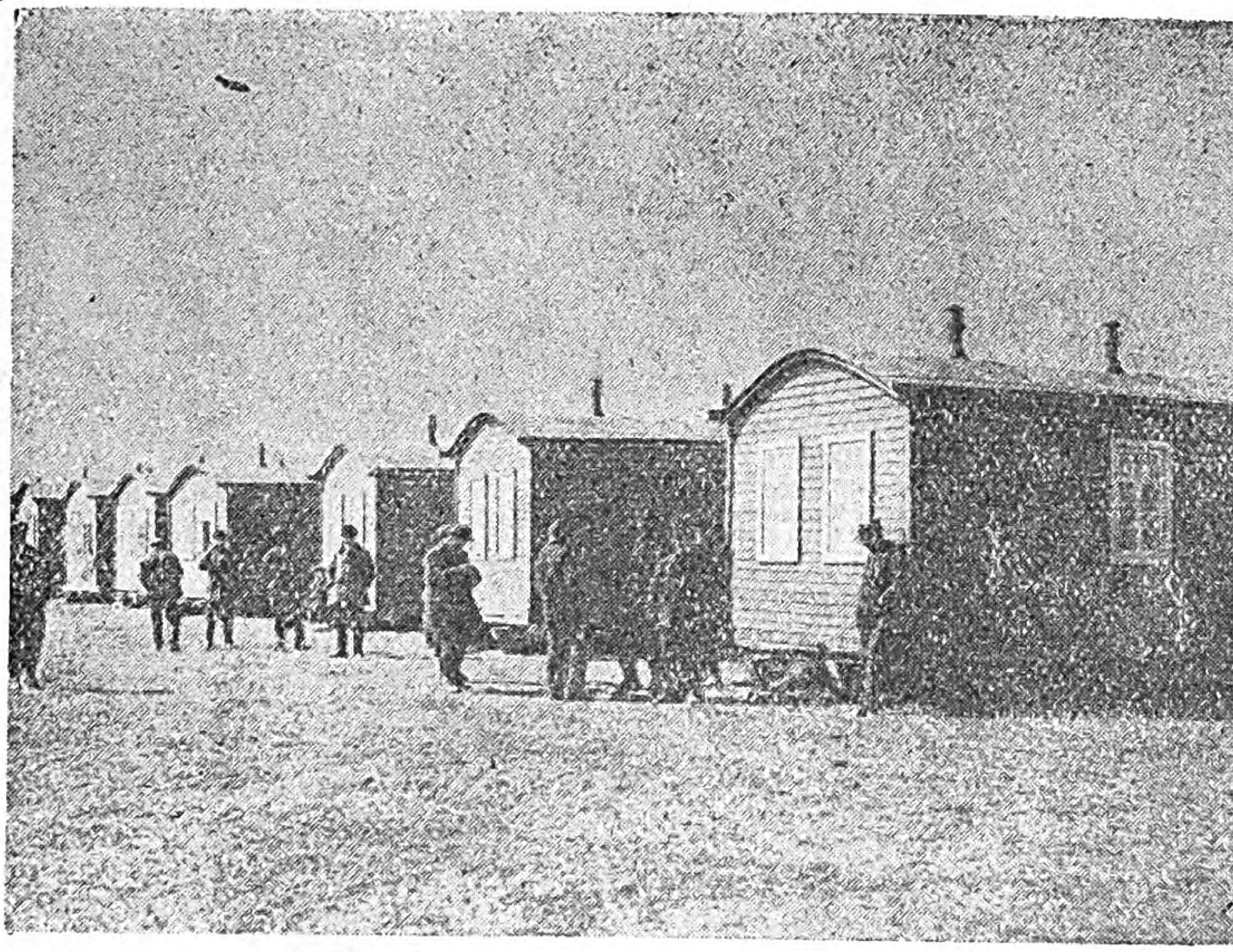
彼は細かい痘痕のある、若くない血の氣の少ない顏で、その眼眸は鋭くて賢さうである。だん〳〵近よつて、青い硝子を透して焔を見る、灼きつけるやうな熱氣が顏に



ムッと來て、唇が乾く。しかし、はげしい炎の溶鑛と、頑強な人間の機敏さとから眼眸を放すことは仲々に難かしい、煉瓦の爐蓋が持ち上げられ、再び又下に落ちる。マルテン爐は、まるで、その一つ一つの中に太陽の斷片を捕へ込んでゐるものゝやうにまぶしく輝いてゐる。半裸體の人々が駈けまわり、跳びはね、まるでその人たちの足下で鐵の床が火氣を發してゐるかのやうである。彼等の青い眼鏡は天然色のものゝやうにきらめいてゐる。皮手袋をはめた手は、まるで作り話のやうに大きい、彼等の脊中は黒く、肩は紫色をしてゐて、その上には汗が、うすい銅の溶液のやうに流れてゐる。彼等は焔の方へ近づいてゆく、そして明るいところではステッキのやうに細い黒い棒は、この炎の旋風をどこかへ向ける。それは、やけきつてトロリとした溶鑛を、水渠を通して、褐色をした漏斗の咽喉元へおとし込むためなのである。丈のたかい力持ちの男が、眼鏡のついた帽子を、尖つた頭の天頂におしやり乍らわたしたちの方へふり向いた。

――やるかね、えゝ？――と荒々しい不器用さをもつて彼は、眼玉の大きい男に向つて棒を突き出した。すると相手の男はばたばたと急き出した。

――あゝ、俺の眼鏡を返してくれ……せかせかと彼は鼻の上に眼鏡をのせて、身を屈めて棒をつかんだ、しかし力持ちの男は又彼を退けさせた。そして力たつぷりの肘を素早く強く動かし乍ら自分でかきまぜた。それから何事かを短かく云つて、大丈夫だと云ふ風に、焔に向つてうなづいた。そしてもう殆んど難かしいことは何もすることがなくなつたと云ふのである。彼は脇の方に行つた。そして胸一杯に息をついた。太い黒い血管が、彼の頸の上で波打つてゐた。皮の前掛の上には大きな汗の滴が流れてゐた。彼は全くその汗にびしよぬれになつてゐたのであつて、掌



7ソヴエート農場の移動住宅。
8協同農場の農民達は集まつて、ロンミユーンで放送する耕作に關するラヂオを聞く。
9數學の授業を受けてゐる協同農場の子供達のさつぱりした樣子。

で頸や肩からその汗を振り落してゐた。口笛を吹いて呼吸をしてゐた。——確かに彼は、華奢な人間を、心配してゐるやうに絶えずその友達を、監視してゐる。私は何だか勞働者の發明に就いて昨日聞いた話を思ひ出した。

——その職場の發明者を、原則としては、私たちソルモヲの者たちは大事にし、誇りにしてゐます——と同志は語つた。

一寸の間暖爐の事は忘れやう——結局は人間が何よりも驚異に値するものである。

これらの燃えさかる焰の前で二人の人間を結合させたのは、どのやうな感情であらうか？　多分、この華奢な、眼の大きな男は、その自分のうちに天才的思想をもつてゐるのであらう。また力持ちの方は、華奢な男のとは全く異なつた型の力に從つてゐて、その力の肉體的な貴い斷片を守つてゐるのであらう。或はそれとも、尊敬と理解に充たされた特別な友情が彼らを結び合せてゐるのであらうか。或はそれとも……要するに人間のことを考へ、察すると云ふ習慣が苦しめてゐるのである。

——株式組織時代には——と案内者が云ふ——この工場はやつとその半分が機械化されてゐたんで、今とは全く異つてゐたんです。彼は、たとへばあの橋梁起重機や、その他のいろんなものがどんなに動いてゐたかと云ふ事を語る。

——手でやらなければならなかつた時は、その苦痛は大へんなものでしたよ。——と古い防水布の服を着て、寸法の小さい、頭に合はないケプカ帽を被つた、あまり若くない男が話に口を入れた。——わしや株式時代からこゝに勤めてゐるんですがね、だから手がこんなに胼胝だらけになつてますよ。しかしわしたちは、今ではそんなに働いちやゐませんからね。全然異つてますよ。……わしたちの職場ぢや、電氣爐さへあるんですからね。



8

——その電氣爐はもう動かしてるんですか？

——さうぢやありませんよ。われ〳〵のところは、今はデクレトですからね、デクレトがすめば直ぐ又活動し初めるでせうよ。お判りですかね？——最早や彼は腹を立てゝきく——きつと短氣な人であらう。

——わたしたちのところぢや、夏の休暇をデクレトと云つてるんですよ。——と微笑み乍ら案内者が説明した。

——わたしも云つてるんです——と又さつきの年のいつた男が遮切つた——勞働者が全部揃はない時は、この爐を活動させてはいけないんです。

——いかゞです？——全く違つた調子で急に彼が云つた——電氣で動かすのがどんなに驚くべく簡單なものかお見せしませうかね？

——それは是非おねがひしたいものですね。

——ようござんす。やつてみませう——と鷹揚にこの變物らしい男はうなづいた。

——これが橋梁起重機と名づけられてゐるのは無理もないことですよ。御覧下さい、何と云ふ長さを持つてゐる事でせうかね——全く鐵橋の骨組ですよ。でよく御覧下さい、わたしは手でおさへただけでこのでかい物を動かして見せますから。

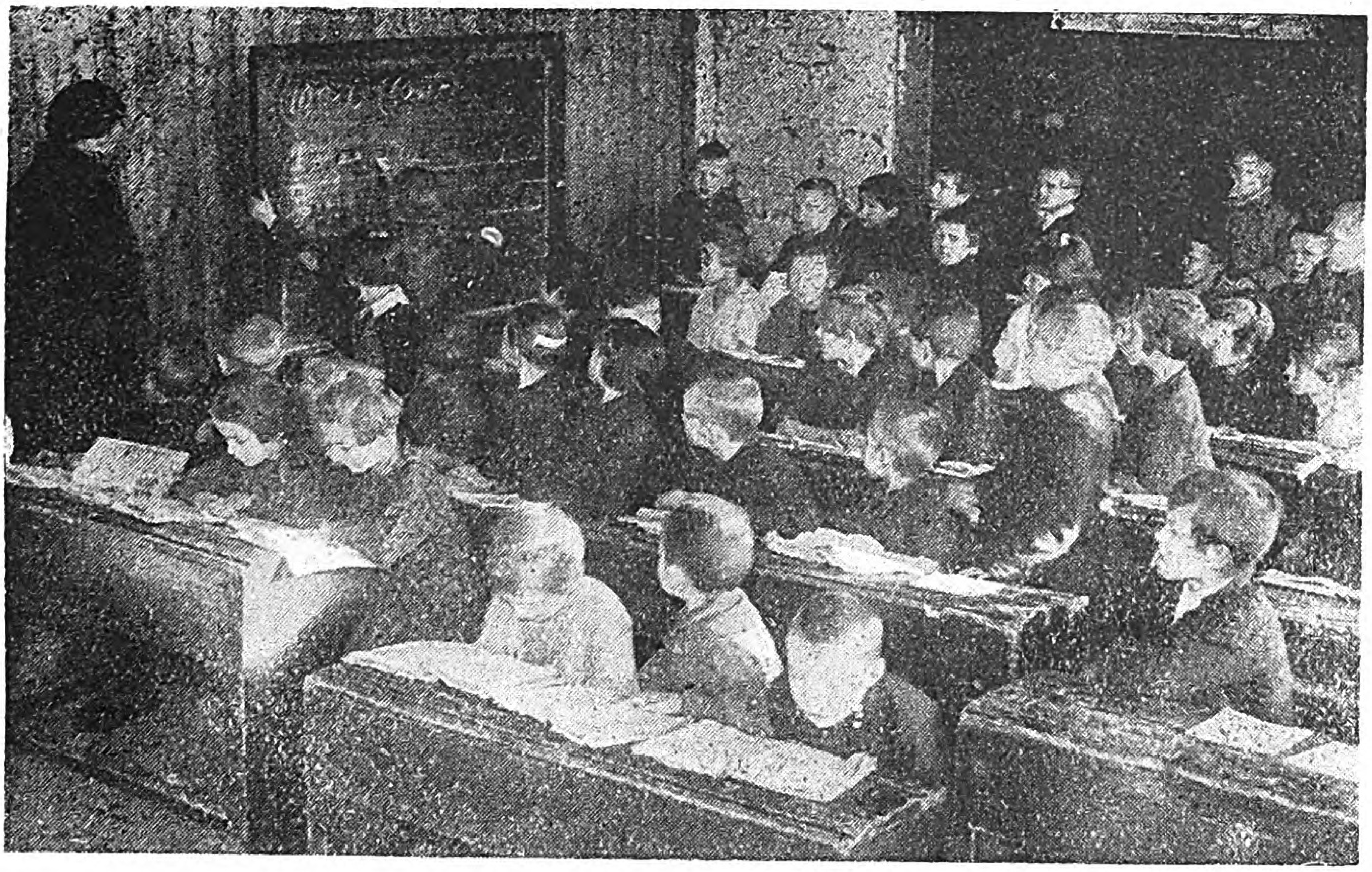
彼は何處かへ行つてしまつた。すると突然に彼の聲が頭の上できこえる。

——さあ、見てゐらつしやい。

すると鐵の極木の方に、何だか椋鳥の箱のやうな板張りの物置きが押しつけられて行つた。わたしたちのこの新らしい知人は、その小窓から乘り出して云つた。

——始めてますよ！

わたしたちは頭を上の方に向けた。彼の兩手が、小窓の中で何かしてゐる。鐵がが



ちやりと音をたてた。――そして橋梁のフエルムはわたしたちの上の方へやつて來た。更に、更に、更に遠く……

――どうですか？――と云つて椋鳥箱の中から、寸法の小さいケプカ帽がうなづきかけた――動いてゐるでせう。お望みならもつと低く鉤を下げませうか？ えゝ？ 鉤が柔順に、鎖をガラ〳〵鳴らせ乍ら降りて來た。

――それ、別な方面にゆきましたよ。そら！ そら？ まだ歩いてますよ。それ今度はうしろへ、うしろへ。見えますか？

――えゝ、よく見えますよ。

――それから、挺子を押してゐるだけなんですよ、えゝ。難かしいと考へますか？ ハッハッ……ちつともそんなことはないんですよ。

――今度は展鐵部の方に參りませう――と案內者がせきたてた。

しかし、椋鳥箱のついたフエルムが動き止まない間は出て行く事は出來ない。この淡黑い髯をはやした男は、自分の內から沸き上る喜悅に捕はれてゐるやうであつた。わたしたちは小聲できく。

――このタワーリシチは誰なんですか？

――起重機係りですよ。その男は、滿足して、揚々としておりて來た。

――あなた方は冬にこのソルモヲに來てごらんなさいよ。夏には、われ〳〵は全く暇なんです。冬になるとわれ〳〵のところでは全員で鑄造が始まるんです。

後の方で火の柱が上方へまき上つた金屬がシユウと云つて音をたてた。

この釜は鑄造のためのものなんです。原油で熱してゐるんですよ。――とせかせかと案內者が話し出す――さあ展鐵部の方へ參りませう、でないともう直きに休憩



10 ロシア農民のお晝――協同農場の生活

になつてしまひますから。

展鐵部では、シーメンス式暖爐がゆるやかに鈍い響をたてゝゐる。そして破碎機が、水の飛沫を立て乍らガタ〳〵と音をたてゝゐる。小さいとびらがきし〳〵となる――すると白くなる程に燒かれた鐵塊が蝶番で動くやうになつてゐるかたい釘拔きの中にはまつてゆく、その鐵塊は、はげしく火花を散らして、氷砂糖のやうに輝いてゐる。展鐵手が蝶番を差し向けて、それと並んで走つてゐた、彼は身輕で敏捷で、恰もこの灼熱した物體を征服し、害をさせまいと云ふ緊張のために燃えたつて若々しくなつてゐるやうであつた。鐵塊は、まだ破碎機のところ迄ゆきつかないうちに、紫色になり、火花を發しなくなり、急に心棒の轟音の中に消えてしまつた。一瞬すると――その鐵塊は又釘拔きの中に出て來て、眼に現はれて來たかと見ると、又々消えてしまふ。それはくね〳〵と曲り、蛇のやうに這ひ、眞赤な尾でばた〳〵と叩いてまわる。破碎機の新らしい調整は、燒かれた棒の部分がだん〳〵細く長くなることである。今その鐵塊は、手でつかまれて、新しい破碎機の下に置かれた。着古された皮チヨッキを着た若い、赤みがかつた毛の若者が、釘拔きを扱つてゐる。彼の片方の眼は、持ち上げられた頰でいつも半ば閉されてゐて、口は耳の方に引曲げられてゐる――彼はどうしても口から煙草をはなすのが嫌らしい。それで彼は煙草をかんでゐるのである。見たところ彼は呼吸するのに都合がわるいらしく、そばかすだらけの顏は苦し相に歪められてゐる。

――吐き出しちまへよ、おめえ、吐き出しちまへつたら……そりや火藥だぜ……一日中煙草をくわへてゐてはづかしくはないかね、えゝ？――ちやんと破碎機の下から棒を出してくれ……あはてるなよ、でないと又きづものが出來るよ。



11

傍の方のどこか暗いところから、髯だらけのせむしの老人が出て來た。ところが何かの塊に突き當つて、彼はそれを、スリッパをはいた大きな足でけとばした。この老人の足、まるで木株の枝に打ち込んだ槌のやうであつた。――その足は胴體に比して不釣合な程に細くて曲つてゐた。彼は骨ばつてゐて、肩巾廣く、ゆら〳〵とし乍ら歩く、そして力持ちで無細工で、白髮の卷き毛が殆んど眼に被さる迄に生えてゐる、確かに、ノールウエーの物語りに出るトロールは、イブセンにこんな姿に見えたであらう。

老人は腹立たしげに、荒削りの二つの長い切株で作られた――テーブルのやうな――高い板床の上にコップを置いた。

――現今ぢや、働きの悪いのを恥としてやがらない――老人は音高く唇をならしながら、絶えず呟やいて、水差しからお茶をついで――俺らは、何んでもかんでも期限に間に合せ樣として、拙い仕事をやるのは主人に恥づかしく思つたものだ。

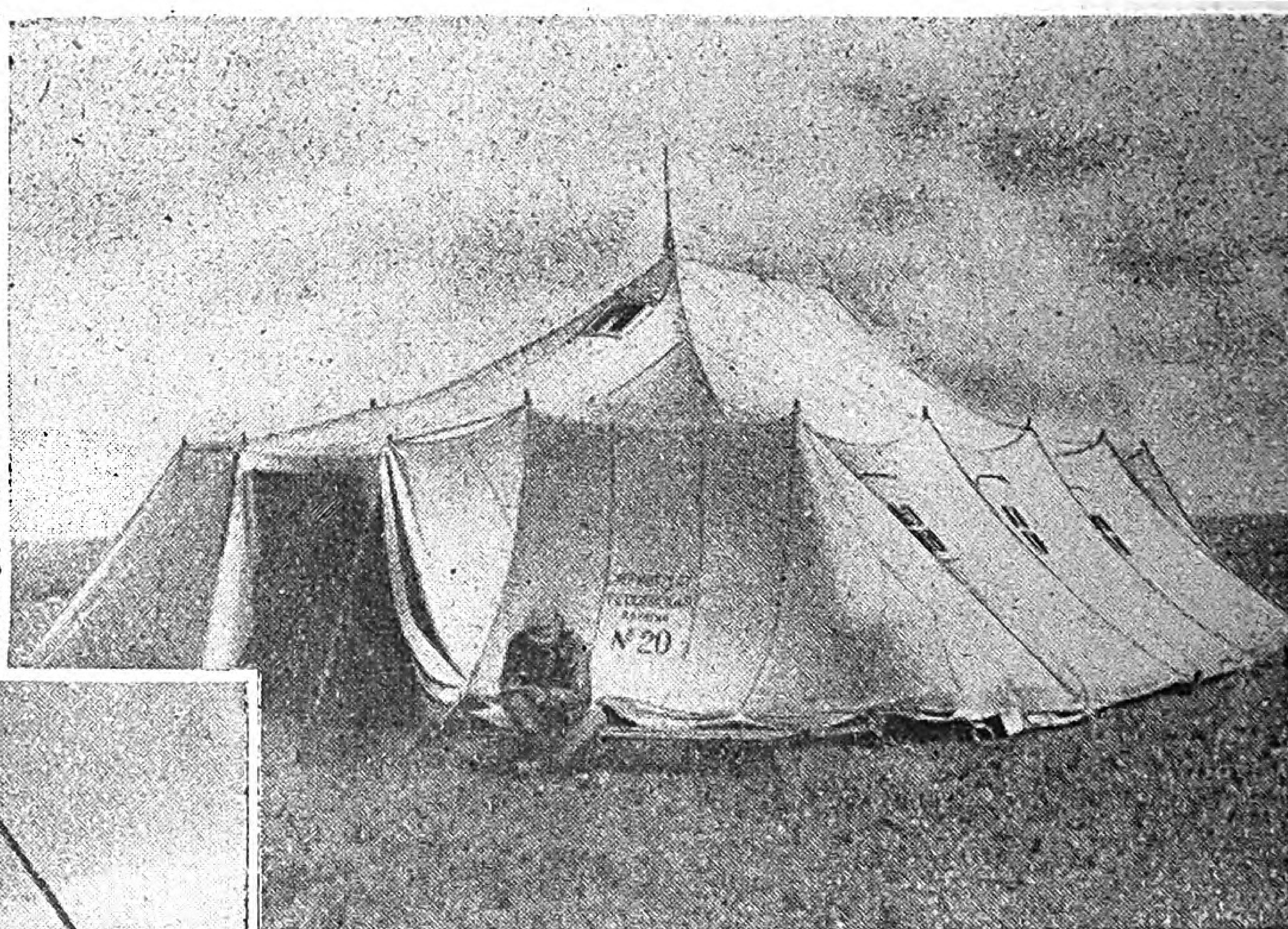
若い展鐵工は、皮上衣の前を開けて、あへぎ乍ら板床の方に馳け寄つて來た。胸當てが、やせて狹い胸を卷きつけてゐた。今は煙草を咬へてゐないので、彼の顏は全く異つてゐる。雀斑の爲に黄色くなつた頬と、蒼ざめて髯のない口をしてゐる。

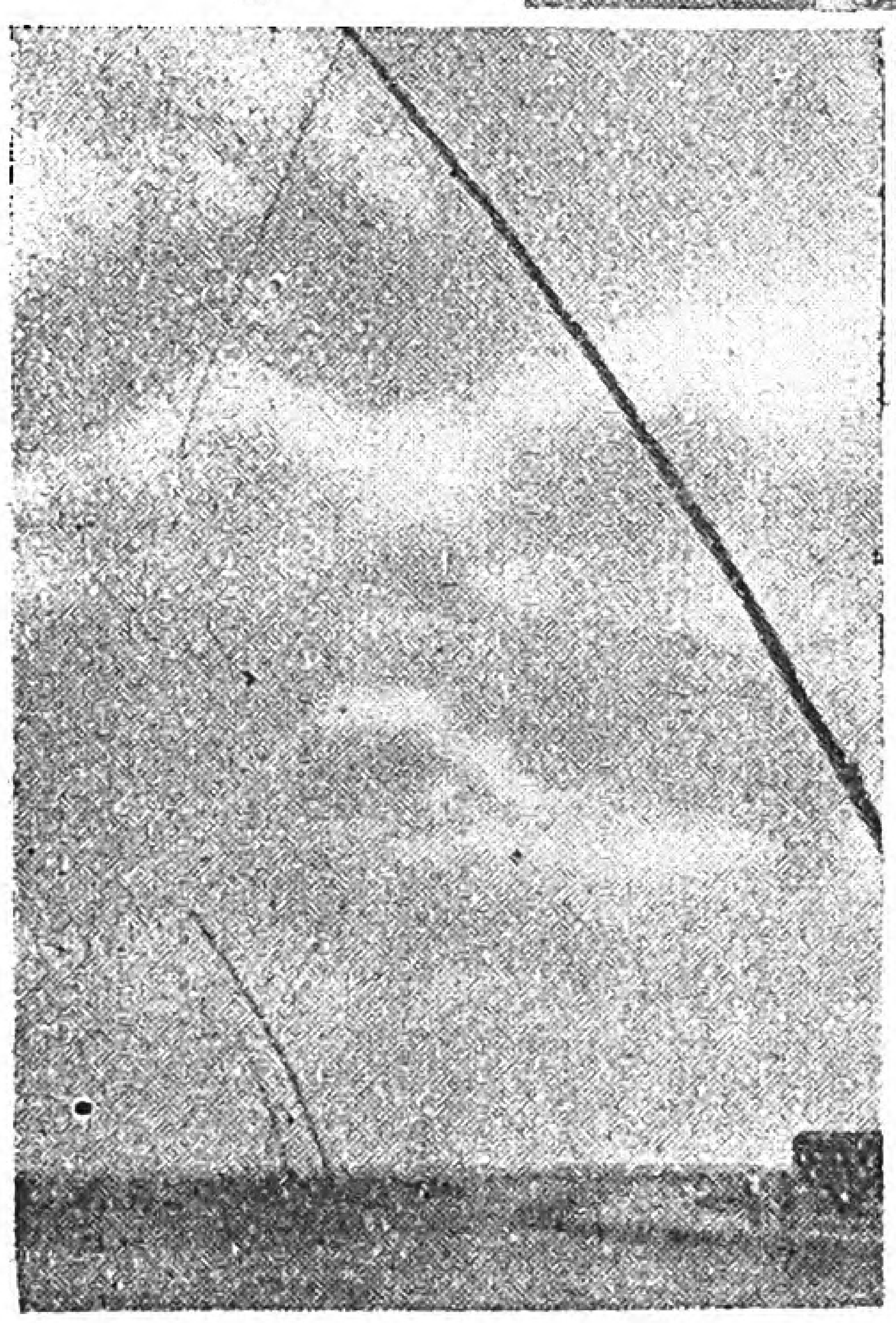
――水がのみたい……

――さあ、さあ！――老人はせか〳〵として彼に水差しをやつた。

――ひどい目にあつたなコーリヤ？――と云つて皮の前掛をかけたやせた若者が駈よつて來た。

――おい、ぢいさん――と云つて彼は水を飲んだあとの濡れた厚い、微笑を浮べた唇をなめづり廻し乍ら薄笑ひをした。――いつもしよつちゆうブツ〳〵云つて





11　ソヴエート農場の移動郵便局（自動車）。
12　農場のテント生活と、數ケ所のテントを連絡する電話線。（左）
13　同じく新聞自動車。
14　同じく穀物輸送の貨車。

ゐるくせして、自分はまだ休憩にもならないのにもうお茶をのんでなさる。

――おゝ、のんでゐるよ。それがどうしたい？　俺やいゝんだぞ、恰度持前だけやつちまつたんだからな。――と云つてトロールの老人は髯をふるはせた。――だが、お前は俺と同樣に見ちや困るぞ、俺はおつつけもう親方になるんだからな。若えの。

――大方その時は俺のところへやつて來るんだらうな――と胸當をつけた口髭のないのがおづおづと顔を突き込んで云つた。

――手前のところへ？　手前のやうなやくざのところへかね？　一生行きやしないや！　徒弟時代にやこんな奴は俺は好かなかつたよ。今ぢや尚更らのことさ。この間丸い鐵を叩きのばしたな、どんなものが出來たかい？　えゝ？

――うむ、一寸ばかりくるつたがな――厚い唇の男が薄笑ひをした。

――くるつた？――老人は口一ぱいに笑つて訊き返した。――茂つた髯の中ではつぶよりの穀種のやうに、まつ白に揃つた歯が光つた――「くるつた」つて何だね、馬鹿者奴！　どれもこれもきづものばかりぢやないかね。何トン駄目にしたと思ふかね？　この縞の悪魔奴！　この馬鹿者ども奴！

――お前さん、もう止すがいゝぜ、どうせ俺らはみんなさう云ふ馬鹿者どもぢやねえか――腹立たしげにケープカ帽をひつ被つて、平つたい顔の男がふくれ面をした。

――さうさ、その時、そこに俺がおつたらよ…毒々しく老人は吐き出すやうに云つた――俺は直ぐちやんと測つて見て、臭のしないやうな手前たちの鼻を引

13



きちぎつてやつたらうにな。ちやんとい丶時に測つておいたらきづものなんか出やしないんだ。

——施療所へ行つて來なくちやいかん。脚がよろ〳〵しやがる。根畜生奴——と彼は氣鬱げに髯の中で鼻をならし乍ら云ひ足した。

若者は何だか遠慮するやうに退き去つた。ところが老人は猶一層聲高く非難してゐる

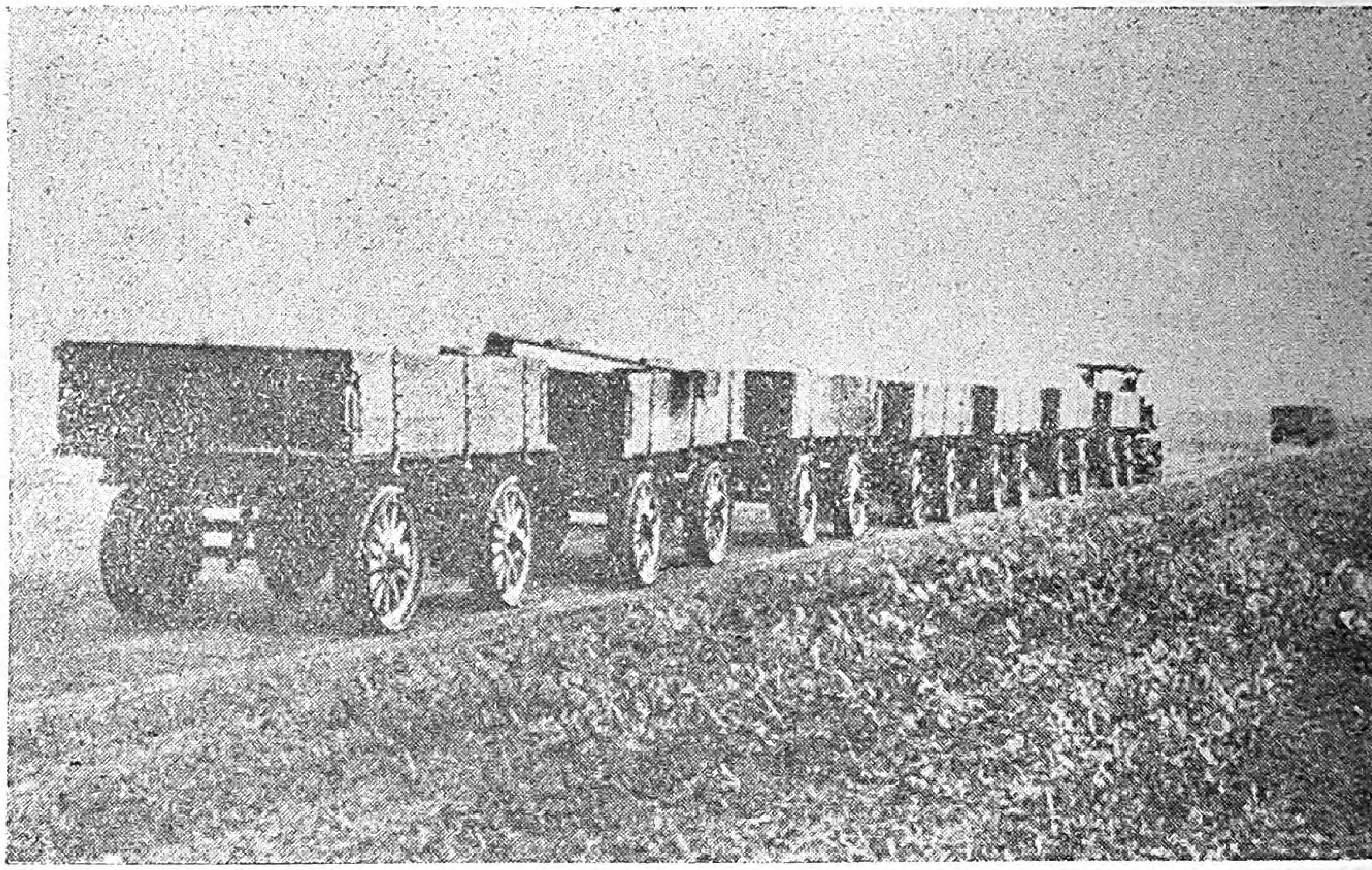
——いつだつてあばきたて丶やれるんだがな……只悲しいことには、俺は學問がないんだ。若し俺に學問があつたらな、俺は新聞に縱横無盡に書きまくつてやるんだがな。

休憩になつて、何號も積み重ねた『赤きソルモヲ人』を眺めて、そこに太い字で「展鐵部に於ける無秩序」と云ふ題目をよんだ。

『思ふにきづものなるものは、出來てしまうものだし作られるものではない。だが展鐵部に於いては、きづものを得る點には、意外と云ふことはないのである、そこではきづものを文字通り製作してゐるのである。』この論文は、きづものが『見られる』ときにそれは展鐵を止めて避ける事が出來る、しかし展鐵がつゞけられてゐると云ふストライキングな實例を全般に渡つてひいてゐる。それで老人の云ふところでは「きづものになつた」金屑が山積して、次のやうな怖ろしい數字になつてゐる。

Ｚ型鐵　二九噸不正品、　變型鐵　一八噸、
圓型鐵　一二噸不正品、　山型鐵　六噸、
圓型鐵（直徑一八・五ミリ）二一噸、　棒型鐵（一六〇×二〇）五〇噸、
圓型鐵（直徑九〇ミリ）一〇噸、　圓型鐵　五〇噸、

そのあとには、それらのきづものが工場を渡り歩く物語りが記されてゐる。それらの工場は、どこでもきづものを『役に立たないもの』として受け取らない、それで取引き



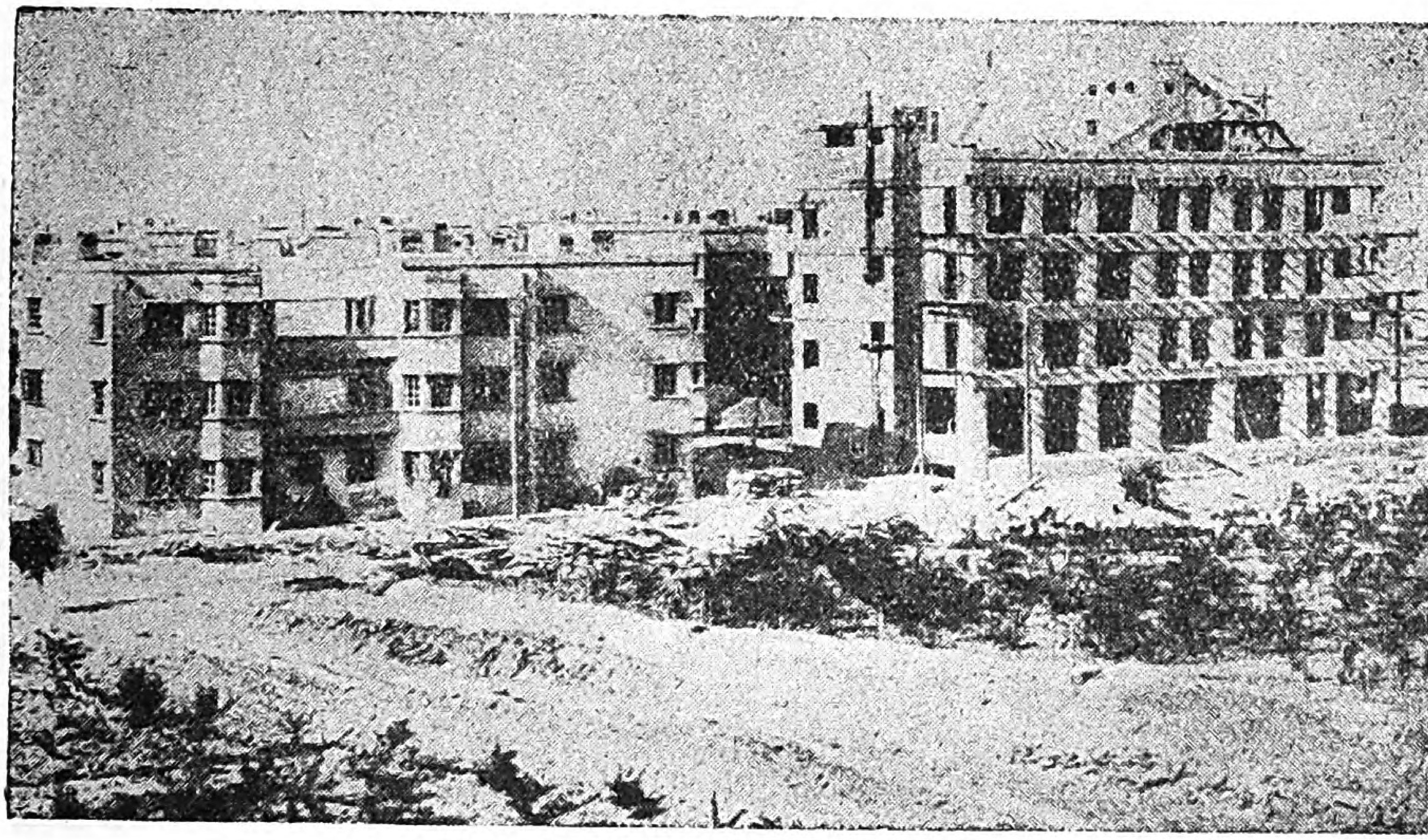
14

は下落した値段で行はれ、再び分け出して展べ直すことになる。若しも一つの火熱工場で、二百トンばかりのきづものが出來るとしたら、殘りの火熱工場は全體でどれほどに登るきづものを出すことであらうか？いつ迄これらのきづものは工場豫算表の足の下でふらついてゐるのであらうか？　いつになつたらわれ〳〵は、われ〳〵の舊式な寛大な「ぐうたら主義」のかうした悲しむべき成果を集めることを止めるのであらうか！　この「ぐうたら主義」と云ふ言葉は、われ〳〵と今朝迄汽船で一緒に來た、しかめつ面をした老技師の會話の中で一再ならず耳にしたものであつた。實際、これこそ「ぐうたら主義」でなくてなんであらう——鐵を展べる、みると充分よくいつてゐるとはいへない、それだのに尚打ちつゞけて、役にもたゝない生産品を山から山に突き込んでしまうのである。この意見は、監督代理人のゲ氏も頒ちもつてゐるところであつた。

——そうですよ——と彼は云ふ——われ〳〵の教養の足りなさ、あらゆるぐうたらさの外にわれ〳〵はまだ技術的な不完全さに惱んでゐるんです。このソルモヲは半世紀も昔から存在してゐるんですがね、技術的完成化は、私たちがやつと今になつて引き入れ始めたんですからね。私たちは、この工場はまだ〳〵建設期にあると考へてゐますよ。各職場の配置が大へん不適當です。まだどこもかしこもが機械化、電氣化と迄は行つてゐません、しかし、バラハンの電流を利用する時は決して遠くはありませんよ。森林の中の新しい石造の營舍を御覽になりましたかね？

——えゝ、えゝ。

——あれが新しい發電所なんですよ。工場の將來の建設に就いてわれ〳〵は話し合ふ。これは容易な仕事ではない、と云ふのは、工場の仕事の領域は非常に廣汎であるからである。——こゝには四十四からの職場があります。私たちは汽關車や、汽車や、電



15 アルマニカンドの勞働者住宅

車や、自動車や、發動機などを製作してゐるので、船渠迄もあるんですよ。しかし私たちは尙建設をつゞけてゐるのでして、それは相當よく行つてゐるやうです。カナビアンスコエ大道に、新しい練金工場が建てられてゐるんですが、そこへ火熱工場が集中されることになりませうよ。

――そんなに工場ばかり多くなつてどうするんですか？　注文は澤山ありますかね？

――それです！　もう注文を斷つてさへゐる位ですよ。不可能なんです、我々の生產プランをたえず擴げて行つてゐますからね。ね、いゝですか、今年度の一九二七――八年には六十臺の機關車を製作しなきやならないところが翌年度の一九二八――九年には既に百臺の機關車を作らねばならないんです、そして五年先には――二百ですからね。

――そりや、素晴らしいですね。

――いや／＼素晴しいところまではゆかないんですよ。若しも資本家たちが、一ケ月に十臺づゝの機關車を作り、われ／＼が五臺づゝしか出來ないとするなら、それらの機械をその構成と力によつて比較することも出來ますからね。ところで、二百づゝ機械を生產するやうになれば、その時は又「われ／＼はもう資本制度の時代から、はるかにはなれ去つたのだ」と云ひ得るでせうよ。

われ／＼は勞働者の發明に就いて興味をもつた。

――わたしたちのところでは、各自のその自分の專門的な分科があるんです。そしてこの分科が發明を管理してゐるんです。この點では、我々は恥づかしくないんですが。この半年期に、一〇一の發明が提出されて、七〇は既に行はれてゐるんです。

――發明には賞金を出してゐるんですか？

――そりや勿論です。その爲に特別資金があるんです．賞金――して我々は三、〇二五



ルーブルを出しましたが、採用された發明の爲に節約されたのは、二二、五〇〇ルーブルになつてゐるんです。この外、我々は發明者に援助するやうに努力してゐます。發明者は、その設計を渡す前に、最も秀れた技術家達が集まつてゐる技術協議會に相談する事も出來れば、又同じく審査委員會に相談する事も出來るのです。

話は、技術家インテリゲンチヤに移つた。

——シヤフテンスク裁判事件との關係では彼らの氣分はどんなものでせうか？

——大きな集會があつて、勿論このシヤフテンスクの下劣な連中から袂を分ちましたよ。だが一般的氣分に就いて云ひ得ることは、我々のところには、『赤きソルモヲ』に合體した社會的な技師達もありますが、又受動的な連中もゐます。かう云ふ受動的な連中は、なか〳〵よく働き、立派な智識もあるんですが、只それが職場での自分の狹い技術的な義務だけしか知らないんです。かう云ふ受動的な連中は、こゝにもゐますが、しかし敵意をもつた技師たちはゐないやうに思はれますよ。

序に云つておくことであるが、これらの社會的な受動性は、技術的行動において强いのであるが、勞働大衆は、新聞でも見るやうに、工場での利害に對するこのやうな無關心の現はれを、悉く憎惡をもつて剔出してゐる。雜誌『赤きソルモヲ人』の中で、海外派遣團としてアメリカへ行つた技術家達——所謂『アメリカ派』の人々に對して、さゝげられた論文は一二篇に止らない。『赤きソルモヲ人』五月の諸號の中の一つに、この『アメリカ人』達に『諸君はニアガル以外に何を見たのか？』と云ふ執拗なる質問があたへられてゐる。勞働者達は、フオクストロツトやニアガルに就いて「色づけをして話される」事では足らない、と考へ、彼らの期待してゐたのはこの事ではないと云つてゐる。『我々は、我々の工場を合理化させることを望んでゐる。』——と新聞は



16 ツバキ

呑氣な「アメリカ派」に數へてゐる。――合理化すると云ふことは、外國に於いてなされてゐるが如き勞働者の勞働賃銀の爲ではなく、海外に對する新らしい生產強化の爲であり、又外國に於ける工場の技術的に高度に發達した生產の方法と手段とを攝取する事である。この爲には、我々は百萬金も惜しまず、外國の機械を注文しつゝある。この爲にこそ我々の工場の技師であるボブリシチエフとコトフの二人を外國に派遣したのである。數ケ月かに亙つたこの旅行に對して工場は九千ドル（一萬八千ルーブル）を消費した。アメリカの工場へのこのやうな旅行から、我々は必ずや結果を受け取るべきであらう。ところが我々はこのやうな結果をもまだ見ないのである。』

『アメリカ人』は、そのすべてを改造し、不正品を失くするための『生き〱した思想、エネルギイ、欲求』を缺いてゐると云ふ點で非難されてゐる。ところがこの二人の技師は最も重要な職場と關聯を持つてゐるのである。

『展鐵工場に於いては、（「アメリカ派」コトフの報告によれば）幾千萬のきづものが生產されつゝある。又鑄鐵工場に於いては（「アメリカ派」ボブリシチエフの報告によれば）鐵塊が鑄造され、又鑄造し直され、舊式に勞勵がなされ、爐は矢鱈に背負はすので苦しみ切つてゐる』

これらの批難は根據がある。勞働者の思考は、夥しくきづものの「生產物」のために不安になりそしてこの不安を技師たちに傳染させようとしてゐるのである。これらの技師に就いての話は社說の中に、大活字や少活字になつて書かれてゐるが、それは『ソルモヲ人』にさへ落ち込んで來たのである。卽ち『ロシア工場局』は、技師の中で誰を外國へ派遣したのだ、そして彼らは何をもたらしたか？』

こゝで技師たちは遂に懸念しはじめ、そしてきづものに抗し、或は技術の原始的な方



法に抗しての闘爭の隊列の中に立ちあがつたのであると考へられる。

——きづもの——これがわれ〴〵の主要なる病氣なんです——ゲ氏は云ふ——われわれは闘ひ、叫び、そして發表してゐる。しかしわれ〴〵の許には、技術的不完全も多いし、それに人間の素質がいつもいゝとは限らないんです。

——たとへば、酒を飲むのですか？

——えゝ、そりやもう幾らでもです。われ〴〵の『赤きソルモヲ人』は當然すべき通り、無頼漢や醉漢どもに手をつけて、彼等を束にして書きたてゝゐますよ。われわれは二軒のビヤホールを閉塞しました。その一つは今では、ゴーリキーの名の圖書館になつてゐるし、もう一つの方は文化喫茶所になつてゐます。

——どうです、その喫茶所は皆の氣に入つてますかね？

——評判はよかつたんですよ、澤山やつて來ますがね……それは新聞を讀んでも解りますよ。しかしニージニイへ酒をのみに出かけてゆく狡猾な連中がゐますよ。それらの妻君達は、夫達が今では『監視なしに』飲んでゐると云つて不平を云つてゐますがね。しかし我々は再びビヤホールを開くと云ふ考へは持つてゐませんよ。

話の終りに近づいて私たちの善良な隣人は注意したのである。

——デーゼル工場には是非ともいらつしつて御覽下さい。それから造船所にもね。われ〴〵はこの造船所のために千七百萬留受取る筈ですが、すれば、この造船所は全く見違へるやうになります。造船所は、私たちの仕事では、最も若い分科です。

硝子の壁をもつた長い營舍の側を通つてゆく。少しばかり行くと——汚い古い營舍の間に、空色の透明な船が運び込まれたやうな氣がする。

——これが新しいデーゼル工場なんです。



17

そこで私は氣がついたことだが、青色の營舍が板張りにされてゐるのであつた。

——主要建築なのに、どうして木材で作られてゐるんですか？

——それが、はるかに安くもあり、早くもあるからです。工場は、耐火方法で保證されることになるでせうから。

しかし私はやはり信じる事は出來ない。これらの整然と輝いてゐる壁は石と——もつと堅固に、もつと確固と結合されなければならないであらう。

古いデーゼル工場は、機械の王國である。ある機械は、しつかりと地上に坐つて、廣く擴がつてゐる。そのピストンや螺旋や車輪の輝きは——ほの暗く、威壓するやうである。又他の機械はその頭の多い頂上を、高く持ち上げてゐた。實際、機械を完成してゐるところの、これらの種々な形をした鐵や鋼鐵や鑄鐵などは、頭のやうにも見えるし、又はその高くなつた結び目が機械の未來の神經のやうにも見える。機械は、その中にかくされてゐる力によつて、合理的なもの〻激烈な美によつて惹きつける。この機械の中の螺旋の一本々々の場所は人間の腦髓の最も纖細な秤にかけられ、計算されたものである。そしてこの眼に見えない實驗室の仕事は、鑄鐵や銅や鋼鐵などのがつしりとした結合に於いて勝利を博してゐるのである。頭の上では、恰も草原の春の絨氈のやうに明朱色に彩られた機械の鋼鐵の部分がきらめいてゐる。

——これが掘泥機用の蒸氣機關で、二百五十馬力を有してゐます。

少しはなれたところに、黒い塊が、前に突き出た腹のやうな鑄鐵がある。それを人々が彫り刻んでゐる、曲げたり、穴を開けたり、削つたりしてゐる。私は思はず尊敬さをもつてたづねる。

——これは何なのですか？

18



17 昨年十一月モスクワで行はれた革命十二週年紀念大會の光景。

18 レーニンが全ソヴエートの民衆に聞かせる演説をレコードに吹き込んでゐる所——一九一九年——

19 ソレムの大劇場に於ける赤衞軍十二週年紀念祭大會の模樣。

20 一九二九年十一月モスクワに於ける革命十二週年紀念の大會のソヴエートの統治者達——向つて左よりスターリン、ブハーリン、ルイコフその他。

——千二百馬力のデーゼルですよ。

やせた、黒い髯の勞働者が謙遜に微笑してゐる。彼の暗い頰には皺が深くきざまれてゐる。しかしその眼は、眼鏡の硝子越しに微笑んでゐる。彼はデーゼルの構成を説明してくれる。彼の大きな毛だらけの手は、恰も眼なんか使ふ必要もないもの丶やうに、輕々と機械のあちこちの部分に觸れる。彼は技術語をまき散らし、とつさに計算して數字をあげる。その説明は、何だか判つたやうにもあるけれども、概して彼の前ではわたしは自分を非常に醫學者として感ずる。

——もうぢきに、この正面裁斷機を据ゑつけますよ。これは、とても大した能力をもつてゐるんです。

——これが……デーゼルよりも大きな能力をもつてゐるんですか？

彼は滑稽に眼をすがめた。

——大きいですとも！ 運搬の時には、此奴、三十輛の貨車を占領したんですよ。

——わが國には、ぢや、このやうな機械はないんですね？

——えゝ、だがよく見て作りませうよ。——と彼は主人らしい確信さをもつて靜かに云つた。彼は、私が此處に、何のために見にやつて來たのかと訊ねる。そこでわたしはこれ〳〵のためであり、自分が何者であるかと云ふことを手短かに答へる。



19

――ははあ――と彼はうなづいた――生活に於いてもかう云ふ風にするためだと云ふわけですね、それは本當だ、賛成ですよ。私もやつぱり文學は知つてゐるんですからね、私たちの圖書館で本を借り出してゐるんですよ。

彼は話すのが嫌でなかつたらしい。しかし後の方で誰かの低音が轟いた。

――さあ、さあ、退いた、退いた！

髯の赤い前屈みになつた男がトロッコを押してゐた。彼の髯は染めてるのではないかと思はれる程赤い。そして空色の眼のまはりは、泥と埃で黒い縞になつてゐる。兇猛にきらついてゐる眼鏡をちら〳〵させて、四方八方唾を吐き乍ら、彼は言葉で最も嫌らしい亂暴な罵詈をまき散らしてゐる。

――ぼんやりしてやがらあ――と云つて彼は私たちの隣人の方に唾を吐いた。

――行け、行け……と相手は蠅でも追ひ拂ふやうに手を振つた。

髯の赤い男は、憎々しげにトロッコを向け直して、襤褸だらけの汚い破れたズボンを見せ乍ら、何處か機械の迷宮の中へかくれてしまつた。

――この工場には何が据ゑつけてあるんですか？

――船舶や水車用の機械や、變電所用のヂーゼルやモーターですよ。

私たちからあまりはなれてゐない小さな空所には、書類や帳簿をつんだ書卓があつた。すり切れたトルストフカ（譯註――W形の襟のついたワイシャツのやうな上着）を着て、禿げ頭の男が算盤の珠をパチ〳〵とはじいて聲高に誰かと話し交してゐる。

――危ないですよ！　頭の上でシュウ〳〵カン〳〵と音がしはじめた。――機械の部分の荷をつけた起重機がゆるやかに動いた。トルストフカを着た男は頭も上げないで知らぬ顔で算盤をはじいてゐた。



20

──起重機は何トン位持ち上げる事が出來ますかね？──我々の案内者にきく。
──十トン位持ち上げるものもありますよ。
──だがひよつとして、こんな重いものが落ちたら……
私は、書卓に坐つてゐる男のことを考へた。
──勿論そんなこともありますね。標準以上に入れたり、又は縛り方がわるかつたりしたらね──
荷物はゆら／＼と揺れ乍ら、危つかしく禿げ頭の計算係の上に浮び上つた。
──ねえ、ワーニャ──と彼は鉛筆を振りまはし乍ら叫んだ──僕はさう書き込んでおくよ、いゝかい？
──どんな風にして荷物を受取つてゐるか御覧になりたいですか？──と早くも戸のところ迄行つて案内者が云つた──これは貨車の車輪の輪縁なんです、これは巧妙にやらなきやならないんです。
貨物列車が、煤だらけの小屋の前の道の上に立つてゐた。
──ひーとーつ！と列車の中から、若い聲がゆつくりと叫んだ──すると鐵の緣輪が重々しく、小橋に沿つて下の小屋の方に辷つて行く。
──ほい來た！──と誰かの手がその緣輪を摑んだ。
──ほい來た！──その緣輪は最早小屋の奥へ消えて行つた。案内者が説明をした──少し欠伸でもしてゐて御覧なさい、この緣輪に、二度と立ち上れない程に打ちつけられますよ。
碁盤縞のケプカ帽子を被り、腰迄露はな、若いづんぐりした若者が先頭に立つてゐた。彼は大きな白い齒をむき出して叫んでゐる。

21

モスコーに建てられたコンミューンの家には讀書室、子供部屋クラブ、食堂、休憩室などありこゝでは、愉快な新生活がいとまれてゐます。寫眞は



21

——さあ、寄越した！　こいつ！　彼は自分の勞働の若々しさを享樂してゐる。勇ましく掌に唾を吐きかけて音たかくその手を叩き、それから露はな廣い胸を張つて、絶えず、新しい荷の輪綫を受取つてゐる。

——おーい、さあ寄越した——彼の勇ましい叫びをわれ〲はまだ暫らく耳にしてゐたが、そのうちに機關車製作工場へと歩みよつて行つた。

廣い戸口の中でわれ〲を迎へた最初のものは、まだ煙を吐いてない煙突を上方へ突き出してゐるところの機關車である。その機關車は、殆んど出來上つてゐる、その高い車輪とピストンは油でてら〲と光つてゐる、只その胸部には、膨れた甲鐵が作りつけられてゐない。破れた縁無帽を被つた筋ばつた男が、この複雜な鋼鐵の組織體の内部で何か仕事をしてゐる。他の者たちは上の方で働いてゐる。丸く刈り込まれた頭をもつた、團子鼻の汚ない男が、力強い機關車の背を据ゑつけて、何かネヂを締めつけてゐる。

——あ……あ……——と彼は風邪氣味の高音で何だか言葉のない歌を唄つてゐる。まるで乾草の荷車に乘つて行くものゝやうな顔付をして唄つてゐるのである。

——此處には運搬車のやうなものもあるんです——と案内者が云つた——機關車を作る勞働の過程を全部御覧になれますよ。次の瞬間は、そらあれです——と云つて彼は後ろの方の次の機關車を指し示した。

この機關車は、まだ車輪がつけてなかつたし、人々はその機關車の上でまだ仕事をせずに、下に入つて働いてゐた——レールは塗磨きの油のために黒くてら〲に光つてゐる深いどぶの上を通つてゐることがわかつた。足のない骸骨のやうな機關車の下では、素早く、又はゆるやかに、人間の手がちらついて見える。打つ音や、軋る音

22



22 今入浴をすました子供達。同じく可愛らしい女の子供達が一緒になつて散歩に川かけるところ。

や、カチカチと云ふ音が耳をろうするばかりの雜音になつて、上の方の硝子の圓天井の屋根の方へ昇つてゆく。鋼鐵の細道の中に押し込められたこれらのすべての人々の耳を考へてみるがいゝ。子供の時代からの知り合ひである釜作りのイワン、マルコウイチ、カリーニンが思ひ出される。彼は丸い美しい顏をしてゐる三十五歳の男で、舞踏家で、おどけ者であつた。そして彼は田舍の老人のやうに聾者であつた、『お前さん、何處へ耳をおいて來たのかね？』——と呼びかけると、『釜の中でさー』と云つて手を振るのである。白髮の勞働者が、陰氣に眼をしかめて溝から這ひ出して來た。そして通風機に唾を吐きかけて板材の堆積の方へ歩いて行つた。

——おい……お前……——と彼は頭を揺りながらぐつたりと咳をした。——さあ、さあ人間樣に席をゆづるんだ……おい！

板材の上では、肘をついて、汚れた白い網シャツを着た可成りに美男子の若者が横になつてゐた。片方の手で彼は、波を打つてゐる暗色の髮を額に撫でつけてゐる。そして肘の中に折り曲げてゐる片方の手で、卷煙草を持つてゐる。彼がこゝやう工合の悪い姿勢で身を支へ得てゐることは驚くべきことである。

——何をぢろ〳〵見てるのかね？——と彼は自分の隣りの男を流し眼で見る。

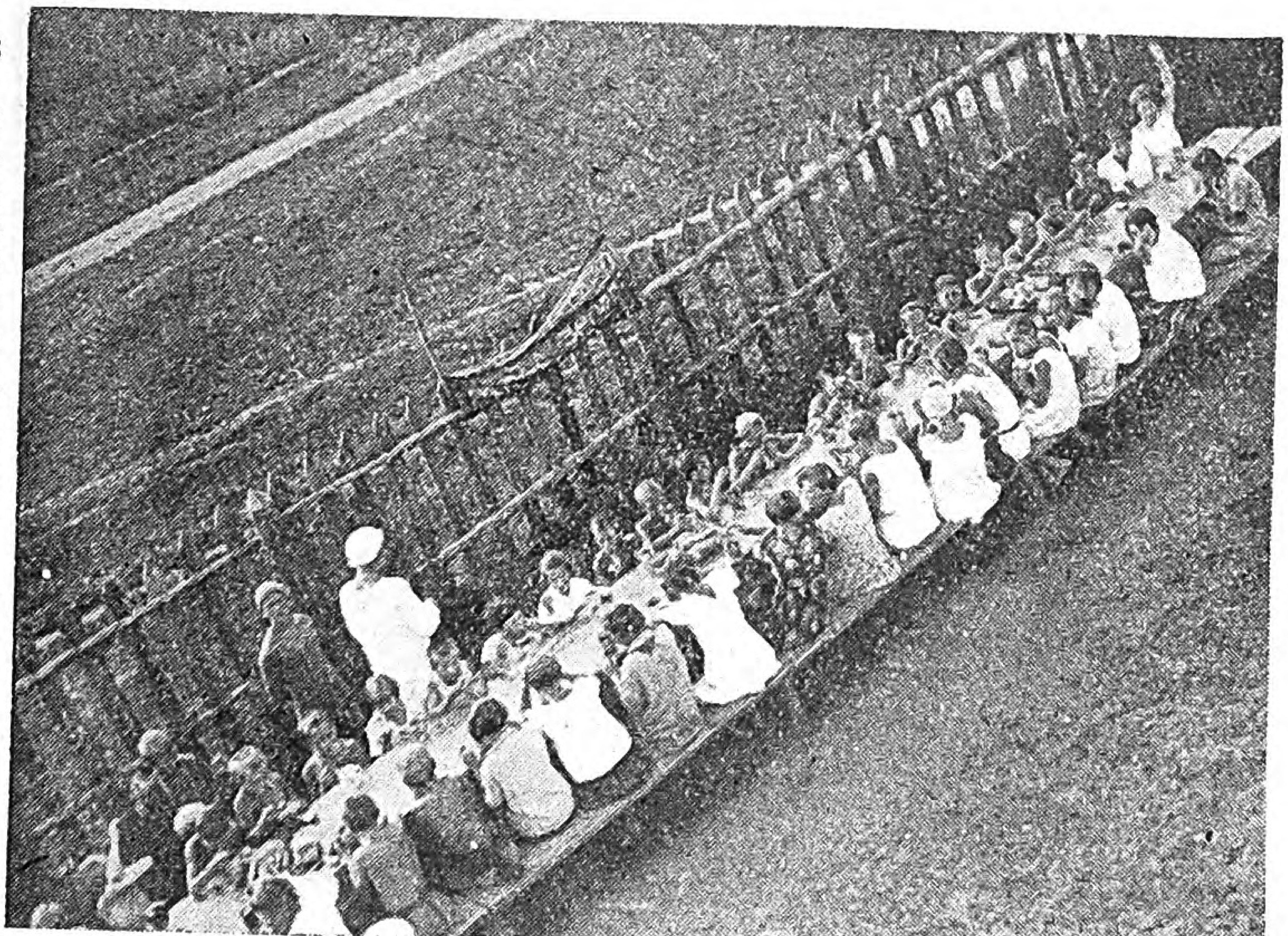
——おい、のつぺり屋、大成功だぞ、心配がないんで娘つ子を可愛がつやがる——

——と白髮の勞働者が溜息と一緒に咳き出した。

——娘つ子は、する事はもう何もねえからな——濃い亞麻色の毛の男が、怠惰に微笑んだ。

——お前さんに惚れる外にはか？

——そうでなくて、どうだつてんだい？——美しい若者が、滑稽に、輕蔑するやう


23

23 戸外の清潔な空氣を吸ひ乍らの食事してゐるピオニール達。

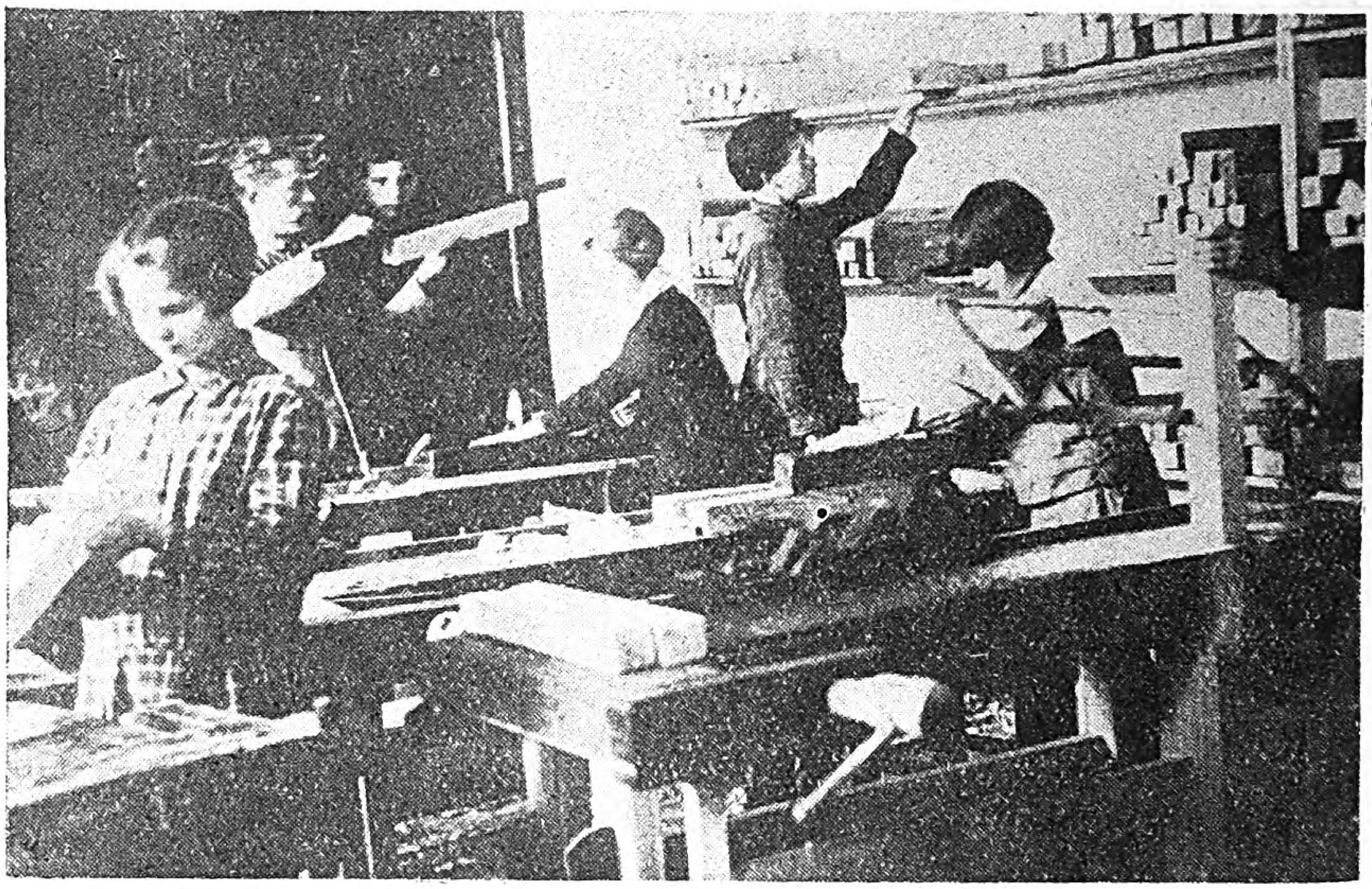
24 學校でピオニールに機械工業の課目を作つて勞働教育を行つてゐるところ。

に口を歪めた。この動作は、彼を損はないで、かへつて彼の薄黒い顔にやさしげな、はげしい表情を加へた。

——おゝ、貴様は……畜生。根畜生！……と白髪が勞働者が來たその方をぼんやりと眺めて溜息をする。私が突然氣が付いたことであるが、白髪の男の顔は、彼の髮の毛よりもずつと若いのであつた。彼は眞黒な眼と、濃いちゞれ毛の口髭をもつてゐる。彼はたしかに痛めつけられてゐる。がそれは決して老衰のためではない、何か他に、もつと〱苛酷なものゝためである。若者の方へ向けられた、彼の疲れたやうな羨望を含んだ眼眸は、如何に説明するべきものであらうか？ そして一體何處から、このあまりにも早い白髪が來てゐるのかと云ふ謎を解きたくなる。私たちの案内者は既に製作工場の方はもう充分であると云ふことを發見してゐるのである。

——さあ、先へ行きませう、もう直に、出來上つた機械が見られますよ。

彼はまだ大へん若い、そして何よりも面白いものは機械であり、その機械の中の主要なものであると考へてゐる。そして機械そのものは死んだものであつて、機械に生命を與へるものは人間の意志であると云ふことを忘れてゐる。人間と機械、賢明に、そして頑固に機械を支配することを習得してゐる人間、力と正確さをもつた、彼の手から出て來るものを測ることを習得した人間、——これが即ち勞働と技術との完全な結合であつて最も嚴格なる自己訓練によつて生氣を與へられたるものである。だが、このやうな機械の堆積だけでは、われ〱には不足なのである。工場で出來るきづものは、人間と機械の仕事が、われ〱の許にあつては屢々ちぐはぐになつてゐると云ふことを示してゐるものである。一九二六——七年度の工場總會の統計によれば、機關車の値段は九〇・六七九ルーブルであつた。それが一九二七——八年には、既に九



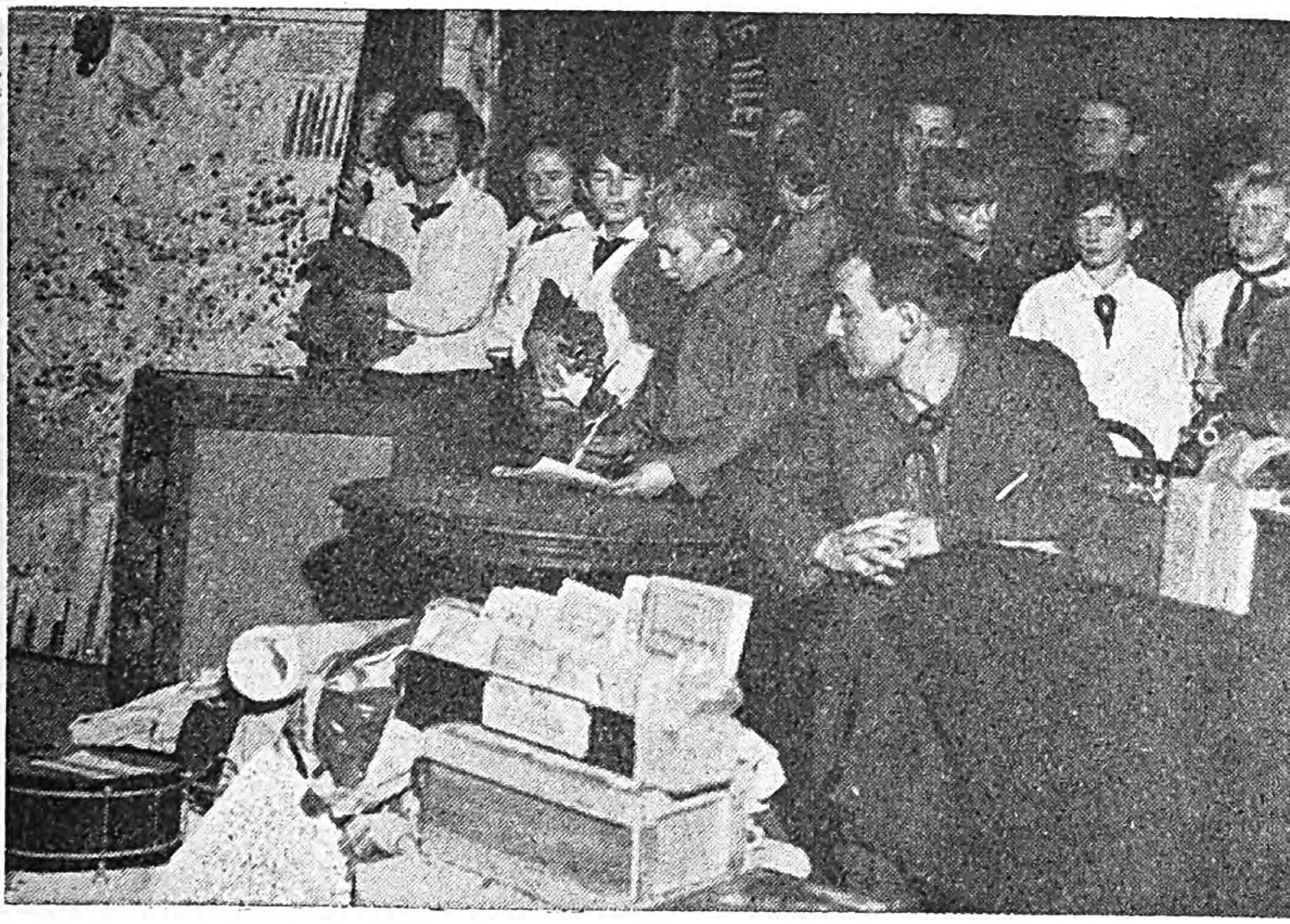
24

一・〇七五ルーブルに上昇してゐる。事實、生金の値が騰貴したと云ふ話であるが・ところで如何なるパーセントで、このきづものが、この上昇した値段に關係してゐるのであらうか？　關係してゐることは疑ひがない。帝政時代の、無智文盲から、われ〳〵に遺産として移つて來たものは、自分の仕事に對する粗略さであり、不活潑さであり、『どうにかなるだらう』と云ふ怠惰な寛大さである。そしてこの寛大さは、仕事の時の喫煙が語つてゐるものである。すべてこれが、等しからざる結合に於いて、人間の中に於かれてゐるのである。しかしこれらの「民族的特質的」特徴の殊に強力な量は、われ〳〵にとつて重要なところのことの忘却を生み出してゐるのであるが、即ち、それは、われ〳〵によつて創り上げられた新しい世界と、各個人の勞働の産物は、密接な關聯の中にあるのであると云ふ事を忘れさせてゐるのである。

私は、『赤きソルモヲ』が一年に二百ブーの機關車を製作するやうになる時代について考へる、その時には機關車製作工場には、運搬車が活動し始めてゐるであらうか？　その時代になつて、美しい若者が、娘つ子の噂をして煙草をくゆらして横になつてゐるか、どうも疑はしいものである。五年先には『赤きソルモヲ』を基礎的數字――二〇〇…をもつた活動の新しい軌道を創り上げてるであらう。……人間は、若し變化せず、又自身の中に新しい力を成育させなかつたならば、とうていこの迅速な激烈な軌道を動いて行くことは出來ないであらう。私は今日見たところの幾多の人々を思ひ出す、――すべてこれらの人々が、さうした事になれるであらうか。人間は孤獨でゐれば自分自身にとつては、自分はいつも目新しく謎のやうなものではないか。

――入場證をお見せなさい、造船所の方へ行きませう。

橋のところから、大きな、埃まみれのプラカアトが見える。「造船所を與へよ」



25

25 都會のピオニールと農村ピオニールの親睦會。
26 看護婦の革命十二週年記念デモストレーション――モスクワ。

――此處では、この五月にこのドックから二ツのスキーナ船が出されたんですよ。進水式があつたんですね？――と私はプラカアトを指さす。

――えゝ、それは勿論ですとも、こんな大きな船はまだ一度も造つたことはなかつたんですよ。一萬噸からの排水量ですからね。これは、一ポンドの乾葡萄なんかとは違ひますからね。

そしてわれ〳〵のコムソモレッツ（共産主義青年同盟員）は舌を鳴らしさへした。

――そら、あそこの新しいスキーナ船のそばで底を入れてゐるでせう。あれはタスパルの註文なんですよ。

橋から下の方を見る。砂と、小さな水溜りの間のところに、まるで地から掘り出した巨人の骸骨のやうに透き通つた長い鐵の物體が高くなつてゐる。

――あゝ、あれがヲルガ旅客船のための石油艀艇なんですね。

河の曲つてゐるところに、他の側からもこんな樣な骸骨がある。森のやうな船板が、四方八方からそれを取圍んでゐる。滑車が軋り、劈ざくやうに、鋸がギイ〳〵となり、鳴き止まない木啄鳥のやうに槌が音をたて、人間の足音がザワ〳〵パタ〳〵としてゐる。人々は、荷物をかついで腰を屈めて雜沓して下の方へ走つたり、上の方へ上つたりしてゐる。すべてのものは有機體の中の同一な無數の血の滴の樣である。

――危いぞ！　おーい

汗まみれの頭を、駱駝のやうに上方に曲げ乍ら、一列に並んで荷運び人夫が歩いて行く、彼らの露はな汗に濡れた胸は、銅のやうに赤い。下へ垂れ下つた兩手は、鞭のやうに側でぶら〳〵してゐる。他の者程には陽にやけてない、一人の鼻の尖つた男が舌を出して歩いて行く。そしてどんよりした眼で太陽を見乍ら口笛をふきながら呼吸



26

をしてゐる。埃の堆積の中で、庇の下から、數メートルある廣い太い穴だらけの棒型の鐵が引き出されてゐる。その鐵は繩で縛られてドックの出口の方へ引張つて行かれる。十人以上の人間が、繩を肩にかけて、細かい灼熱された礫の中に埋れ乍ら、重々しく前方に歩いてゆく。みなの顔は汗に濡て眞赤である。そして灼熱されて兇惡な様子になつてゐる。突然誰かゞ吐き出す様に口汚なく罵つた。誰かゞ吠え出した。

――何でい？ なんだつて起き上りやがつたんだ？――と前方から叫ぶ。

――繩が切れたんだよ……ごた〱云ふない、根畜生！

私は、工場の中庭にあつた橋梁起重機を思ひ出す。起重機係の見張小屋で鈴が靜かに時々鳴つて、起重機が動き出す、そして、どうしても一噸よりは輕くない鑄鐵の塊が空中に浮び上るのである。そして起重機は、その塊を、まるで木屑でもあるかのやうに輕々と音もたてずに何處か隅の方に下す、そして元へ動いてゆく。空地では勞働者が、はめてゐる革の手袋をばた〱叩き乍らその起重機をまつてゐる。彼は新しい鐵塊を摑む鐵鉗を樂々と向け直す。

――此處では、澤山の者が手で働いてゐるんですよ――と案内者が、ドックの騒音と、口汚ない罵詈を通して叫ぶ。――此處ではまだ〱機械化は非常に必要ですよ。

平つたい顔をした、頰の垂れたあばた面の男が、コールターで汚れた袋の前掛をしめてゐる、彼は投げて來た刷毛を受取り乍ら、黑いバケツを下げて正面からやつて來た。私たちの案内者は、殆んど彼と突き當らないばかりになつたが、そこで側の方によけた。

――お出でなすつた！――いゝあばた面がわめいた――なんだつて人間にぎやあ〱吠えたてゝるんだ！ 鼻つまりの犬奴が！…そら貴樣を…



27 セメント工場の勞働者が、限定規限前に豫定の三十萬樽が生産されて祝つてゐる所。

そして彼は、その黒い刷毛を表情たつぷりに振り廻した。

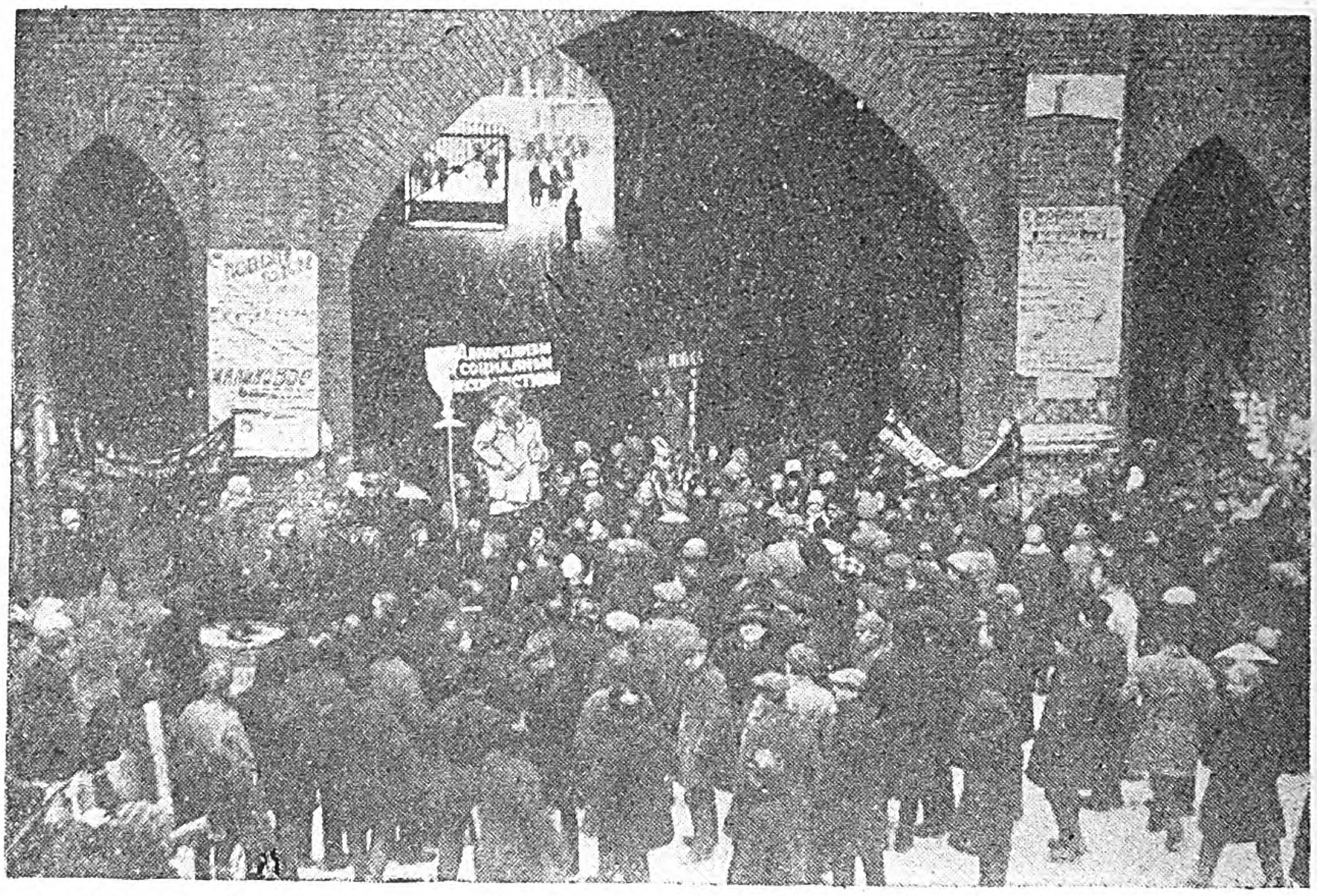
――同じやうにのろ〳〵してやがる！

彼の聲の中に響いてゐる怒は、本當のものかどうか疑はしい。彼は寧ろ、重苦しく息が窒るほどに疲れてゐるのである。ヲルガ岸の砂岸の上で、灼けつくやうな太陽の下でする此處の勞働は、殆んど全く、人間の筋肉の緊張にのみかゝつてゐるものであつて、機械の恩惠的な助けと云ふものがちつともなかつたのである。だから千七百萬ルーブルは、ソルモヲの造船所には非常に役に立つであらう。

――今度は、一番陽氣な職場をお見せしませう。――と急に案内者が滿足げに云つた――塗上工場へ行きませう。出來上つた車輛のところへね。

堤防の下には――そこではレールが、二つの側から延びて來て高い營舍の門の中へ入つて行つてゐるが――この堤防の下には、濃い緑の絨氈がひろがつてゐる――この草原は、かう云ふ草を搖がすのは、無恥かしくはないであらう。少しはなれた道の上に、櫻の絞り汁のやうな暗赤色をした新しい貨物列車が四輛置かれてゐる。防衝機や、彈機や、車輪や、煤入りの油をぬつた最も贅澤な黒色の閂がある。前方のプラツトホームには、出發するばかりになつてゐる電車の車輛が彩色されつゝある。それは尚一層輝かしく立派になつてゆく。如何なる絹といへども、これ程の光澤を見せることは出來ないであらうし、又組の番號の數字を記した、朱のやうに赤いこれらの車の壁ほどに、陽をうけて赫々と輝やく事は出來ないであらう。

繪具と漆の香ひが車壁や人々の着物に喰ひ込んでゐる。土地や草もこれらの鋭い新鮮な香ひに浸透してゐるかのやうである。人々は此處で靜かに、話しさへしながら働いてゐる。背の低い肥つた男が、かるく唇をぺちゃ〳〵させながら、ものうげに何



28 モスコウのお神さん達によつて行なはれるアルコール反對運動のデモ。大抵給料日に工場の前に集まつて酔どれ親父の給料を全部取り上げる—。

かの讃美歌のやうなものを唄つてゐる。用心深くバケツに刷毛を浸し乍ら彼は私たちの質問に答へてくれる。

——おかげで儲けは惡かありませんや、暮してゆけまさあね。協同組合もだんくよくなりましたよ。さうですよ、一日一日とよくなつてゆきますよ。私たちは一番金持ちになるかも知れませんぜ、——さう云つて彼は腹立たしげに口を噤んだ、しかしやがて又話し始めた——此處では、革命以前は電車は全く作らなかつたんです、きつとそんなものは眼中においてゐなかつたんでせうよ。ところが私たちはかうしてそれを作つてゐるんですよ——彼は再び咽喉をならして云ひ足した——どの町からも注文を受けてやりましたよ。

彼は、木の刷毛を輕く胸にふれた——勿論こゝでの彼の役割は重要なものゝ一つである。ニージニイでは私たちの作つた電車が走つてゐますよ。モスクワでだつてさうですよ。そして、又再びものうげな歌を唄ひ始めた——彼は日曜毎に唱歌隊で歌つてゐるんではなからうか？ 若い勞働者が側柱に寄りかゝつて聲をたてゝ新聞を讀んでゐた、きくと——詩である。

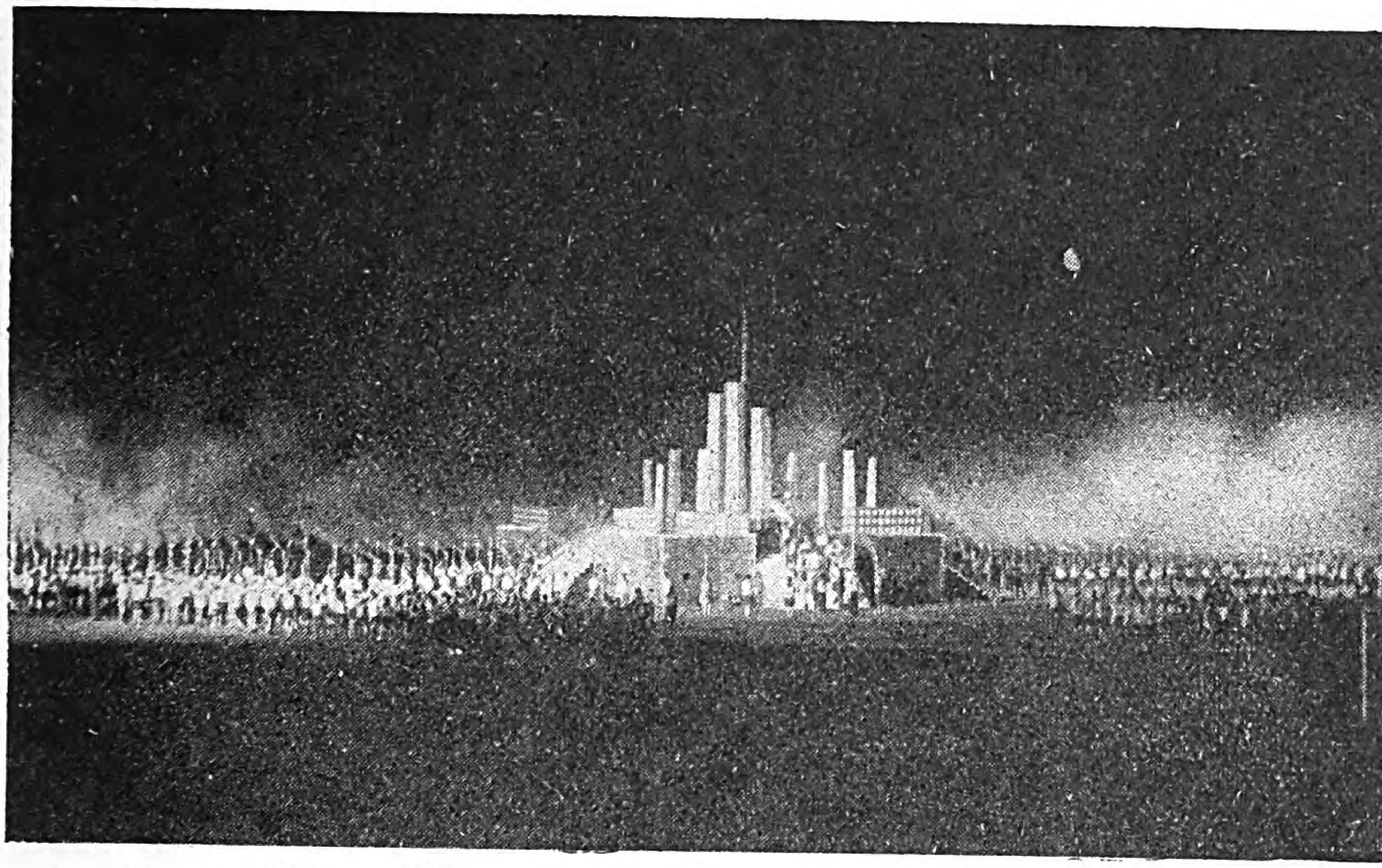
——その詩はソルモヲの詩人が書いたんですか？

彼の雀斑だらけの頰が微笑で解ける。

——いゝ、しじんですか！ 大したもんだ、このわたしたちのところには、何が詩人なんてゐるもんですか。

——どうしてゐないんです、タワーリシチ？ 彼には『確固』たる意見があつた。詩人とは『本當の雜誌か新聞に書いてゐる人たち』なのである。

——併し貴方の新聞の『赤きソルモヲ人』は本當の新聞ぢやないんですかね？



29 一九二九年八月モスクワにおいてピオニールの全國大會が開かれた。

――あれどもは都の新聞ですが、私らのは單なる工場新聞でさ。

――しかしあなたたちはそれを讀んでゐるでせう。そしてきつと豫約してゐるんでせう？

――勿論豫約してますよ。そこでは、主要なことは、我々の工場に就いて書かれてゐますからね。『ニージエゴロド、コンミユン』にはいくらでもそれがありますよ。

――それごらんなさい。あなた自身書かないんですか？

――いゝえ、わたしなんか、遂この間讀み書きを覺えたばつかりですよ。

私は、彼がソルモヲの文學グループのメンバーたちを知つてゐるかと訊ねる。そして教化部では、このソルモヲの詩人や散文家の一人に就いても何一つ話すことは出來なかつた事をつけ加へた。

――えゝ、今ぢや、さう云ふ連中はなか〳〵見出せませんよ！――と同情するやうに彼は突然に云つた――夏になれば誰一人家になんかゐませんよ、フツトボールだとか、ボートだとか何だとか云つてどこかへ行つてますからね。

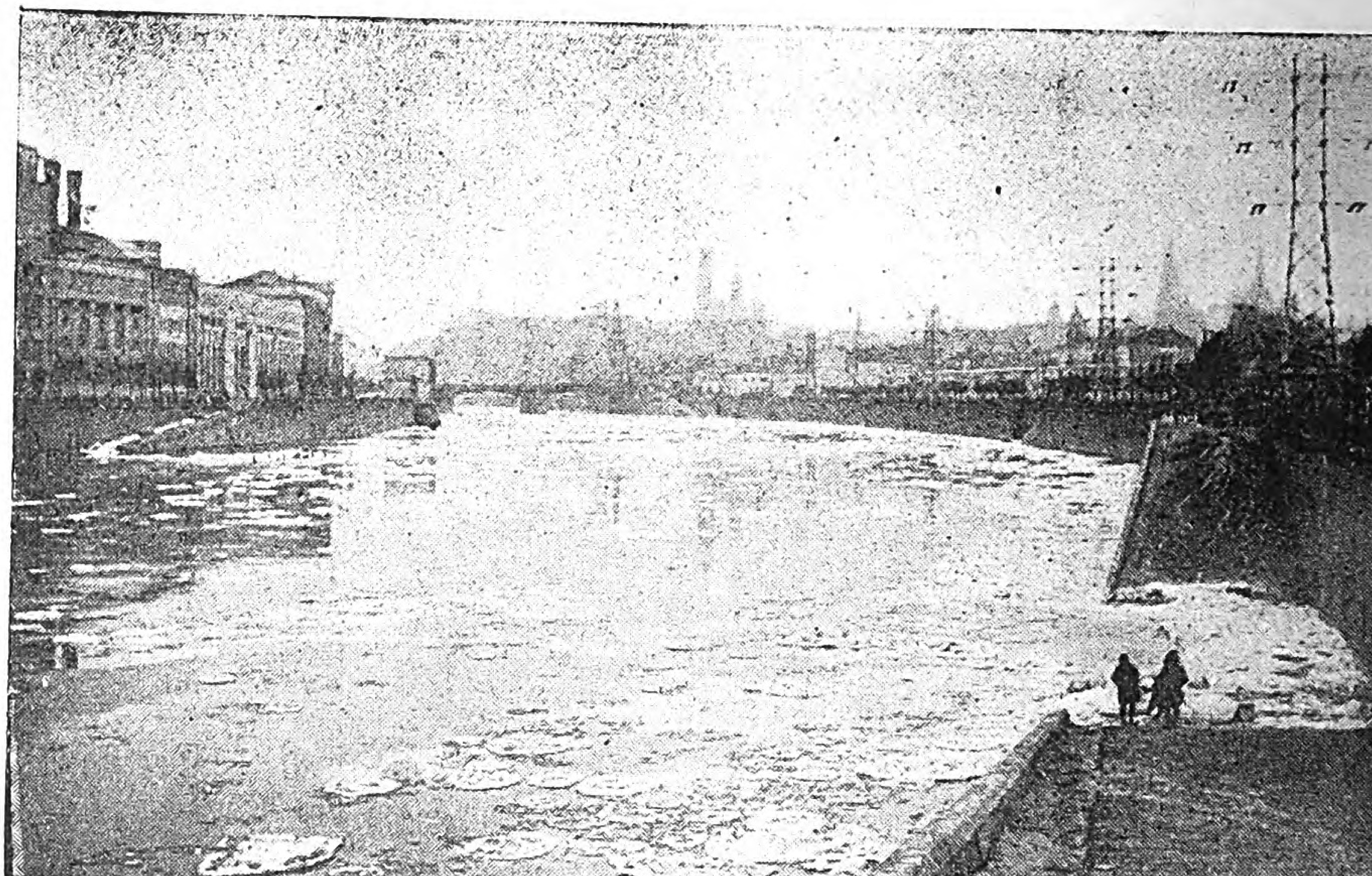
私たちの案内者が云つた。

――遠足は私たちはまだ度々やつてますよ。冬にはみんな集まつて來て、工場は全員になつて仕事をするんです。それに又クラブだつてじつとしてゐませんよ。

雀斑の男が脇からやつて來て、冷淡に、藍色の眼で流し見て、語氣を强めつゝも無關心にたづねた。

――ぢやたとへば、詩はどんな風にしたらいゝんですか？どこへ送つてやるんですか？……どんな雜誌が一番いゝでせうね、え？

私はソルモヲの新聞の事を思ひ出した――彼はそこへ送つてみたであらうか？　彼



30 春モスカウ河の結氷がとけて氷の片々が流れはじめる——一九三〇年三月。

は曖昧に薄笑ひした、そして再び又どんな『都の雑誌』に送ればいゝかと訊ねた。

私は全露プロレタリア作家協會の文學協議會へ送るやうに忠告をした。

——アドレスをさし上げますよ、いかゞですか？

——いや、——と彼は不滿げに云つた——頂いておきませう、しかし直ぐに返事してくれますかね、そしてそれから載せてくれますかね？

私は説明をしてやる。彼は氣落ちしたやうに兩肩を持ち上げた。私は、わたしに『赤きソルモヲ人』を送るやうに頼む、彼は髮の毛を撫で上げた。

——私達とこぢや、解る者はゐやしないんです。——そして溜息をついて云つた。

——まあ、やつて見ませう、あちらや、こちらへ送つてみませう、どうせどこへも送るところがないんですから！

彼は挨拶のしるしに庇に手をふれて、口笛を吹き乍ら立ち去つて行つた。

そこで再びムヰシヤコフスキイの汽船が待つてゐる。使用濟の入場證を返す、——すると再び通りがあり、熱氣や埃がある。女の高い聲が離のかげで叫んでゐる。

——トート……え畜生、どこへ行つたんだらう、トート……

工場の營舍が後に見える。工場の職場を巡つたこの忙しい行程の二日間に、やつと知り得たにすぎない工場は、この靜寂とは、根本から違つた、或る、複雜に動いてゐる完全な價値ある存在として意識の中に浮び上つて來たのである。そしてこゝで考へなければならないことは、一年一年と機械や電氣エネルギイやラヂオや救護の成長が、われ〳〵の廣大な土地の、まだ萬事に於いて粗雜な不揃ひな風貌を淸算する、即ち、人間を淸算するのであらうと云ふことである。この人間がなければ、最もよき土地も何の役にも立たないものであるからである。

ニージニイに於いて。一九二八年六月。

實社會からくり覗き

反動希望社一覧

素川絹子

資本家がお金儲けの巧いのは今更ら云ふまでもない事である。まるで金の卵を生む家鴨をかゝえ込んだやうに、剩餘價値、また剩餘價値と熱心になりすぎて、勞働者といふものは澤庵漬けと同じにいくらでも押しつけの利くものだ等と、飛んでもない事を思ひ込んだりする。だから不景氣になれば、株の配當はそつとしておいて最先きに賃金の値下げをやる。資本家はお金もうけが商賣だ。もうかりさへすれば外の事はどうでもいゝんだ。時たま、鐘紡のやうに溫情主義など振りまはすのもいざといふ時にはどんな鍍金より早くはげたがる。

「七割の配當を三割五分まで下げたのに勞働者は未だ不足なのだらうか」

鐘紡の減給問題が燃え上つた時に株主達はさういつて呆れてゐたといふ話がある。間違へちやいけない。勞働者は働く人間で株主ぢやない。そして配當は勿論勞働者の血と汗の結晶なのだ。七割の配當が當然で、三割五分には我慢してゐるのだと眞面目でいふやうな資本家達に今更ら何を云はう。

だがさういふ資本家達も、流石に一代に數百萬圓を搾り取るには相當何とか智慧が必要だ。正面からばかりかゝつてゐたんでは、ちやんと儲かるやうにからくりの完備してゐる資本主義社會でも彼等の貪慾を思ふ存分滿たすわけにはゆかない。そこで一人か二人が別の方面に目をつけ初める。重役だつていつまでもでつぷり肥つた赭面の太い金鎖ではなくなり、佛蘭西語位は巧みにあやつり、細身のステッキに瀟洒な洋服といふ時代になつてみれば、それも又當然な事である。

日本全國に百萬の讀者を持つと誇る希望社が即ちそれだ。

「希望社創立滿十週年を祝つて下さい。靜香

本社の基礎をすゑた十年、此の六月一日がその記念日です、祝つて下さい、私は烈しかつた戰の跡を顧みて涙ぐましくなります。よくも命が續いたものと思ひます——實は盛んな記念式でも擧げる筈ですが、今は希望館を建てることゝ、誌友を普及することに一生懸命で、とても呑氣にお祝ひなどする氣になれません。皆樣お願ひです！　どうか私を助けるお積りで、五月、六月の二箇月に一口貳拾錢以上の記念寄附金、誌友一人以上の記念紹介此の二つか又は何れか一つに應じて下さい。御寄附一口に對し、私の胸像を入れた銅いぶしの上品な記念メダル一箇を、呈し、誌友御紹介一人に對し、私の寫眞を入れた記念カード一枚を呈上致します。幾口でも御隨意です。」

一人二十錢づゝとしても、百萬の讀者なら、二十萬圓だ。大衆の力がどんなに大きいかはこんな所にも見えるが、とにかく變な哀願めいた廣告一つで二十萬圓は恐ろしくぼろい儲けだ。あえて希望社の社長でなくても唾涎たらざるを得ない。その上雜誌の讀者倍加運動だといふのだ。なほその上にこれ等の寄附の代りに出さうといふメダルとカードには後藤社長の胸像をお入れ下さるとは全く有難涙の代りに、口惜し涙が流れると云つた讀者がある。二十萬圓と、幾十萬かの雜誌購讀者と、自己宣傳とを一時に仕やうといふのだから凄い。

とにかく、この普通の廣告にしても蟲のよすぎる、哀願の調子を含めた文章は昭和三年五月希望社發行の「泉の花」の表紙裏に出てゐたものである。署名の靜香といふのは希望社の社長後藤靜香の事で、昭和三年が十週年とすれば、希望社の出來たのは大正七年になるわけだ。

私が希望社の名前を初めて聞いたのは、大正十三年の關東大震災の時であつた。地震で荒れはてた上野の山に一杯集まつた燒け出されの人達の慘めなバラックの間に、希望社の大看板が黑々と立つて、合宿所のやうなものが出來てゐた。希望社つて何ものだらう？　救世軍かしら！　が結局正體はわからなかつた。今日でも希望社の本當の姿を知つてゐる人が幾人あるだらう。燒け出されて無一物になつた人々に——同じ燒け出されでも、金持ちにとつては事情は全然別だ——物を無代でやる事は弊害ありと認め、實費で賣る事にした（希望の日本所載）——程親切な希望社の仕事と、そのやり方とを正當な觀察の下に一わたり眺めてみるのも無駄ではないと思ふ。先づ見やう！

發行する五雜誌

現在希望社の仕事と目されてゐるものは——社長自身何が本職だか解らないと云つてはゐるが——「希望」「のぞみ」「泉の花」「光と聲」「希望の日本」の五種の雜誌の發行と（これ等はいづれも最近改題されたが）、それに附隨する出版、讀者の修養會、その他の事業である。その他については後に希望社の反動事業網で、具體的な實例を上げて委しく說明するが、先づ雜誌は「泉の花」といふ四六版三十二頁のものが工場の女工及び地方處女會員等最も知識程度の低い人々を目的として發行されてゐる。內容は今年の三月號を見ると「家庭の新鮮味」といふ題で、「相互の理解」とか、「日に進み月に新たなるは家庭是なり」とか、「天に向つて成長」「感謝せよ」「家庭的催し物」「老人に感化され信賴されよ」「過去を許せ」などゝいふ言葉があつて全體がそれ等をやゝ引のばした丈の恐ろしく觀念的な陳腐な修養論で埋

まつてゐる。石頭になつた過去の道德論が、蹶起す可き無產者に對して何を强ひてゐるかは最早いふまでもない明らかな事實だ。こんなものは單に一時的な眠り藥であり、一時的な重にしか役立たない。併し、たとへ一時的にもせよ、支配階級にとつてはそれが絶體に必要なのだ。一時を永遠に繰りかへさせやうとする努力とともに——●

そして、「家庭的な催しもの」「相互の理解」「過去を許せ」などゝいふ事は、働いても滿足に食べられない一般の人達には手も出ないやうな高價なクッションの作り方を書いたり、禮儀としてのマニキユアを說いたりする所謂商賣婦人雜誌の極端にベチブル的な家庭記事や、告白物に對する回答と全く同じ行き方で、無產者にとつて鼻くそ程の足しにもならないものだ。にも關はらず如何にも勿體らしい云ひ方で欺滿してゐる所が殊更ら目につく。

「のぞみ」は看護婦、事務員など、いはゆる職業婦人相手のもので、「泉の花」の外に尙三十二頁の修身記事が綴ぢ合はされただけのものである。

「希望」は後藤社長の言葉を借りれば希望社の指導者と成る可き人々の讀むもので「のぞみ」六十四頁の前へ、希望社の反動事業をその時々に宣傳したもの、例へば國家食糧問題に對する玄米の奬勵——同時に別にうまく焚ける重寶釜の代理部廣告が出てゐる——神社佛閣雜巾奉納運動など、または社長の獨尊式な隨想三十二頁を綴ぢ込んである。つまり「泉の花」と「のぞみ」と別の新らしい三十二頁が一つになつてゐるものが「希望」である。

これは營業的にも中々商賣上手なやり方で、「泉の花」などは一つのものを三樣に粉飾して購買慾をそゝろうとする百貨店の品物と少しも變りはない。そしてその事で(印刷の事を知つてゐる人間が見れば)生產費が半減されてゐるにもかゝはらず(雜誌の生產費については後で希望社で經營する印刷學校についてもそのかうかつぶりを示すつもりだが)四六版に、今時珍らしい五號活字を三十三字、十二行(約四百字原稿紙一枚分。普通雜誌は一頁二枚半から四枚くらゐまで入る)といふ鷹揚な、言ひ代へれば金のかゝらない組方をし乍らカットも寫眞版も入らない「泉の花」三十二頁を五錢「のぞみ」を十錢、「希望」を二十錢が廉價だと盛んに恩に着せてゐる。殊に十錢の「のぞみ」に三十二頁足した丈の「希望」が一躍二十錢になつてゐるのは、「希望」の原稿料は特別高いとでもいふのか。併もそれ等の原稿は後藤社長一人が妙筆をふるつて股肱と賴む古參の社員にさへ書かせないので、後藤社長に思ふ存分儲けさせる爲に緣の下の力持ちをやらされて來た人たちの中には火のやうな不平が渦まいてゐるといふ消息さへある。

やゝ橫道へそれたが、その他「光と聲」といふのが學生の爲に出てゐる。これは殆んど每月前の三雜誌から拔萃寄せ集めたもので(全く同じものが載つてゐる事もしば〳〵ある。例へば御自慢の自動車新調の記事など)二頁のエスペラント講座と、唐詩選や、明治時代の詩人の句など引用して、若い學生らしいセンチメントを利用してゐる所がやゝ異つた色彩である。

「希望の日本」は菊倍版二十四頁、最も最近のもので「この讀者を以つて希望社全日本聯盟員とみなす」だから買へといつてゐる。が、全紙を希望社の事業の廣告宣傳と代理部の商品の廣告で埋めて、普通の商賣人なら、先づ廣告料位出してこしらへ、おとくい先へ無代で送りつける所を、讀者は

十錢づゝ出して買ふのだから、全くお目出度いものだ。
だがそう云へば、何故そんなに高いものを今時の讀者が買ふかと反問されるであらう。そこに彼の商賣の手腕——いゝからくりが有る。品物が事實よかろうが惡かろうが、五錢と五十錢とでは五錢は實に零細な金だ。五錢は廉い。着物のちりめんと木綿の區別は一目でわかるが、本の場合には一目でそれ程價値判斷は判然しない。
殊に近代人にとつて、活字の持つ魅力は一種特別だ。ブタ箱に一月放り込まれた人が、つく〳〵歎じて、これからの人間は活字なしでは思考力も働かなくなるかも知れないと云つてゐたが、これは單に活字の蟲インテリだけの事ではない、現に工場の修養會で今時生臭坊主のお說教を眞正面から聞く人はゐないが、全く同一の意圖の下に書かれた希望社の本には欺される人が未だ幾人か在る事でもそれはわかるだらう、何んでも本でさへあればといふことになれば勿論五十錢より五錢はやすい。事實この雜誌の編輯後記には必ず、夜店の商品のやうに僅か五錢で修養が出來る云々と書いてある。そしてそのたつた五錢が、やがて百萬圓の反動希望會館を建てる基になつてゐるそのからくりを、忠實なる希望の讀者は氣がつかないで、まるで後藤靜香の人格？がひとりでに百萬圓の會館を建ててしまつたやうに思ひ込んでゐる。
最一つは地方青年處女の純眞さを欺瞞する偶像崇拜的な自己宣傳だ。昨秋希望館が出來上つた當時の「希望の日本」には特別刷の素晴らしく大きな後藤氏の肖像が、入つてゐた。セピヤ二重わくつきのはり込み寫眞は天皇陛下の御寫眞を連想させた。これが皇室と樣々の關連を持ち皇室尊崇を看板にする後藤氏のやり方だ。その他にも、地方の讀者修養會へ臨んで、兩側に正列した地方人の間を、十五歳になる自慢の息子をしたがへて、得々と會釋しながら通つてゐる彼の寫眞（希望の日本所載）などは全く觀ものだ。觀兵式のやうだと云つた人がある。
だがもと〳〵希望社の仕事が初めからこんなに豪勢であつたわけではない。最初は五錢の本を千五百部刷るのにさへ危惧と困難を感じたと云つてゐる。出版事業で成功するのは容易でないといはれる。それも大きな資本を擁してゐるなら格別、誇大な新聞廣告も華やかな宣傳の方法もない。彼の武器は青白い中學青年時代に、彼の血潮を躍らした舌足らずの社會改造の夢だつた。
それは資本主義の發展に落伍した人間と、資本主義に極度に搾取された人間との一面の機微を捉へ得た。この事は現在に於いても、希望社の運動の最も勢力を持つはんゐが、中流階級と、農村の極貧者であるといふ事實が證明してゐる。いふまでもなく大ブルジョアは利用する以外にはこの運動に鼻もひつかけない冷淡さだ。左翼運動は怖い、といつて大ブルジョアには勿論なれない、といつて世の中に白眼を向けるには血の氣が多すぎるといつた、プチブル層の人間にとつて希望社の運動は危險のない玩具同樣いゝお道樂だ。極端に搾取され乍ら、正しい反抗に未だ目覺め得ない貧しい人達は、救はれる〳〵といふ言葉を正直に信じて藁を摑むのだ。それが飽くまでも藁で、確かな救ひの綱でない事を氣がつくには、たゞ正視しさへすればよい。その爲にこそこの原稿も書かれるといふものである。
が、とにかく、彼は自分の投じた武器が案外的確で成功だとみるや急に馬力をかけ出

した。
後藤氏には中途半端な人道主義的社會改造の夢と一緒に、これは又中途半端どころではない確かな商才があつた。そこで日本印刷學校をこしらへて月謝をとり乍ら雜誌を印刷する方法を考へ出した。勤勞女學校といふのはやはり可憐な少女達が月謝を拂つて印刷物の製本をする素晴らしい學校だ。だが、去年まで後藤氏の娘も息子も、この學校の御厄介には決してはならなかつた事を人々は知つておく必要がある。

そうして出來た本を持つて、後藤氏と二三人の講師とが日本の各地を巡行して歩いた。「人間は働く事を喜ばなくてはいけない。現代社會の缺陷は人々が働く事を喜ばな所に起る。希望社の本と運動とは人々が希望を持つて働く事を教へる爲だ」とばかり賣藥の廣告同樣、働き度くても仕事のない人々や、極端に働かされ磨りへらされた人間にはそつぽを向いて、飽くまでも勞働神聖のお太鼓をたゝく事で工場の寄宿舍に農村の處女青年會にと喰ひ込んで行つた。同時に工場の監督も、地方の爲政者も喜んでそれに便宜を與へた。勿論本代の幾割かゞ貰へる爲とそれ等が自分達に好都合であつたからである。そしてまたゝくまに事業は發展したが、それと同時に、成り上り根性の當然行きつくところ、既製權力の奴隷的地位へと行きついた。そして彼の雜誌の全部は國家權力の御先棒を務める希望社運動を、安價な人道主義的正義感で合理づける役目をつとめる事になつたのである。

その證據はいくらでも擧げることが出來る。後藤靜香が、希望社の輝やかしい榮譽として、地方の純良な人々を引つける可く大々的に掲げてゐる皇太后陛下の御花籠御下賜を初め、大正天皇の御生母柳原二位局の御信頼、伺候、樣々の御下賜品、伏見宮家、東伏見宮家、李王家、各宮家の金一封の特別寄附などについての誇大宣傳はとにかく、德川家達公の訪問、最近に於ける牧野宮相、關屋宮內次官一行の希望社訪問、俵商相の會見、などが必然的にもたらしたものは、希望社全日本聯盟の結成であり、國債償還促進運動であり、全國學生聯盟となつて現はれてゐる。

昨年八月十日には文部省の社會教育局長官下村氏が後藤氏に相談し度い事があるから、といつて官舍に呼んでゐる。後藤氏はひたすら恐惧再拜、神前早天修養會（伊勢及び、明治神宮に於ける）、相互修養會、講師巡回講話、大阪でやる大々的國民運動、伊勢でやる全日本聯盟大會、更に玄米飯普及の話までして、下村氏からは「文部省からも希望社の講師が地方出張の際は紹介する。大阪や伊勢の大會には私の代理を出張させやう。東京で希望社の全國的な大會が開かれゝば私が出る。明治神宮の早天修養會にも參加する」といはれて、本當に國を思ひ、世を思はない限り、役人の單なるお役目で、斯くも行き屆いた事を云はれるのではないと讃歎してゐるが、この事は期せずして、躍々と國家權力の走狗となり終せた希望社運動の本質をもつともよく語つてゐるのではないか。

かつては後藤總裁（最近總裁と號してゐる）の社會改造の夢であつた出版は、明かに現代支配階級の最も御方便な道具でしかなくなつたが、同時に後藤氏は出世して自稱總裁になつてゐるのだ。

今、大正十五年二月の希望時報（希望の日本の前身）を見ると「盛んなる修養氣分と題して「泉の花」の取締め註文の一部が載つてゐて一寸興味を引く。

二千部、（泉の花）東京府下吾嬬町東京モスリン工場目谷善次郎氏

一千部、東京府下隅田町鐘ヶ淵紡績會社東京本店殿

長崎市幸町長崎紡織會社小田部愛胤氏

五百部、東京府立第六高女丸山丈作氏

東京府下龜戸町　東京モスリン工場

三重縣四日市東洋紡績會社工場　淺田金也氏

兵庫縣和田山小口組製糸所　大平源司氏

同今津町モスリン會社　木村赳夫氏

同尼ヶ崎市外大阪合同神崎支店　笹岡定幸氏

神戸市三菱造船所　郷古潔氏

岡山市下石鐘紡備前工場　溝口代一氏

福岡縣戸畑市明治紡績會社　山本秀雄氏

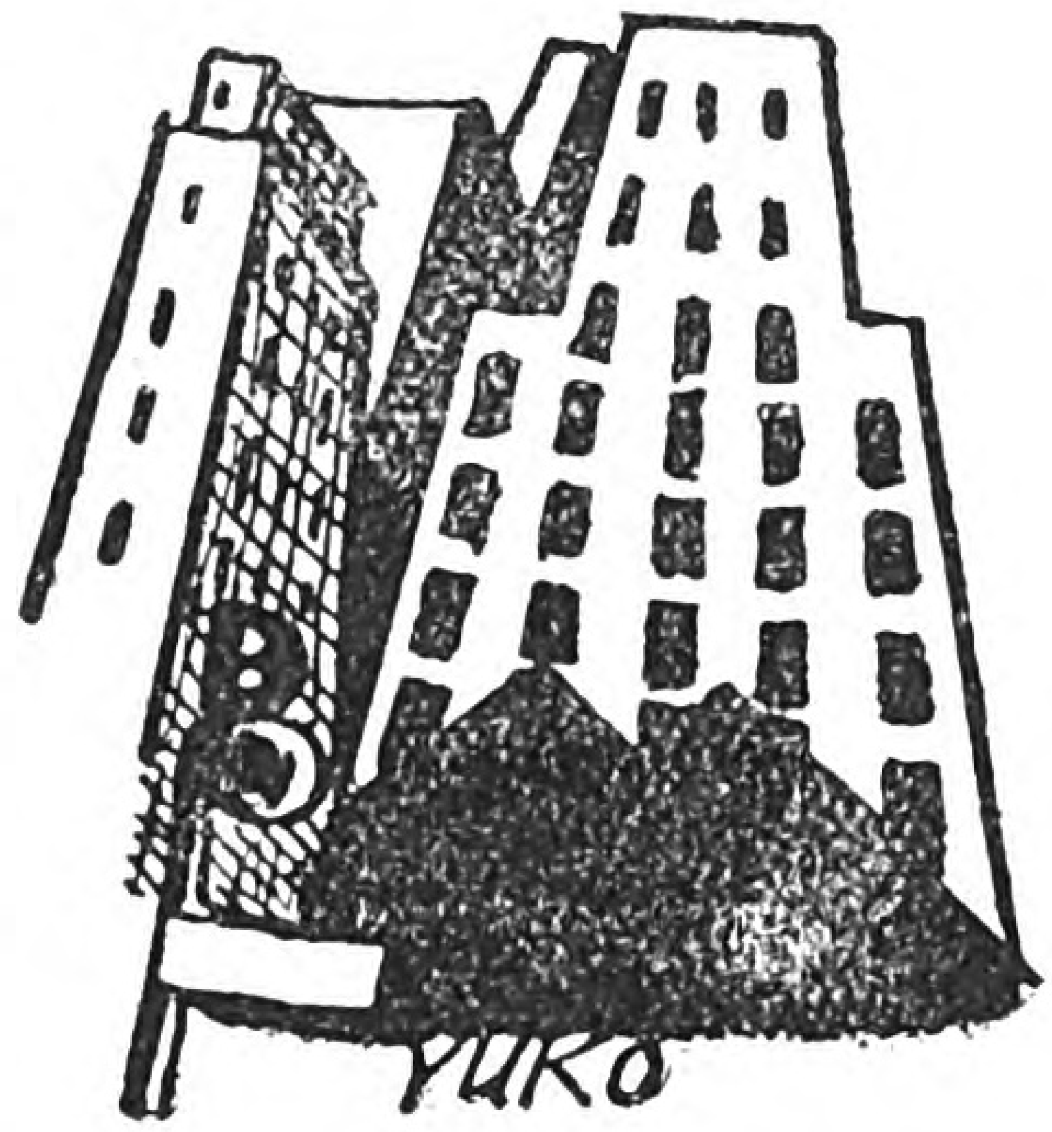
參百部以下全國の註文者の中には、紡績製糸、モスリン、その他の工場、高等女學校、小學校、市縣教育課の名前が最も多數を占めてゐる。四五年前に龜戸のモスリン工場の女工寄宿舍へ行つた時に、こゝにもおびたゞしく希望社の本が入り込んで、讀む讀まないに關はらず、彼の女達の賃金の中から誌代が差引かれると話してゐた。

普通の婦人雜誌さへ、純眞な女工達に意識を誘導する危險を感じて喜ばない程の工場主や工場長が「泉の花」と「のぞみ」をすゝめる意圖は今更ら云ふまでもあるまい。

富山縣の第一ラミー紡績の爭議中に、この希望社運動は寄宿舍監督東堂キクが主になつて早天修養會だ、社內淨化運動だと見事にスキャップの役割りを務め終せた。そうしてその後のより惡い狀勢以外には勞働者の爲に何物をも洩らさなかつた爭議の終結を「愛は遂に勝てり」とうそぶいてゐる。後藤氏の「愛」とは何物をも齎さないものの事なのであらうか。女工さん達よそんな「愛」はけとばしてしまへ。

今や、最も知識程度の低いもの、どんなでも飴棒さへあてがつておけば滿着仕終せるものと資本家が高をくゝつてゐた女工さん達が團結の力を自覺し、働く者の社會を獲得する爲に最後まで資本家と鬪爭しやうとしてゐる。先日の東洋モスリンの爭議がそれであり、鐘紡の女工さん達の勇敢さがそれを語つてゐる。搾られても資本家には從順の德を守れ、虐待されても工場長をうやまへ、人間以下の扱を受けても女はしとやかに、男は恨みを忘れてつねにさつぱりしてろ、而して汝の敵を愛せよ、等々々絕えず被搾取者の眠り込ませに努力してゐる希望社の希望を裏切り、資本家の幼稚な對策を嘲笑して、生活の必要が彼の女等を急激に目ざましつゝある。流石の後藤總裁もこれまでのやうに片々たる人道主義的正義感や、感情の弱點につけ入つたセンチメントばかりでは間に合はなくなつたと見てとつたか、今春の誌友卒業者達に向つて、「社會主義は粗野で希望社のやうな情操がない、社會主義が希望社の運動に到達するには未だ百年かゝらなければ出來ない」と訓示した。元々希望社は理論も計畫もなくたゞ熱意丈で初めたものだと白狀してゐるが、何を根據にこゝまでの出鱈目が云へたのだらうか。尤もらしい顏付きをして、これを語る後藤總裁よ、後を向いて出した舌の長さをはかられないやうに注意せよ。

（つゞく次號希望社の反動事業綱について）



何を爲すべきか

——女人藝術三週年に際して——

中島幸子

元始女性は、實に太陽であつた。眞正の人であつた。今女性は月である。他に依つて生き他の光によつて輝く、病人のやうな蒼い顔の月である。——扃ある窓にて、（らいてう）

然り、かうして往年の「青鞜」は初聲をあげたのであつた。吾々は、近代女性史における彼の女等の集團を、資本主義の上向期にあつて、もつとも光榮にみちた且つ華々しい活動を展開したものと云ふことが出來るのである。その初聲は、その意志は、その啓蒙運動としての指導精神は、すべて資本主義社會の必然と結ばれて理解されなければならないのである。

人間生活を窒息さすやうな封建制度といふ社會組織が、その内部にうつぼつと發展してきたところの生産力を支持することが出來ずに、もろくも解體の過程を辿らねばならなかつたのである。或る程度迄は尨大な生産力を抱合する可能性を有する資本主義社會が、滅亡したところの封建社會の懐から出てきたとき、個人主義的内容を有する自由と平等との熱烈な要求であつた。商品生産の極度に發達した上向期資本主義社會にあつて、最も價値あるものとして認承されたものは、個性の發揮であり、人格の涵養であつた。あらゆるものが、公的生活であれ、私的生活であれ、個人に還元されて考へられたのであつた。

殊に封建治下にあつて、もつとも苛酷な抑壓を蒙り、服役を强ひられてきたところの婦人は、自己の永い重壓から目醒めて、强固な殼から脱却を要求するに至つた。

婦人も、人間である。——現代から考へれば極めて平凡な自明のことであるが、封建的社會の道徳的な規範を一瞥すれば、婦人は人間として認められなかつたのである。——個性をもつところの尊き人間である。「青鞜」は、かうした資本主義的雰圍氣の内から生れたのであつた。さうして此の集團の精神を解剖するならば、彼女らの要求するところは、暗鬱な束縛から、婦人を個人として、完全に解

放することであつた。當時の急進的インテリゲンツアイヤ婦人の指導原理の基調は、決して此の限界を越へることはなかつたのである。例へば、近代劇にあつて、主要な地位をしめてゐるところの、イブセンの「人形の家」の主人公ノラの自覺は、個人主義的要素のニユアンスが濃厚である。

「青鞜」は何故に解體したのか？

資本主義社會は、ブルジョア學者が、一般に主張するやうに、絶對的な又永遠なる究極的なものではないのである。いかに殷賑の相を現出せしめても、資本家的商品生産の社會も亦、歴史の辯證法の流れに抗することは、絶對不可能なことである。特に資本主義制度が、人間の勞働力の搾取に、換言すれば、剩餘價値の蓄積に基調を置いてゐる限り、その内的矛盾は、いやが上にも激成し、生産の無政府狀態、危機、犯暴なる市場の爭奪戰、及び失業群の增大にともなふ生活不安の增大は、いつか、資本主義社會をその必然の沒落にみちびいて行くのである。

正に「青鞜運動」は、資本主義的建設時代の所產である。政治思想的に見れば、個人としての婦人の獨立の主張である。彼女等の把握してゐる主張は、封建的な桎梏と奴隷化に對する抗議であり得ても、やうやく自然發生的に增大し來つたプロレタリアートの社會的勢力を認識できなかつたし、更に資本主義下における賃銀奴隷制度の本質を究明し、歴史發展の法則の發見などは全く出來なかつたのである。「青鞜」のもつ階級的根據が、小ブル的インテリゲンツアイヤにある限り、澎湃として漲り來たつたプロレタリアートの勢力は、むしろ恐怖であつた。「臆病なる自由主義者は、此の階級の前に匍伏する」。然り、「青鞜」に屬する婦人達が、階級鬪爭に盲目であつて、唯ブルジョア的秩序の味方であるかぎり、その存在理由は當然喪失しなければならなかつたのである。

「從來のすべての社會の歴史――とマルクスは×××宣言の中で書いてある――階級鬪爭の歴史である。自由人と奴隷、貴族と平民、地主と農奴、親方と職人――簡單に云へば、抑壓者と被抑壓者とは、永久に相互に對抗する位置にあつて、或ひは公然の、絶ゆることなき鬪爭をつゞけ、此の鬪爭は、全社會的建物の××的再建に終るか、或ひは相戰ふ階級の共倒れをもつて終るのを常とした。……滅亡した封建社會のふところから出てきた近代ブルジョア社會は、階級的矛盾を絶滅しはしなかつた。それは單に古き階級の代りに新たなる階級を、新たなる抑壓の條件及び新たなる鬪爭の形式を、打ちたてたに過ぎない。しかしながら、我々の時代、ブルジョアの時代は、階級的矛盾を單純化した點において、他の時代と異つてゐる。社會は、いよ／＼二つの大いなる、相反する陣營に、相互に對立する二大陣營に、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級に分裂しつゝある」。

階級鬪爭のかくの如き激化は、「青鞜」運動を沒落せしめたのであつた。――

昭和三年七月、吾々の輝ける「女人藝術」は發刊された。

我が國無產階級運動は、當時漸く階級鬪爭の端初的過程である組合主義的鬪爭から完全に方向轉換して、それが胎生的狀態とは云へ

明確に政治的特質を帶びてゐたのであつた。

「階級の對立に基礎をおいてゐる社會において、相敵對する階級の間の鬪爭は、必然に政治鬪爭に變化する、政治的階級鬪爭のもつとも完成した統一的な形態は、黨と黨との鬪爭である」(レーニン)

一九二七年七月――女人藝術發刊の前年――コミンテルンのテーゼが、日本のプロレタリア運動に基礎石を置いたとき、日本××黨の態度に非常な變化が生じた。そうして一九二八年二月の總選擧を契機として、××黨は、公然とその勇姿を大衆の面前にあらはしたのである。此の結果、プロレタリアートの威力に震撼した支配階級は、その暴壓の魔手を××黨に及ぼしたのであつた。しかし乍ら、かくの如き彈壓と障害にもかゝはらず、××黨の再建は――それとても一度びは根こそぎにされたが――强力的に且つ果敢に遂行されたのであつた。此の政治階級鬪爭間におけるもつとも完成した統一的な形態をもつところの××黨が暴壓の嵐と抗爭してゐる時代に、忽然と生育したものこそ「女人藝術」そのものであつた。

正に「女人藝術」は、社會の辯證裡に誕生したものではない、それは渦卷く嵐の眞只中に、女人大衆の熱烈な期待と翹望とを擔つて、合法的な出版物として、はなばなしく出現したものであつた。

我が國における資本主義的搾取は、いかなる形態を取つてゐるか?一般に日本資本主義の利潤は、先進資本主義諸國のそれの如く、重工業から獲得されたものではない。例へばヴアルガの「世界經濟年報」は、此の點を明確に分析してゐる「日本の資本主義は、依然として近代工業の基礎――重工業及び機械工業の基礎を缺いてゐるのである。それは、人工的に育成してきたところの、そして極めて低廉な勞働力と壓迫植民地との搾取の上に立つてゐるところの、著しく投機的性質をおびてゐる資本主義である……」の如く、利潤の形成過程の主要な部分は紡織工業である。特に婦人勞働者の中の八割もが紡織工業に屬してゐることを觀れば、如何に婦人大衆の勞働力が、資本主義社會制度の存續の支柱として、役立つてゐるかが容易に理解できるであらう。

殊に、沒落期資本主義にあつて、ブルジョア達は、利潤低下の阻止方法として、纎細な勞働力の所有主たる勞働婦人にたいし、强力なる攻勢を開始したのである。此のことのみが、自然的資源にとぼしい資本主義の最後の段階としての日本資本主義を、僅かに支へしめてゐるのである。

此の時期にあつて、「女人藝術」は何を目標として生れ出たのであるか?

吾々は、創刊號以來、そこに確乎たる目標を發見することは出來ない、然し吾々は、「女人藝術」が單に、婦人インテリゲンツアイヤ相の自己滿足を滿喫するために生れたのでないことだけは、判つきりと云ひ得るのである。

「世界的經濟恐慌によつて、資本の集中過程を促進し、中小ブルの零落過程を促進し、特に植民地における基礎的農民大衆の大規模な貧窮化を増大し、最後に資本主義的産業合理化による勞働階級の搾取形態の未曾有の强化、これら資本主義社會の根本的諸矛盾の深刻化によつて、生ずる階級鬪爭の尖鋭化」の時代にあつて、婦人大衆

――殊に『家庭奴隷』と『賃銀奴隷』の二重の桎梏におかれてある東洋婦人も、自然生長的に解放を要求するやうになつたのである。此の女性の社會的地位の變革にたいする希望は、意識的にプロレタリア解放運動の一環として、傳染病的性質を帶びて擴大してきたのであつた。

二十世紀は、ブルジョア對プロレタリアの階級鬪爭の決定的瞬間である。

此の雰圍氣の中に「女人藝術」は、あらゆる社會層の婦人を、然もその中には可成り尖鋭分子を包括して擡頭したのであつた。

或るものは、女人藝術に對し、無原則として排撃し、又或るものはインテリ層の知識的な遊戯だと云つて揶揄する。然り「女人藝術」は、且つて無原則なところが多分にあつたのである。

だが見よ、「女人藝術」の最近の威風堂々たるその歩武を、その陣營を！

日比谷に於ける一週年記念の催し、朝日講堂に於ける公開講演……等々、幾多の難關を經驗して、「女人藝術」は、地方の強固な女人聯盟の支持のもとに、今やその擴大强化を展開するに至つたのである。

現在の「女人藝術」の指導的な理論が、全體的に、マルクス、レーニン主義に基調をおいてゐることは明白に斷定し得ない。しかし乍ら吾々は「女人藝術」の構成員が、社會主義的意識を持ち合せてゐることを誰れが否定し得やう。

「女人藝術」は今、種々なる方向の思想家を網羅してゐる。即ちサンヂカリスト、アナーキスト、マルキスト、ニヒリスト等等等…然し極めて最近の急激な發展を見よ、客觀的情勢の激化と相俟つて、マルクス主義に規準を置く潮流がたかまると共に、我が「女人藝術」の陣營内部の意識も漸次、統一化されて行く傾向を示しつゝある。

例へば「婦人戰線」の擡頭は、或る意味に於いて且つての「女人藝術」に重要な理論的地位を占有してゐたアナーキスト婦人連が、明晳な頭腦をもつて、「女人藝術」に未來を――それは輝かしき未來をもつ――豫見して、自らしりぞいたとも云ひ得るのである。

その他あらゆる觀念形態の取扱はれてゐる分野を見るに、ことごとくマルクス主義的傾向をおびるに至つたのである。或ひは、「女人藝術」をして最も存在價値あらしめてゐる社會時評が、マルクス主義の原則にもとづいてゐること、更に本年三月號に於ける婦人デーと我等の任務、及び五月號の一九三〇年のメーデーを迎ふの二つの卷頭言――少くとも卷頭言といふものは、その團體の意見を代表するものである――から判斷すれば、意識的にもあれ、無意識的にもあれ「女人藝術」は、最近に於いて、著しく飛躍的な進展を示してゐることは事實である。

勿論、幾パーセントかの商業主義とナンセンスと、ジャズ氣分はまぬかれ難いものであるが、このことをもつて、「女人藝術」の社會的價値を批判云々するのは、事物の本質を究明し得ないものである。

日本の資本主義は、今行詰まつてゐる。世界的にはあらゆる事實が、(第三期)として信用恐慌の時代に入つたことを如實に示して

みる。利潤率の低下は、著しく世界各國を對立狀態に陷入れ、植民地再分割の問題は、第二次××主義戰爭を豫想せしめるに充分である。

「××主義戰爭及び帝國主義世界から、最初ボルシエビーキ革命によつて、先づ一億萬の人間は救ひ出されたのであつたが、此の次の××は、此の戰爭及び此の世界から總ての人間を救ひ出すだらう」と云ふレーニンの此の豫言は、ドグマではない、吾々は歷史の必然性に盲目である限り、永久に婦人のどん底の生活を解放することは到底不可能であらう。

「女人藝術」は、今、三週年記念號を出すに至つた。だが此れは只管に祝賀的意味を持つだけであつてはならない。此のモーメントを利用して、婦人の鐵鎖を斷ち切ることを目的とした自然生長的な大衆の要望を擔つて生れた「女人藝術」を、もつと、果敢に階級鬪爭に參加せしめて、婦人の最後的な解放を、完全な社會的自由を築きあげねばならないのである。

女人藝術萬歲！

女人聯盟萬歲！

（一九三〇、五、三〇）

一言欄

貧乏な母親から

貧乏人はいつも子供をどなりつけてゐてあれでは「お子さんが可哀さうだ」と、あるブルヂョアおくさんが仰しやつたさうだ。

そこで私は一言申上げます。貧乏すればするほど子供は可愛いいものです。自分たちは食ふものをくはなくつたつて、子供にはどうにかしてやりたいのです。しがない親となりたいものは一人もないんです。そんならお働きになればいいと仰しやるでせう。働きたくつてウズ〳〵してるのです、だけど、人があまりかへつて職がないんです。あなた方の旦那の懷を肥したあげく、金庫を閉められちやつたのです。あたし達が子供にどなるのは、どうしてもやれない苦しさ、悲しさ、なさけなさ――その切ない思ひを押殺した、がまんの爆發なんです。まだ怒鳴つてるうちはどうにかなるが、ドナリつけてられなくなりや子供をくびつて、其意趣がへしはきつとします。

三日も食はないで、おふくろには怒鳴られ、おやぢには張り飛ばされて育つ子供は強い。それだけが貧乏な親のほこりで樂しみなんです。

■赤旗の下へ

原名リュボーフイ・ヤロワーヤ 黎明社發行定價七十錢・五幕物の劇である。茂森健吉氏・田村玄佐雄氏の共譯。

■ゴー・ストップ

中央公論社發行定價一圓二十錢 貴司山治氏著左翼大衆的小說。

■黄色い窓

先進社版・定價壹圓七十錢・細田民樹氏著左翼大衆小說 譯者・作者・いづれも定定ある好讀の書です。

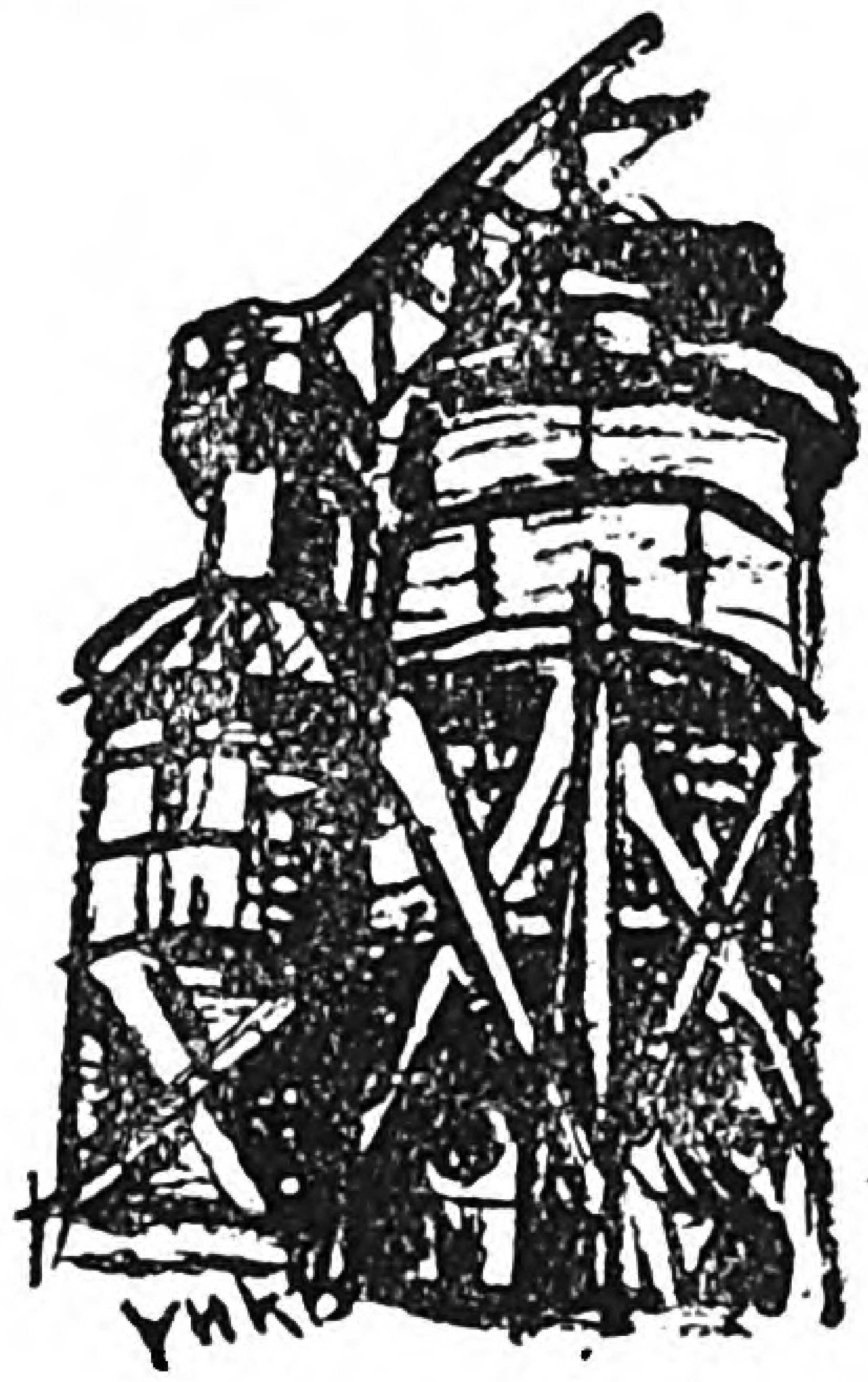
大講演會豫告

女人藝術三週記念講演會開催

六月廿七日(金曜)午後六時半ヨリ
丸之內朝日新聞社五階講堂ニ於テ
入場券　金參拾錢
申込・女人藝術社・當日ハ會場

全女性進出行進曲合唱

表現派漫想	尾崎翠
低い展望臺	葵イツ子
女人聯盟に對して	戸川靜子
酒と詩と人生	林芙美子
無產婦人同盟の使命	岩內とみゑ
明快なる日々	小池みどり
女子青年團によびかける	松田解子
工場町所感	織本貞代
過去における新婦人の擡頭	富本一枝
演劇雜感	辻山春子
新婦人の位置	園田時子
プロレタリア美術觀	熱田優子
女性の解放	松村喬子
現實の或る風景	深町瑠美子
知識階級婦人は何をなすべきか	中島幸子
感想	平林たい子
勞働婦人の立場から	小林たね



解放されたロシヤの婦人

神近市子譯

十月革命は、ソビエットユニオンの勞働婦人に、その內容と趣味とのゆたかな新しい生活を開いてくれた。貧乏、抑壓、絶へない失業の怖れ、搾取、凡ゆる權利の絕對の欠除――これらの凡ては、過去のものとなり成長しつゝある新しい世代にとつては全然知られないところのものである。

　プロレタリアートの革命による解放には、多くの犧牲が必要であつた。そして勞働婦人も亦多くの犧牲を提供した。しかしプロレタリヤの一般鬪爭は、家庭と工場、及び公共の生活と國家の機關に於ける婦人の同權利のための鬪爭を含んでゐた。犧牲は決して無駄にはならなかつた。ソビエットユニオンの敵でさへ、十月革命が勞働婦人の地位をスッカリかへてしまつたといふことを敢へて否定はしない。ツァー時代のロシヤでは、勞働婦人といふ言葉は小ブルジョアには何かのひけめを感じさせたものであつた。それと同時にこの同じツァー時代のロシヤでは、勞働婦人は資本家のためにはたゞ安い勞働力のことでしかなかつた。しかるに今日では彼女が勞働階級の一員であるといふそれだけの事實が、その婦人に一般教育をうけその職業に熟練し、國の經濟と行政とに於いて指導的な地位に任命されうる最優先權を與へてゐるのである。

　婦人が十月革命を通じて得たあたらしい權利は、勞働する婦人大衆の活動の範圍を非常にひろげた。彼等は今日では新しい生活の創造に、社會主義社會の建設に力を合せて働いてゐる。

　一九二八年――一九二九年は、特に婦人がこの新しい活動に加はつた例を多くもつてゐる。新しくソビエットに選出する代表者の選擧は、大きな新しい活動の分野を與へた。すべての勞働する婦人の七〇・一パーセントは、二百六十五の町村ソビエットにおくる代表者の選擧に加はつた。

　組織に加はつてゐる勞働婦人の活動は、組織に加はつてゐる男子のそれに少しも劣らなかつた。男子の勞働組合員の八〇・五パーセ

ントと、婦人の勞働組合員の八〇・五パーセントは百四十七の町ソビエットへの選擧にあづかつた。組織のない町と田舍の人々とについては、百二十一の町と地方地區とで男子の選擧人は六三・六パーセント、これに對して婦人の方は五八パーセントである。

勞農婦人は、たゞ選擧集會に出席するだけでなく、又ソビエットに選擧された人々に彼等の仕事のための指導的な目標としてわたされる大切な提案をすることを委ねられてゐる。

ソビエットに選出される婦人の數は、年々增加してゐる。前に述べた百二十一の町では、ソビエットに選出された婦人の率は二二・一パーセント（一九二七年）から二九・一パーセント（一九二八年—一九二九年）に增加した。これらの數字の重要さを正しく理解するためには、十四萬五千二百二十人の農村婦人が、ソビエット・ロシヤ社會主義共和國聯邦の四萬一千三百九十四の村ソビエットに選擧されたといふことを語る方がいゝかも知れない。

町村ソビエットの議長たることは複雜な骨の折れる仕事であるにも拘はらず、ソビエットの主席に座る婦人は絶へず增加してゐる。ウクライナでは三つの大きな地方が婦人によつて管理されてゐる。ソビエットロシヤ社會主義共和國聯邦では、婦人は無數の地方でソビエットの議長に選ばれてゐる。村ソビエットの議長の中で七・七パーセントは婦人である。しかるに一九二七年にはその率は僅かに一・一であつた。東部ソビエットでは五百の婦人が（トルコ人、バシキール人等々）村ソビエットの議長の職についてゐる。

國民敎育、衞生、社會保險、等の部門の指導者としての地位を占めてゐる婦人の數はなほ一層多い。又多くのプロレタリヤ婦人は、協同組合及び勞働組合に於いて指導的な地位を占めてゐる。そして最後に勞働婦人は工場の代理管理人——管理人さへも勤めて指導的な經濟的地位についてゐる。

婦人の活動を慫慂するためには、彼等の智識を增進させるためにいろ〳〵な方法がとられた。多くのプロレタリヤ大學や高等技術學校を出た後も研究をつゞける爲に勞働者學術研究所に入つてゐる。人民敎育委員は、高等學校は一定の數の勞働婦人を收容しなくてはならないと定めた。彼等の生活を保證するためには、給與金が與へられる。が、更にその上にこれらの勞働婦人の子供達は、國家が設備した機關の中に收容されることを保證するため他のいろ〳〵な手段がとられてゐる。

ソビエットユニオンでは、婦人勞働は男子の勞働よりはずつと高價である。が、そこには婦人の勞働を減らさうとする傾向は少しもない。婦人は男子と同じ賃銀をうける。けれども婦人の仕事ははるかに多くの費用を要するのである。それは國家の婦人保護の條款によつて、勞働婦人は産前産後全額給料を與へられて二ヶ月の休養を與へられ、同時に子供を哺育する間の餘分の出費に對して九ヶ月の附加給料と子供の寢臺、産衣等の全額の支拂ひをうけるからである。その上に各工場は、その工場にはたらく勞働婦人の子供達のために託兒所を造らなくてはならない。

五ヶ年計畫（註）は、母としての婦人の健康に害のない凡ゆる生産部門に、婦人の勞働を今日よりも尚ほ一層廣い範圍に使用しやうと

して準備してゐる。婦人を仕事に熟練させるためには種々な手段が講じられてゐる。この方面での第一歩は非常な成功であつた。旋盤工・仕上げ工・職工監督は今日では工場には珍しいことではなく、實に永久的な現象になつてしまつた。公共生活と政治生活に於いての勞働婦人のこんな理解のある協力はむろん婦人の側にあつての不生産的な時の浪費を除くが故に社會關係に於いて非常に大きな變化を豫想せしめるのである。ソビエットユニオンの勞働婦人は、すべての家族生活の鎖から全然解放されてゐるといふことはまだ云へない。けれども彼等の地位はどの『文化のひらけた』國の勞働婦人のそれとも比較にすらならない。

ソビエットユニオンに於ける尨大な社會主義的建設と調和しない古い社會關係をかへやうとする努力は、各方面で行はれてゐる。ソビエット權力、經濟關係、勞働組合、協同組合、これらの一つ〳〵が、『生活の社會化』の事業にその役割をはたしつゝある。托兒所、幼稚園、洗濯場、食堂等が場内に組織されてゐる。プロレタリヤ婦人大衆の要求に應じやうとする事業にあつては、絶えずそれに適應する力を増しつゝあることは明らかである。けれども要求は、その現實に必要な物質の増加よりは遙かに以上である。すべての勞働婦人が、洗濯や繕ひをし、床を洗ひ夕飯を調理するよりは、その餘暇を講演をきゝ本をよみ、劇場に行き、公共の仕事や勞働組合の仕事に携はる事に使用する方が遙かに有益であるといふ事を學んでゐる。

まだ多くの缺陷はあるが十月革命につゞく十二年の間に、全く新しいタイプの勞働婦人がソビエットユニオンには發生したといふことができるのである。家族はもはや婦人の唯一の避難所ではない。經濟的に解放され、物質的には男子から獨立し、國家によつて勞働婦人として母として保護を加へられて、ソビエットユニオンの婦人たちは急速に一個の人間として成長しつゝある。十二年のプロレタリヤ獨裁は、婦人の地位に非常に大きな變化を持ち來した。その手に權力をもつ勞働階級のみが、これらの變化を持來たすことができたのである。

註―五年計劃といふのは一九二八年から一九三三年にわたる五ケ年間の經濟的發達の基準を立てた、即ちこの五年間にロシヤ國内の工業生産の一二〇プロセントの増加を計劃したものである。聯邦共産黨第十五回大會によつて決定された。

この一文は近着のインプレコールのモイロークの報告を譯したものである。

ごく短かい文章ではあるが、革命後のロシヤの勞働婦人の生活がどんなものであるかをよく語つてゐると思ふ。

日本では今や不景氣のドン底にあつて、資本主義はその合理化によつて勞働階級が既に得てゐる權利をも奪ひ去らんとしつゝある。この間にあつて勞働婦人の生活は尚ほ一層堪へがたいものとなりつゝある。(製糸業者の賃銀不拂ひを見よ、鐘紡を見よ。)これを國家によつて保護されその要求と幸福とを對象とした各種の設備を有するロシヤの勞働婦人との比較に置く時、私共はその相違がいかにして生ずるかといふ事を疑ひ始めざるを得ないと思ふ。これを紹介する私の興味も、その一點にかゝつてゐる。

（神　近）

明快な渦

—川柳—

井上信子

明快な渦で世層は新まり

反抗は胃の腑の隙(すき)に満ちながら

かうまでに染まるものかと思ふ日

飢えた眼の底に賢さ燃え上り

青空へ枝が伸びゆく生(せい)の音

おとなしくして金魚は餌になやみ

萬象の眠る世界に鳴る時計

いつぱいの力で汲んだ水に生き

サックリと割れた林檎の無垢の肌

理性からチラチラ洩れて出る焰



雲雀が丘スナップ

生田春月氏の告別式の濟んだ夕方の多門院の庭で中村武羅夫氏と社長さん。
「何時伺ひませうか」「何時でもよろしい」
「では明日の午後」
蒼空のいい五月の末、素川さんと熱田さんは不二屋で待つてゐるつて、でお土産を買ひに銀座までスットバした車が大阪ビルの前まで來ると三々五々の市電の人達が歩いてゐる。おまはりがかたまつて歩いてゐる。何だ？　復職の同答要求かな、思つてゐるまに銀座に出てしまつた。
一番表に近い階下のテーブルに外をむいてこちんと腰かけた二人の顔が笑つて、「來なかつたらどうだらうつて云つてゐたのよ、飲まず食はず、默つて入つてきて腰かけたんだけど、このまゝでゐたら出て下さいつて云ふか、默つてゐるかと思つて、」
大箱二つの西洋菓子をおみやげに、お茶のアイスクリームで飲まず食はずをけとばして東京驛を出た汽車は三時五分。「お腹が空いて又悲し相な顏をすると困るから」大船でサンドウィッチとおまんじふを買つて貰つて、むしやつゝいてる間に辻堂へついて、時計を見ると丁度四時すぎ。
「長谷川先生でいらつしやいますか」驛の出口に來たあたし達をめつけた男の人が「二時にいらつしやるかと思つて」待ちくたびれたらしい言葉つきに一二時集合三時出發」とも

最初の外國保險詐欺

——日本橋——15

時雨

この章にうつらうとして、あんぽんたんはあまりあんぽんたんであつた事を殘念に思ふ。ここに書からとする事は、私の幼時の記憶と、おぼろげに聞き噛つてゐただけの話ではちと荷がかちすぎる。

私はまことに呑氣な、ぽかんとした顏をしてゐるが、私といふものが生をこの世にうける前は、江戸が甦生し、新たに生れた東京といふ都が、總てに新生の姿をとつて漸く腰がすはつたところであつた。いたるところに開化文明といふ言葉がもちひられた。チョン髷がとれて　腰の刀が廢された位の相違ではない。一般庶民が王侯と肩をならべられるやうになつたのだ。これはなんといふ急激な改革だかしれない。昨日まで土下座の身分の者が、ともかく同等の權利を認められやうといふのだ。そして憲法は發布され、國會も開設されやうといふのだ。

そしてそこには幾多の衝突と犧牲があつた。幕末からかけて五六十年間、尊い血潮が流

云へず「撮影所は遠いんですか、わざわざむかひに來て下さつたりして恐れ入ります」
日本キネマ雲雀丘撮影所見學と云ふ目的で出て來たあたし達は、そこで二臺の自動車に、おそろしくがたがたの、ホロの布とセルロイドとが車體と仲が悪くてはづれつこをしながらたたきあつてる——のにのつかつて、田舍の路を、ピシヤン、ガタガタ、ストンギリギリブウと砂ほこりを立てながら走り出したのである。夕方に近い海の空氣は、もうすつかり黄色になつた麥の穗にただよつて、「岡田先生は、(岡田三郎氏) とつても一生懸命で、撮影をしてゐるんです、とても一生懸命なんですよ、岡田先生が一番です、」「もつと早く走らないかな、ほら前の自動車の方が豪勢に走つてるぢやないの」「之以上出ませんよ、そんなに違はないぢやありませんか」「走れ走れ、いい氣持だな」「こつちの、このほらこの横を右に這入つた所のあの家が」指さしてる間に通りすぎてしまつてる家を丁寧に敎へて呉れる「中山さん吞海さんの家ですよ」「そう」く　らないけど解つた樣な顔をして、「この道を左に曲ると、中村先生の家です」「あれ、あそこに屋根が見えるでせう、あれが撮影所です、でも今はロケーションに海岸に行つてゐますから、すぐ海岸の方にゆきませう、岡田別荘のとこまでやつて呉れ給ひ」五分程のつかつた自動車を、とてもでつかな立派な家の前で降りた。「之岡田さんのうち」「岡田さんでも遊ふ岡田さ〱です」「そうでせうねえ」變な事で感心して、海から吹きつけ

され、有爲の士の多くが倒れてゐる。その最後が佐賀の亂、西南の役であるが、自由黨の頭初といひ、倒幕維新の大きな渦の中にはフランスコンミユンの影もかなり濃かつたのではなからうか、時代の流れ、思潮の渦はこの島國の首都をも捲きこんだのであつた。

私はなんでそんなむづかしいことを言ひだしたかといふと、「娼妓開放令」についていひたかつたからだが、あんぽんたんはそれを聞いておくにはあまり幼稚すぎた。いま私が語らうとする、おぼろげながら私の頭に殘る二人の男は、その當時での當世男であると思ふが、いつでもきける話だと思つてゐた油斷で父が死んでしまつたので、私の記憶はたゞ外形だけのものとなつてしまつた。その一人を通稱金兵衛さんといつた松本秀造といふ人と、秀造さんの妹の御亭主清水巽之助といふ人だ。

秀造さんは吉原の大籬金瓶大黑の總婿で、吉原に文明開化をもちこんで、幾分でも吉原を明るくしたかはりに養家はつぶしてしまつた人。巽之助さんは本邦最初の、外國火災保險詐欺をやつた男。

秀造さんは眼から鼻へぬけるやうな才人だつたといふ——これは後に大人が言つてるのをきいてゐたのだが吉原の積立金（税金だともきいた）使ひ込み事件で體があぶない時、父にかくまはれてゐた。

そのころ私は赤ん坊で、家は大火事に燒かれて藏前に庇かけをしてゐたといふから、明治十三四年のころでもあつたらう。ある夜、神田柳原河岸の米屋、村勝といふ爺さんにつれられて、唐棧の袢纏を着て手拭の吉原かむり、枝豆や里芋の籠を包んだ小風呂敷を肩にむすんで、すつと這入つた來たのが秀造さんだといふ。

金瓶大黑といふ名はよく講談にも出てくる。目下、日日新聞夕刊に載つてゐる田中貢太郎氏の「旋風時代」には金瓶大黑として、時の高官たちの遊興ぶりを書いてある。事實そ

る風に向つて、大嬉びで走り出すと「大變、大變、砂ほこり、洋服で靴の人は先にゆく事」社長さんに吹鳴られて、優子さ、と二人すたこらすたこら先にゆく。もうあたしたちの、重みで地面にめりこんだ靴をぬく時に立つ砂ほこりも社長さんにかゝるまい、思ひながら振向いてみると、今度は風に頭の髮を翫弄されておさへたり、横を向いたり、大さわぎ。

　廣がつた、丘と野を持つ辻堂の濱は、すいとのびてパッと開いたつぱなの穗の、一面の白いふさ〳〵の波と、その中に咲く濱ひるがほのうすもいろと白と、濱ゑんどうのむらさきとあかと、白絲の花をつけた、もうすこし時期の遲い防風の匂ひと、もちりと強い葉の綠で一ぱいだ。雲雀が鳴いて、低くとんで、草に飛び込んで、風の荒い海は白い浪頭をはしらせて、走りまわりたい思ひの濱だ。

「居るぞ、居るぞあれだなロケーションの連中つてのは」丘のスロープの所にかたまつた人の群をみつけて、さて社長さん達は？　見返るとはるか後の方でゆつくりゆつくり、しやがんでみたり、立止つてみたり、遠くからみると、まあそんなにも風に惱まされてるのかしら、「可哀さうにお迎へに行かなきや惡いかしら、すつとんできちやつて、」「でも大丈夫でせう、桒川さんも、美智子さんも川瀨さんも居るから」やがてやつて來た社長さんをつかまへて、「風がひどくて」なんてお見舞を云はふと思つてみると之はしたり、「いゝでせう」濱豌豆の紫の花をみせられて「あれあれつみくさで立止つてたのか風かと思つて同情

の遊びぶりは大いしたものであつたらしい。金瓶大黑の今紫の男舞ひといへば、明治もずつと末になつて、今紫といつた妓の晩年まで地方の劇場では賣りものにしてゐた。その今紫には、土佐の蓉堂侯が硝子の大姿鏡をかつぎこませたのを、うらやましがつてお婆さんになつてもその事ばかりいつてゐた女もある。金襴手の陶器の高脚で、酒盛りをしたものと見えて、私の家にもその幾個かきてゐた。

　秀造さんは上野の（山内の寺院）のおちごさんで美貌で評判だつたさうだ。振袖姿で吉原へ通つて、吉原雀といふあだ名だつた。鬼の金兵衛さんとよばれた樓主の娘おやすさんに惚れられて養子になつた。このお父さんの方の金兵衛さんは大柄な人で、美男でおちごさんの婿には不服だつたが、よつぼつど娘が可愛かつたものと見えて造さんを養子にした。

　この、おやすさんといふ女を、私が十一二になつてから見覺えてゐる印象は、とても大柄な、すらりとした――まだコートはない時分だつたから、吉原から人力車でくるのに、上に黑ちりめんの羽織を着てきて玄　で脫いでゐた。下にもひとつ羽織を着てゐた。根下りの丸髷に大きな珊瑚珠の簪を挿し、鼈甲の櫛をさしてゐた。ことさらに私の眼についてゐるのは、大きくとつた前髮のあまりを、ふつさりきつて二つにわけ、前額の方へさげてゐる。これは下町の娘たちはみんなさうしてゐたが、すこし大きくなると、も一つ奧の、髷の橫前へ、分けないで片つぼだけにして、毛のきりめをゾッキリと揃へて曲げておく――男の小姓髷の前髮のやうに――その風俗が四十位の女の人がしてゐてをかしくないほど、パラリトした顏立ちの、派手者だつた。

　秀造さんは私の老母にいはせると、伊井蓉峰の顏を、もつと優しく――優しくの意味は美男を鼻にかけない――柔和にしたやうなと言つてゐる。私の眼には文壇では里見さんを大柄にして、ドッシリトと落ちつかせ、ソッなく愛嬌をもたせた面影が殘つてゐる。

してたのに」「風もあるのよ、こんな時はやつぱり洋服ぢやないとだめね」そこで一つ智恵を差上げて、美智子さんのスカーフを一時借用しておかぶりなさるといい。白地にダイヤの赤のとんだスカーフをおこそにかぶつた社長さんを、みんなに見せたげたい。とても綺麗で、とてもおかしくて、そして妙に素敵で、もつと云ひたいけど怒られちやふから中止。寫眞をとろうと思つたら「こんなのをとつちやいかん」て叱られてしまつた。今にして思へば叱られたつてかまはずとつておくべきだと思つて惜しがつてゐる氣持大いにありで。

女優さん達は何だか皆な、ねづみ色よりも少し白つぽい顔色をした人達で、それが、カメラの前に立つ爲にぬられてゐる色だと云ふ事が解つてゐても、不健康さのかんじを受けて、こつちがあんまり元氣でピンピンしてゐる爲故かなんか、妙に弱々しさばつかりをかんじる。加藤武雄氏原作の「昨日の薔薇」をとつてゐて、場面は丁度二人の女と一人の男の登場する所で、足が惡いと見えて松葉杖の横に置いてある美しい女の人がねてゐると、銀座的臭味を持つた一人の若い男がその人の首に手をかけて、驚いた表情で抱き起しかける、そこにも一人のおぢようさんがやつて來る。之が來るとその男性はも一人の女性から手をはなして、新らしく來た人と向き合ふ、とそのおぢようさんが何かもさもさと云つて、その男性の胸に頭をつけて彼を見上げるといふ所である。大した濡場でもないけれど、何度もやりなほしさせられてゐるのをみ

金瓶大黑はさうした時代の空氣につゝまれ、そしてまたその時代のある空氣をつくつてゐた。高位高官の宿坊であり、鬼の金兵衞さんがパリパリさせてゐた樓ではあり、そこへこの新智識の才子が大事の娘の戀婿である。言ふことに行なはれないことはない。吉原の改革はズダズバと行はれた。その廓の權者が日影者になつたのだから、吉原の動搖は一通りではなかつたらう。ここで私に分らないのは、土地の爲にならない事をしたのならば、土地のものがこぞつて彼をかばうわけはないから、この税金費消事件には何か綾がありさうに思はれる。後に金瓶大黑は娼妓も二三人になり、しがなくなつて止めたさうだが、淺草觀世音仁王門わきの辨天山の辨天樣の池を埋めたり、仲見世を造つたり、六區に大がかりな富士山の模型をつくつたりした。

秀造さんは藏の二階にかくまはれたのだ。階下は祖母の住居になつて、さしかけへ赤ん坊の私と兩親が居たわけだ。そんなところへよく逃げこんだものだが、隱密がくると、(隱密とはスパイ)父はわざと藏の階下へ通して話をするので他の者がハラハラしたといふ。でも、この裁判は勝訴になつたのださうだ。そんなばかな話もあるまいが、私の老母はうろ覺えでこんな事をいつてゐる。

裁判官が代言人の父に「では、それだけの金をどうしてつくる。」――保證するといふ意味をいふのであらう。

父の答えがふるつてゐる。「私の母はあの邊で有名な金持ちでありますからおしらべになればわかります。私は母の金をかりて納めます。」

裁判官「左樣か。」

嘘でないからそれですんだのだといつてゐるが、そんなばかな筈はない。それに吉原の方では、金は吉原から出して決して不自由をさせないからと言つて來たが、たうとう出さ

ると、はてさてつら相な商賣だと幾分照れ氣味に思はさせられる。カメラの足をピシャンコにひろげて地面とすれ〳〵のとこからとつたり、ぐつとたてゝ高いところからとつたりたゞ面白がつて活動寫眞をみてゐると、到底かんじ得ないちぐはぐさでやつてゐる。そこで成程裏とか、もと、とかいふものはこんなもんかなと感心して見て見た。が一向事件はそれより進展しない。ピウピウ風の吹く中で、何度か何度かやりなほし、やつてる人と、體のあいてみてる人と、彌次馬もない、（あたしたちは彌次馬なんかぢやないぞ）ロケーション隊は靜かにゆつくりとかまへてやつてゐる。見學隊の連中も、もう別に見る事もなささうなので海岸にゆく、つまり波打ぎはに行かうと出掛けかけると、「今日はもう撮影を止しますから、お茶にして、撮影所に歸りませう」といふ事になつた。私達が來たためだと仕事に對して惡いからと云ふと、私達のせいではなく、太陽のせいでもう陽がうまく使へなくなつたためだといふ。そこでその場面を持つたところのスナップを私達や、そこにゐた人達全部でとつて、お土産のお菓子でお茶にした。胃散を御持參の岡田監督先生もさすがにおなかがすいてたと見えて、お菓子もさる事ながら、汽車ののこりのサンドウイッチを、その方がいいなとばかり、ムシャムシャ。夕暮れの濱を撮影所に歸る路すがらあたし達は一足おくれて波うち際まで遠征、たまに海を見る者にとつて、水と話しもしないで歸るなんてそんなこと、とてもおしくて

ないで濟んだといつてゐる。しかし父は秀造さんを自首させたさうだ、すこしばかり未決にゐて放免になつたが、此事件は被告が無罪になるまでにはかなりの骨折だつたので、吉原では私の父でなければならないやうに大事にした。

またその頃でもあらうか、吉原に娼妓の自由廢業があつた。これは恥かしい事に父が樓主の方の味方をして勝たせた不名譽な事件だ。勝つたときくと、全國の女郎屋からおなじやうな訴訟を頼んできた。母は慾張つて商業繁昌だとよろこんだが父は斷はつて、あれはあの事件が最後になるもので、もう法律が變るといつて諭めたさうだ。私はいまこれらの事をよくきいておかなかつたのを悔んでゐる。娼妓解放と、この自由廢業とのことについて耳にとめておいたらば、もすこし報告的なことが書けたであらうに――

ともあれ金兵衞さんの生活は豪華だつたものに違ひない。私がもつてゐる古裂れに、中巾の絹縮みに唐人が體操をしてゐる圖柄の更紗がある。それを一卷もつて來て、私の着物の無垢に仕立たのも金兵衞さんの秀造おぢさんである。六代目菊五郎の幼時にも、横濱からおなじ柄の着物をもらつたといふので、いつぞや裂地をくらべて見たが、秀造おぢさんの手に入れたのの方が上等品であつた。その他に、好事な手だんすだとか、古い竹屋町裂れでつくつた茶ぶくさ入れだとか、みな大名道具であつた。私の父はよくいつた。他人の泣きをよろこぶ不淨な錢で買つたのだと――

秀造さんの兄弟は、かなり有名な人たちであつた。沼間守一といふ刑法學者、銀行家の須藤、代言人の高梨哲四郎――この人は長髮で騎馬へ乘り歩くので有名だつた。その頃の代言人（辯護士）は長髮の人が多かつたが、高梨は白哲美貌、長髮がよく似合つた。

清水異之助さんは、秀造さんの妹を細君にして、横濱で外國商館の番頭と通辯をかねて

出來やしない。静かに夕風ぎになつた濱に立つて荒い浪をみて ゐるとしみじみ した心持だ。案内をしてくれた若い男の人が「辻堂の海をおよぎ切れば立派なもんですよ」とはなしてゐた。辻堂の濱は好きだ。砂ばかりの海も好きだけど、草を持つた、雜草を持つた荒い濱はなほ好きだ。江の島と、烏帽子岩と、不二山とを見ながら、撮影所に向つて歩いてゆくと、さつきせつかくつんだ花を、風でみんなとばしちまつた社長さん口惜しがつて、又一生懸命つみくさをしてゐる。であたし達も防風をつんだり、つばなをぬいたり、はまえんどうをとつたり生へてゐたあらゆる雜草をつんで田甫道にくると、プウンと甘い匂ひをまいて月見草が咲いてゐる。濃いまつきいろがなつかしいもう月見草が咲くのかなあ、折つて取りながら思はずつぶやく。

スタディオの中をみる。どの位の廣さだらう數學的にその廣さを云ひあらはす事は今出來ないけれど、それはかなり廣い地面に屋根とかこひを持つた一つの大きな家だ。その中が幾つかの、ホテルの部屋に、客間に、居間にと作られ、別れてゐる。「今日は夜間撮影がないので、ここはきのふまでやつてたんですよ」といふ家の緣側に、やつこらさと疲れた腰をのつけて、みまわす。となりはホテルの寢室で、半分だけ塗つて、らしくしてある寢臺が一つ置いてある。之がフイルムになるとちやんとほんものの樣に見えて、又この部室も新聞紙や何かではりつけてある壁を持つてゐるなどとは思はれないものになつてゐるん

ゐた。この人は坂東しうか（今の中村吉右衞門のお父さん歌六の弟のしうかではない、もう一代前の有名な役者）と、品川の土藏相模といふ妓樓の娘との仲に出來た子だといふ。

ある日、あんぽんたんの家の前に近所の人たちが立つてゐた。その人だかりの中には、日ごろは外などへ出たこともない大問屋の内儀たちも交つてゐる。私はよそから歸つて來て、なにごとだらうかと思つた。それよりも小さな子供らしいことで、自分もみんなに交つて、自分の家になにがあるのかと立つて見てゐた。（見物の雰圍氣がやはらかいものであつたのが、子供にも安心させてゐたものであらう）

そこにはピカピカした黑塗りの車があつた。車夫は勢ひのいい人達で汗をふいてゐた。一人はさしびきの綱を肩からかけてゐた。

何が出てくるかな？ と私も好奇心に待ちながめてゐると、横濱の淸水さんが長い顔に山高帽子をかぶつて出てきて、車に載つた 見物人はざはついた。

「しうかだ、しうかだ。」

「松島屋だ、我童だ。」

「違う時藏だ。」

みんな役者の名である。あんぽんたんは通辯さんだといふ事を知つてゐるからニコリと笑つた。すると、通辯さんもニコリと笑つた。靑い顔に、薄手があつて鼻が高い。

見物たちはきまり惡くもなく、しうかだの、時藏だの、我童だのと取り廻いて騷いだ。車が曳きだせないので、通辯さんは車の上から、

「あぶない、あぶない。」

なんて、技巧的に、稍身を前屈みにして、手を出して制した。そして反身になつて車を飛ばせた。前綱は片手をグルグル振つて、見送られてゐるので得意に駈けた。

だらう。土間にはこばれたテーブルと椅子に腰かけてたかつてくる蝿を氣にしながらコーチャをのんでいちごの御馳走になりながら、陽に燒けてまつ黒になつた岡田三郎氏の顔をみて、大變だらうな、と思ふ。一巻八百呎のフイルムを平均一日に四百呎、八巻のものを作るには日數を十六日とるといふ。しかし之も順調にいつた時で、家內撮影はライトの使用によつて自由だがロケーションは太陽を直接使ふために思ふ樣にゆかないときもあるから、一日に何呎もとれない事もあるといふ。

俳優さん達はみんな素人だが、主役の本城龍子といふ人はもと日活に居た人とかいふはなしである。ここで働いてる人達はみんなこの合宿にゐる人達ばかりらしい。岡田氏は忙しいのはたのしみで何ともないが、たゞ、「銀座へ出られないのがつらい」とこぼしてゐた。サイセリアのお京さんとかつてのに逢へないのがつまらないんでせうときこうかと思つたけれどそれより先に、「食慾に於て銀座が戀しい」といふ事をいはれたのでよした。

屋內撮影の時に使ふライトは、アークライトユーイング、スポットトップなどださうで、アークライトは上から下つてゐるもので、ユーイングは下に置くもの、スポットは人物に使ふのださうである。つけて見せてくれたが實にあかるくて奇麗だが強い光線である。光つてゐる間中電流が交流するので焔が出て燃えるためにブーブーと音をたてゝゐる）けい光榮の光、とにかく、こんな強い光線をみて仕事をしてゐたら一片で眼がたまらなくなる

あんぽんたんがポカンとしてゐると、近所の女達はいつた。

「いゝわねえ、あなたのとこ、役者がくるのねえ。」

私は返事に困つた。その通辭さんが、廿萬圓の火災保險の最初の詐欺をしたのだ。その時分日本にはまだ保險事業はなかつた。外國との契約にしても早い方なのであらう。

この事件も、どんな風に、またどう繫爭したかといふことが知れたら面白くもあり、一つの記錄ともなるであらうし、淸水といふ人の性格もしつてゐたら書きたいが、子供心にはさうたいした事件であらうと思ふどころか、覺えてゐたのが不思議なほどものかすかな聞かじりだ。老母にきいても、ぼんやりと、そんなことがあつたといふだけしか覺えてゐない。

ある朝私の父が新聞に眼を通してゐると、横濱山手の、ある商館番頭の新築の家が燒けたと出てゐた。それを見ると、父は、「あゝ、やつたな。」と叫んだ。

その家には外國の火災保險がついてゐるのだ――

家財はその前に運び出してある．細君は東京によこし、自分とコックだけだつた。だが彼は服罪しない。獄にもいれられた。だが、保險金は手にはいつたのだ。商館では腕ききな番頭なので彼の下獄に困らされて．罪にしたくないといつた。

とりとめもない記憶だが、私はこの二人の人を思出すと、時代の子といふ感を深くする。この人たちのさうした道にゆく心の動きと時代相を、もつとよく知つてるものにきかせてもらつたならば、鬱勃たる野心と機智をもつたこの男たちが、どんな氣持ちで田舍侍の權官らの躍るにまかせる時代を眺めたか、一足飛びに平民の世界がくるやうに思へてゐて、その實士族の上下がひつくりかへつたばかりだつた世相に、才人だつた彼等の不滿がなかつたか――

だらうと思はれる强さだ。すみの方では大工さんがコツンコツンと道具を作つてゐる。おもてでは門を作つてる人達が、せはしげにたそがれのくらさの中に働いてゐる。出來上らない荒けづりのかんじの中に一生懸命さが見える氣持のよさ。「こんな靜かなとこに一晩とまりたいなあ」「たいなあ」がはじまる。「三日はまあいいですね、三日すぎると何が何だか、ひ日も曜日もわからなくなりますよ、何にもないんですからね」三週間以上も東京に歸らないといふ岡田氏は、しきりにおいしいものが食べたいと望んでゐる。七時三十三分の汽車に間に會ふ自動車のガタピシヤのおむかひに月見草の一ばい咲いてる、停車場の柵が妙に記憶にのこつて、辻堂はいいなあ。くたびれて、汽車にのつて、「ほんとを云へばおなかゞすいたの」で大船で又サンドウヰッチを買つて貰つて、お腹を一時も　して、新橋から銀座通を、ホコリだらけの額をして天金をめざしてのそりのそりと歩く。今日は之で銀座から出て又銀座に歸つた樣なわけだぞ。不二屋をのぞいてみながらどんな形の圓をかいたかなぞ考へてみる。尾張町の角で、今日臨時に刑務所を出て來たといふ、酒くさい、幾分ふとつたかんじの、林房雄をめつけた。「いやにみんなに逢ふなあ」「珍らしさうに、うれしさうに、きよろきよろしてる。たまに出てくるとにぎやかなんでおどろいてるといつた顔だ。天金に座つてあゝ樂だつていふ風な額をしたみんなの額、ここでカメラのふたをして、ザ、エンド。（みどり）



我がはしがき

窪川いね子

敵ひも何も無い、巾の狹い臺紙にすれすれに貼つてある小さな古びた寫眞は兩手を飾り氣なく脇に垂らして立つてゐる半身の娘の影がもう、ろう石の色に薄れてゐる。娘は肩上げのある厚ぼつたい黑木綿の紋付きに袴をはいて、白の襦袢の襟をおひな樣のやうに二枚そろへて合せてゐる。弱々しい、まだ子供から拔けきらぬあどけない胸元、さかしい、乙女らしいもの哀れな瞳、心持ちふくらました㭟目正しい束髮の横に、花かんざしが覗いてゐる。

この古びたろう石色の寫眞の娘は私の母である。寫眞の裏に、その頃のハイカラさんを思はせるばらの花束や、リボンや、横文字の寫眞屋の名前など印刷したのも手あかに汚れて赤くなつてゐるが、そのかたはらにこれも横文字で、母の名の頭文字と、舊姓が斜めに走つてゐてその上に明治三十七年一月二日寫しと書いてある。この明治三十　年は、その六月一日に私の生まれた年なのであつた。心なしか、私はこの寫眞の花結びに結んだ袴の

マルキシズム論陣の嘖々、先々月本誌に宗教の現實批評を書いた中島幸子さんが、お寺のお嫁さんだつて事知つてゐますか。但し御主人が和尚さんではなくて、お寺様の息子で某大學の社會科の先生、どういふわけか近所の人はお宅の旦那さんは御養子ですかいふ相です。この中島さん、論文を書くばかりではなく、語學も出來ればタイプライターも打つ、速記もやる、御料理は巧いといふ八方美人。私も欲しいといつたくらゐ、ところが今度はある女の人が中島さんのやうなお嫁さんならその上に赤ちやんまでも生む良妻ぶり。間もなく第二世御出生といふある日女人藝術の社長さんが聞いた。「男の子だつたら何て名をつけるんです？」アハ…と先づ決活に嬉し相に笑つて退けた中島さん、「パパ（御主人の名前）はレーニンとつけやうかと云ふんですのよ」「ヘエー、レーニンつて零人ですか」といつたのは素川。「零ぢやない冷たい人ですよ」「冷たいも可笑しいが禮人なら、いゝレーニンぢやないの」と長谷川さん。「中島さん一體女の子だつたらどうするつもりなの？　まさかローザの當てはまる日本字もあるまいし」

○

長谷川さんの「日本橋」に出てくるおたきさん――長谷川さんのお母樣は七十幾歳だが大變な元氣で、編輯室の連中を羨まし相に見乍ら大森の奥で女中相手ぢや退屈で仕方がないから「みなさんと同じに毎日社へ出勤してお手傳ひしませうか」に娘の社長さんの方が「いゝえそれには及びません。」そこで今度は

紐の下に私の蠢めきを見ることが出來る。

母はその時十六才であつた。そして女學校一年生であつた。が、母は私の出生のために學校も退(ひ)かねばならなかつた。母はそれを知つて、記念(かたみ)としてこの寫眞を撮したのではないだらうか。胸の下に止めた銀色の學校の徽章、懷ろへ入れた時計の紐、それは彼女の誇りであつたに違ひない。

七人姉妹の眞ん中に生まれ、八才の時實母を亡くして、その時あまり優しくなかつたといふ繼母の許にゐた母であつた。母は父との戀愛關係に於いて、繼母にひどく罵倒され、その頃にとつてはかなり悲しかつたであらう嫁入の仕度もなく、父の許に來たのだといふ。然しこの寫眞の母の面影に、一沫の寂しは窺はれるとしても、何といふ邪氣や陰鬱さのみぢんもないことであらう。

私は十八才の青年であつた父と、この十五才の乙女との愛情の子である私自身の血に美を感ずるのである。

臺所の流しに立つて青菜を洗ふ手に水をはねながら、兎が餅をつくといふ、いにしへ人の語り草、と聲高々に歌つて、座敷の父にほめられると鼻をひく〳〵うごめかす癖だつたといふこの若い母は、二十三の齡に私と弟をおいて早世した。その時八才であつた私の、この母に對する記憶はちようど昔見た映畫のやうに、斷片的に一つ〳〵の場面をいくつか覺えてゐるに過ぎない。

父と母は、二つになつた私を連れて、自分たちの生活してゐる長崎から郷里の佐賀へ歸るところだつた。小さな煙つぽい汽車の中で私は午睡から覺めた。母は私を抱いて便所へ立たねばならなかつた。しかし母はなるべくなら勝手のわからない汽車の便所になど入りたくなかつたのであらう。汽車の入口へ出て、端にしやがんで、おそろしい勢ひで後方へ

宗教婦人會の人々と永平寺詣りに出かけて北陸めぐりの様子を細々と知らせて來た。社長さん讀み乍ら「變なおばあさんだ、このごろ下手なペンなど使ひ初めて…」といつてゐると、ある日しばらくもじ〱した末に「この間の手紙は雜誌へは出ませんかねえ」

○

先月五月の海に沈んだ生田春月氏の告別式の夜、二階の春月氏の靈前で、記念揮毫が始まつた。「僕は長篇作家だからかういふ時に短い巧い文句が中々浮ばない」といつたのはこの頃少々肥つた文壇大久保彦左中村武羅夫氏だ、「何か一つ考へておいていつでもそれをかけばいゝんだ」達筆でわが目の詩を書いてゐた佐藤春夫氏がいふ「お目出度なら考へておいてもいゝが、おくやみの文句を先きから考へておくわけにもゆくまい」と云ひ乍ら考へ込んでゐた武羅夫氏、いゝ文句が出來たといふ。何だ〱、と聞くと「春月や、蛙飛び込む水の音、どうだ傑作だらう!」にさあ、と一同首をかしげれば、ぢやあと筆太に――一切空――それをまた空の字を忘れて穴まで書いて考へてゐる下にエさとそばから云はれて慌てゝ書き足したがまるで穴とエが別々みたいだ。そこで――一切穴エ――これは本當の傑作だといふ事になつた。

○

一月のうち半分位は家にゐない女人藝術の大家さんへ、留守中に謹嚴講談社から手紙が來た。見ると三上於菟吉樣。時雨さん喜んでホートーキチ樣もいゝが、放された莵が草を

飛んで行く外に向ひ私を差出した。昔の貧弱な線路の上で汽車の動搖は劇しかつたであらう。抱かれてゐる私は反り返ることも知つてゐたであらう。若い母は、そこへ、子供を抱いて中腰にしやがんだのだ。汽車の中から人が跳んで出て來て止めた。怒鳴るやうになじつた。中にゐて母のその仕草を知らないでもなかつた、父もまた始めて、そんなものかと氣づいた。

私はこの汽車の話をたび〱父から聞いてゐるうちに、いつか情景を自分で作り上げて、私自身それを覺えてでもゐたかのやうに記憶の第一頁に加へてゐる。

私の三才の時、私のうちは港から見て長崎市の奥にあたるいらばやしといふ所にあつた。いらばやしのすぐうしろは山であつた。私の家も、若宮さんと呼ぶ大きなお稻荷さんの社のある小高い森の中にあつた。町の通りから森の中の社の横まで、細いだら〱坂になつてゐて、小さな赤の鳥居がだんだんに高く頭を揃へて續いてゐた。兩側から蔽ひ茂る樹木の下で、新しく取り換へられた鳥居の朱の色が際立つて見えた。境内は鬱蒼たるうしろの山に陽をさへぎられて赤土がいつも濕つてゐた。白木造の社殿の千木が木の枝の間に尖つてゐた。大きな石の御手洗に竹の樋から落ちる山水が絶え間なく靜かな音を立てゝゐた。御手洗の靑ごけに水が玉になつてこぼれた。狼のやうに恐かつた土佐犬が三匹、いつも境内の石疊に寢そべつて耳を立てゝゐた。社殿のうしろには、お稻荷さんの狐がゐるのだといふ洞穴が奥を覗かせてゐた。

私の家は坂をへだてゝこの社と對ひ合つてゐた。坂の中ほどには、間口の廣い茶店があつて、駄菓子などの入れてあるガラス箱がラムネの壜などといつしよに店先きに並べてあつた。私は坂を降りてこの茶店の店先きで遊ぶことがあつた。

或る時のこと、友だちの一人二人と店先に遊んでゐた私は、どうしたのか、ガラス箱の

喰べちまつて兎になつてゐるのもいゝ。

○

それと前後してホートーキチ様の奥様時雨さんのところへ訥子の家からやつぱり手紙が來て、長谷川雨暮様に暮といふ字に日篇がついて「しぐれ」とふり假名がついてゐる。江戸ツ子はひの字をしと發音するのでしぐれを雨の日ぐれとでもおぼえてゐたものだらう。

○

産業合理化の嵐に吹き荒されてます〳〵辛い女工達の間に、此の頃「愛して頂戴ね」の唄が非常に流行してゐるといふ。愛して頂戴ねは西條八十氏がひとみゆかりをモデルに作つた唄だ「へエー?」と思つてよく〳〵聞いてみると、夕方になると工場で監督の鬼めが急に夜業居殘りを云ひ出す。そうすると女工さん達は一齊に唄ひ出すのだ。

日暮れになると涙が出るのよ
知らず〳〵に泣けてくるのよ
ね、ね、歸して頂戴ね、

○

中島幸子さん出産三日目にハガキを書いて報じていはく「女性」でしたと。○○つきです。さてなんといふ名になつたでせう。

○

西さんといふ聯盟員に新宿驛でぶつかつた小池みどり、向ふからくる古川緑波氏に聲をかけられて、大きな女と男の間にはさまつたなあと思つたら、眞中の自分が一ばん大きかつたと、自分でいつてゐますから間違ひなしです。

中に手を入れて駄菓子を掴み出したものらしかつた。私はそれをどうしてやつたか覺えてゐない。それがまたどうして母に知れたのであつたかそれも覺えてゐない。母は私の赤い唐ちりめんの着物の裾をまくり上げて、身體を慄はして私の裸の尻を打つのだつた。その私の手から、トンのクソといふ駄菓子が落ちるのだつた。その駄菓子を私はよく覺えてゐる。その面白い名は鳥のふんから來たのであらうか。この菓子は一銭銅貨大の餅の皮に似たものを三本の指でつまみ上げたやうなものであつた。母は全く身體を慄はして打つたのだつた。いろ〳〵の心配に痛められてきた母の胸は、またそこに自分の子の惡癖といふ豫想をさへ抱かせられて恐怖にまで戰慄したのであつたらう。

その次の年は、母は私と弟を、その頃鄕里から出て來て一緒になつてゐた祖母と叔母とにあづけて、勤めに出たのであつた。

町の一端にある諏訪公園の入口に、私たち子供の普通さう呼んでゐた陳列場といふ石造りの洋館があつた。港に上陸した異人たちのために、長崎の、及び日本のさまざまの物品が陳列されてあるところだつた。花草模様のお皿や、蒔繪の手筥や、金絲銀絲の繡ひのある布や、キモノ、日本風俗の人形など、非常に高價な、大小様々の品がガラス箱や戸棚に入れて並べてあつた。中でも目についたのは鼈甲で作つた丈五寸位の人力車の模型であつた。細い梶棒、せんさいな車輪、折疊の出來る幌、それは「雛さん遊び」の子供の慾望をそゝるに充分だつた。何故、大人はこんな高價な玩具をつくるのか分らなかつた。障子や、丸窓や、椽のある竹細工の日本の家の模型もあつた。形相いかめしい鎧甲の立姿などもあつた。

母はその陳列場に、看視人として「月給とり」に出たのであつた。父の僅かな月給では、家族も働かねば食べてゆけなかつたのだ。陳列場は長崎の縣廳か市役所かの經營であ

質問一束

ここの頁を埋めるのは私の責任ださうで、三十分の時間を與へられました。私は學校にゆかないので試驗のけいけんがないが、さう早急にいはれると、財袋とおなじことでありさうでゐてふるつてもなんにもない――これは書くといふよりも好い智惠がないといつた方が正直だ、むづかしいものだといふと傍から小池みどり、でせう、そらどらんなさいと胸を反らす。だがほんとは御苦勞さまとお禮を言つてもらはなければあはない。領分荒らしではなく無理にかづけられたぶやくだから

そこで　苦しまぎれにふと思ひついたのは他から問合せられて答へなかつた試驗答案。題して質問一束とします。(時雨)

一、貴下は避暑にいらつしやいますか?

いゝえ、行つた事ありません。山泉山河はこひしいが、都の風習をもちこまれるので都會を出てもなんにもならないから。

一、およそ懐かしいとお思ひになるもの、またたまらなく厭はしいものは?

人間の聲だと思ひます。

一、貯金をなさつたことがおありですか、保險はいかがです?

貯金は生涯出來さうもありません。一度殊勝な心がけをおこして、貯金玉へ入れたのですが、お金が入用だといふ人があるとつい貯金玉までガチャガチャやつて出してしまうので、貯りつこなしです。

つたので、看護人たちは束髪に結つて袴をはいてゐた。

毎日二度づつその母の勤め先へ、叔母が弟を負んぶして乳を飲ませに連れて行く。私もそれに連れ立つて行くのであつた。陳列場の中は一種違つた、骨董屋に似た匂ひがただよつてゐた。床が綺麗な石疊で、冷めたい感觸を好んで私はよく洗足になるのであつた。見物人はいつもまばらであつた。階上の自分の場所で椅子に掛けたまゝ弟に乳をやる母の傍で、私は腰掛に乘つたり降りたりして遊んでゐるのであつた。ある時、四五人連れの外人が、太い聲を天井に響かせながらそこを通りかゝつた。その中の一人が、笑ひに口元をゆがめながら、椅子の上に遊んでゐる私に　ステッキの先を指し示して　からかふやうに覗いた。私はその丈の高い異人さんの顔を、白眼で横に見ながら膝を引くのだつた。私はお行儀の惡い坐り方をしてゐたのだ。連れの、眞つ白に肥つた中年の婦人が、小鳥のやうに何か言ひながら寄つて來て五錢白銅をカチリと私の前の机においた。私は默つて母の顔を見上げるのだつた。母は蒼白い顔に笑ひを浮べてゐた。

母はこの勤めを病氣になつて止めた。母のゐた場所に、以前に肺病の人がゐたのだと祖母は言ふのだつたが、母の身體には、母の毎日の生活は少し辛かつたのかも知れなかつた。

それから四年間、私が尋常一年生だつた夏亡くなるまで母にとつて色々な意味で苦しい月日が續いた。母は郷里の兄の家に隱居所を借りて病をやしなつた。そして長崎の家に歸つて來ては、また暫くすると惡くなつて郷里へ引返して行くのだつた。

暫らくぶりで逢ふ母と子は苦しい程の愛着を感じ合ふのだつた。行水をつかはせようとする祖母の手を拂ひのけてどうしても母にして貰ふのだと拗ねる私のために、母は氣嫌を惡くした祖母に對ひあやまるのだつた。私の身體を盥の中で流しながら、座敷へ上つてし

一、保險の方はいかがです。

それはあります、たいしたのがあります。しかも簡易保險十年と十五年、十年が私で十五年が三上です。牛込赤城下の「鼠の家」となづけた小屋に貧乏してゐた時分、ふと道入つてしまつたのです。ある日青年三上於菟吉がお金にならない原稿を一生懸命に書いてゐると、簡易保險勸誘員が「ごめんなさい、ごめんなさい」に、どうせ好い事はこないのだとだんまりでゐると、先方では障子の中の人の氣配を知つてとうとうと保險の必要な事を述べたてるので、疳癪もち於菟吉「そんなによければ、勝手に君の方でつけたまへ」と怒鳴つた。すると翌日簡易保險氏あらためて訪問、書式はこれでよろしい、ここへ御判と年限と金高をおきめくださいと印刷したものをならべた。さうなると氣の弱い於菟吉自分だけでは腹が立つので「君もはひれよ」と悲鳴

十五年なら壹圓五十錢で貳百何圓。十年なら貳圓の月がけで貳百圓だとある。貳圓はつらいが十五年なんて生るかどうかわからないから十年にするといふと、死ねばみんな差上げるのですといふ。かなしいかな此命金貳百圓と折紙がついた。疳癪もち青年自分のしでかしたあやまちに神經をジリジリさせ齒をくひしびり青つぽく憤つて「僕は五十錢でもすけなくする」――その後十年、毎月午前中、眠れないで漸く眠りついた時間に「三上さん保險の集金です」とくる。煙草錢もない時などまた來てくださいと斷はつてまた不快な思ひを繰返し、ある時は惜い書籍を賣つて、一年

まつた祖母に詫びてゐる母の聲を、私は何かうら悲しく聞くのだつた。

久しぶりに私と弟を連れて夜店の町に出て行き、夜店の玩具店の前で、小さな秤と姉さま人形とに迷ふ私に、母は兩方を買つてくれるのだつた。

長崎の氏神の祭禮（オクンチ）、お盆のしようろう流し、旗上げ（凧上げのこと）、その他二三の華やかな年中行事に關聯しては母の記憶はひとつもなかつた。母はきつとゐなかつたのであらうと思ふ。しかし私の幼稚園へ入る準備の時、――これは人數が多いとかで斷られた。――小學校へ上る時、母はその世話をすつかりしてくれたのであつた。

母は鄕里へ引返すまでには、可成りの辛さを押してゐたものにちがひなかつた。祖母は始めて氣づいたのだつた。母はとり目になつてゐた。

吊りランプの灯かげに針をすかして糸を通す母の手つきのあやしさに、祖母は始めて氣づいたのだつた。母はとり目になつてゐた。母のとり目のことでは、何か譯のわからぬいざこざが起きたことがある。中學生であつた私の叔父が、ある晩泣きながら祖母に訴へて怒つてゐた。かたはらで母がしきりに言譯けを言つてあやまつてゐて、祖母がとりなしてゐた。叔父のは入つてゐる便所の戸を母が開けたといふのだ。母は暗くて見えなかつたとあやまつてゐる。便所の戸を開けた位で、どうして泣くほど怒つたのか、非常に神經質の叔父ではあつたが、今の私にも解らない。

その頃私たちは、大きな耶蘇寺のある町に住んでゐたがこの叔父が耻蘇敎の中學にゐた關係で、父や母と一緒にその耶蘇寺を見物したことを覺えてゐる。

この耶蘇寺のある町は、大波止や停車場や工場などのある市外に通じてゐる小さな通りであつた。夕方になると、市外の馬込方面から山の方へ歸つてゆく幾十頭の山羊の群が、一かたまりになつて、黑豆のやうなふんを落しながら小きざみな足を運んで行くのだつた。臭ひの中に山羊の鳴聲がふるへた。夕燒けの空には無數の赤とんぼが通りに並行して

に一回損になつて利子もない掛金をつゞけた十五年の人はまだ年期中だが私は昨年春滿期悦ばしき事なりと時の局長天岡さんといふ今は市ヶ谷刑務所にゐる高官からお褒めの書狀をもらつて――そのお金をなにしたと思ひます「全女性進出行進曲」の賞と作曲料になつたのです。青年三上於菟吉の金刑はいまだ三年を殘し、あはれにも其間に大屋さん頭の眞ン中をお見せにならないやうになんて言はれる始末です。

一、**見てゐられないとお思ひになつた事。**

反對に面白いことがあります。私たちはよほど不經濟な人間だと見えて、ある折、いま大阪にゐる二科會の洋畫家鍋井克之さんの向ふ側にすんだら、鍋井さんをすつかり憂鬱にさせてしまつたのです。鍋井さんにいはせると「見てはおられん、僕に賄なはせろ」心配で病氣になるといふわけ、友達だから案じてくれるのだと言ひながら於菟吉悲鳴をあげて「鍋井に賄なはれたら、干もののやうになつて死んぢまう」

一、**びつくりなさつた事。**

それはついせんだつて、五月の東京劇場で山本有三氏の「盲目の弟」が上演された時、乘合馬車がつくと、宿屋兼飲食店の女中の尾上菊子が急にペチャペチャと立てつゞけにしやべりだしたので、思はず笑ひだしてしまつたのです。私の姪ですが、あの子があんなにペチャペチャと一息に物がいえるとは思つてゐなかつたので、びつくりしてしまつたのです。きいてもみないが、江の島へでもいつて見て來たか、川崎の大師へでもいつて覺えてきたのでせうねえ。

飛んでゐた。兩側の家と家との空間をうづめた許りであつた。私たちは行水をすまし、浴衣を着更へてゐた。その時刻に、汗に黝ずんだ紡績女工が三四人づゝ連れ立つて、辨當箱を抱へて、山ぎわの百姓家に歸つて行くのだつた。引つ詰の桃割の髮に、かたまつた灰色の綿屑がいつぱいつもつてゐた。あれだから皆紡績の女工さんは肺病になるのだと言つた大人の言葉を思ひ合せて、子供ながら痛ましくその髮につもつた灰色の綿屑を見るのだつた。

耶蘇寺の夕の鐘が、女工さんたちの姿をよそに、「一日の幸福を感謝し、神を祝福して、」和やかに響き流れるのであつた。

耶蘇寺の細長い禮拜堂の中は薄暗く森閑としてゐた。壁ぎわに等身の大神々の像がいくつも並んでゐて、金や青の繪具が暗く浮いてゐた。耶蘇教にたくさんの神さまがゐるのかと私は不思議に思ふのだつた。それはきつと十何人かの使徒たちででもあつたのであらう。その像の前に、無言のまゝ身體を折り曲げて祈りを上げてゐる人の姿を、私たちはそつとよけて行くのだつた。

病氣と鬪ひながらも、母は「神さまの力」に頼らうなどとはしないやうであつた。母が最後に鄕里へ歸つた時、私は習ひ覺えた片假名を綴つて、母へ手紙を始めて書いたのだつた。たいへん字が上手になりました、と母は返事をよこした、卷紙に書いた母の字は、學校の本の字と同じやうに上手に思へた。

カラダヲ ジヨウブニシテ、ヨイオヨメサンニナルヨウニ。

それから間もなく、母は看病のやとひ婆さん一人にみとられて死んだ。何度目の歸宅の時であつたか、迎へに行つた父のうしろに、車から降りた母は、珍らしく丸髷に結つてゐた。拔けるやうに白い母の顏が、紫の紋は二重の羽織に映へて匂ふばかりだつた。



雷雨

―放浪記―

林芙美子

七月×日

胸の凍るやうな佗しさだ。

夕方、頭の禿げた男の云ふ事に「俺はこれから女郎買ひに行くのだが、でもお前さんが好きになつたよ、どう……。」私は白いエプロンをクシヤクシヤにまるめて、涙を口にくゝむんだ。

「お母アさん！　お母アさん！」

何もかも厭になつて、二階の女給部屋の隅に寝ころぶ。鼠が群をなして這つてゐる。

暗らさが瞳に沁むと、雑然と風呂敷包みが墓場の石塊のやうに轉がつて、寝巻や帶が、海草のやうに壁に亂れてゐる。

煮えくり返へるやうな階下の雑音の上に、おばけでも出て來そうに、シンと女給部屋は淋しい。

ドクドク流れ落ちる涙が、ガスのやうにシユウシユウ拔けて行く。悲しみの氾濫、何か正しい生活にありつきたい。

何か落ちついて本が讀みたい。

しうねん強く
家の貧苦・酒の癖・遊惰の癖
みなそれだ
ああ、ああ、ああ、

切りつけろそれらに
とんでのけろ、はねとばせ
私が何べん叫びよばつた事か、苦しい、
血を吐くやうに藝術を吐き出して狂人のやうに踊りよろこばう。

槐多はかくも叫びつゞけてゐる。こんなうらぶれた思ひの日、チエホフよ、アルツイバアセフよ、シニツラア、私の心の古里を讀みたい。働くと云ふ事を辛いと思つた事はないが、今日ほど、今こそ字がなつかしい。だが今は皆お伽話の人だ。

薄暗がりの風呂敷の中に、私は直哉の和解を思ひ出した。

こんなカフエーの雑音に巻かれると、日記をつける事さえ、おつくうになつて來る。

まづ雀が鳴いてゐるところ、朗らかな朝陽がウラウラ光つてゐるところ、陽にあたつて青葉の音が色が、雨のやうに薫じてゐるところ……槐多ではないが、狂人のやうに、一人居の住居が、イマ！イマ！欲しくなつた。

十方空しく御座候だ！暗いので、只じつと瞼をとじてゐる。

「オイ！ゆみちやんはどこへ行つたんだい！」階下でお上さんが呼んでゐる。

「ゆみちやん居るの……お上さんが呼んでゝよ。」

「歯が痛いから寢てるつて云つて下さい。」

八重ちやんが亂暴に階下へ降りて行くと、漠々とした當のない、痛い痛い氣持ちが、ふくらがつて、いつそ死んでしまふたならと唄ひ出したくなる。

メフイストフエレスがそろそろ踊り出したぞ！昔おえらいルナチヤルスキイとなん申します方が、云つてござる。

——生活とは何ぞや？生ける有機體とは何ぞや？ルナヤチルスキイならずとも、生活とは何ぞや！生ける有機體とは何ぞや！落ちたるマグダラのマリヤ！ワツハ　ワツハ。

死ぬんだ！

死ぬんだ！

自己保存の能力を叩きこはしてしまふのだ。私は頭の下に兩手を入れると、死ぬる空想をした。毒藥を呑む空想をした。

「お女郎買ひに行くより、お前が好きになつた。」何と人生とはくだらなく朗らかな事であらう——。

どうせ故郷もない私だ、だが一人のお母さんの事を思ふと、切なくなる。泥棒になつてしまはうかしら、女馬賊になつてしまはうかしら……。別れた男達の顔が熱い瞼に押して來る。

「オイ！ゆみちやん、女給が足りない事よく知つてんだらう。少々位は我慢して階下へ降りとくれよ。」お上さんは聲をとがらして、梯子段を上つて來る。

あゝ何もかも、一切合財が煙だ、砂だ、泥だ。私はエプロンの紐を締めなほすと、陽氣に唄をくゝみながら、海底のやうな階下の雑音へ流れて行つた。

七月×日

朝から雨。

造つたばかりのコートを貸してやつた女は、とうとう歸つて來な

かつた。一夜の足留りと、コートを借りて、蛾のやうに女は他の足留りへ行つてしまつた。
「あんた人がいゝのよ、昔から人を見れば泥棒と思へつて言葉があるぢやないの。」
八重ちやんが、白いくるぶしを掻きながら私を嘲笑つてゐる。
「ヘエ！そんな言葉があつたのかね。ぢや私も八重ちやんの洋傘でも盗んでドロンしちやはうかなア。」
私がかう云ふと、寝ころんでゐた、由ちやんが「世の中が泥棒ばかりだつたら痛快だわ……。」
由ちやんは十九、サガレンで生れたのだと云つて白い肌が自慢だつた。八重ちやんが肌を抜いでゐるかば色の地に、窓ガラスの青い雨の影が、キラキラ寫つてゐる。煙草のけむり、女の呆然。
「人間つてつまらないわね。」
「でも木の方がよつぽどつまらない。」
「火事が來たつて、大水が來たつて逃げられないから……」
「馬鹿ね！」
「ホツホツ誰だつて馬鹿ぢやないの。」
女達のおしやべりは夏の青空、あゝ私も鳥か何かに生れて來るとよかつた。
電氣をつけて阿彌陀を引く。
私は四錢。女達はアスパラガスのやうに、ドロドロ白粉をつけたまゝ皆ゾロリと寝そべつて、蜜豆を食べる。
雨がカラリと晴れて、窓に涼しい風が吹いてゐる。
「ゆみちやん！　あんたいゝ人があるんぢやない！　私そう睨んだわ。」
「あつたんだけど遠くへ行つちやつたのよ。」
「素的ね。」
「あら、なぜ？」
「私別れたくつても、別れてくんないんですもの。」
八重ちやんは空になつたスプーンを舐めながら、今の男と別れたいわと云ふ。どんな男と一緒になつても同じ事だと私が云ふと、
「そんな筈ないわ、石鹸だつて、拾錢のと五拾錢のぢや、隨分品が違つてよ。」
夜。
酒を呑む。
酒に溺れる。
もらひ――貳圓四拾錢、アリガタヤ、カタヂケナヤ。

七月×日

心が留守になると、つまづきが多い。ざんざ降りの雨の中を、私を乗せた自動車は八王寺街道を走つてゐる。
もつと早く！
もつと早く！
たまに自動車になんて乗れば、女王様のやうにいゝ氣持ち。町にパッパッと灯がつきそめる。
「どこへ行く？」
「どこだつていゝわ、ガソリンが切れるまで走つてよ。」
運轉臺の松さんの頭が少し禿げかけてゐる。若禿げかな。

午後からの公休日を所在なく消してゐると、自分で自動車を持つてゐる運轉手の松さんが、自動車に乘せてくれると云ふ。

たなしまで來ると、赤土へ自動車がこね上つて、雨のざんざ降りの漠々とした櫟の小道に、自動車はピッタリ止つてしまつた。遠くの眉程な山裾に、キラキラ灯がついてゐるきりで、ざんざ降りの雨に、ゴロゴロ地鳴りのやうに雷が光りだした。雷が鳴るとせいせいしてい〻氣持ちだが、シボレーの古自動車なので、雨がガラス窓に叩かれるたび、霧のやうなしぶきが車室にはいる。

その、たそがれの櫟の小道、自轉車が一臺通つたきりで、雨の怒號と、雷のネオン、サインだ。

「こんな雨ぢア道へ出る事も出來ないわね。」

松つあんは沈默つて煙草を吸つてゐる。

だが、こんな善良そうな男に、こんな芝居よりもうまうまとしたコンタンはあり得ない。

スイスイとしたい〻氣持だつた。

雷も雨も、破れるやうに響いてくれ。

自動車は雨に打たれたま〻夜の櫟林に轉がつてしまつた。

私は男の息苦るしさを感じた。機械油くさい菜つぱ服に押されると、私はおかしくもない笑ひがこみ上げて來た。

十七八の娘でもあるまいし、私は逃げる道を上手に心得ておりまする。私が男の首に手を卷いて言つた事は、

「あんたは、まだ私を愛してるとも何とも言はないぢやないの……暴力で來る愛情なんて、私大嫌ひさ、私が可愛かつたら、もつとおとなしくなくちや厭だよだ。」

私は男の腕に女狼のやうな歯形を當てた。

私は胸が迫つた。男の弱點と、女の弱點の鬪爭だ。

雷と雨……夜がしらみかけた頃、男は汚れたま〻の顔で眠つてゐる。ふ〻んハイボクの兵士か！

遠くで青空をつげる鷄の聲がする。朗らかな夏の朝、昨夜の情熱なんかケロリとして、風が絹のやうにしゆうしゆう流れてゐる。

此男があの人だつたら……コッケイな男の顔を自動車に振り捨てたま〻私は泥んこの道に降りた。

紙一重の昨夜のつかれに、腫れぼつたい瞳を風に吹かせて、久し振りに晴々と故郷のやうな路を歩いた。

芙美子はケイベッすべき女でムいます！。

荒みきつた私は、ツッと櫟林を拔けると、松さんが、いじらしくなつた。疲れて子供のやうに自動車に寢てゐる男の事を思ふと、走

つてかへつて起してやらうかしら…でも恥づかしがるかも知れないな、私は松さんが落ちついて、運轉臺で煙草を吸つてゐた事を思ふと、やつぱり厭な男に思へた。

誰か、私を愛しがつて吳る人はないか、七月の空に流離の雲が流れてゐる、私の姿だ。野花を摘み摘みプロヴアンスの唄を唄つた。

八月×日

女給達に手紙を書いてやる。秋田から來たばかりの、おみきさんが鉛筆を嘗めながら眠りこけてゐる。

酒場ではお上さんが、一本のキング、オヴ、キングを淸水で七本に利殖してゐる。埃と、むし暑さ、氷を澤山呑むと、髮の毛が澤山拔けると云つて氷を呑まない由ちやんも、冷藏庫から氷の塊を盜んで來ては、バリバリ嚙んでゐる。

「一寸！ ラブレターつて、どんな書き出しがいゝの…。」

八重ちやんが眞黑な瞳をクルクルさせて、赤い唇を鳴らす。

秋田とサガレンと、鹿兒島と千葉の呆然のやうな女達が、カフエーのテーブルを圍んで遠い古里に手紙を書いてゐる。

街に出てメリンスの帶一本買ふ。壹圓貳拾錢（八尺）

何か落ちつける職業はないかと、新聞の案内欄を見る。いつもの醫專の群、ハツラツとした男の體臭が汐のやうに部屋に流れて、學生好きの、八重ちやんは、書きかけのラブレターをしまつて、兩手で乳房をおさへて品をつくる。

二階では由ちやんが、サガレン時代の業だと云つて、私に見られた羞かしさに、プンプン匂ふ藥をしまつてゴロリと寢ころんだ。

「面白くないね。」

「ちつとも。」

私はお由さんの白い肌を見ると、妙に惱ましかつた。

「私これで子供二人生んだのよ。」

お由さんはハルピンのホテルの地下室で生れたのを振り出しに、色んな所を歩いて來たらしい。子供は朝鮮のお母さんのとこにあづけて、子供のでない男と東京へ流れて來ると、お由さんはおきまりの男を養ふためのカフエー生活。

「着物が一二枚出來たら、銀座へ乘り出さうかと思つてゐるの。」

「いつまでもやる仕事ぢやないわね。」

春夫の車窓殘月の記を讀んでゐると、何だか、何もかも夢のやうにと一言瞳を射た優さしい柔い言葉があつた。

何もかも夢のやうに…落ちついて小說や詩が書きたい。

キハツで紫の衿をふきながら、

「ゆみちやん！ どこへ行つても音信頂戴よ。」

由ちやんが淚つぽく私へ——えゝ何でもかでも夢の樣に——ね。

「そんなほん面白い？」

「うん、ちつとも。」

「私、高橋おでん好きだわ。」

「こんなほん讀むと、生きる事が憂鬱なるきりよ。」

八月×日

他のカフエーでもさがさうかな。

まるでアヘンでも吸つてゐるやうに、ずるずると此仕事に溺れて

行く事が悲しい。
毎日雨が降る。
午後二時。
ボンヤリして、カウンターのそばの鏡で、髪をなでつけてゐると、立ちうりの萬年筆のテキヤが、二人飛び込んで來る。
「あゝ俺ァびつくりしたぜ、クリヤマ(巡査)がカマる(來る)からゴイ(逃げる)ろて、梅の野郎が云ふんで、お前をつゝいたんだよ。」
二人は泥のついた萬年筆を風呂敷にしまいながら、
「姉さん！支那そば並のを二丁くんな。」
鏡にすかして、雨が針のやうにふつてゐる。私は九州の長崎の思ひ出に、唐津物を賣つてゐた頃、よく父が巡査になぐられたのを思ひ出した。
――こゝに吾等は藝術の二ツの道、二ツの理解を見出す。人間がいかなる道によつて進むか、夢想！ 美の小さなオアシスの探求の道によつてか、それとも能動的な創造の道によつてかは、勿論、一部分理想の高さに關係する。理想が低ければ低いほど、それだけ人間は實際的であり、この理想と現實との間の深淵が彼にはより少なく絶望的に思はれる。けれども主として、それは人間の力の分量に、エネルギイの蓄積に、彼の有機體が處理しつゝある營養の緊張力に關係する。
緊張せる生活はその自然的な補ひとして創造、爭鬪の緊張、翹望を持つ――。女達が風呂に出はらつた後の夕暮れの女給部屋で、ルナチヤルスキイの、實證美學の基礎を讀んでゐると、こんな事が書いてあつた。
科學的に處理してある言葉を見ると、どうにも動きのとれない今の生活と、感情のルンペンさが、まざまざと這ひ出て私は暗くなる。勉强したいと思ふ、あとからあとから、とてつもなくだらしのない不道德な野性が、私の體中を馳りまはる。
見極めのつかない生活、死ぬか生きるかの二ツの眞蒼な道‥‥。
夜になれば、白人國に買はれたニグロのやうな淋しさで、埒もない唄をうたふ。
メリンスの着物は、汗で裾にまきつくと、すぐビリッと破けてしまふ。實もフタもない此あつさでは、涼しくなるまで、何もかもおあづけで、カッ一丁上つたよッ！か――。
何の條件もなく、一ケ月卅圓もくれる人があつたら、私は滿々としたいゝ詩をかいてみたい、いゝ小說を書いてみたい。
バカヤロ、バカヤロ、お美美さん！



煤けた部屋の集まりで

北山雅子

「ところシこのォ
農民組合つうものは――」
私の視線にぶつつかると、
作さんは、ひどくあわてゝ
眉毛の根まで眞赤にし乍ら
困惑した鼻の下を、ヒョイと撫ぜた。

かまわないから、
おやりよ。作さん。
熟語に價値を持たせやうとするのは、
一握りのエセ學者連さ。
ごらん、

「フンと―ほら、フーンとすろ」
あなたは、陽に灼けたふところから
茶色になつた新聞紙を出して、
ピオニル達の頭をおさへ
鼻汁をかんで廻る。
あの子達は、
あなたを好んでゐる。
明日は
ピオニルを連れて山へ行かう　ね。

一九三〇　五、十二

出帆

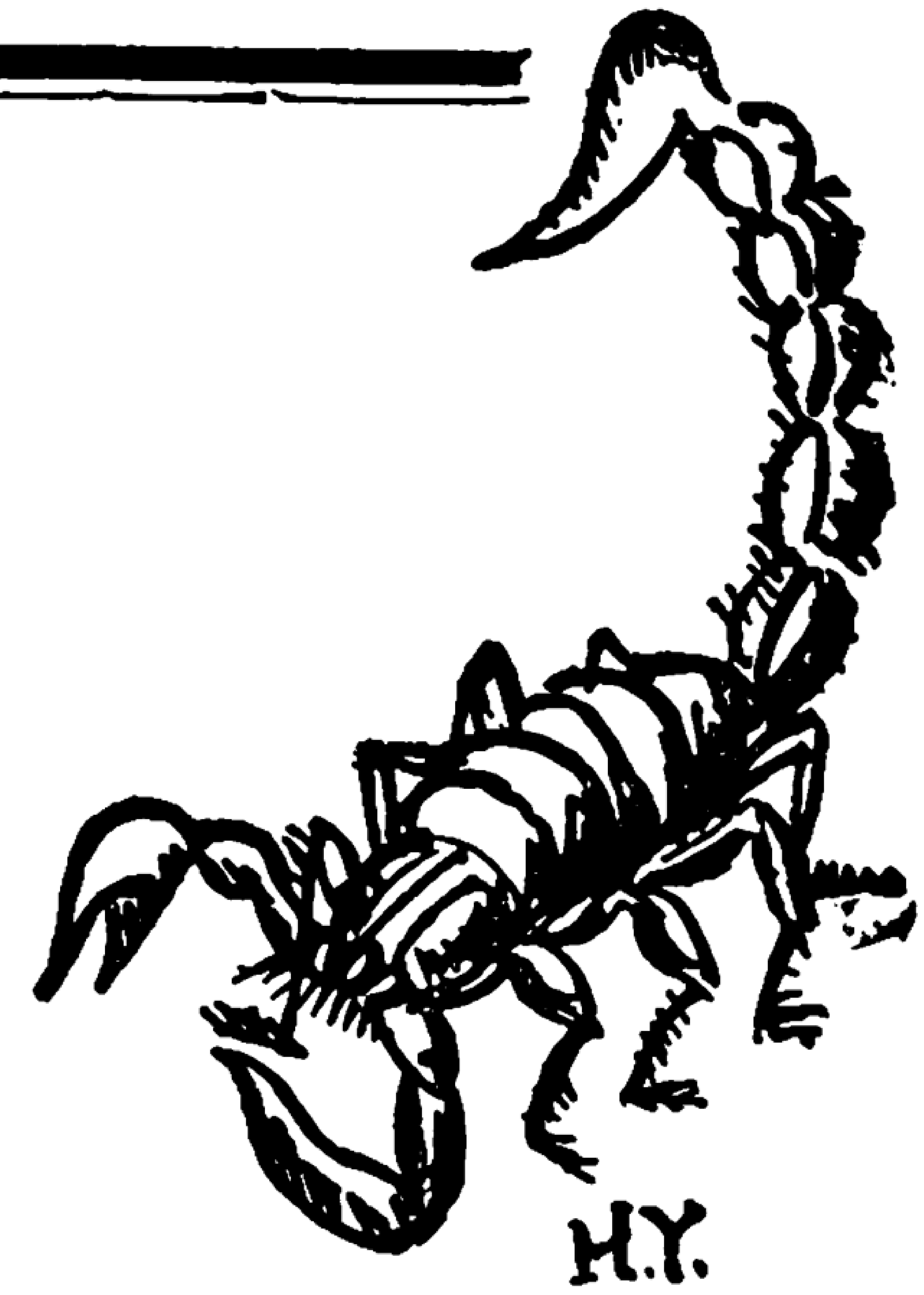
岩崎二二子

七月の感傷が遠いところで呼んでゐる――
樹木の影で心の中のやさしい



みんな熱心に聞いてゐる。
語の拙いのを笑ふ人は、ひとりもゐない。
野良で鍛えた圖太い聲で
みんなに話しておやりよ――ね、
踏みつけられた麥は
どんなに強く成長するか――つて。
私達は麥みたいに、
穗をそろへて　ぐん――と伸びやう。と。
そして作さん。
黑穗の恐しいことも話しておやりよ。
あいつは病菌を傳染させる。
見つけしだい引つこ拔かなくちや
取返しのつかないことになる――つて、
ね――。作さん。
そしたら明日はピオニルを連れて
山へ行かうよ。

ひとびとを靜かに呼んで
話してゐる午後です
世の中は淋しいことと悲しいことの多い
生活苦惱の戰場だ。
淚つぽい抒情人形の樣な
センチメンタルは
そこいらに捨てゝしまつて
强い鐵のような女性となつて
この大地を！
この社會を！
あの怒濤をおしわけて
一ぱいに孕んだ帆をあげて
出發しようではないか、
我等が世界へゆかうではないか、
しつかり手をつなげ姉弟(きようだい)よ。



支配階級の攻勢

——社會時評——

永島暢子

一、盗犯防止法案と催涙弾

沐猴にして冠した無産黨議員の、隨喜的お茶番と、ブルヂョア代議士の、見えすいた泥仕合の他には、何等爲す所のなかつた第五十六議會も、流石に資本家地主への御奉公は忘れなかつた。即ち全プロレタリアートのごう〳〵たる反對のあつたにも拘らず、「盗犯防止法案」を通過せしめたのだ。

「盗犯防止法案」を、文字通り、近頃レーヨンの如く流行する强窃盗に對する自己防衛の法令だと思つたら、あまりにお目出度すぎる。自己防衛に關してなら、既に刑法で規定され、五月九日に於ける下谷區新坂本町の、山本氏の强盗を殺傷したのが、無罪になつたのでも充分である。だから名は、正當防衛に借りても、事實は勞働者農民の××化の彈壓を、一層合理化せしめやうが爲の事は、一點疑ひなく明らかである。「故なく人の住居、又は看守する邸宅建物若しくは船舶に侵入した者、又は要求をうけて之等の場所より退去せざるものを排斥せんとする時、前項各號の場合に於て、自己又は他人の生命、身體又は生命に對する現在の危險あるに非ずと雖も、行爲者、恐怖驚愕、興奮又は狼狽により、現場に於て他人を殺傷するに至りたる時は、之を罰せず」

更に泉二刑事局長は、國民新聞記者との問答に於て一層よく、この法案は、盗犯防衛の爲のものでなく、完全に爭議の場合などに、勞働者農民を、合法的に斬り捨御免である事を物語つてゐる。

問「人の邸宅に行き、門衛なり用心棒などがゐて、出て行けといつても、尚頑張つてゐた場合、殺傷されてはどうなるか」

答「無論適用される。又主人と豫め電話なりで承諾を得てゐる場合でも、門衛なりがそれを知らなかつた場合、誤想防衛として無罪が成立する」(爭議團の交渉委員は殺されに敵地に乘り込まねばならぬ法律ではないか——引者)

問「爭議の時、例へば鐘紡爭議の時、河上丈太郎氏が、塀によぢ上つて、女工に出て來いと言つた事があるが、若しあの場合殺傷されたらうか」と

答「それだけなら適用されないが、無理にも入らうとしたり、下りてくれといつても尚頑張つてゐる樣な場合には、適用される。工場主や資本家、その家族を訪問した時にも同然である」

問「どう見ても、一部擁護のものだ、勞働者の生活擁護や、その他止むを得なき場合の人達の間に、附帶事項を設けてはどうか」

答「勞働者とか一部の人のために、國民全體の正當防衛に對して(勞働者農民諸君よ、支配權力は、日本の全人口の九割以上を占める勞働者農民を民衆の多數と見ず、僅の資本家地主を國民の全體だと思つてゐる事を注意せよ)特許するやうな事は出來ない。さういふ特殊な階級には別に法律なり命令なりを設ける」

この問答が明確に示す如く、支配階級は、ます〳〵激化する勞農大衆の鬪爭に挑戰し、沒落の危機に瀕したる資本主義の安定を、プロレタリアートの血を以て築きあげやうとするに他ならないのだ。

放漫政策の亂舞のために、遂に資本家地主の利益を十全する事の出來なかつた、政友會內閣に變つた濱口內閣は、徹頭徹尾、金融資本家の御意をうるために大童である。金解禁、產業の合理化、資本の集注化はいはずもがな、大量馘首と勞働條件の低下による勞働の強度化、殖民地搾取のより合理化など、彼等の審議する政策は、何一つとして、金融資本家への忠義立てゞない事はない。

かゝる政策の下に於て、民衆はどんな生活にさらされてゐるか。

昨秋九月、二十六萬と言はれた失業者は、十月には二十九萬二千、十一月には、驚異にも三十萬を突破し、今年二月には、三十五萬等、社會局の失業統計は加速度的に、數字を加へて行く。けれどこの三十五萬云々とは出鱈目であつて、事實は、全國に於て、百萬の失業者は、今日の一碗の飯もなく、而も生きんとする本能と苦鬪してゐるのだ。支配階級は、このダイナマイトの如き失業者の群れをギマンせんとして、勞働手帳などを設けてデカ〳〵に宣傳するが、一切は空雷の如く、九日に一度仕事にありつければ、まづ上の部といふ態たらくだ。この狀態に、勞働者は、最後まで牛の如くだまつてゐるか？　斷じて！　沸々として起る大小爭議、暴動に盛り上らうとする鬪爭意志、それ等は、今こそはつきりとした方向をとらず、單に自然發生的なる形態で戰ひつゝあるとは云へ、漸次××的スローガンに統一されて、今や正に、雷管に火が點ぜられんとする狀勢を、釀成しつゝあるのだ。

學校・青訓・警察・監獄・軍隊等一切をあげて、資本家地主を安泰たらしむる事を任務とする支配權力は、決してこの民衆の傾向を見逃しはしないのだ。さうしてその權力を利用し、戰線に於ける攻勢を一層充實せしめ樣としてゐるのである。これは今更に支配權力の用ひた珍らしい手段ではない。治安警察法、暴力取締令より、治安維持法に至るまで、すべてが、勞働者農民の彈壓法令でなくつてなんであるか。

一九二八年コミンタン第十回執行委員會總會に於て、帝國主義的資本主義諸國の搾取狀態を適確に表現した。

「從來は勞働の強度を、勞働時間に比例して或一定の點以上に上さない事は、或程度まで、企業家自身の利益であつた。今では彼等は合理化によつて勞働者を殺すまでに使ふ自由の可能性を得たのである。今では利潤として、勞働者の心臓の血が直接吸ひとられるのである。そこで驚くべき大衆的失業があるのである。」

世界帝國主義の一環をなす、日本資本主義も亦、クーシネンの表現以外にある事は出來ない。飽まで恐慌のピホーと、勞働者農民の××化を防衞し彈壓しやうとする支配階級の意圖は、かくしてまつさきに、樞密院や貴族院のお目見えも目出度くすみ、シヤニムニ盜犯防止法案、否本當の名、勞働者農民斬り捨御免法律の制定となつたのだ。一方には、持兇器をしち喧しく云つて、勞農大衆には徹底的に素手を強いながら、富豪の持兇器に對しては、緩漫である事も亦この事實を表明するに、一層の拍車を加へるものではないか。

しかも、支配階級の、プロレタリアートへの挑戰はこれのみに止らない。更に彼等は、化學的殺人器使用の前哨戰として「催涙彈」を使用しはじめた。幹部諸君の日和見的鬪爭と、右翼の裏切りのために、大爭議初まつて以來とされる悲慘なる敗北に終つた爭議の失敗を取り返すべく、勇敢にも再び立ち上つた市電從業員諸君のデモンストレーションに、警官は催涙彈を發砲して、多くの負傷者を出させた。彼等はこゝに、勞働者農民の血税の使用によつて完成製出した武器で以て、勞働者農民を彈壓しやうとしたのだ。この卑劣、暴戻究まる攻勢に對して、勞働者農民は何を以て報いやうとするか？

市電幹部諸君並に、各無産黨の輝ける指導者達？は、相變らず、當局への談判で片付けやうとしたにすぎなかつた。その結果は、昨冬の市電爭議の時、從業員の恐ろしき結束振りに、あはてふためき、盛んに同情者的口吻を洩らし、勞働者の味方面をした××××にもすつかりなめられ、「もつとどん〳〵使用するつもりだ」などゝ放言されて、しほ〳〵と引き下つた。

昨今の組織的計畫的、そしてロコツなる支配階級の攻勢振りを見よ、彼等の持つ一切の權力、利用され得るあらゆるものを動員して、プロレタリアートの××化の彈壓に備へ、資本主義の斷末期を亂舞しやうとしてゐる。來年行ふべく用意おさ〳〵怠りない、國民總動員の、災害を豫想してといはれる演習も亦、一朝勞農大衆の蹶起した時に備へんとする準備である事は、彼等自らが物語つてゐるではないか。かゝる攻勢に對して、勞働組合、無産政黨は、如何に戰ひつゝあるか。彼等は議會主義を勞働者農民にふりまいて當選しながら、斬り捨て御免法に對して攻擊らしい攻擊も出來なかつたではないか。組合は勞働者農民の團結の利を宣傳し、大衆を組織しながら、かゝる事に對して、何か鬪爭でも行つたのであらうか。

實に勞働者農民の支配階級への抗議は、組織的大衆的行動以外にはあり得ないのだ。それは千葉に於ける、四・一六事件の公判が雄辯に、今更に生々しく物語つてゐる。××黨の裁判は從來各地とも、傍聽禁止で暗黑裡に終止せしめたが、千葉に於けるそれのみは、大衆動員と、黨員の果敢なる鬪爭によつて、とう〳〵裁判官をして、傍聽禁止を宣して後の狀勢を危惧せしめ、完全に公開裁判を

鬪ひとつたとの事だ。公判廷は、忽ち×××大會の如き觀を呈し、裁判長は、黨員のスローガンの説明に、一言の返す言葉を知らなかつたとの事だ。この鬪爭こそ、プロレタリアートの戰ふ術を知らしめる。組織には組織を、武器には武器、××には××を以て戰ふ、ボルセヴイキ的鬪爭以外には、斷じて解放の一歩を戰ひ取り得ない事を知らねばならない。敵が、武器を持つて刃向つて來た時に、素手で頭を下げたら、その頭がまづコロリと落される事は、三歳の童兒でも知つてる事である。

二、クローヅアップされたドン底生活

金融資本家の御用振りを發揮して、金解禁・緊縮政策と矢次早やに行つた政策から、ボロを出し、金甌無缺を壽いで、生活に苦しむ人が一人もゐないかの如く威張つてゐたのに、貧民階級は急速にクローヅアップされて問題になつてゐる。最近の新聞の社會面には多かれ少なかれ、ドン底生活の生々しい記錄が載つてゐない事はない。一二の例をあげれば、ラヂオ放送で、隣保協會長津田氏は、東京府營住宅に住む、貧民の例をとつて話してゐる。府營住宅の數は三百六十戸、世帶數三百二十、人口一千二百八十八人、內小學在籍兒童二百十九人、家賃一ヶ月四圓乃至六七圓だが、これさへも拂ひ得ない人が多いといふ事から、說き起して、一世帶平均五人として、月收二十五圓を上とし、十五圓以下三十戸、十圓以下九戸もあり、唯一の御馳走は十錢に七つのうどん玉であつて、質草には、五錢でもいゝから貸してくれ、と古手拭を持つてさへ行くと、審にその狀態を述べてゐる。讀賣新聞では、辛い失業者をつかまへては、思ひつきり愚痴をこぼさせ、生活に困つた事のないらしい記者の、浮つ調子なペンで描かせ、芝居を見る氣でゞも讀むであらう讀者の、安價な興味と涙をかちとらうとしてゐる樣に、更に當局は全國的に、所謂貧苦と鬪つた孝女、節婦、烈女を募集し、表賞して、貧苦と鬪ふ人達に、不平とうめきをかみこらえさせやうとしてゐる。

實に新聞は、プロパカンデイストであり、アヂテーターである。彼等は、支配階級と密接なる握手の下に、意識的に、計畫的にこの饑餓線上にさ迷ふ民衆の憤激を、綺麗に發散させ、その困苦の原因を彼等自身に轉化させ、所謂人類愛（錦紗の着物を着てゐて、人に貧乏をお忍びなさいといふのが人類愛か）を以て、この尖鋭化しつゝのある階級對立を巧く糊塗しやうと努めてゐるのだ、彼等はこの百萬失業者をどうするか〳〵と盛んにお太皷を叩いた。さうして盛んに民衆の窮乏を書き立てた、而して次に來たものは、政府の救助政策の提灯であり、社會的正義の士とやらの寄附行爲である。五月二十五日、三河島の貧民長屋に一圓二圓と、二千圓ばかりを撒きちらした、金持の息子らしい人達の行爲は、どんなにセンセイショナルに報導された事か。この青年こそは、一世の美事でも爲した如くに、一齊に宣傳したものである。そして旱魃に、滋雨でも降つた如き喜び方を、殊更にドン底階級に強いたのだ。さうした新聞記事的禮讃によつて、續々と寄附行爲者が表はれる。或は貧しい一勞働者の貧しい財布をはたいた話、或は小學生の、先生に敎はつたらしいセンチメンタルの具體的表れを、而してまた、それ等をうけ取る人々の

悲しい乞食的根性を無批判に書きたてる。

だがいくら、ブルジョア息子が、ドン底階級に「貴家の幸福の増進の爲に」と事々しく書いて送つたとて、一圓は一圓の用にしか立ちはしない。明日は干ぼしから逃れる譯はあらう筈がない。否むしろかへつて、この一圓が民衆の乞食的根性を一層助長せしむる、非常な害毒を流すに役立つのみなのだ。勞働の搾取の上に立つてのみ、利潤を生み富を蓄積する資本主義の解剖、眞實なる民衆の幸福は、如何にして獲得すべきか等、貧苦に苦しむ民衆にとつて、本當に知らねばならぬ事を知らしめず、資本主義が覆滅しない限り、幸福といふものゝ存在しない事を、さもある樣な、幻影と喜びを持たせる事は、反動的役割でなくてなんであるか。

しかも民衆の不平不滿を、押へつける爲に、東京市では、學校出のお孃さんを訪問員とし、貧乏人の相談相手として、貧民窟を歩かせるさうだ。それはいづれ、方面委員が設けられ、社會事業團體が、雨後の筍の樣に出來、その人達の名譽と懷を肥やしたとしても、ます／＼民衆が餓ゑと病に迫ひやられつゝある樣に、お孃さん達の半襟をふやし、プライドを高めるにすぎないであらう。

この時金持階級はどうか。二三百圓以上の時計が羽が生えた樣に賣れ行きを増し、四千圓、五千圓の高價な指輪が、苦もなく、新らしいサツピラと換へられて行くといふ。尚これと相俟つてスポーツの道具や、大小劇場の氣違ひ的好景氣、みな金持ちの景氣のよさを物語つてゐる。

即ち救濟は、いかに計畫的になされたとしても、救濟でしかない。民衆の幸福は、決して安價な人道主義やギマンで實現出來るものではなく、搾取の上に立つ資本主義制度と强烈に鬪ふ事によつて、搾取なき社會××の途上にすゝみ、その社會に於てこそ、民衆の幸福が初めてある事に目を覆ふべきではない。然るにこれを糊塗し、僞瞞の一時しのぎを以て、徒らに乞食根性を増長せしめ、民衆を飽まで奴隷的地位におかうとするのは、先きにも見た如く社會政策の本態であり、從つて、社會政策は勞働者農民の解放に當つて、一の反動的役割を努むるだけだ。

片手に平和、片手に劍、この陰險な政策は、最近、頓に露骨になつた。プロレタリア運動への彈壓手段である。既に出來てゐる殺人的法律に加へて、盗犯防止法案や、催涙彈の使用を積極的に用ひつゝ、孝子節婦の表賞の、給食パンの、蚊の涙ほどの救濟のと、いろんな、おあづけで、民衆を釣らうとする。民衆は、彼等の陋劣なる手段を逆に行き、支配階級の社會施設を利用しつゝ、常に、その本態をつきつめ、僞瞞と戰ひつゝプロレタリアートの目的を把持する方向に進むべきであると信ずる。

三、貰ひ子殺しに就いて

「殺したのは七人だけです」といつた言葉や、「この子だけは筋がよいので、生かしておかうと思ひました」といふ、いかにも、貰ひ子殺しを正業化した、殺人鬼中島の「貰ひ子殺し事件は」、我々の感傷癖をそのまゝにしてはおかなかつた。

生活の貧困化は、遂に道德的なるものゝ一切を奪ひ、たゞ食ふ本

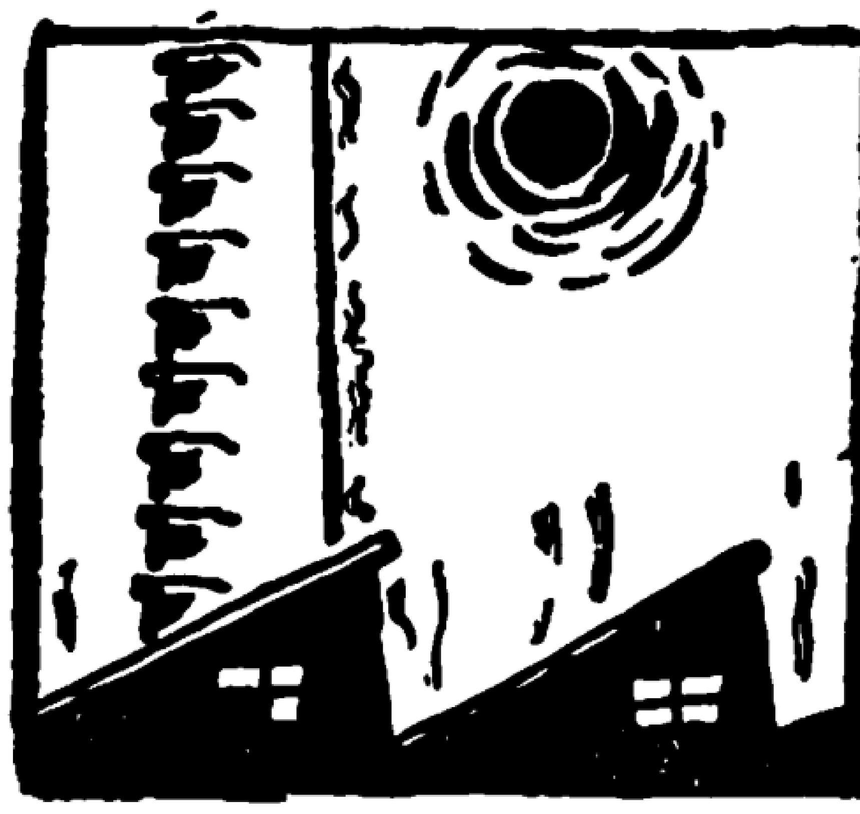
能にのみ支配される實情を、東京市外板橋町の一隅の、貧民長屋が生んだ、一村こぞつての貰ひ子殺し事件は、明に物語つてゐる。金が基準である現代社會の道德も、形式も、ドン底生活の彼等には異る世界の代物にすぎなかつた。食ふ事の出來るその事が、彼等にとつては唯一の正業であり道德であつた。だから、他人が生んだ子を貰つて殺したとて、何等彼等には非道德的な事ではなかつたらう。それなら、彼中島の場合にはそれではどうであつたか？ 勿論同じ理由が成り立つ。たゞ彼に少しばかり、現代の教養なるものが與へられてをり、從つてその犯罪行爲も亦、多くの殘虐性を加へてゐる。近時生活の不安よりかもし出された神經衰弱的な焦々しさと、弱肉強食的な支配階級的意圖が、ブルジョア的教養のために、より合理化されて潜在してゐなかつたとは、誰が云ひ得るであらうか。ベルトに卷き込まれ、落磐に命を落す直接的傷害は元より、ヨロケ、結核、胃腸病等、種々の職業病に勞働者農民をつき落す事によつてのみ、富致を許される現代社會に於て、子殺しなどを一の企業と考へる事も、正常な事と考へる人も少くはないであらう。一服の藥に生命を託され乍ら、金のない爲に藥を盛る事を拒絶し、見す〳〵命を落させる事が許されてゐる社會に於てゞある。

この事が發表されて以來、社會は亦、風紀問題、道德的頽廢等と個人の享樂をまで罪惡視し、子殺しの罪を、その母親に轉化せしめやうとした。この問題と性の問題とは別個のものであるし、且母自身だけの問題ではない。またこの事のために、事實に、性慾の合理的解決として「産兒制限」を一層浸透する事の急務をとかれた人もあつたが、産兒制限の必要の要素は、また別に存在するであらう。また更に、「若芽の延びる如くにすら〳〵と延びねばならぬ幼き生命が、貰ひ子等によつて、いぢけて育つ事は由々しい事である。殊に貰ひ子殺し等は、放置出來ない問題だ」と幼兒生命保護の法律の作制も傳へられてゐる。幼兒生命の保護、元より結構である。だが幼兒はその生みの親に育てられない事によつてのみ、若草の如くにも延びないであらうか。生みの父と母とに育てられながら、貧故にあたらよき性質を歪曲されて行く實例は、政府と金持ちの眼には、見えないやうだ。法律を、プロレタリヤ階級彈壓の爲に作る他は、目先きを糊塗する必要に亂製する支配階級にとつては、やはり作る必要もあらうが、やはり之も枝葉の問題でしかない。

問題の根幹は別にある。

それがいかに非道德的な事であらうと、一の習慣となれば、道德的である事は、現代の制度が物語つてゐる。資本主義社會に於て小盗のためには、いろ〳〵な法網は作られやうとも、勞働者農民の勞働力を公然と盗む大盗に對しては、何等制裁がないばかりか、名譽が待つてゐる。この社會に於て産兒制限が普及されやうとも、幼兒保護が制定されやうとも、生活の不安は、ますます殘忍的な犯罪で私達を戰慄させる事であらう。而して、支配階級が、彼自らの地位をカクリツするために、極力强制した所の道德観を、どし〳〵と大建築に巣喰ふ白蟻の如く、食ひ破るであらうし、このブルジョア社會も亦、彼自らの胎内より、必ず破壞を助成されるであらう事が見通されるのである。

（三〇・六・五）



未開社會に於ける性と抑壓（三）

B・マリノウスキー
小林すみ子譯

五　幼兒性慾

フロイド一派の精神分析家達の論據と同じものを研究してゐながらまだ私は性の問題を明らかにしてゐなかつた。と云ふのは、半ば自己の說の社會學的見地を强調する爲、半ばは母子牽引性とか「快感追求（リビド）」といふ樣な机上の空論的な區別を避け度い爲であつた。然し乍ら此の時代には、子供は自由に遊ぶ事を得、周圍の人々や仕事に對する興味も增して來るので性慾は、外部からは容易に社會學的觀察をなし得且家庭に直接影響を及ぼす樣な形を取つて始めて姿を現はす。ヨーロッパの子供を綿密に觀察し、且自分自身の子供時代の事を忘れてゐない人は幼少の折——三歲と四歲の間と云はう——或る特殊な興味と好奇心とが起きてくる事を認めねばならない。法に適つたノーマルで「お上品」な世界以外に、羞かしさうな顔をした慾望や秘密な興味や隱れた衝動等の天地が開けてゐるのである。

人の一生を通じて存在する樣な運命付けられてゐる「上品」と「猥褻」、「清淨」と「不淨」等の相對した二つの範疇が固まり始める。

或る人々の間では「猥褻」は完全に抑壓され、上品さの眞價が、ピューリタンのどぎつい德、或はもつと反撥的でコンヴェンショナルな道德的僞善に迄過度の發達を遂げてゐる。さうかと思ふと多量な軟文學の滿足で「上品」が窒息して了ひ、僞善的な「德」自身に劣らず反撥的な、反對側の範疇が完全な色好みの域に發達してゐる人もある。

今問題としてゐる小兒時代の第二期——私は四歲頃から六歲までとした——に於て、「猥褻」は排泄機能や、殘酷性を伴ひ勝ちな猥褻な露出行爲やそれに關する遊戯等に興味を集注する。未だ意識が性的に分化してゐないので生殖行爲には少しも興味を感じない。農夫に混つて永年生活し彼等を子供時代から親しく知つてゐる人は誰でも、斯くの如き狀態は、おゝつぴらではないが當り前な事だ、といふ事を認めるであらう。勞働者階級でも同じ樣だ。（註）上流階級で

は「猥褻」は他の階級より以上に抑壓されてゐるだけで、別に變つてゐる譯ではない。然乍ら農夫の場合よりも困難な、社會各層のこうした觀察は、教育學や道德、優生學等の理由に依り、早速行はれねばならない必要に迫られてゐる。だから適當な研究方法を工夫せねばならなくなる。思ふに、此の結果として、フロイド一派の學說の或るものは、動かすべからざる迄に確認されるであらう。(註)

(註) かの眞面目な社會學者であるゾラは私と全く一致した觀察方法に依り、此の問題に關する豐富な材料を提供して吳れた。

(註) 小兒性慾のノーマルな發現として、兩性間に性意識の分化を見ない事、肛門色情、生殖器的興味等の說は、私の觀察に依れば正しいものである。最近の「精神分析學時報」所載の論文に依るとフロイドは、別に論證も擧げずに以前の意見や確言を稍變へてゐる。詰り子供は此の時代には既に「前生殖器的」興味を持つてゐる、といふのだが私は贊成致し兼ねる。

新たに目醒めた幼兒性慾或は幼兒の猥褻性は家族に如何なる影響を及ぼすであらうか。凡そ「上品」「猥褻」兩者の中、兩親殊に母親は皆初めの範疇に含まれてゐて、絕對に「猥褻」の觸れない淨いものとして子供心に印せられてゐる。子供は何か自分の猥褻な遊びが母に知れる事を非常に厭やがる。又性に關する事を母に話したり母の居る所で仄めかしたりする事に、强い嫌惡を感じる。之も亦嚴然と「猥褻」の範疇から除け者にされてゐる父親は、道德の權威者であり、みだらな考へや、遊びは立腹させるであらうと、子供は思つてゐる。何故なら「猥褻」は何時も後めたい罪の感じを伴ふからである。(註)

(註) 現代兩性の態度は急激に變化しつゝある。現在我々は子供の心を「開發」し、彼等自らの爲に「性」をちやんと萬事整へて置いて遣らうと努めてはゐる。然し乍ら先づ第一に、之は英米のインテリゲンツイア間ですら極く少數である事を記憶せねばならない。次に、性の問題で子供が兩親に對して感ずる羞恥やばつの惡さが、何の程度迄此の教育法に屈服するか私には解らない。一般に大人でも、日々往來してゐる親密な間柄からは、劇的でドギマギする樣な且神秘的な要素は除いて了はうとする傾向が見られる。本質的に「抑壓されぬ」トロブリアンド人ですら、性的事件に關して子が親に打明けたためしが無い。自分の日常生活に余り立入つてゐない知己友達に、デリケートな或は恥づべき告白をする方が遙かに容易だ、といふ事は實に顯著である。

フロイド一派は母と娘、父と息子間の各の性的競爭に重きを置いてゐる。私の考へでは母娘間の張合ひは此の幼少時には未だ初まらない。兎に角何の形跡も認める事が出來ないのである。父子間の關係はもつと錯綜してゐる。前に述べた樣に、男兒は之は「猥褻」の部類に入ると意識する樣な考へや慾望や衝動を、母親に對して持つてはゐないけれど、その幼い肉體組織が、母親との餘り密接な肉體的接觸に對して性的反應を示す事は疑はれぬ事實である。農夫社會では、男兒が三歳になつたらもう母親と一緒に寢かしてはいけないといふ意味の助言が、よくおしやべりな老人共から若い母親に與へられる。幼兒の勃起、及び男兒は女兒と異つた方法で母親にすがるといふ事實が、此の社會では廣く知られてゐる。之位な條件の下に父と幼い男兒が性的に張合ふなんて、局外の社會學的觀察者の目に

さへ不可能に映ずる。精神分析家は範疇を作つて之を力說してゐるのである。もつと富有な階級に於ては野蠻な葛藤(コンフリクト)は稀で、假令起つても想像裡に止まるか又は洗練され恐らくは非常に陰險な形を取つて現はれると云つてゐる。

子供が性に依りそれ〴〵異つた性格氣質を示し始める此の時期に兩親の愛情が息子娘と區別して注がれる事は顯著な事實であるに違ひない。父は自分を家系や家庭から除いて了ふ繼承者、として息子を見る。夫故父は益々批評的になり、此の傾向は感情を二つの方向に分ける。若し息子が心的や肉體的に劣つてゐる徵を示したり、父親の理想とするタイプに遠かつたりすると、彼は激しい失望と敵意の種となる。又此の時期に於てすら、可成な競爭心や未來の更迭に對する憤懣や、自分の代が殘少なになつて行く事の悲觀やらが、段々敵意に導いて行くのである。兩方とも抑壓された場合には、此の敵意は無情の父を作り反應として子供の心にも敵意を喚起す。一方母親は否定的な感情を形成する何の理由も無いし、かへつて未來の男子としての息子を崇拜してゐる。父の、娘――女性の形を取つた彼自身の再現――に對する感情が、娘の心に優しい愛情を喚起さないといふ事は滅多に無い。そして又大抵彼の虛榮心を滿足させるものである。斯樣に社會的要因は生物學的要因と混合し、父親をして息子以上に優しく娘に愛着せしめる。然るに母親は全然其の反對である。けれども異性の子孫に感ずる魅力は、異性であるからと言つて必ずしも性的魅力には限らないといふ事は明らかであらう。

メラネシアでは子供の性的發達過程に、全然異つた一種のタイプが存在する。本能衝動は本質的に相違があるものではない、といふ事は論を俟たないが、然し私は所謂幼兒の猥褻な行爲とか、排泄機能や露出行爲を主とする秘密な遊戲に子供が耽る「地下の世界」と言つた樣なものは何一ッ發見する事が出來なかつた。問題は當然觀察上或る困難さを提出する。何故なら、土人の子供との極く私的な交涉に入込む事は難かしい事だし、我々の間に見る樣な猥褻な物事で滿ちた世界があるとしても、それを一般の成熟した土人から聞き出す事は無益であらう。丁度我々社會のコンヴェンショナルな父母や媬姆から聞出さうとする事が無益である樣に。然し土人間には適確に、物事をかくも變へて了ふ一つの事情がある。即ち彼等社會では、我々が今取扱つてゐる時代より稍後――五六歲頃になつて現れて來る生殖器的タイプの幼兒性慾に對して、何等抑壓も罰も道德的非難も加へない事である。だから若しそれより以前に猥褻行爲が行はれても、後の性的遊戲の生殖器的階段と等しく寛大に見做されてゐるのである。

では、フロイドが「前生殖器的」興味とか「肛門色情的」興味とか稱してゐる時代が、何故土人間には無いのかといふ事を、如何したら說明出來るだらうか。それには、小兒の發達過程に於ける、此の次の時代の性慾、卽ちメラネシアの子供が我々の子供と本質的に異つてゐる事を示す所の性慾を精査したらもつとよく理解出來るであらう。

六　人生の見習ひ

さて、我々は五歲から七歲の間に始まる小兒時代第三期に移つた。此の時期に於て、子供は自分を一人前の樣に思ひ自分で遊びを工夫し、同じ年頃の友達を探し始める。そして出來た友達と共に、大人に煩はされずに其處らを彷徨つき始める。只の遊びが、もつと

明瞭な仕事や人生の眞面目な興味に段々變つて行くのは、此の時なのである。

我々社會に於ける此の時期はどうだらう。ヨーロッパに於ては、就學又は無教育階級では何か仕事の初步見習ひを始める事等に依り子供は家庭の影響から遠ざかる。男兒でも女兒でも、母親に對する專らな愛情が或る程度迄減じる。男兒にあつては此の時代に、母の代用物へと感情が移動して行く事が屢々有つて、當分の間その代用物は、母親に對する樣な激しい愛情――それ以外の何の感情も無く――で以て敬慕される。斯樣な移動は、青年期の男子が年上の婦人と戀に陷る樣な、後の傾向と混同してはならない。又同時に、子供の心には、母親の獨占的な親密さから獨立し樣といふ慾望が起つて來、之が爲め子供は親に絕對的信賴を置かない樣になる。農夫や下層階級の間では、母親からの解放過程は上流に於けるより、早くから行はれるが、本質的にはどちらも同じである。母親が子供、特に男兒を深く愛してゐる場合、きつと此の解放に對して多少の嫉妬と憤りを感じて、妨害し樣とする傾向がある。だが普通は、挫折をより激しく苦痛にするに過ぎない。

西方太平洋の珊瑚島の子供達も同樣な傾向を示してゐる。のみならず其處では、より明瞭に見られるのである。何故ならば、此の時代に義務教育も何の嚴しい訓練も無いといふ事は、子供の天性が好む儘の自然な遊戲を、自由に行ふ事を許すものであるから。併し、メラネシアでは、母親側に何等嫉妬めいた憤りや、子供が新たに發見した獨立に對する心配などが無い。此處で我々は、母子間に深い教育的興味が缺けてゐる爲の影響を知るのである。此の時代にトロブリアンド群島の子供達は、大人の團體の中にささやかな少年團を造り始める。彼等は隊を組んで彷徨つき廻つたり、遠くの濱や藪の中の人目に付かない場所で遊んだり、近所の村の少年團の子供達と一緒になつたりする。之等すべての行動を取るのに、同じ子供の指揮者の指圖には從ふけれど、大人の威力からは全く獨立してゐる。親達は彼等を引戾さうとしたり干涉したりしない。又一定の課業に縛り付けもしない。勿論始めの內は、家庭はかなりな力で子供を把握してゐる、けれども解放の過程は自由に自然に絕えず、段々と進行して行く。

此處にヨーロッパの狀態との大きな相違が存するのである。ヨーロッパの子供達は、大抵家庭の暖かみから學校の冷い訓練や、色んな見習ひ課業の手に渡つて行くが、メラネシアに於ては解放過程は徐々に起り自由で樂しいものである。

さて、此の時代の父親はどんなだらう。我々の社會――イギリスやアメリカの家庭生活の、或る新時代的局面は此處で再び除く事にして――では、父は矢張り家庭內の主權を代表してゐる。外部、學校や商店や農夫の子供がよくやらされる初步の手仕事等に於て、權力を揮ふのは父親自身か又は彼の代理人である。此の時期の上流階級では、父親の威光を感ずるとか父を理想とするとか、自覺的觀念を形成する重要な過程が始まる。子供は今迄臆測し朧氣ながら感じてゐた事――父親の、家長として確立された權力並びに經濟力――を今や理解し始める。母や保姆が宗教的或は道德的なしつけをする時、父の、過失の無い事、智惠、正義、力等は常に色んな方法で、子供の頭に敎へ込まれる。だが理想といふ役割は決して容易いものではない、それ許りか親密な日常生活の中に迄保持してゐる事は、本當に至難な芝居である。殊に癇癪や馬鹿げた失錯を抑へる樣に銳

えられてない人間に取つては、一大事である。斯くして、「父の理想」は築かれるや否や程無くこわれて行く。最初の內は、子供は父の癇癪や缺點に付いての漠然とした不快、憤怒に對する恐怖、臆氣ながら正しくないといふ感じ等を持つてゐるに過ぎない、そして又余りひどく爆發した場合には恐らく多少の恥かしさを感じる事だらう。

が、直きに、尊敬と輕蔑、愛情と憎惡、優しさと恐れ等の矛盾した感情が混り合つた、典型的な、父への感情が形成される。子供の父に對する態度のうちに、家長制度に起因する社會的影響が固まり始めるのは實にこの時代なのである。男兒と父との間には、繼承者と免職者との張合ひや、前の節で述べた樣な相互の嫉妬等がより明瞭に固まつて來、息子對父の關係を娘對父の場合より、否定的要素の多いものとしてしまふ。

下層階級に於ては、父の理想化はもつとざつではあるけれど矢張り少からず重要である。

既に述べた樣に、典型的な農家では父は公然と暴君である。母親は彼の主權に默從し、父を尊敬してゐると同時に彼の兇暴な力を恐れてゐる子供達に、自ら模範を示す。此處で亦、父親が女兒を偏愛する事に對して一つの情操——矛盾した感情で滿ちた情操が形成される。

メラネシアの父の役は如何なるものであらうか。此の時期の父の役に就いては取立てゝ言ふ程の事も無い。相變らず子供の友達で、手助けをし、彼等の好きな事又は好きさうな事を敎へてやる。子供達は、もう父に余り興味を感じなくなり、一般にそれより小さな友達の方を好く樣になる。けれども父親は常に、半ば、遊び相手半ば、保護者の良き助言者である。

併乍らこの時代には、部族の律や權威者の主意、即ち、慾望の或るものへの禁止束縛等が、男兒や女兒の生活にはいつて來る。だが此の律と束縛とは、父親とは似ても似つかぬ人間、母權社會家族の男性の長である所の、母親の兄に依つて代理されてゐる。實際に家政權を握り大いに行使するのは彼なのである。

彼の權威は、我々社會の父の權威に非常に似てゐるとは云へ、全く等しいとは云へない。

先づ第一に、彼の勢力は、ヨーロッパの父親のそれに比べて、子供の生活圈にはいり込むのが遥かに遲い。そして又彼は家庭生活に親しく近づいた事が無く、ほかの小屋か又は村を異にして住んでゐる。何故なら、トロブリアンドでは父族結婚であるから、彼の妹や子供達は、夫や父の村に住ふのである。斯樣に、彼の勢力は遠方から働きかけるので、余り細かい面倒臭い事迄は及ぼす事が出來ない彼は男兒女兒のどちらの生活にも二つの要素を持來す。第一は、義務の要素、即ち禁止と束縛である。第二は——特に男兒の生活に——功名心の要素であつて、即ち誇りと社會的價値、實にトロブリアンド人をして生き甲斐あらしめる所のものである。彼が男兒の仕事を監督し、彼の用事をさせ部族の律や禁止に就いて敎へたりし始めると、もう束縛はやつて來る。束縛の多くは、既に兩親から敎へ込まれてゐるのだが、カダ（母親の兄）は、常に律の背後に居る眞の權威者として男兒にまみえる。

男兒が六歲になると、そろ〳〵畑仕事を始めたり刈取つた穀類の運搬を手傳ふ爲に、はる〳〵やつて來る事を伯父から求められるであらう。母方の伯父の村で、氏族は同じでも異ふグループの人々と

こうした實地仕事をやつてゐるうちに、男兒は、自分の氏族のブッラ(名譽)に貢獻してゐるのだといふ事を知る。

彼は、之が本當の自分の村であり自分の仲間である事を感じ始め氏族の傳統や神話や口碑等を覺え始める。又此の時代の子供は屢々父親と協同作業をする。だが、此の二人の目上に對する子供の態度に、ちやんと區別が存する事は面白い。父親は矢張り仲好しで子供と働く事を好み、手助けしたり又は敎はつたりする。けれども、こんな協同作業は、法律ではなしに好意に基いてゐるのであつて、報酬といつては作業から來る所の悦びそれ自身なのであり、結局その光榮は他所の氏族へ行つてしまふのだといふ事を、父親は益々自覺して來る。又子供は、母親が兄から指圖を受け便宜を與へられてゐる事や、彼を非常に尊敬してゐて、酋長の御前の平士民の樣に彼の前では跪くのを見る。軈て彼は自分が母方の伯父の世繼ぎであり、將來は自分の妹達の主人になるのだといふ事を理解し始める。此の時期に於ては、僅かの親しさをも禁ずる特殊なタブーに依り、男兒は既に姉妹達から引離されてゐるのである。

母方の伯父は、我々間の父親の樣に男兒に依り理想化されてゐる。且御機嫌を取らねばならない人、將來のモデルとして眞似をせねばならない人間だと見做されてゐる。斯樣に我々社會に於て父の役を大變困難なものとする要素——皆とは言はない——の大部分がメラネシアでは母親の兄に與へられてある事を我々は知る。理想化された彼は勢力が有つて、子供や母親は服從してゐる。然るに、父親はこんな厭やな特權や特性からは全く免れてゐる。だが、伯父は人生をより華々しく面白くし、且その魅力を增す或る新しい要素——社會的野心、傳統的榮譽、血統や親族の誇り、富や權力や階級等の前途の望み、などを子供に手引きする。

ヨーロッパの子供が我々の複雜した社會組織の中を進んで行かうとする此の頃、メラネシアの男兒や女兒も亦、社會制度の主なる土臺をなしてゐる親族主義なるものを摑み始める。之等の主義は家庭生活の親密さを斷ち切り、子供の爲に社會を配置し直す。もう此の時は彼に取つて社會は家族の大きなサークル、否、家族以上の同胞であり一村の團體である。さて、子供は色々なグループを超越して、二つの主な範疇に區別せねばならない事を知る。その一つは彼のまことの親族ヴェヨラである。

之には先づ第一に母親そして兄弟姉妹、母　の伯父やあらゆる親族が屬してゐる。之等は彼と同じ物質又は「骨肉」を分けた人々であつて、子供は彼等に服從し、仕事や戰爭個人的ないさかひには、協同して事に當り補助しなければならないのである。自分の氏族や親族の女性は彼にとつて、性的に嚴重なタブーとなつてゐる。もう一つの社會的範疇は、他人若しくは「よそ者」トマカヴアと呼ばれ之は母系でつながれてゐない人々、又は氏族を異にする者の總稱である。そして又、父親とその親類——男も女も——それから將來子供の結婚や戀愛の相手をするかも知れない女性達、等はみな此のグループに含まれる。之等の人達は——殊に父親——個人的には非常に密接な關係を持つてゐるにも拘らず、律や道德からは全然無視されてゐるのである。斯くの如く、一方には社會的野心や誇り、又束縛や性的禁止等と結付いた、血を分けた親族なる意識があり、他方父親やその親族に關しては、ほがらかな友情や性的自由や自然な感情等はあるけれども、自分と同じ骨肉とか傳統的な桎梏などは存しないのである。

映畫漫評（四）

尾崎翠



ルウス・チヤスタアトンの「サラアとその子」

見たもの一束

「サラアとその子」

主演女優ルウス・チヤタアトンのせりふと子守唄によつて聲畫のよさを敎へられる作品。こんな境地を示されると聲畫も好いと思ふ。ジヤズ氣分に背中を向け、靜畫にも似た靜かな幕の上で、ルウスの聲が靜かに、立體的につゞく。聲畫も好しと思ふ。聲畫とはジヤズ・汽笛と水のあぶく・百人もの足音・百人ものどよめき・市街騷音の總計、などを意味もなく配置もなくごて盛りにしたものではないのだ。決してないのだ。いつたいにこの頃地上ではあまり音樂が多すぎる。五分間街を歩くと五分間音樂に攻められる。ラヂオと、隣のラヂオと、隣のレコオドと、ラヂオ・レコオド・レコオド・レコオド・ラヂオ、だ！　幾重の複音雜音樂に攻められたらいいのだ。（聽神經を斷つてしまひたくなるのだ）その中を潜つて行きついた武藏野館でまたジヤズごのみの聲畫では助からないのだ。沈默の天國を想ひたくなるのだ。そこで聲畫とは靜かさを、「影」の力を、より深めるものでなくてはならない。そして「サラアとその子」はルウスの聲によつてその境地を開いてゐる。

ルウスの演技は……さう、めんど臭いから簡單にいつてしまはう。巧みだ。あと二つもつづけて見たいほど、腕の動きに自信があり、ゆつくり、迫らないで動く。この動きは「嫉妬」のジヤンヌ・イイグルスを偲ばせ、聲も相通ずるものを感じさせる。この二人の聲は光澤消しの光澤によつて非常に自然にひびく。この質の聲は遺憾ながら今日までの日本の女優には絶對に一人もない聲なのだ。

ルウスのもひとつの特徴は感情の迫りをお芝居でない巧さで表現したこと。この映畫はともかく子供に對する母親の感情の迫りを表

現し得る女優でなければ演れない畫なのだが、ルウスはその點で得がたい演技を持つてゐる。殊に身代りで寄越された啞の子供を自分の子供と思つて抱く場面の演技は稀にみる巧さと思ふ。この時母親ルウスは決して身ぶりのお芝居をしない。軀の動きは實に靜かだ。そしてせりふによつて、聲の抑揚と聲の光澤の濃淡によつて、迫りを表現する。表情は大刻みで深く、軀は靜か。尊い演技だ。

最後に、鼻音で唄はれた子守唄の餘韻が、細く空氣の底に吸はれてゆく時、聲畫なればこそと思ふ。ルウス・チヤタアトン！ 聲畫とは生臭いものではありませんでした。あなたには心からさう申しあげます。監督さんにもそれを傳へて頂きたいのです。私はチエホフにならつて、あなたに「なつかしい女優さま！」と言ひませう。

「快走王」 次にみた「サラアとその子」のために此方を忘れてしまひました。失禮、リチヤアド・アアレン・そしてメリイ」ブライアン！ 忘れた原因はしかしあなたがたがさう巧くないからだと思ひます。ただメリイ孃の顏の甘くないところや、手足の大樣に伸びたところには心を寄せかかつてゐるのですが、ただそれだけのことで、あなたは今んところ大根の一本だと思つてゐます。それからいま以上聲に光澤をつけてはいけません。さよなら。

「眞夜中行進曲」 りつぱなくろんぼに仕立てあがつたエデイ・キヤンタア氏によつて、武藏野館の三階が十五分間見世物小舍になつた。惡趣味のためには十五分間でも惜しいのだ。私は酸つぱい欠伸を催してゐる。

「東洋の秘密」 獨逸ごのみの結晶で、すばらしいおとぎばなし。やはりウファは現實ものよりも象徵、おとぎばなしに勝れてゐる。しかも靴なほしアリイ（ニコライ・コリン）の素敵な夢の前後に、すこしだけ靴屋の仕事場を出して現實生活の哀しさを見せたところ……やはり獨逸人は夢好きで、象徵好きで、おとぎばなし好きなのだ！（この畫は監督もロシア名前だし、役者の顏ぶれにもニコライ・コリンをはじめロシア人が多いやうだけれど、何といつてもこれはウファ的な畫だ。手法や內容の小さい端々までも）

この畫についてはゆつくり心ゆくばかり推讃したいけれど、——大がかりなセットの美・夢・ニコラス・靴なほしの悲哀・アクメッド王子・デイタ・パアロオ——と並べるに止めなければならない。

それから挨拶をひとつ——ニコライ・コリン、しばらく！「ブリンス・チヤアミング」以來待つてたんです。あなたはすこしお爺さんになり、後頸が太くなりました、獨逸人らしく。しかし、あなたはロシアより、そしてフランスより、獨逸に住むのがいちばん好いと思ひます。「東洋の秘密」のやうなすばらしいおとぎばなしを作れるからです。

オリガ・クニツペル・チエホフのこと

アントン・パヴロヰッチ・チエホフ様、

このごろ私は、はかないすさびのひとつとして、「映畫漫想」といふ駄文を書いてゐます。屋根裏の柱にピンでとめた微笑溫顏のあなたが、ときどき苦笑なさらなければならないとほり、月の終りから

月はじめにかけて、私は大いそぎで、一度か二度街に出かけ……

アントン・パヴロキッチ！　いつもいつも、もう締切りは迫つてる！　んです。ですから大あわての私は、溫顏のあなたの寫眞が柱の上で苦笑してる妄想に陷るのです。ほんとですアントン！　あなたのなだらかな微笑が、いつも月の終りから月はじめにかけて苦笑をはじめるのです。「さて……第三階に出かけなければならない時が來てるんだが……迫りかかつてるんだが……もう迫つたんだ」と思ひはじめ、思ひ、思ひつめ、そして締切りに追ひつめられる頃に、柱のあなたは苦笑していらつしやるのです。

アントン・パヴロキッチ。ここにあなたの苦笑を持ちだすのは、なにも別な意味ではありません。いつもあなたを苦笑させなければならないほど、私は借部屋から街への飛躍を遲らすやつだといふ意味です。そしてこのぐづを、折があつたら編輯長樣に詫びたいと思つてゐます。

あなたの苦笑を持ちだしたもうひとつの譯は、寫眞とか繪とか映畫などいふものは、どうも、すこし、おばけのやうなものだといふことです。見る人、見る時によつて違ふおばけです。手近な例があなたの寫眞です。私が締切りに迫られない、あわてない時あなたは微笑してゐて、私があわてだすとあなたは苦笑をはじめるのです。それはまだいいとして、このあひだ三人の人間が（三人とも日本人で、三人とも同じほどな若さなのですけれど）おなじボオル・モオランを一册づつ持ち、おなじ部屋で、おなじやうなペエジどころを讀んでゐました。これは日本人らしくもなく浪漫的なはなしですけれど、アントン・パヴロキッチ！　日本人て、こんな人種なんです、一室に集つた三人が、三人ともボオル・モオランを持つてゐるのは嘘としか思へないほどの。そして、私にしても、なぜこの三人が、同時に、同處で、ボオル・モオランを讀んでたのか、原因は知りません。假想してみれば（假想なんて考への中味に自信のないやつのすることだといひますけれど）、まあ、この三人はボオル・モオランの譯者を訪れて歸つたばかりで、三人の一人がこの部屋のあるじで、それでこんな光景になつたのかと思へなくはありませんけれど、それにしては譯者が訪客の三人に三册の譯書を與へるかどうか大きい疑問ですし、それに、ボオル・モオランばやりもこのごろではとつくに下火になつてるやうですし……　……ともかく三人の日本人が同時に同處で三册のボオル・モオランのおなじやうなペエジどころを讀んでた浪漫的な愛い、稀なことがらの、ほんとの原因は私には解らないのです。ただ私は散步のみちすがら、その事實を見ました。アントン・パヴロキッチ！　ここでちよつと、ボオル・モオラン氏に話しかけさして下さい。短い言葉だけを、

ボオル・モオラン！

日本人といふものは、散步といへば脚でするものと決めてるやうです。脚のほかの散步が日本に來ると、またはたまに日本で創られると、それはもう散步ぢやなくなり、ねごとか、ひとりごとにされてしまひます。ですから、あなたにすこしお願ひがあるのです。散步には脚以外の散步のあることを、いろんな色あひの散步のあることを、あなたのテクニックで

次々日本人に教へていただきたいのです。あなたのテクニックが、ここしばらく日本に向つて沈默してることを、私はすこし淋しく思つてゐます。その原因がフランスであなた自身の沈默にあるのか、日本で堀口大學氏の怠りにあるのか、またはフランスか日本かの、例のヂヤアナリズムにあるのか私には解りませんけれど、あなたのテクニックの沈默を私は淋しく思つてゐます。そして、散步は脚でするものと決めてる日本人には、あなたのテクニックが必要です。

で、アントン・チエホフ！　私は「脚でするのではない散步」のみちすがら、三人がボオル・モオランを讀んでる光景を見ました。そして歸りにまた三人の樣子を見ようと思ひながら、その部屋のそばを通りすぎました。

歸りに、アントン・パヴロヰッチ、私の言ひたいのは、この歸りにみた三人の變化です。Aはボオル・モオランを投げだし、ぶんぶんしてゐました。Bはペエヂを閉ぢ、あくびしてゐました。は、Cはボオル・モオランの上に屈みかかり、かなりたくさんのペエヂを讀み進んでゐました。ですから（ここで私は話を戾したいのです）ひとつのボオル・モオランの小說は、三人に三つの變化をはたらきかけるおばけです。あなたの一枚の寫眞が、二つの時二つの表情で私に向ふのとおなじおばけです。

おばけといへば、アントン、もうひとつだけペテイ・アアマンがおばけになつた話を書かして下さい。あなたに苦笑されつひでに、私のペンは漫想家に許されただけの散步はしてみたいのです。失戀を喰べて生きてる男がありました。アントン・チエホフ！　こんな種類の男はあなたの小說のなかに幾つでもころがつてる男で、あなたは飽きていらつしやるかも知れませんけれど、すこしのあひだ許して下さい。彼は額のにきびを氣にしいしい、次から次と失戀のための戀をしなければ生きて行けなかつたさうです。幾人目かの女に失戀させてもらつた夕方、彼は「アスフアルト」を見、ペテイ・アアマンの幕に映つた最初、彼はもう彼女に戀をしました。「何と引きしまつた、すばらしい口だ」。そして「アスフアルト」が消えると同時に彼は失戀してゐました。一日に二つの失戀をさせてもらつたこの男は消えてしまつたペテイをまだ忘れないで失戀させてもらつてるさうです。

一方おなじ晩に、さつきの夕方彼に失戀させてやつた女が、おなじ館で「アスフアルト」を見てゐました。といふのは、彼女はまた男に失戀させてやるのを生きがひにしてる女で、夕方男にひどい失戀をくれてやつたのを男がどうやら嬉しさうに受けたことが、彼女には意外で呆氣なく、もの足りなかつたのです。それで彼女はもいちど彼にほんとの深刻な失戀をくれてやるには、もいちど彼を取りもどす必要がありました。それで男に一分だけ遲れてその館に這入り男が頸を左に廻しさへすれば二間と離れないところに彼女自身の橫顏のある、こんな位置に坐つたのです。しかし男は一度も頸を左に向けず、彼の見とれてるのはただペテイ・アアマンだけ。こんな結果を女はもらひました。それで女は「アスフアルト」を十五分間だけ見て館を出、ペテイについてはこんな言葉を吐きました「何と

だらしのない脣だ、砂糖漬め」
　ペテイ・アアマンの口に對する二人の言葉のどつちが正しいか、ともかくペテイもおばけです。ポオル・モオランとお同じおばけですアントン・パヴロヰッチ、
　話が變な方にそれてしまひましたけれど、あなたの寫眞やポオル・モオランの小說や映畫などいふものが、人々により、時々によつておばけである話はこれで終りました。私はこの「感じる對象としての映畫はおばけだ」といふことを讀者に忘れてほしくないのです。このおばけの原理に就いては、それを裏から說いた「畫面への漫想家の心理」といふ項を最初に序文のつもりで私は設けました。畫面への科學者ならぬ漫想家の受持つ限界は、畫面を、もう出來てしまつてる一つの世界として扱ふもので、そのなりたち（監督、撮影技術等の方面）には無關心でただに役者の演技と體軀についてゆく心理だといふことを規定しました。アントン・パヴロヰッチ！　あなたに手紙を書いてゐますと、あなたが生きていらつしやつた頃の客間のお客さまのやうに、私もいろんなことをおはなししたくなります。けれど此處はアントン・チエホフの客間ぢやなく、儚い映畫漫想の紙の上ですから、殘りの理屈はまたの折に讓りませう。でなくてさへ私はポオル・モオランなどを持ちだして、映畫漫想を文藝漫想のやうにしてしまひました。心ある讀者は澁面作つて居られると思ひます。けれど心ある讀者よ、私の映畫感は私の文藝感の一分流で、私は決して專門映畫人ではありません、決して。これは私の馱文の立證するとほりです。とまれアントン・チエホフ！　映畫は大きいおばけです、批評家と漫想家の間には大きい溝を持つた大きいおばけです。そして「映畫漫想」なる馱文を通じて私のしなければならないことは、畫面の科學者的批評ぢやなく漫想家的彷徨です。この場合の私の彷徨心は、武藏野館の三階で聽く德川夢聲の聲と、ラヂオのそれと、座談のそれとの色わけをしてみたかつたり、獨逸映畫の癖を探したり、發聲映畫の無聲版の退屈さを考へたり、「オルガ・チエホフ孃」の夫アントン・チエホフに手紙を書いてみたかつたり、總じてこんな非科學の限りを盡してみたいのです。
　そして私は、この手紙の書きだしに申しあげたやうに、いつも月の終りから次の月はじめにかけて大いそぎで一度か二度街に出かけ、武藏野館の三階その他に坐り、いつも稿の末尾にくつつけるならはしになつてる「時のもの」の項の材料を拾つてくるのですけれど、さて、アントン・パヴロヰッチ！　私はこの項のためにもやはり漫想家の態度に終始して、役者の體軀と演技を主題にした考へを書きたいのです。此處でも私は非科學をはたらいてみたいのです。これが映畫漫想に於ける私の領土です。
　アントン・パヴロヰッチ、
　この回で私があなたに手紙を書かうと思つたのは、あながち以上のやうな漫想家の限界をならべるためではありませんでした。私はあなたの晩年にチエホフ夫人だつたオリガ・クニッペル・チエホフのことを書いてみたかつたのです。といつて私は夫人のことを委しく調べたわけではありませんし、夫人の出演映畫とても「ムウラン・ルウジユ」ひとつを見たに過ぎません。ただこのあひだ、夜、時間

殺しに日本版のあなたの全集を次から次いぢつてゐたら、その一册に「チエホフ夫妻」とした寫眞がありましたので（この寫眞はあなたの他の寫眞とおなじに私の舊知己なのです）もう心のなかで消えかかつてるおぼろな「ムウラン・ルウジユ」の記憶をたどり、クニツペル夫人に對してなにか書いてみたいと思つたのです。しかしクニツペル夫人に對する私の知識は、日本で出版されてる二つのチエホフ書簡集、とフランスで作られた映畫「ムウラン・ルウジユ」だけ。こんな貧弱なのです。ただ私の想像し得るのは、あなたの生前モスクワ藝術座のプリマドンナだつたといふ夫人が、あなたの死後（或はロシアの革命當時他の藝術家たちがみな國外に亡命したやうに）歐洲に渡り、映畫界に身を投じたのか知らといふことだけです。とまれチエホフ夫人は、日本の映畫プログラムの一枚に「オルガ・チエホフ孃」といふ可愛い呼びかたをされてゐました。そしてこの呼びかたは、寫眞「チエホフ夫妻」にみる夫人の可愛らしさに適した呼びかただと思ふのです。あなたの肩に頤を載せ、前齒を出して笑つたチエホフ夫人は、まつたく可愛い「オルガ・チエホフ孃」です。この寫眞の夫人はさう若いとも思へませんし、さう美しくもないにも拘らず、どつか無邪氣な可愛らしさが漂つてゐます。これはボオズの可愛らしさとも言へるでせう。けれど、飾り氣のない時代のついた髮の結ひかたや、眼のあたりにも……見て行けば何處にも可愛らしさが漂つてゐるのです。それで私は、チエホフ夫人はたましひの可愛らしさを持つ人だと決めてしまひました。けれどこれはたぶん私の獨斷や誤りではないやうです。結婚前、まだあなたがオリガ・クニツペルから「うちの（モスクワ藝術座の）作者」と呼ばれてゐた頃の手紙に「御機嫌よう、懷しき女優様！」「優しい女優様！」とあなたは呼びかけ、「では懷しき名女優様、皆さんの御健康を祈ります。私は貴方に戀ひ焦れて居ました」「貴方の小さなお手を接吻します」「では貴方の小さなおててを接吻しますよ、そして何時までも貴方の變らない僕です」などと結んで居られる言葉は、オリガ・クニツペルをまつたくチエホフ型の可愛い女にしてしまふのです。

前にも申しあげたとほり「ムウラン・ルウジユ」の影はかなり薄れてゐますので、細かいことは書けませんけれど、アントン・パヴロヰツチ！　あなたの夫人はひどく太つてしまはれました！「チエホフ夫妻」の二倍くらゐに！　あなたが墓石の下で「ムウラン・ルウジユ」の夫人についてお考へになるのは（あなたの小說のユウモラスな手法でお考へになるのは）たぶん次のやうな事だと思ひます。

「どうも、家人はしばらく見ないうちにひどく太つたものだ。フランスのハムを食べすぎたのかも知れない。小さいおてても脂肪過多症に陷つてゐる。何とか處方を考へてやらなくては。殊に頸のまわりにはハムが詰まりすぎたやうだ。どう見てもあれは猪頸だ。どうも家人はひどく太つたものだ」

「ムウラン・ルウジユ」の記憶は、何といつても薄れてしまひました。レヴユウ映畫といふものは眼に美しく記憶に短いものかも知れません。夫人の演技については次に新しいものが出たときすぐ書き留めておきたいと思ひます。それを待ち、それをお約束して。

應接室

英國婦人の活動諸相

宮嶋新三郎

輝ける一九三〇年の婦人！

この呼名にあたひする者は一人英國の婦人あるのみだと思ふ。彼等こそは、今や長年もとめてゐた男子と平等の婦人參政權をかちえてあらゆる活動の分野で男子と平等の機會、報酬、責任を分持つ時機に達したのである。もつともこの樣な婦人參政權を獲得するまでには長い年月と幾多の先覺婦人の、いたましくも華々しい努力と犧牲的精神とがあつたのだ。

メリー・ウオールストン・クラフト女史をはじめ、サンダースン女史パンカースト夫人フオーセット夫人等なくしては到底今日のフラッパーボートの實現は期せられなかつたと云つてよい。英國の婦人大衆はそれを長く記憶にとゞめておく爲でもあらうか、パンカースト婦人の銅像をロンドンの議事堂に近いビクトリア・タワー・ガードンズにたてゝその除幕式を今年の三月六日に華々しく行つた。その除幕の任にあたつたのは婦人參政權を通過させた前首相ボールドウインであつたと云ふ。

昨年三月三十日の總選擧には、十四名の婦人代議士が議會におくられ、しかもその中の九人までが勞働黨から出てゐる。その後間もなく勞働黨内閣には、婦人勞働運動の有力者マーガレット・ボンドフイルドが勞働大臣の位置を占めスーザン・ローレンスが保健大臣の秘書にあげられてゐる。婦人の政界に於ける勢力はます〳〵擴大され、彼等の運動では近い將來に貴族院にも議席を占めると云ふ事が重要な條項の一つになつてゐる。

尚彼等の今後の運動方向をみると、

一　すでに大學其他の學校機關を通じて多くの婦人が活動してゐるが更に重要な地位を占める事

二　婦人の科學者も少くないが女子なるが故により訓練のない若い男より下の地位にあるからこれを平等にする事

三　醫學法律の方面でも女子なるが故の種々のハンデキヤツ

世界各國活動婦人の近状

プがつけられてゐるからそれを取除く事、であるらしい。

文藝に緣故のある二地方で、最近婦人が市長に選ばれた。一方ウオリック市長としてのウオリック伯爵夫人であり、他方はチエルシー――カーライルを始めスヰフト、スティール、スモーレット、ターナー、ロセッテイ、フイスラー、リー・ハント等と緣故のあつた――の市長としてのフイリップス夫人である。フイリップス夫人は特にチエルシー――勞働婦人のためにはやくから活動してゐたので知られてゐるだけに今後のこの方面の女史の活動は多いに期待されてゐる。

勞働大臣としてのボンドフイルド女史の活動の目覺しい事は今更云ふまでもないが昨年の總選擧で當選した婦人代議士（勞働黨）ジエニー・リーは今年わづかに二十五歳で議員中最年少者であるにもかゝはらず、昨年の議會の處女演說ではその辯舌の爽かさと理論の明晰なる點、加ふるに情熱とをもつて議會に大暴風をまきおこしたと云はれてゐる。リー孃はアソール女史に次いで、スコットランドから二番目の婦人代議士として出たものである。炭坑夫の娘として生れ、後エヂンバラ大學に入つて、文學士C法學士の稱號を得、卒業後は教育事業に從事し、かねて勞働運動にも參加し、獨立勞働黨の年次大會では雄辯家としてその名をひゞかしてゐた。炭坑地方の實狀に關する知識と、その地方の勞働者の生活を向上させやうとする熱心な努力とが炭坑夫や勞働大衆からの一般的な支持を得たのであらう。リー孃は、婦人代議士中最も力強い一人になるだらうと期待されてゐる。


ジエニー・リー

フオーセット夫人及びパンカースト夫人が亡くなりそして二十一歳のフラッパーボートを通過した今日では婦人運動として特にみるべきものはなくなつてきた。卽ち男子を對象としての婦人運動なるものは一段落がついたと見てもよいのである。現在又はこれからの婦人運動は階級的立場から男子と共に手をとつてすゝみつゝありすゝんで行くのではないかと思はれる。もつとも先にのべたやうな職業的方面その他ではまだ男子を對象としていくものではあるが――例へば失業問題の如きは婦人運動にあつては對男子の問題であると同時に對

世界各國婦人活動の近状

階級的な問題でもある。あらゆる機會において婦人は男子のために職をうばはれる事をこばむと同時に、男子をもふくめたすべての失業問題の解決にも進んで行く責任がある。この事について最近極めて興味ある事件が婦人運動の間にひきおこされた。失業者救濟委員會の會長ジエー・エッチ・トーマスが鐵道從業員のある會合で大體次のやうな意味の演説をした。

「一體職業婦人の幾人が眞に必要にせまられて勞働してゐる人だらうか？　殆ど全部はお化粧代かせぎのために働いてゐるのではないか？　そしてさう云ふ事は本當に職を得たい人のための邪魔であり又實に不公平きはまる事だ。と云ふ意味の事を述べて、暗に失業者救濟の一方法としてお化粧代かせぎの職業婦人の排斥をといたのである。これに對して婦人運動にたづさわつてゐる多くの者は一國の責任ある者が出鱈目を云ふにも程がある。男が職業について金を得た場合その金を何に使ふかと云ふ事が問はれないのに、女の場合に限つてそれを問ふ必要はどこにある？　男の失業者が出るのは女が職業につくやうになつたからでは決してない。いやしくも失業者救濟委員會長ともあらう者がこんな冗談出鱈目に等しい事を云ふ事があるかと抗議した。尚その結果であるかどうかは知らないが婦人運動者達は女なるが故にの特別保護條令等は一切廢止してもらひたいと云つて、ある會合では

一　炭坑における婦人勞働者の地下勞働の禁止をとく事

二　婦人工場勞働者の夜業禁止を廢する事

三　婦人の運搬能力に對する重量上の制限をとる事

四　婦人勞働者の産後の勞働制限を廢止する事

の四箇條を決議さへした。それはとにかくとして、今後の婦人運動はいろんな方向で無産階級の解放運動と共に手をとつて進んで行く事だけはたしかである。英國においていやしくも進んだ婦人と云はれるやうな者はことごとく勞働黨の支持者であると云つてもよい。昨年の總選擧で勞働黨の壓倒的勝利をかちえたのも實にフラッパーボートのおかげだとさへ云はれてゐる程である。又婦人運動のために働き通してきたアスター夫人の如きはその所屬こそ保守黨であるが夫人の抱いてゐる見界は全無産階級文化の建設と云ふ點に存する。私の滯英中（三四年前）夫人は文壇の大家で諧謔家であるチエスタートンを向ふにまはして婦人に男子と同等の參政權を與ふべきや否やを公開の席で討論した事がある。無論女史は賛成者でありチエスタートンは反對者である。例のバーナード・ショウがチエアマンとして出ると云ふのですばらしい人氣の討論會であつた。私は時刻をすぎたので入場し得ず宿にかへつてラヂオできいたがその時のアスター夫人の云ふところは全く無産大衆婦人のための主張その物に他ならなかつた。

今日では英國文壇においても多くの婦人が男子と同様にもしくはそれ以上に華々しい活動をしてゐる。しかもその多くが戰

世界各國活動婦人の近狀

なる玩具の創作に沒頭するのではなく無產階級の爲とか、無產婦人のためと云ふやうな大きな目標をたてゝ、活動してゐるのである。例へばローズ・マクオーレーにしても、レベッカ・ウエストにしても、バージニア、ウールフにしてもクレメンス、デーニスにしても彼等の視野は傳統にとらはれた男性作家のそれよりははるかに廣く、社會の前面に擴がり殊にその下積みになつてゐる下層階級又は下層婦人のあられもない慘苦に同情の淚をそゝいで、かゝる社會狀態を改革しやうと云ふ情熱にもえてゐる。かつて英國の中堅作家セン・ジョン・アービンに會つた時彼は歐洲大戰の文藝に及ぼした影響の一つとして有爲な女性作家の多くが輩出した事をあげられた。ウールフ・ウエスト・デーン・マクオーレー等の作品は形式においても現在多くの男性作家のそれよりは、はるかに生彩あり活氣を呈し、たへず現在の英國文壇で問題の中心となつてゐる。これは直接婦人開放の問題とは關係がないが現代文明が生んだ性格破產的な女性——法律や道德ではみとめられない——さう云つた女性に關する問題の解決に資するのを目的として小說をかいた女流作家もゐる。「淋しさの井戸」"The well of Loneliness" この作者ラドクリフ・ホール女史がそれである。女史はこの作品で所謂性格破產者、男女兩性を具有してゐる性格の持主をとらへ來つて、その實生活を赤裸々にえがき世間からは不道德者扱ひにされて行く一女性のやるせない淋しさをゑがいて、發賣禁止となつた。しかし女史がかゝる變態的な女性もこの世に正しい存在權を主張すべきである事を暗示してゐるのは甚だ意義ある事だと思ふ。しかもかゝる仕事は到底男性作家には出來ない事で女流作家をまつて、はじめてなし得るのである。

輝ける一九三〇年の婦人！　それは全く英國現代の婦人にあてはめられるべき名だ。全部が全部さうだと云ふわけでは決してない。ブルジョアの環境否貴族の傳統にすらまだ引きづられ、蔽はれてゐる無自覺な婦人も又實に多いのである。劇場と云ふ劇場へ行けばさう云つた婦人がチョコレートをかじりながら、芝居をみるよりはむしろ自分の衣裳をみせやうとしてゐる。俗惡なアメリカニズムの惡趣味は先づかう云つた婦人を媒介として英國にひろまりつゝある。彼等は安價なセンチメンタリズムの家庭小說を電車の中でベッドの上でよみふけつて、安價な淚を流してゐる。彼等は自分にも、社會にも容易に目ざめさうでもない。だがしかし、輝ける一九三〇年の婦人！その光輝ある婦人の手によつて彼等も次第に目覺まされる事であらう。兩親の手からはなれて夫の手に移り、人形妻になつて朝に晝に夕に衣裳更へをして一生をおくるのが能でもあるまい。せめては『夫が希望峯にゐるので行きたかつた。飛行機で行つてみたいと思つたんです』と云つてロンドン、希望峯間の飛行行程一千八〇〇マイルの說明に代へたベーリー夫人の意氣込み、熱意位はすべての婦人がもつてもよいではないか。

實話・四篇

裸を賣る

堀川登女

その細い急な坂は初夏の爽やかな風を持つてゐた、兩側の屋敷の長い塀と塀から溢れ出た木々の綠葉が蒼い空に水の流れるやうな音を立てゝサラサラと鳴つた。坂を登り詰めると寺の多い町に出た、寺の門內の柵で朝顏の蔓が柔い觸手を太陽に向けて伸しながら絡まりついてゐる。ホッと息を吐いた弓は白い生毛を水銀のやうに光らした薄い綠の莖を見ながら小首を傾げた。

「此處から左へ行けば良かつたか知ら、それとも右だつたか知ら」

白い道に照り返す陽光が眼窩をキリキリ突刺して痛い、全身の疲勞を乘せた磨り減つた利久を鉛のやうに重く引擦りながら彼女は寺の前にある小さい線香屋へ入つた。外光に馴れた眼は一瞬間の闇を感じたがやがてその闇の中に赤い紙を卷いた線香と皺だらけの婆さんの顏がぼんやり浮んで來た。

「一寸お伺ひしますがこの近所に宮田さんてお宅ございませんでせうか」

空腹と疲勞で粘つた唾が糊のやうに喰つ着けた上下の唇はカラカラに干乾びて動かす度に痛かつた。

「宮田？　御商賣は——」

「モデル——モデルを紹介してる家なんですけど——」

云ひながら生え際に撫でた手にねつとり汗が着いた。

芳箋

三週年紀念を迎へるに當つて、有形無形に御援助下すつた各方面の諸氏に、女人藝術が歩んで來た道についての御批評と、今後の進展に對する御意見をお願ひしました。お忙しいところわざ〳〵御返事下さいました方々に厚くお禮申上げます。（編輯部）

ミス女人藝術のお誕生日に

松本恵子

永遠の女性　ミス女人藝術よ、貴女のお誕生を祝　たのは、わづか三年前でした。

それだのに今日私達の前に立つ貴女の姿はまア、何たる驚異でせう！

貴女はこんなにも美しく成長し

貴女はこんなにも健かに成長し

そして何も多くの未來をもつてゐる！

貴女はこの三年間わき目も振らずスパイクに固めた足を强く大地に踏み、絕えず新女性のトップを切つてきた。

貴女は決して勞れないでせう、けれども時には綠の樹蔭に足を停め、靜かにあの夕燒の空を眺

「モデル？」

「あの若い娘さんや畫家さんが澤山集る」

「あゝその家なら一軒置いた西隣だよ」

婆さんは下顎をひつしやくつて答へた。その言葉の餘韻には明に嘲笑が含まれてゐた、弓は頭を垂れて店を出た。

――モデル紹介業宮田幾太郎――

薄れかゝつた墨跡のある看板が掛つた小さい家を見た弓は一寸意外だつた。モデル――この飛び離れた職業の持つ特異さは彼女に明るい洋風の建物を想像させてゐたから。虫が食つて輕石のやうになつてゐる敷居を跨いだ弓は急に汚い下駄と埃臭い褪せたメリンスの裾が氣になり出した。

「御免下さい」

聲に應じて小さい鈴音がチロチロ聞えると艶々しい毛並をした三毛猫が柔和な眼付で出て來た。それに續いて若さの名殘を肥り肉の胸に膨らした妻君が現れた。

「あの――私モデルにお世話して戴き度くて參りましたけど――」裸になる商賣の羞恥が彼女を眞赤にさせた。

「えゝそりやいくらでもお世話しますよ、この職業は身體さへ良かつたら誰にでも出來ることなんですから」

弓は生活の爲に萎れた青春のやうな扁平な胸が呪はしくなつた。

「裸體だと半日――三時間と定まつてますが――一圓廿錢、着衣だと八十錢、午前午後普通二回ですが忙しい人になると三回も四回もやつてます。仕事は裸になるのが辛いけれどたゞ畫家や彫刻家の云ふ通りのポーズをしてゐればいゝから樂です」

――之が有名なお菊さんだな――

モデルの少なかつた一昔、いゝ身體で美術家仲間に騷れたと云ふ細君は陶器のやうに滑な頬をしてゐた、大分落ち着きを取戻した弓は猫の背を撫でる白い指を見て思つた。

「幾ら閑でも生活費位充分でせうか、それに私こんなに痩せてゝも大丈夫でせうか知ら」

「えゝ一人位は充分やつて行けますとも、餘りますよ、それに今から製作期でモデルの書入時ですからね、適度に肥つてればいゝんですが痩せてゝも均整さへ取れてゐれば構ひませんよ。もしやる位だつたら裸體ですね、着衣は收入が少いし又滅多に無いので始終遊んでゐなくちあなりませんからね、兎も角今度の日曜日に來て御覧なさい、日曜日毎に集ることになつてます」

雜念にこんがらがつた頭を抱えて弓は途初

めませんか、あの七色の雲が消え七つの星が輝くまで夕靄の中に立つて瞑想に耽りませんか。烈日を浴びて立つ貴女の姿は勇ましい。

斯くも大膽な貴女の露はな姿に多くの男性は好奇の眼を瞬り、そのオレンヂ色の肌に蠱惑されるでせう。

だが貴女のその健康な素肌を、あの青白い月光のヴエールに包むだなら女性をさへも恍惚とさせるやうな、神秘的な美を現はすでせう。

永遠の女性、ミス女人藝術よ、寶石のやうに多くの面をおもちなさい、その一つ一つの面が光を映す時、貴女の全體が燦爛と輝くでせう。

歳月が貴女の面に多くの角度を刻みつけ、貴女をよきダイヤモンドとするように。ダイヤモンドは女性の裝飾品です、そして堅いガラスを切る實用品です。

千葉 [illegible]

毎度雜誌を頂戴して讀んで居ります、記事の配列、内容の撰擇それぞれに隨分苦心してゐられる事を陰ながら推察されます。そして御誌のやうな雜誌の成立としてはどうもこれ以上、仕方がなから

橋に通じた坂に出た、上野の森に五重の塔が見える、綠の樹木の上に浮き上つた塔の朱色が疲れた彼女の眼に新鮮な刺戟を投げた。

——公園を拔けて歸らう——

弓は下りかけた踵を廻らした。

——毎日二回働いたら一週間少くとも十五圓、月六十圓を越えるとするとお父様をお醫者様に見せる事も出來る、それに滋養物をふんだんに食べたらあの痰に混る嫌な血は少しづゝ影を潜めてゆくだらう。

足下に立つ砂埃の中に描いた空想は直ぐ打消されてしまつた、裸になる——之がいけない程嫌に思はれた　羞恥を失つたあばずれの墮落を想像させたから。

——確りしてやればいゝのだ、贅澤云つて撰り好みなんか出來る場合ぢやない——

彼女は滅入る心をこんな呟きで支えた、そして空を見た、伸びた櫻の葉と葉の間から白銀色の輝きを増した六月の陽光が矢のやうに落ちて來た。

Mキネマ關東映畫配給所、廣小路のHビルの二階にあるこの事務所へ弓は通つてゐた。其處では辯士の臺本の原紙切りが重な仕事だつた。滑りの悪い鐵筆は空色の事務服で包んだ肩を石のやうに凝らしたが弓は出來るだけ居殘り仕事をして一錢でもより多く働かねばならなかつた。朝八時から五時迄、この規定の時間通り働いて與へられる四十圓は胸を病んでゐる父と彼女の生活を充すには余りに少な過ぎる金額だつたから。父親の咯痰には血が赤い絹糸の様に混つてゐた、時には白い痰壺を椿の花瓣の様などす黑い血で汚した。

——あの血を少しでも減らし度い——

併し彼女のこの念願は何時も生活に撥ね飛されてゐた。やつと食つて行くだけで生卵一つ買ふにも財布の底を憂欝な眼で覗かなければならなかつたのだ。それに半月前京都に居る本社長の死は社員整理を東京にも齎らした、仕事に充分馴れてゐなかつた弓は勿論その槍玉の悲惨な犧牲の一つになつた。

——新しい職業を見出すとしてもそれ迄をどうしやう——

醫者にかゝる事の出來ない病人は氣休めの効果しかない賣藥を呑んでゐた、その賣藥すらも絶やさねばならなくなる、解雇手當は一ケ月分の給料にも足りない。その日の歸途弓は明日からの生活を恐怖に似た氣持で考へ續けた。

「歸つたか」

うと思ひます、と申してこれで完全だといふのではなく、むしろ正直に見て、満して頂きたい缺點は相應にあるのですが、それは一般的な雜誌としての水準からの事で「女人藝術」をどこまでそれに近づけるかゞ問題です。それから「女人藝術」が各人各說の主義を採つてゐるのが一つの特長でありながら、それがために漠然として統一がなくなるといふやうなヂレンマ其の他、隨分いろんな矛盾で苦しんでゐられるやうに推察され御同情します。

葉山　嘉樹

新鮮ないゝ雜誌だと敬服してゐます、益々御發展の程切望に堪えません。

下村　海南

數多い婦人雜誌の中でも尖端を走つて行くやうな感じで、毎號女人藝術をおもしろく拜見してゐます。此上婦人サロンなどに散見するようにゴシップ式樣のものを一層澤山取り入れたらばなどと思ひます。

堺　眞柄

新潮社でも改造社でも婦人の雜誌が持ちこたへられないのに、獨り女人藝術が大努石として三周年を迎へることゝ又その間一度も休

熱つぽい體臭が漲つた部屋に何時もの通り仰臥した父は蒼白い顏を天井に向けた儘云つた。

「お父さん今日はね――今日は氣分どうなの」

云ひ度い事は喉につかえて出なかつた。

「相變らずさ」

視線を心持枕元の痰壺に動かして、かう云つた父の語調には絕望的な自棄が蒼白い水のやうに流れてゐた。

「もう上野はすつかり青葉になつてしまつただらうなあ、とう／＼今年も櫻の花を見ずに濟んだか」

弓は父の嘆きを上の空で聞き流して考へてゐた。

――云はうか――矢張切迫詰る迄云はないでおかう――

翌朝から平常通りに家を出た彼女は職業紹介所へ行つた、周旋屋へも行つた、切り拔いた新聞廣告を持つて市中の埃の中を馳け廻つた、が結局與へられたものは電車賃の浪費と身體の溶けるやうな疲勞だけだつた。カフエーの女給だつたら――との言葉は何處でも聞かされたが不景氣と失業者の數は弓の望む職業をおいそれと與へはしない。殘り少くなつた金、第一父の藥が罎の目盛を下る度に苦悶と焦燥が全身を切り苛んだ。

――女給になる――

かう云つたら頑固な父は蒼白く瘦せた身體を慫りに顫はして叫ぶに違ひない。

「酒の給仕、しかも夜遲く迄金を目當てに男に甘える、そんな商賣は生娘のする事ぢやないぞ」

例へ飢餓しても離さないと云ふ祖先傳來の白鞘の刀を引き拔いてその氷のやうな刄に昔の生活を映しては泣き泣く事によつて慰められる父だつた。着てゐる以外の着物は勿論雨傘すらも金に代へてしまつた日弓に思ひ切つて父に云つた。

私もうM映畫舘になつたの。二週間も前に――」

「フーンさうか――」

全身の生氣を一時に吹き飛すやうな溜息を吐いた父親は落膽を隱すやうに寂しく慫つた。

「だつたら何故直ぐ云はないんだ、馬鹿！」

嗚咽つた父の小鼻はびく／＼顫えて瘦せた頰を糸のやうな淚が流れた。娘は痴呆のやうな眼でそれを眺めてゐた。

――父を殺して自分も死なう、どうせ癒らない病氣だし、お父さんだつて死んだ方が幸

刊もなく定期々々にキチンと出して行かれる編輯上の手腕と經營上の强固さを心强く思ひます。

次は着物道樂が、あれもいや、これも飽いたといふ所で結局澁い紬を着るといふやうな工合に、雜誌自身社會主義的傾向が强いのに何かゼイタクなおもちやの樣な感じを受けるのは私一人でせうか。

女人と云ふ言葉が大體その內容その傾向にそぐはない樣に思ひますが、それも三周年にもなれば大分なじんでもきたやうです。

戸川靜子

お返事がおくれましたが、六月號について少し申し上げてみたいと存じます。

目次を一通り見て感じる事は、女人藝術が一定の方向にむいてきたと云ふ事です，論文にしろ、職場よりにしろ附錄としての女人大衆にしろ充分それを示してゐます大變に有難い事だと思ひます。かうなるのが眞實なのだとも思ひます。もう一歩進んでほしいと同時に發刊當時かゝげてゐた何でもござれの看板はさつぱりと下してほしいと思ふのです。勝手な文句を吐いたやうですけれど、讀者の大部（現在の）はやつぱりさう力（りき）む氣持を持つてゐるだらうと信じて

なのかも知れない――

新聞の三面記事には有ふれた親子心中の情景が彼女の心を締め付けた。

「俺さへ死んだらなあ、かう思ひながら死ねない、病氣は癒らなくともゆつくりした生活が何時か來さうな氣がする――この執着が俺を死なせないのだ、昔のやうな生活でなくてもせめて樂に食つて行ける日が――」

父の言葉は弓の肺腑を鋭いメスのやうに抉つた。親殺し――恐しい罪惡だ。彼女は道德的な觀念の叱責に愕然とした。士族を誇りにした小工場主、破產、上京、貧乏、貧乏　病氣、どん底。弓は父の不具な軌道を干乾びた眼で振り返つた、苦しまずに食つて行ける日――この無形の希望は彼女自身も無意識に持つてゐるのだ、そして凡ゆる貧しい人々が生きやう生きようと喘へぎながら生活苦と鬪つてゐるのだ、生きやうとする本能にさへ反旗を翻す事を强ひる生活苦と――。與へられる職が無くても求め探さなければならない。弓は最後の綱として古い婦人雜誌の微臭いページからモデルと云ふ商賣を拾ひ出した。

この寺町には不調和な色彩を華な着物の兩袖から撒き散らしながら弓の前方を娘達が步いてゐた。その娘達は皆宮田の文字の薄れた看板の蔭に吸ひ込まれて行つた、彼女が行き着いた時は男女の靴と下駄が狹い土間一杯に並んで柄の太い洋傘と金具を光らしたステッキが何本となく壁に立て掛けられてあつた。初めての彼女はまごまごしながら下駄の脫場所を探した。

「外へ脫いどいたつて大丈夫だよ、サッサと上つて坐つて吳れ給へ」

中から大きな男の聲がした。實際何處へ脫いだつて大丈夫な下駄だつた、彼女は脫いだ下駄を目立たないやうにソッと片寄せて座敷へ上つた、ぶつ通しにした三疊と六疊には毛布が敷かれてそれを等分に劃つた男女が列を造つて向ひ合つてゐた。お河童にワンピース、美しいマダムのやうな女は古參であらうか、スペインピンの石をキラキラ頭に光らして絹扇の桃色の房で輕く胸元を煽いでゐる、おきやんな女學生型、柔順しい桃割姿、矢張初めての人らしい木綿の單衣を着て伏せた睫毛の影を動かさない女、赤いボヘミアンネクタイ、黑いルパシカ、油繪具に汚れたブルーズ大家らしい肥滿の紳士、美術家達は長髮を蒼白い指に絞ませて話し合つた。

「おい君買つたか」

居ります。

中河　幹子

マジメでムキな雜誌になつた事を祝してゐます。然し興味的な記事が全くないので面白くありません。左傾も中途半途の感じで、中間派的に思はれますが如何でせう。現代において中間派的な存在といふものは、兩方から挾擊せられる位置にあるものと存ぜられますが如何でせう。

三上於菟吉

僕としては余り內輪になるが每月千圓上から數百圓の缺損を埋めて來た自分の根氣に感心し、同時に諸夫人諸孃が、內外ともに報酬にもならぬ仕事のためにこれ又骨惜しみをせぬのに感心してゐる。僕はもつと本誌が啓蒙的意義を發揮するか（思想的には）それとももつと洗練された內容で突進むかを望む。無熱情な仕事ならつゞけてゆく必要はないと思ふ。

井伏　鱒二

拜復創刊當時と最近とは編輯傾向が變つて來てゐると拜察致します。三年もつゞいて、よくせきの御努力だと敬伏いたします。

小寺　菊子

此頃の新綠のやうに焱やかで生々してゐて私たち大分古風になり



「まだだ　どうも良いのが無くてね、稀にあると思つたら賣約濟みさ」
　之等はモデル市場の風景に相應しい取引の言葉だ。
「警察つて實際うるさいんですよ、看板はどうしても掛けとかなくちや不可ないつてんで、うるさいのは又近所がそれ以上で此處へ集る女は皆淫賣だなんて蔭口を聞いてますからね」
　背の高いチヤツプリン髯を生やした主人が若い畫家を捉えて話してゐる。
「まあ私又女子美術よ、嫌んになつちやうわ」
　取引を濟ました洋裝の若い娘は口を尖らした。道樂程度の繪を描く同じ年頃の娘の前で卑下と羞恥を嚙み殺して生活の爲めに裸になる。之は誰でもが嫌になる事實に違ひない。
「贅澤云つてらあ、私なんぞこの前の週すつかり遊んぢやつて三度のおまんまも二度つてな慘さだつたんだよ」
　瘦せた首に白粉を鼠色に塗つた女が云ひ返した。
「君あいてる？」
「えゝ」
「ぢや來て呉んないか」
「裸ですの」
「無論」
「だつたら私」
「さう云はずに來て呉れよね」
　が娘は十八の心のやうな花簪を赤く咲かした頭を横に振つてゐた、頼んでゐる絽羽織の中年の紳士は惜しさうに若い雌鹿のやうに柔軟な線で伸びた娘の脚を見た。
「君は――」
　桃色絹の扇の女は矢張靜に胸元を煽ぎながらかう云つたルバシカの男を奇麗な眼で見上げた。
「駄目、三回も行つてんだもの」
　優越で全身を孔雀のやうに誇りかに膨らして女は答へた。忙しいこの言葉は身體がいゝつて事の代名詞なのだ。
　――お信さんは太平洋畫會だよ。間違はずに行つとくれ。この前みたいにすつぽらかしては駄目だよ」
　――お葉さんは午前はA先生の所がずつと續くんだつけね、午後はO畫伯、夜は川端畫塾の洋畫部、いゝかね――
「始めてと云ふのはお前さんかえ」
　忙しさうに美術家連とモデルの間を縫ひ廻つてゐた主人はかう云ひ ながら弓の 前に來た。馴れない室の重苦しい空氣の中で首垂れ

かけて來た者にとつて甚だ大きな刺戟です。我等の先輩時雨さんがかう云ふ時代的な大仕事をはじめられた事を全く一つの驚異をもつて見てゐます。柔か味といふやうなものは、かう云ふ新らしい仕事にはもう必要でないかも知れぬが、上の慾から云ふと、堅い中にも一味一寸輕く柔かい味はひを持たせて頂いたらどんなものだらうと思つてゐます。いかがや。

吉屋　信子

　おめでたうございます。
かゝる雜誌の三年續くことすでに時代の進步。更に將來の勇猛期すべし。

今井　邦子

　女人藝術の三週年の道をふりかへつてみますとずいぶん面白い雜誌だつだと云へます。
　はじめて一堂に當時の女流文筆者を集めて華々しく發行紀念會のやうなものをした事からはじめの步みはにぎやかでした。それから特色のあるいろ〳〵の座談會があり一問一答がありおい〳〵にモダンなジャズ的な雜誌になつたと云ふ評を受けました。それが轉じて現在のやうな女の雜誌にはめづらしい左傾的の雜誌となりました。私にはどこを引出してみてもおも

續けてゐた弓の兩肩は石のやうに固くなつて頭の芯が痛んだ。
「ぢや名前と現住所とを云つて與れ給へ、嘘で無しに本當のね」
モデルは皆僞名を使つてゐる——主人の言葉はこんな雜誌記事を弓に思ひ出させた、住所を書いてゐる主人の手許を見ながら彼女は突嗟に思ひ付いた出鱈目の名前を云つた。
「山川早苗」
「お父つさんは——」
「ありません」
又なんでもない嘘を云つてしまつた、身元を隱し度い氣持が知らず知らずの間に働いてゐたのだ。
「お母さんは——」
「美子」
涙がいがらつぽくこみ上げて來た。一生懸命眼を見張つたが膝の模樣がぼんやり霞んで溢れた涙が生溫く頬を濡らした。
——とう／＼人が淫賣と思ふやうな職業に迄なり下つたのだ、女でも人間でもない事をする人々と同一視せられる——生活に强さを奪れた弓はかう考へたからだ。
「僞名を使ふものが多くつて困るんですよ、急に行つて貰ひ度い所が出來て速達を出しても住所不明で返つて來たりしますからね」
こんな事を云つてゐた主人は彼女の涙を見て仰山に驚いた。
「おやお前さん泣いてんのかい、泣く位だつたらこんな所へはなから來ないがいゝや、世間ぢや何んと云つてもモデルつて商賣は藝術に身を捧げる立派な仕事だよ」
室內の全部の眼が彼女に集つた、殊に緣側で妻君を取り卷いて猫を撫でたり庭の夕顔の發育を褒めてゐた女達は薄い輕蔑と敵意を含んだ視線を彼女に投げた、純眞振つてやがる——女達の眼はみんなさう云つてるかのやうだつた。
「僕その人に賴み度いんだが——君裸體やれる？」
「えゝどちらでも——」
「ぢや來て與れ給へ、宮田さんに所を聞いて——午前八時から三時間——」
「ぢやお前さん明日から此處へ行くんだよ、四谷大番町の〇先生の家、醫大の裏だ。A先生と肩を並べる有名な彫刻家だよ、時間をきつちり行つて與れ　それから午後は此處へ行つたらどうだい、下高井戸のY畫伯、お弟子さんが描くのだけれどコスチユームでいゝさうだから——」

しろ味があります。その間に女人藝術社として、いろ／＼の仕事をしてゐる事は、心强い事です。特色ある女流作家を幾人も世に出してゐる事が第一の巧績と思ひます。

樺山　千代

最近一層個性が判然としてきた事をうれしく存じます。
新しい人達の作品御紹介に吝でないことをいつもながらたのもしく存じます。たゞ新進を印象づけるために一寸通讀して同じ名を見度いと思ひますけれどこれは私が毎號つゞけて雜誌を拜見出來なかつたせいかもしれません。顏ぶれ本意でなく作品本意である事は氣持がいゝ事に存じます。

伊藤金次郎

女人藝術の三週年——早いものですね。僕は每號非常に「興味」をもつて同誌に對してをります。それは近代女性の一部の人々の持つ神祕な胸奧の扉をうかゞひ得られるかのような氣がするからです、殊に執筆者の誰でもが、日本女性には珍らしく、ハッキリしたものゝ云ひ方が氣に入ります。さうして、多分に社會性を持つてをる事もまた關心外におくわけにはゆきません。女人藝術——と云ふ名に或ひは內容にぴつたりせぬほど、



道順を書いた紙片を貰つて外へ出た。重い額のほつれ毛を爽やかに風が撫でた、裸になる嫌さなんか考へてゐられないとしても父にはどう云つて置かう、この問題を抱えて弓は細い坂を下りた。

「F、帝展の審査員をやつてゐるF畫伯アトリエの挿話つてのを聞かしてやらうか。」

裸の弓が腰を掛けたモデル臺を取り巻いたO先生の弟子が四人。マドロスだつたと云ふ若禿のあるTが圓めた粘土で乳房を盛り上げながら云つた。

「挿話つてどんな事」

此處へ通ひ始めてから半月、裸になる羞恥をさ程にも意識しなくなつた弓は微笑しながら聞き返した。

「なんでも美貌で評判のお君さんてモデルが或日キアツと悲鳴を上げて裸のまゝ着物を抱えてアトリエから飛び出したんだとさ」

若い弟子達には興味のある話だつた、彼等は朗に笑ひ合つた。四角な窓が截り取つた庭の風景の中で紫陽花が大輪の憂欝を重さうに石に傾けてゐる、庭を隔てた先生のアトリエの窓で風鈴がチロチロと鳴つた。

「モデルさんの前でなんだけどこんな商賣は處女ではやれないな」

若いKが云つた。

「第一どう云ふ目的だらう」

「金さ、奇麗な着物が欲しいとか、あはよくば畫家の奥さんに納ろう位が關の山さ、なんしろ事務員ぢや月給が少ないし女給は嫌だしつてな事からね、稀には畫の勉強を働きながらやり度くてなる者もあるが矢張美術家の生活に近づいたと云ふだけで實際はなんにもならないから結局一緒さ」

弓はかう云つたTの言葉に心から呼び返し度くなつた。

——他の人は離れ離れに働いてるからどうか知らない、でも此處に處女が居ます、ハンカチのやうに眞白い貞操を持つた女が——そして奇麗な着物の爲めでもなく畫家の奥さん目當てにでもなく親子二人が食つて行けないから羞恥を着物と一緒にかなぐり捨てゝ裸になつた女があなた達の目前に——

「處女を賣物にしてる女をモデル臺に坐らせてよく見ると姙娠五ケ月だなんて全く笑ひ話さ、いくら口で隱しても崩れた身體の線は隱し切れないからね」

跛で皮肉屋のYが探るやうな視線を弓に投げた。帶を取つた、着物を脱いだ、そして素

社會性を、私は認めます。長谷川サンの包擁力の偉大である事を欺りなしに敬意を拂ふ。

山田清三郎

『女人藝術』は、いつも興味をもつて眺めてゐます『女人藝術』の中から動きつゝある時代の息吹きにかけられた新たな要素が次第に發展して行く姿はとりわけ注意をそゝります。これらの要素がやがて『女人藝術』の上に、いかなる變化を導いて行くか。私は深い關心を以てそれを觀て行きたいと思つてゐます。

前田河廣一郎

すこし六ケ敷いやうに感じますが如何でせう　なるべくわかりいゝ論文などが必要ぢやないのでせうか？そして本質的に大衆の物であるべき藝術を育てるやうに努力をするのが！

富野 つぎ

御誌の初期の、方針を語る座談會で素川さんが『なるべく多くの女性によまれたい』と云はれた尤もな意見を思ひ出しました。眞摯な女性の全線に亘つて益々御誌の伸びやかな御發展を祈ります。

若杉 鳥子

發刊當時と今日とは、宛ら別人の如く、女人藝術は面目を新らし



裸だ、素裸に八つの若い異性の眼、好奇と性的な興味の錯雜した男の視線をピシピシ皮鞭で毆られるやうに感じてモデル臺へよろけながら上つた最初の日が慘めに思ひ返される、身體が火のやうに火照つて何も見えなかつたつけ。腰を掛けて右の腕を頭に、左の腕を右肩に廻したポーズを廿分續けると五分休む、粘土を喰つ着けたり削つたり若い彫刻家の卵は製作に夢中になつてともすれば休みの時間が來たのにも氣が着かなかつた、そんな時彼女は痺れた腕の汗の出さうな痛さに堪えかねてソッと身じろぎした。

——お休み——

この聲を遠慮勝ちに促すやうに——一定の時間中不動の姿勢を續ける事は不馴れな弓に取つて體刑に似た苦痛だつた、殊に毎月週期的に起る病氣の時は男達の中にゐて人知れず苦勞した。弓は若い男の眼が恐しかつた、弟子達の眼からは時々青春の疼くやうな情熱が製作慾を押し退けて覗いてゐたから。

——獸のやうな眼——弓は慄然とした。

午後、玉川電車に乘つて下高井戸へ行つた。永福寺內にあるY畫伯の庭には白い百合が一杯咲いてゐた。その花の蒸せるやうな匂ひの中で弓は白いドレスを着て座つた。裸にならないでも濟む、彼女は之が何より嬉しかつた、眼下に閉けた青い田には漸く暑さを增した太陽が白銀色に輝いてゐた、風の吹く度に肥料の臭ひがした。食べるにはどうにか困らなさうだ、父は醫者に見せる事も出來た。

——或富家の雜務の手傳ひに——事情を話したら大變同情して呉れて日通ひでもいゝとの事、そしてお給料以外に余分なお金迄下さる——娘の優しい嘘を信じた父は快く藥を呑んだ、が長い間放つてあつた病氣は坂を下るトロッコのやうに死へ急轉してゐるのだ。

Y畫伯の庭の百合が白い花瓣を茶色に變へて一つ一つ萎みかけた頃、弓は生活を考へた。

——食つて行く、只之だけが生活だらうか、外に何かしなければならない事が澤山ありさうに思へる——

O先生の弟子達は秋の構成展を目的に、Y畫伯のお弟子さんのSは二科を目當てにそれぞれ彼女を粘土に造り、油繪具にした。彼等は美の前に拜跪してそれを生かすことに夢中だつた、自分の天分を盛つた藝術を世に誇る機會を掴まうと汗みどろになつてゐた。

午前も午後も當分續きさうだつたので日曜日のモデル市場で商品化した自分に卑下を感

くしてきました。

最初同紙に濃厚だつた、エロチシズム、文壇ゴシップ等々の夾雜物を排擊しつゝ質實な努力に進んで來た事を悅びとします。

倘幾多の急進的な女性を世に紹介され、常に正しき文化の役割も果されることを切望します。同時に、長谷川さんの健康と、同人諸氏の健鬪とを心からお祈りします。

鎌田敬四郎

此月は「女人藝術」の三週年をおむかへの由、皆様の御辛抱御努力の結果として慶祝申上げます、これを一般婦人雜誌として見る時にはいろ／＼の批評や注文も出ますが、それはする方の見當違ひで「女人藝術」は誌名の示すごとく女人の藝術の尖端を進まれる態度がよろしいと思ひます、私共は御誌に接する事によつて我國の女人の最もフレッシュな一面に觸れ得る事を常に有益に思つてゐるものであります。

龍膽寺 雄

女性が獨持な藝術文化を把握すべきだと云ふ見解は肯定出來るが女性そのものゝ本來が男性から切離して存在を意義づける事は不可能なのだから、女人藝術も尼寺や女子大學の寄宿舍みたいな、婚期

じなくとも良かつた、一軒について一圓づつ毎週毎に宮田へ收めなければならない。或土曜日弓はその金を持つて上野の森を通り過ぎてゐた、弓の前方から背の高い女が歩いて來た、よれよれになつた着物の裾さばきも元氣にやつて來たその女の顔は何處かで見た事があつた、色の黒い顔、鼻の側の大きな黒子、それが彼女の幼い記憶を掘り返した。

——道ちやんだ——

父の工場で働いてゐた女工の娘で秀才だつた小學校時代の親友だ。

「道ちやんぢやあない？」

「えゝ」

振り返つた女は不思議さうに弓の顔をヂッと見た、そして思ひ出したやうに胸をたゝいた。

「まあ孃さん」

「暫らくね」

「隨分」

白いベンチに腰を下ろした二人はお互の顔と服裝からお互の現在を朧氣に讀み合つた、生活の苦しい話が弓の口から堰を切つた水のやうに流れた。

「道ちやんは未だ結婚しないの」

「したんだけれど」

「別れたとでも云ふの」

「えゝ夫は監獄に居るのよ、市ヶ谷の—」

弓は驚いて道を見た、道の冷靜な横顔には寂しさを克服したある强さがあつた、監獄—弓はこの言葉に惡人？を聯想した。

「まあ」

女は弓の見張つた眼に靜な微笑を投げた。

「監獄へ行つても盜みをしたのでも人殺しでもないのよ、奪はれた人間の權利を返せ、勞働に對する正當な報酬を與へよ、虐げられてゐる勞働者はみんなかう云つて立ち上つた、夫もその鬪ひの先頭に立つて働いた一人だつたの」

蒼白い昂奮が道の瞳に渦巻いて樹木の蔭のアーク燈を映してキラキラ光つた。

「何時歸るの」

「二年後か三年か十年か、又一生歸らないかも知れない—」

道は社會に無智過ぎるこの女にかいつまんでイロハを敎えた、今の日本の勞働者は如何に苦しみ如何に鬪ひそして倒れてゐるかを—。

「私今日一寸急ぐので又——さやうなら」

木々の下で濃くなつた闇の中を去つて行く道の背で褪せたメリンスの帶が白い花のやう

の遲れた老令孃のヒステリイに終らない様、もつと僕らと打解けてほしいもんです。その方が魅力が深まる。

靑野　季吉

別にまとまつた感想はありませんが、女人藝術の發展にはつねづね慶賀してゐます。たゞ少し內容の選擇が粗雜ではないでせうか。それから女性しか書かないと云ふ基準はもう多少改更されてもよいのではないかと思ひます。

安成　二郎

もう三週年になりますか、早いものですね、創刊の頃から見ると實に盛んになりましたね、そして若い女人がずいぶん出ましたね、殊に批評家の澤山出たのにはおどろきます。世の中がこんな狀勢になつたのにもよるでせうが、この雜誌がさう云ふ女人の進出を促進させた力も多いでせう、やがてそれらの女人が口先だけでなく何かやり出したら恐ろしい事でせう、—だから今のところ、雜談は實に賑やかで立派です、そして私の愛讀するのは實話と詩です、編輯は女子もこんなに出來るかと思ふほど上手です。表紙は一月號六月號に賛成

山田やす子

に浮んでゐた。

——みんなが働いてみんなが苦しまずに食へる自由な社會の建設の爲に——

自身の一生なんか問題ぢやないとも云つた、弓は道の言葉の跡を辿つて考へた、血色に波立つた社會には無關心にあの美術家達は畫を描き彫刻を造る、生活の餘剩を藝術で消費して名聲を汗みどろになつて摑まうとする彼等は社會から遊離した泡のやうな存在だ、そしてその泡の中へ泳ぎ上つて餌を拾ふ魚、弓は自分がこんな風に思はれれだした、目になんだか薄い幕が掛つてゐるやうな氣がした、もつとはつきり知り度い、道はこの幕を取り除いて與れるに違ひない、さうしたら世の流れがはつきりと見えるだらう。

——さうだ——

彼女は撥ね飛されたやうに立ち上つて道の去つた方向に走り始めた。

——まだ停留所に居るかも知れない——

濃くなつた夜空に——仁——丹——廣告燈が眞赤な字を描いては消してゐる。

一九三〇、五、五、

脱出

——前出「地獄の反逆者」の續目をなすもの——

松村喬子

一

カチヤツ、ガチヤ……カチヤ、カチ、カチ、カ、

ひくい金屬性の錠前と鍵の合ふ音は、廣い臺所の薄暗い電燈の光りと、シンとした靜けさの中に空氣を震はせた。どんなに心を落ちつけようとしても、心の激動は兩手に傳はりいくら突張つてみても、ガタ／＼と震へる足であつた。

「どれ、貸してごらん、私あけてみるわ」

いら／＼とした小波の聲が、鍵を引つたくる樣にして、錠穴に鍵を持つて行つたが、やはり手がブル／＼震へるのをどうする事も出

拜復御誌の左翼的傾向濃厚となつたのは斷然讀書界をリードするもので敬服して居ります。近來はプロとブルとの同伴的傾向が斷然左翼勝利となつたやうで女人藝術の名を冠する御紙の使命はこの道しかありますまい。しかし經營者の經營苦はこれが地方の一般讀書子を吸收してくるにはまだ距離がありすぎますので困難なことと存じます。たゞ經營者長谷川女史の健鬪をまつのみです。

弘津千代

「日本橋」と「放浪記」を毎號殊に興深く拜讀いたして居ります。

大井さち子

まとまつたことの何一つ考へられさうにもないわたくし、こゝでも批評なんて出來さうにもありません。女性ばかりの團體がこんなにも長くそしてこのゝちもおそらくいつまでもといふことだけでもひとりぼつちのわたくしには一つの刺戟です。

堀江かど江

失禮のやうですけれども實は御誌をよく拜見して居りませんので——と云ふのはわざ／＼買つて讀むだけの余裕がないのでたゞ本屋の店頭でめくつてみる位のものですから私の批評は的はづれである

來なかつた。小波は亦、囁く様に私の耳元へ口を持つてきて早口に云つた。

「後ろを氣をつけて合圖をしてネ」

熱い息を感じながら、私は大きくうなづいてみせた。

ガチヤツ、カチヤ〱、

二人の耳には、痛い程それが響いた。口の中がまるで熱のある時の様にかわいた。

「チヨツト待ちなさい。私、かうしてゐるから」

私は咄嗟に湧いた考へから、すぐ手の屆く流し許の水道の栓を捻つた。

ヂヤアツー、と眞夜中の水量は勢よく飛び出してきた。

ガチヤツ、ガチヤ〱カチーン、

水の音に混つて、細い低い金屬性の音は止まつた。二人は何んとなくハツとした。

「とれたよ」

つい不用意の中に口走つて、小波は、クルリと錠前を後にして、兩方の廊下に目を走らせた。

「今度が大へんなんだ。」

と云つてから、もう一度注意深く左右の曲り角に目をやつて、硝子戸に手をかけた。私はもつと音を消す何かゞ見付かりはしないかと、周圍をすばやく見まわしてから。

「今、お茶碗を洗ふから待つてなさいネ」

洗つてザルに入れてあつた誰のだか解らない茶碗を五つ六つ洗槽の中に投げ入れた。

そして、ムチヤクチヤに茶碗を洗槽の中で廻した。

騒々しい音を立てゝ瀬戸物のふれ合ふ音と水の走り出る音とが縺れ合つてゐる中に、鈍重な硝子戸の時々キシる音がからみ合つた。閾の溝に入れてある眞鍮の細い棒が半分なくなつてゐるスベリの惡い重い戸は、ゴトリ、ゴトリと、中風の老人の様な音を立てた。臺所の隅に三疊だけ疊が敷てあつて、そこには炊事をする夫婦者が寐てゐる。今日も、更け(當直)の仲居が神棚の掃除を終へて、榊の枯れ葉を棄てに來る時分であつた。私達は、音をゴマ化す一方では、體中の神經を耳に集めて人の足音と、見張りをしてゐる川柳と高奴の合圖に注意した。

二寸、五寸、一尺、天の岩戸は、勇氣と決心と努力に依つて、オツ〱と、それでゐて心だけが、キビンに動いて、漸く開かれた。

「早く早く」

私が水道の栓をまはしきる方が早かつたので、小波の聲が急に大きく聞えた。その時は、

かもわかりません。

三ケ年も繼續されてゐるにも拘はらず御誌としての主張がどこにあるか私にはわかりません。たゞ毎月雜然とした多勢の顔ぶれを並べるだけでしたら大して意義のあることゝは思ひません。少くとも新人として紹介する以上は何等かの意味において活躍し得る人でなければ、いはゆる投書雜誌と違はないやうに思ひます。とにかく御誌としての主張を確立して文藝運動まで進展させる事が急務のやうに私には思はれます妄言多謝

今野　賢三

貴女人藝術が三週年をむかへられたといふことは發行者及び編輯者の努力のなみ〱でなかつたであらう事に敬意を表します。その耐忍、苦闘の容易でなかつたであらう事を充分に察せられます。扨て今後いかなる讀者層を目標にして如何にはたらきかけるか？といふ、一定の方針と、その立場をもつと明確にして欲しいと思ひます。そのためには、貴誌の讀者層の各個人について、客觀的な、買ひかぶらない認識が必要だらうと存じます。啓蒙を欲してゐるのか？文學的指導の最高を欲してゐるのか？大學的道連れを欲してゐるのか？

もう、小波の證は、戸外に出てしまつてゐた。

私は、わざ〳〵草履を手に持つて、飛び出した。音のしない様にと自分では充分注意を拂つたつもりであつたのが、返つてそれは、慌てゝゐる動作であつた。

「アラ、川柳さん達を呼んできてやらんと、駄目やないか。まだ、知らずに居るのだらう」

小波に叱られる様に云はれても、決してその時は腹立しくなかつた。私は、再び土間に足を踏み入れた。

——若し見付かつたら何と云はふか……

「一寸、汚ないゴミを棄てに行つたの」とでも。だがこの戸口からは、仲居にさへ自由に出入を許されてゐないのに。それでいゝのか？　けれど二人を捨てゝ行く事は出來ない。どうしても。

私は土のついた心持ち惡い足で、ソーッと指先だけで歩いた。

「高奴さん、早くお出で——」

丁字なりの廊下に、表面の方を熱心に注意してゐた高奴は、すぐ後をふり返つてうなづいて見せた。

四つの室を挾んで西の曲り角では、川柳が、氣付いたらしくこちらを見てゐた。私は、二度程手まねきをして、音のしない様に走つた。

「ソーッと閉めなければや、この上が彦左衞門やデ」

二階を指ざして小波が云つたので、四人の顔は同じに上へ向いた。

一番めんどうな、そして毎晩、お客のない、久榮は、毎夜寢あきてゐるから。

四人は三尺程しかない狹い露路で證と證をくつつけて歩いた。四人はその時程頼り合つた氣持に出逢つた事がなかつた。隣りの、豐國樓の板壁を境に、もう一つ、開きの門があつた。そこを出なければ、どうしても通りの道へは行かれなかつた。然もその開きの門の側が主人の寢室になつてゐた。主人夫婦が寢てゐる。

「ソウット開けるのよ。氣をつけなければ、今度こそ、おしまいよ」

四人の證中には再び熱い戰慄が駈けずり廻つた。

ゴトッ。ゴトッ

怖しさは、度を増して太股の筋肉の震れるのだけハッキリと感じた。

閂がはづれた。兩方に戸が音なく開いた。

秋立ちかけた曉の空はどんよりと曇つて、ポツリ〳〵と雨が落ちかけた。

前からの計畫で、道を二つに分ける事にな

衆性を欲してゐるのか？それに依つて、一定の目標へ進んでほしいと思ひます。

土岐　善麿

「女人藝術」がます〳〵發展する事は、普通の意味でなく本統に欣快にたへません。内容に就いては特に女性の體驗による實話が尊い文献だと思ひます。この方面に一層の御努力を望みます。思想の統一よりも、むしろ豐富にバライエテイのある事が、時代を知るにいゝと思ひます。

中村　正常

「女人藝術」は時折誠に興味深く拜見してゐます。今后も益々、男性の敵としての女性の位置確立のため御盡力下さることと期待いたします。——大變失禮な事を申し上げてす　ません。

中村武羅夫

「女人藝術」の如き雜誌を維持するには、何んと言つても經濟的困難と戰はなければならない。一般女人のために必要な雜誌でありながら、經營上には決して樂ではないと思ふ。それが、とに角、三週年紀念號を出すまでになつたのは、同人諸氏の努力はさることながら、長谷川さんの苦心は並々ならぬものだらうとお察しします。

つてゐた。四人は無言でそこに起ちつくした。
「では、こゝで別れ樣ネ、二人共無事に大阪へ着いて頂戴よ。祈つてゐるワ」
私は、いつ迄居てもいけないと思つて、促す樣に云つた。
「あんた達もネ、では　さようなら」
「サョーナラ」
「氣をつけてネ」
寂寥と悲哀と、不安が一度にこんがらかつたまゝ道を二つにわけた。

二

ゆかたの上に伊達卷をしたまゝの私と小波は無言で歩いてゐた。朝の冷氣とさわやかな氣持を身に受けながら、それを味ふひまがなかつた。只々、歩みのはかどらぬ焦燥のみが、強く〱響いた。胸の激しい動悸は、容易に沈まりそうになかつた。三丁程、夢中で、歩いて、後をふり返る勇氣もない。
「伊達卷一つであやしまれるといけないから、裾をからげて、帶のあたりをかくそうよ」
それ迄氣がつかなかつた私は、思ひ出した樣に草履をはいた。錦紗の裾よけとユカタの調和がどう見てもとれそうになかつた。處々まだ家のない一本道を、二人の脈の度がやうやく少しづ少なくなりかけてきた。
家のある處へきた時、ボン〱時計が五つ打つた。新聞取次店の主人らしいのがその家の前で、今起きたらしい顏をして立つてゐたが、二人の姿を、ジット眺めてゐたのが、二人には急に赤恐怖心を呼び起した。
「こんなんだつたら、傘を持つてくればよかつたネ。」
と云つた小波の氣持がよく解つた。だが、その聲は浮づつた震へをさへ持つた聲であつた。かへつて、無言でゐた方がよかつたのに。
「そうね。でももうすぐだから——」
私の聲はそれよりみぢ目であつた。
その家から少し遠のくと、小波はやうやく、ホッとしたと云ふ格構をして、
「あのおやじ、たしかにあやしい奴だと思つてゐたよ」
と云つた。
だが、二人が息付く間もなく、二臺の自動車が勢よく後の方から疾驅してきた人通りもないのに、警笛を鳴らしてゐるのが、どうしても、呼びかけてゐる樣にしか私達には思へなかつた。
不安と、失望と恐怖、まるで、メスを身に當てられた樣に、體が硬ばつてしまつた。

讀者通信

北海道　大井とき子

毎月レポ有りがたう御座いました、創刊　以來からの讀者であり乍らつい今まで消息を怠つてゐたことはめざめた同志に對して申譯ないと思ひます。
半年は穴中生活をする北海道も今は新綠の頃です、朝が明け、蛙の聲に夕の訪づれる初夏です、そして、鈴蘭が可ゝれんな姿をして街頭で賣られるやうになりました。
女人藝術を讀んでゐる人はほんの三四人よりないと云ふ書店の主人の會話であるが寂しいことです。內容的に少しむづかしいからでせうもうちよつとくだけてほしいと思ふんですが。
五月號の柳原女史の短歌にひきつけられました、私たちの主張してゐる現代語歌に近くなつてきたことを喜びます。
華族樣や有閑婦人のよいおなぐさみである（けるかも哉）の歌は過去の藝術である。
その日の生活に喘ぐ現代人にどうして、カンメイできませう。
私たちはもつと革新された歌を作らう。

――アヽもう解つたのか――

キット前の自動車には、ごろつきの荒くれた奴等が乘つてゐるに相違ない。そして後の車には、あの怒つた時の恐ろしい形相をした樓主と、冷たい少しも娼妓に對しての情味を持たない帳場と、氣違ひの様なおかみさんが乘つてゐるのだ。どうしたらいゝのか。こんな野原みたいな處で、かくれる處もありやしないのに。いくら、早く走つたつて、自動車と私達の足では、――

いよ〳〵自動車けすぐ後ろにきた。もう、思慮も分別も、わきまへも、フツトンで、二三日前から、覺えておいた、自由廢業の時の言葉なんか頭のどこを探したつて出てきやあしない。

エヽやけくそだ。捕まつたら、その時だッ！

なんでもなく自動車が通り越すと、胸の中が、スーツと輕くなつた。

永い刑の囚人が脱獄して逃げる時もこんな思ひで逃げるのではあるまいか？　足の鎖の半分ついたまゝ、その鎖りを解くひまもなく逃げる時の氣持は!!　キツト、私達の今と同じ思ひで逃げて行くのであらう……

幾臺も自動車が追ひかけては通り越して行つた。

「今時分の自動車は市場の人の朝がへりだよ。市場は早いから。」

小波はそうは云つたものゝ、やつぱり自動車が目の前を通る毎に、二人共、ジットその自動車の中を見る事が出きなかつた。

それでゐて、氣がゝりで、通りぬける瞬間にはオヅ〳〵と中に目をやつた。

今度こそ、追手に相違ない――

どうしてもそんな氣持がしてならなかつた。驛に近づくにつれて、人家も多くなつて、ボカシタ様な夜明けから、明けてしまつた。恐怖の中に歩きながら、熱田の方へ行くと云つた。別れた二人の事が心配でもあつた。

「廊の近くで乘り物に乘つては足がつくから、なるべく、拾ひ車を選んで乘つて行く事にしやう。決して、廊の中では乘つてはいけませんよ」

幾度も云つたのだけれど、ほん當に、さうしてくれたらうか――

ヒケの五分前に「私行かないわ」と云つて、折角、一しよに逃げる事を約束した太郎さんは、今頃どうしたゞらうか。堅い人だから、よもや、主人に告げる樣なことはないだらうけれど、なぜ一しよにこなかつたのだらう。

女人藝術に短歌作者の少いことを私はさびしいと思ひます。

これから御誌に發表させて頂きたいと思ひます。

島根縣　岩崎二二子

六月の雨が樹木を叩いて、いい風景の午后三時ごろです。

やつと六月號を手にした私です東京の友は六月號の感想を十九日に知らせてゐるのに私の町の書店へはまだ來ない。

もう見たくて〳〵しようがない今月はとびきりおそい。

「まだ來ませんか」と毎日書店通ひ――

本屋のお上さんも心配してくれる今月初めてですこんなにおそいのは、昨日請求書を出して置きましたからどうでも來ますでせう、もう少し待つてゐて下さい。とのおかみさんの言葉に一日缺するまたおちつかぬ氣持で訪ふ――

やつと六月一日に見ることが出來ました。

女人藝術の素晴しい發展と聯盟支部の澎湃たるこゑをきゝつゝこの田舍から大きくうたつてつよく女人聯盟の旗をふりあげ私の新しい思想の街道にこの幌馬車を進めませう――

大阪　富永　ナミ



着物も一枚も殘さず一しよに質に入れたのだから、キット後で、樓主に呼び出されて、責められるだらうに。あんな浮氣なヨーさんに引きづられて、とう〳〵思ひ止まつてしまつたんだ。また、あの晩に限つて、あの馬鹿野郎が邪魔しにきやあがつたんだ。今に、太郎さんも芳之助さんみたいに、肺病になつてみんなに嫌はれて死んで了ふか、梅毒で體中にボツ〳〵が出來て、腐れ果てなければならない。鑑札まくらに死んで了ふのだよ。借金があつて死んだら、落花生の皮みたいに捨てられるのだ。それに、あのまむしみたいな目で、ギユーッとにらみつけられながら、私達の足拔（脫走）した事を、聞かれる辛さは、どんなか。それが可愛想だ!!

驛へ着いた。交番の巡査が、二人だけを見てゐる樣だつた。

「早く切符を買つてきてよ。私、自働電話の中に入つてゐるから」

小波は、そう云ひながら、財布を私に渡した。樓の中では、古顏の彼女も、外へ一歩踏み出せば、字の讀めない人であつた。

東京行の一番にはまだ卅五分あつた。湊町行が、あと五分で出樣としてゐる。私は時間を見て、すぐその事を告げた。

「どれでもエヽワ、今、こゝでぐづ〳〵してゐる場合やない。汽車にさへ乘れば、亦、どうにでもなるわ。早く買つてきてよ。どこでもかまへん」

私は、汽車賃と便利を考へて、一番近くて、目立たない小驛の切符を二枚買つた。

おきんさんの死

園田蔦枝

朝！工場の汽笛が方々から相呼應して鳴り出した。

「そつぢや行つてきますけん、どうぞお頼みします」

前略御免下さいませ。

私は唯今デパートメントストアー×丸につとめてゐる者でございます。ずつと前から女人藝術を愛讀しております。どうして私が讀み始めましたかと申しますと、私の生れは福岡市でございまして、女學校を出ますとすぐ×丸につとめる樣になりました。丁度上阪すべく山陽線に乘込みますと一人の婦人がほんとうに親切に一人旅の私を可愛がつて下さいました。その時その方がおよみになつてゐらした雜誌それは女人藝術でございました。一寸お借りして讀みました今までは溫室の花のやうに何一つ不自由なく女中につらくあたつたり父母に無理を云ひましたほんとに我まゝな私でございました。而し運命は決して一人丈を幸福にはして下さいませんでした。盛ゆる者はいつか衰へるためし！その時はまいりました。實社會の渦卷、裏面、働かねばパンを得る事が出來ないなんてそんな事を考へようともしませんでしたその私が明日から一女店員として働かねばならぬと思つた時、決して實社會がバラもてかざられた華やかな路ではないつて事を痛切に感じました。それから私の親友になりましたの



仕事着に脚袢、草鞋、手拭をかむつたおきんさんは今朝も仕事に出かけやうとしていつものやうに隣りのお婆さんに聲をかけた。

眞夏の空はカラリと氣持よく晴れてゐた。みどりをふくんだすが〱しい風が、今日も勇ましく戰ひへと出て行く人々に讃美と祝福とを贈つてゐた。

何ていゝお天氣!!

チラと空を見上げた瞬間、たまつてゐる洗濯物を思ひ出して舌打をした。六疊一間きりの犬小屋のやうな家の中に小さい子供二人はまだ居ぎたなく眠つてゐる。それをみるとおきんは自分でもわからない突然な怒りに似た衝動でどなりつけた。

「おい!! もういゝかげんに起きないかよ、そこらを早く掃除して着物の一枚も洗つとけ」―

十一になる女の子はびつくりしてとび起きた。そしてねぼけたやうな顔をしたまゝ、あはてゝ弟の體をゆすつた。

「おばさん、まだかんもし?」

同じ仕事場に行く近所の娘が、愛想よくさう云つて通つて行つた。

汽笛がせき立てるやうになり出した。

おきんさんは今年三十九だつた。二年ほど前にその夫を失つて、今十一の女の子と、六つの男の子との三人で貧しくその日を送つてゐる。生きてゐればもう力にもなるはづの長男は、あまり丈夫でない身體を、小學校を卒へるとすぐから生活のための勞働に出されて小さい身體も心も伸びないまゝに父に先立つて死んで行つた。

そしてその父――少しおろかしいほど善良な彼女の夫は、これも工場で傷ついた爲にびつこになり、ながい間を女房にのしられながら日蔭者のやうにすごしたあげく、とうとう長男の後を追つてしまつた。

勝氣で、饒舌で、男のやうな氣性をもつたおきんさんは、づつと自分が一家の中心となつて働きつゞけて、ともかくもこの悲慘な一家を支へてきたのだ。

このM鑛山の山といふ山、岡といふ岡、肌もあらはな大地がむきだしだ。

灼熱の太陽に近くせまり立つ赤煉瓦の大煙突からは、たえずあら〱しい呪ひの息吹きを噴き上げてゐる。灰色の宏大な建物からは、恐ろしい壓殺的な音響と、絶えがたい强烈な藥品の惡臭が生れ、工場ではいつも紅蓮の焰

が女人藝術でございました。

昨年大阪實業會館で開かれました講演會にも五十錢ふんばつしてまいりました。

つまらない者ですがどうぞ女人聯盟の一人に加へさして下さいませ。

富山 大井登美子

活氣のない今の私の生活!今にもづるけてゆきさうな自分の魂を呼び起してくれるのは女人藝術です。思想的に見覺めない私達の街に支部をつくり少しでも向上致したいと思ひますものゝ愛讀者の數もわからず困つてをります。でもこれから人々に愛讀者になるやうにとすゝめて、少しでも女人藝術のために働かせて頂きたいと思つてをります。

神戸 奥田富美子

いつでございましたか、可成り以前にお厄介をおかけして、神戸の支部の事共を承りましてから、もうこの頃では高橋鈴子さんとも昔からのお友達の樣に、よくみなさまのお噂等おきゝする樣になりました。そしておかげ樣で力强く勉强出來ます樣になりました事を私、心から感謝いたして居ります。

それからいつかも御誌を本屋で

がうづまいて舞ひ上つてゐる。そしてそれらをめぐるくちなはのやうなレールは眞黒な魔物をのせて絶えずがう〳〵と鳴り、地獄への通路であるいくつかの大昇降機は、驚くべき速度をもつて廻轉しつゝ、亡者のやうな人間をのんでは又吐き出した。

もしそれが悪魔のものである夜の世界では、この恐るべき一切の音響は地の底からきこえ、そゝり立つ建物は奇怪な幻覺の中に生き、そこに明滅する青い又赤い灯は、さながらの地獄を現出する。おきんの職場はそこにあるのだ。

夏のながい日がやう〳〵にくれやうとして、涼しい風が海の方から吹いてきた。

きたない露地の奥にも新鮮な食物の香が流れ、犬ころのやうに遊んでゐた子供達は、めいめいの戸口に立つて呼んでゐる母の手に飛びついて行つた。

が、おきんさんはなか〳〵歸つて來なかつた。待ちあぐんだ子供達はもうだまつたまゝ、雀の子のやうにポッンと並んで、上りかまちに腰をかけてゐた。やがて暗くなつた家の中の茶つぽい疊の上で十燭の電燈がこつそり點いた。

「おつ母アんはどうしたろなあ」と弟は泣き出しさうな顔をした。

「もうかへるだろ――あんたもおなかゞすいた？」と小さい姉も心細さうに云つた。

隣りのお婆さんは共同水道へ水をくみに行かうとして、ふとこの家をのぞいてみた。

「おつ母アんはまだ歸らんかん？」

「うん」と二人は一緒に答へた。

「どうしたろな、ほんに」

お婆さんは何となしに家の中を見廻したが、ふとものにおびえたやうに、すぐそこから向ふに廣がつてゐる夜の礦山を振返つた。

石炭を積んだ礦山用の汽車が、黒く、長く、光をよこぎつて目の前を通つて行つた。

やつとおきんさんは歸つて來た。けれどもその時おきんさんは柩の中に這入つてゐたのである。

あはたゞしく集つた近所の人々も、しかし柩の中の彼女をみることは、それを送つてきた人達によつて拒ばまれた。それは知る人のみが知る、あまりにもみぢめにのろはしい死にかたであつたからだ。

子供達はわけもわからずに泣き出した。

人々はいたましげに、しかしもう味ひなれた顔付で何かと世話をやいてゐた。

求めて居りましたけれど、それよりも直接に頂く方が、御社の方も私の方も何かにつけて都合よい事と存じましたのでさし當り振替で半年分二圓四十錢お送りいたしますから、よろしくおねがひいたします。

群馬縣　横堀　恒子

何時のまにか息ぐるしい程みどりにかこまれてしまひました。編輯室の先生方にもおたつしやでゐらつしやいますか、六月號も、相變らずお元氣な作品をみせていたゞけました事を感謝致します。

わたくしは―ずつと病んで居りましたので、一月以來なにや、かと計畫たてゝ居りましたが、こんなにのびてしまひました。今度こそ―ぜひお仲間にいれて、いたゞいて、つとめたいと思ひましたので、取りあへずお通知いたしました。來月からは直接讀者にお願ひ申します。先生方のおみちびきにあづかつて、うんと勉強しなければならないと思ひます。ひまのある度に、友人や知人の間をとび歩いても、まだ一人の聯盟員の方にも出合はないのを淋しく思ひました。けれど追々わたくしたちの仲間をふやしたいとねがつてをります。此の群馬の地にどの位の讀者

「ほんに今朝も——ほんに今朝までも、聲をかけて出なはつたになあ——」
只、隣りのお婆さん丈が、とぎれ〱に、いつまでゝくり返してはすゝり上げてゐた。

——私はこんな、概念的に、まはりからだけしか、おきんさんの「死」が書けないのが殘念だ。

不足税六錢

森 溫子

——私の父は、昨年、詐欺といふ、いまはしい罪名の下に、被疑者として、未決に收容されました。

數ある證人、參考人、陳述、作り上げた調書、まことに立派な罪人として、父一人にぬりつけてしまひました。

ひん〱として舞込む投書に、どんなに苦しめられた私共一家でしたらう。弱い者を助ける人間を、ブル資本家は常によく云はない。けれども……何故弱者の味方になる者が悪いのでせう。

曰く、町議拘引、曰く收容、町議失格、曰く、黄金魔、曰く、裸一貫で數萬の財産云々……。又曰、百數十件の罪條明白、自白何件等々。

その、數萬の財産家のお孃さんである私は、何故、こうして毎日、毎年、こせ〱としてゐなければならないのでせう。けれど、事實、一年腰辨で、人夫を雇つてまでありとあらゆる方面まで、突つつき廻した反對黨の町議さへありましたから。何處へ行つても父の噂で持ち切つてゐたことでせう。

世人の侮蔑、嘲笑を双頰に受けて、眞直ぐ路を歩む時の氣持は、云ひ現せません。無事で歸つたとはいへ、全然事件が落着したのではないのに父を見捨てゝ行く氣か!! と母に迫られます。

がゐるのか見當が付かないので弱つてゐます。はやく群馬の地へも準備會でもひらいて皆樣して、研究できる樣にいたしたいものだと思つてゐます。先日伊勢崎町で買つてまゐりました女性行進曲のレコードを、毎晩かけては歌をならつてゐます。しみ〲と力强いものがわたしの腹の底から、盛りあがつて來る樣な云ひ知れぬ喜びをかんじます。ほがらかな、元氣なすこやかな、わたしたちの行進曲です。とても大きな聲なので、みんながびつくりしてしまひました。村の娘たちも聞きに來ました。はじめは目頭があつくなつてしまつて、どうしても歌へませんでした。うれしくつて泣けてしまひました。じつと胸をおさへて聞いてゐると、わたしたちの大地をふむ力强いひゞきが聞こへる樣な氣がします。みんなに聞かせて、みんなにおぼへさせて、みんなで歌ひたいと思ひます。機を織りながら桑をつみながら、……………めぐまれてゐない農家のおかみさんたちや、貧しい山の娘たちと一緒に、あゝその日こそ、泣ける程うれしいにちがひありません。みんながみんな、幸福になるのでなければ、わたしたちはうれしくはないと存じ

息ついて命なきの如き現在の私の家で、何人にても人手の足りない有樣です。

今年だけはどうしても出されぬ。どうか今年だけは家の手傳をしてくれ――と哀願のやうにされても、それを振り切つても自分一人受驗のため上京するやうな强い私ではありません。

あきらめ切れぬ心を抱いて、淋しくも約束された宿命に從はねばなりませんでした。

たとへどのやうな厚顏な、アブノマル自稱受驗病患者でも、今年を逸しては、永久に上級學校進級は出來ません。學問には年齡はないといひますが、私はやはり女でした。

同期卒業生には、遙かのおくれであり、又これ以上後れようとしております。追ひつこうと努力する勇氣さへなくなりました。三月は私にとつては、最も憂鬱な月です。

底知れぬ惱みと、焦燥に苦しみつゝも、やはり平凡な道程しかたどり得ない私なのです。家庭に何事もなかつた昨年は、又、受驗日を目前に控へてたほれた私でしたし。

あまりにみぢめな宿命です。今は泣く事さへ出來ず、やよひの空を無意味にみつめてゐます。

本でも讀もう――これが私に殘された唯一の樂しみとなりました。

誰も訪ふ者もなく、誰も省みてくれる者もない私です。

校友會誌に、光井某が娼妓になつたといふ事で、いろ／＼な意見があるやうでしたが、非難されつゝも、さげすまれつゝも、同情され、顧みられた彼女です。やがては救はれる彼女でせう。むしろ、私はこの方が、はるかに幸福だと思ひます。とにかく、心配してくれる同窓を持つてゐるのですから。

けれど……。

私は愚痴を云ふのでした。たゞお骨折に對して、何等酬ひもしない失禮、いつも／＼無駄骨ばかりかけた無禮を私はお詫びするのでした。

あまりに脫線しました、御ゆるし下さいませ。では亂筆にて失禮致します。

鈴木先生

この手紙を卽日投函しました。しかし一日おいて次の日、受取人受信を拒ばむ――といふ、理由によつて、戻されて來ました。しかも郵稅不足として。六錢をはつてやればよかつたのです。けれども、私はうつかりして重いも輕いも、考へませんでした、倘重いとて

ます。かつて、家族制度の犧牲になられたわたしらのおつ母さんや、お祖母さん、わたしたちはいさましく戰ひますと、みんなで叫んでやりたいものです。どうぞみんなのためにめざめかけた女性のために、力强いお聲をかけてやつて下さいませ。未開な農村の片隅から頭べをたれて、お願ひします。

海外通信

香港にて　岡田八千代

昨日五月二日朝香港へつきました。此處まで來たら如何やら日本を離れたやうな心持がして來ました。然しまだ／＼現實といふ心持よりは、舞臺を見てゐるやうな氣持の方が多くて不可ません。

午前はピークへドライヴしました。千二百尺位の所まで上りまして、市中を眺めた時も、まだ活動寫眞を見てゐるやうで仕方がありません。此處の市の收入の稅の大半は道路にかけてゐるといふ丈あつて夫は立派なものです。

ローマより　長谷川春子

ムソリニの顏は餘りおつかなくはありませんでした。一種の風貌を他人に印象せしめやうとするやうな氣どりをやゝかすかに感じます。レネマの墓でみるタレマンソ

六錢の不足額を支拂つて受取つてくれるものと思ひます。けれども、事實、戻つて來ました。不足六錢、併せて九錢のこの手紙は、先方にもとゞかず、用をなさず、煙になつてしまひました。母が受取つて寄越した手紙を、物をも云はず火に投げ込みました。私は悲しかつたのです。くやしかつたのです。

僅か六錢——支拂つてくれてもいゝぢやなからうかと思つた時、先生といふものが信ぜられなくなりました。卒業の時、なんと、先生にお話されたかしら？　私は忘れない。思ひあまつたら、困つたら、すぐ相談せよ——と。有難いお言葉と感謝したつけ。

過ぐる年。女學校卒業の修學旅行記を校友會誌に載せねばならない私でした。それで、一生懸命で眞面目に書いて、小學校の作文の先生に批評を願つたことがありました。その旅行記の原稿をそのまゝ入れて。

十日ばかり過ぎて、郵税不足として送達されました。中の原稿はそのまゝで、丁寧に、批評やら、添削をして下さつたものでしたが、前と同じ原稿をそのまゝ送るのに、郵税不足なら、私がその小學校の先生に送つた時もやはり不足であつたらう。けれども、受取つて批評して下さつたのはほんとに有難いことではありますが、私は今又、郵税不足の手紙について考へさせられました。

自分が受取つた時は不足であるならば、又これを送り返せば不足であらう——ことは誰もが考へられることです。それを知りつゝ三錢切手一枚を糊つてお送り下さいました。私はこの時も、九錢の御奉公を政府に致しました。こういふものです。師といふのはも——

それでも、この時は用は足せました。けれども、今度は九錢を無駄奉公さしたのみで何等先樣には通じません。

けれども、私は二度書いて、受驗斷念の通知を出す勇氣がありませんでした。どうして出來ませう。くやしがつて、泣くほどですもの。先生をうらむほどですもの。

けれども、このまゝ何等先生に御しらせもせずおることが心苦るしく、といつて、新らたに差出すことも出來ず、私は實話として「師」といふ尊敬すべき各々に對し、抗議します。たつた六錢の不足税は——受取人受信を拒むには貴下の日頃の御教訓とはあまり矛盾した行爲ではありませんか。

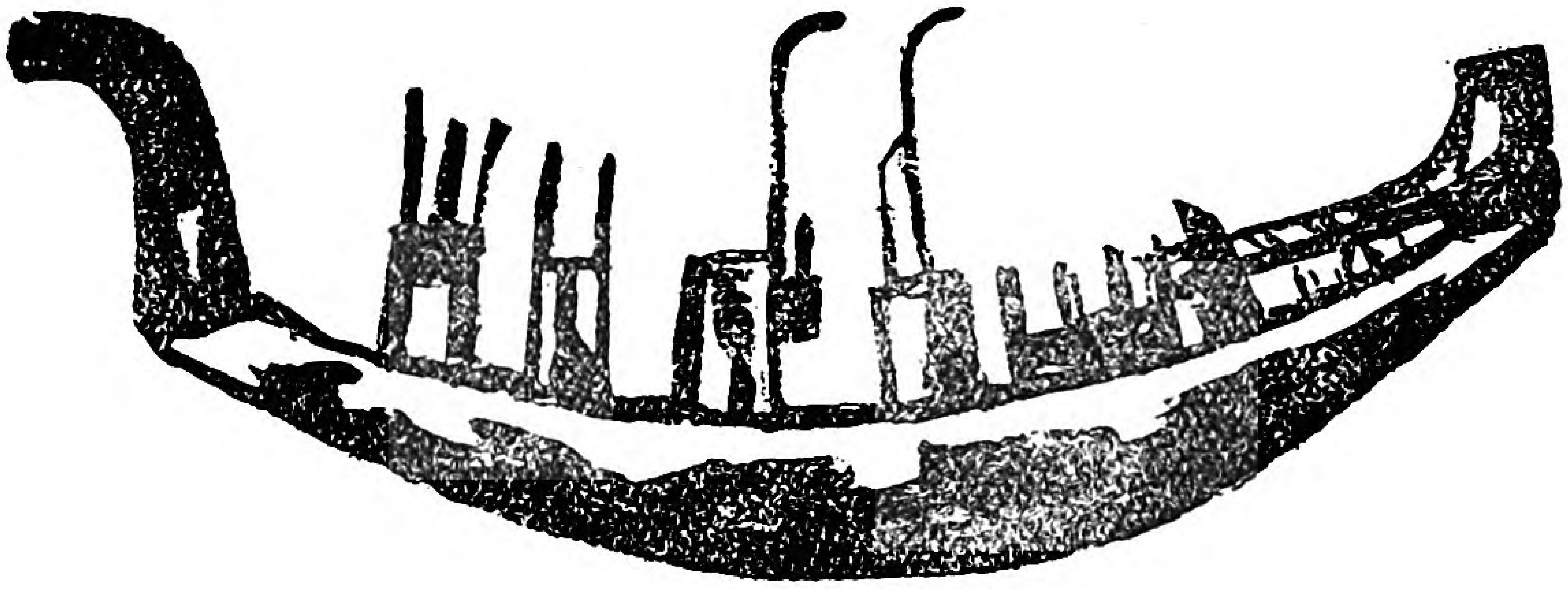
ーやポアンカレのような偉にして親しきものを感じませんでした。

四月十三日

ナポリにて

ローマで初めて、若い黒い愛人も見出しました。テルム博物館の生々した瞬間の動く美を永久的にとらへた「圓盤投げの青年です。天才は銅（カラカネ）を黒い生きたすてきな體にしました。私が手をふれずにはいられなかつたほど。他にも男と女の像のいくつかに天才の魂が生きてゐて話しかけ啓示してくれました。カプリの琅玕洞はあんまりアンデルゼンが「即興詩人で美しく描寫したので私が頭の中へ想像してしまつたので眞物は弟分位にしか思へません。ヴェスビオの火口へ飛び込むにはナポリ人は生がたのしすぎると案内者がいひました。ローマ日本展へ私が出品者でないと知ると英佛語を語る人々は面白いきたんなき評を私にきかせます、横山大觀代はすこしやつれて居るようです。現在のイタリヤ人は立派なローマン型の顔をもちながら額に智の美がうすれてゐます。

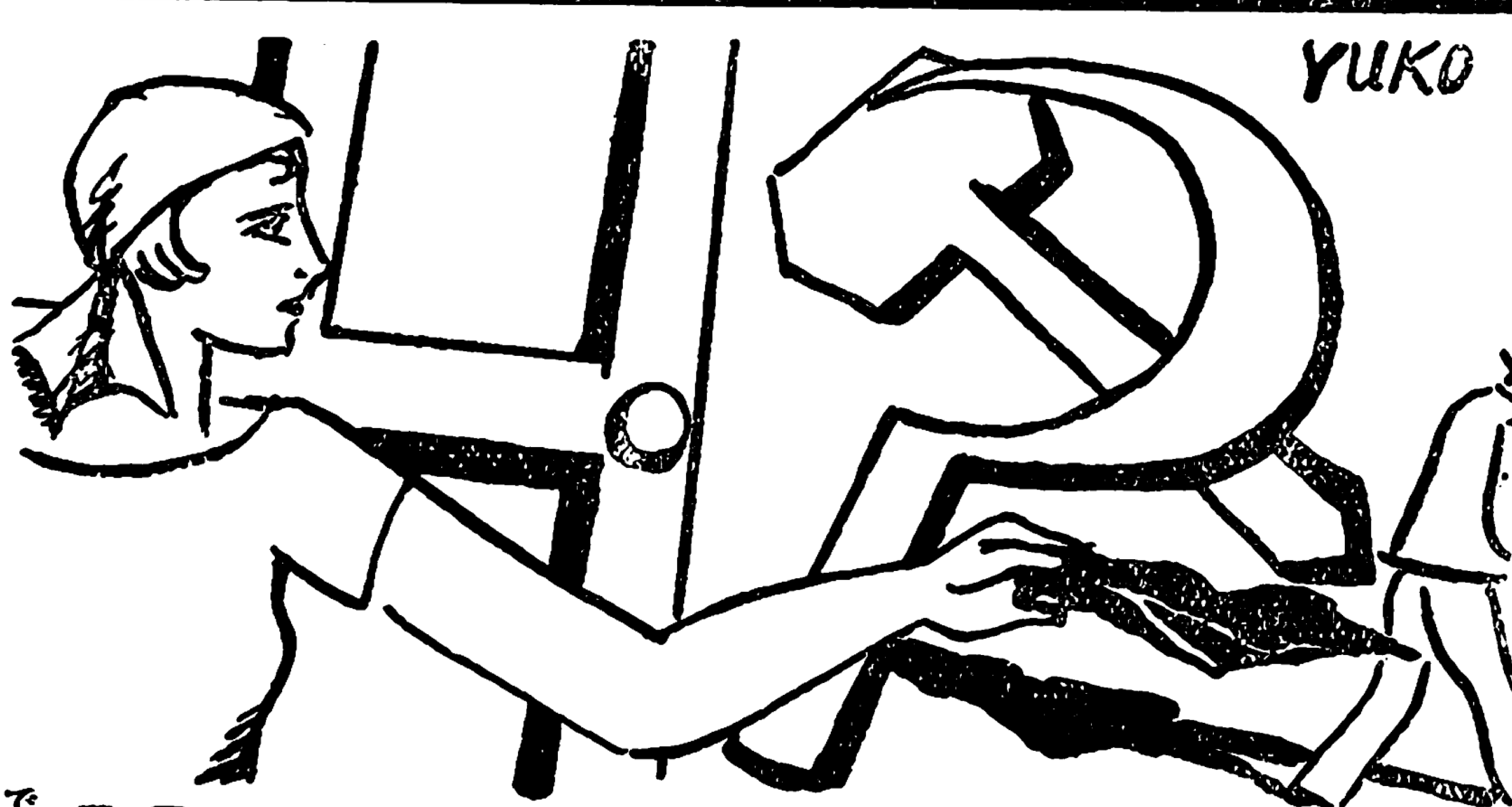
明日フロレンスをへてパリへそして又畫作畫作です。ヴェスビオの曠野の美しいこと!!



海の喚聲

山鹿勁子

荒れ狂ふ海にむかへばしひたげに馴れきし胸のすくをおぼゆる
鬪爭につかれし友をはげましぬ越後の海の喚聲をきけと
ひきよう者汝が足もとをさらはんと小山のごとき波よせきたる
網もてる漁師きたりてゆきずりに海はすきかと云ひてゆきたり
故里の小作爭議の應援に七年ぶりに船にのりたる
さかまく怒濤越えて越えて我船はわづかなれども進みてぞゆく
その親の親の親よりしぼられて我等の友は背丈ひくかり
いとし子を女工に賣りて納税にかへんと云ふか悲しき人々
鬪爭は彼岸におこりゐたりけり我等田を植う豪雨を衝いて
夢か…非ずうつゝか…非ず蛙の聲…帶をもとかずねむりに入りぬ
大いなる圓を描きて鳶はまへり此天地に事なきが如し
鳶まへりたんぽぽの花咲けりけり食ふに足らへばのどけきものを
たんぽぽはうれしき花ぞ踏まれつゝ明るく強く咲きいでにけり



秘密命令

松村シズ子

一

雨が烈しく窓を打つ。

裏の日本人料理店から三味線が流れて來るのが、病兒の眠りを妨げはすまいかと知枝(ともえ)はハラ〳〵した。隣室に人の氣配がするので覗いて見た。

『まあ？　リチヤード。』

『ミセス、僕はお約束の場所に二時間もお待ちしましたよ。』

青年の顔は蒼ざめて、レーンコートはすつかり濡(ぬ)れて居る。

『私、讓(ゆづる)の急病で店から直ぐ家に歸へりましたの。』

『たゞそれだけの事で、僕を三時間も待たす理由は有りません。』

青年は、辛辣(しんらつ)な憤りをこめて云つた。

『僕は、電車で十分もかゝらない所でお待ちして居たのです。』

『今日は、電車のストライキの第一日である事を、昨日の電話で知らせて下さつたのは何誰(どなた)でせう。』

青年は不滿さうであつたが、默してしまつた。ベッドの中で高熱に苦しんで居る讓は、大好きな「小父ちやん」が來たのも知らないで眠つてゐた。

『隨分、苦しさうですね。』

讓は、時々瞳を開けて、母親の存在を認めると、微笑して瞳を閉ぢた。知枝は、涙ぐんだ瞳を青年にむけた。

『リチャード、お解りになつて？ 私は、讓の母です。』

『それを知つて居るからこそ、なほ苦しいのです。』

水枕を替へて、コーヒーを入れた知枝はケチンから聞いた。

『夕食は、まだでせう。』

『まだです。』

お腹が滿ると、青年は心をやゝ落ち付かせた。

『今日はほんたうに濟みませんでした、貴方のお約束を思ひながら、此んなに苦しんで居る子供を捨てゝどうしても出て行けませんでした。父親は、あゝして長い間入院して居るでせう。それに私は仕事に行つてしまうし。ユリ子と二人で一日中留守番をして居ることは隨分淋しいことだらうと思ひます。いぢらしくて、今朝ばかりは、働く者の悲哀を感じましたわ。』

『先刻はごめんなさい。僕が惡かつたやうです。今日は御存じの如く會へ出席しなければならないのに、貴女は來て下さらない、雨は降るし、ジリ〳〵しましたよ。六時が迫つても居らつしやらないから、惡いとは思ひましたがお訪ねしたのです。』

眼と口を光らせて居る日本人のホテルに、碧眼の青年が、良人の入院して居る知枝を訪ねる事は、惡口の材料を提供する事になるので、二人はホテルでは逢ないやうにして居た。

『會の方、今からでも大丈夫でせう。』

『もう七時が廻りましたね。』

『いけませんわ、どうか出席して下さい。又、フランクから皮肉を云はれますよ。』

『行きます。』

青年は、コートを着ながら云つた。

『ミセス、僕は、此んな狀態が此れ以上續くと、氣が狂ひますよ。僕には、貴女は世界中の何物にも替へ難い人ですが、貴女には、二人の御子さんの方が大切なのです、僕は、御子さんより小さい存在なのですね。』

長い間に、幾度かくり返へした言葉を、又云はずには居られない青年の苦惱が、知枝の心に反射した。

『決して、そんな事はありません。貴方は私にとつて、子供と同じやうに大切な方です。』

『小さい存在であることが解つて居ればこそ…もう止しませう。今日はミスターの所へは？』

『まだ行けませんの。』

『僕が時間の都合をして、お寄りしませう何か持つて行く物がありますか?』

『濟みません。』

『あゝして長い間入院して居らつしやると一日でも見舞つて貰へないと淋しいものですからね。滋さんを氣を付けてお上げなさい。』

青年が歸つてもやゝ暫らくは、知枝は彼の言葉を味はつてゐた。

二

七年前に表は英字、裏には日本字で電話番號まで印刷した大型の名刺を持つて洋三郎が知枝の家を訪問した。兩親は電話番號に、兄姉は洋三郎が近所の自動車を修繕した事に親類の人々は土産物にミワクされて、女學校四年の知枝子を喜んで嫁づけた。

知枝は總べて幻滅の悲哀を感じてボンヤリして居る間に、二人の子の母となつた。若い時代を移民で、女と賭博に過した洋三郎に何が求められやう。

移民地には珍らしい美男子の洋三郎は、知枝が獨占して居る事を許されなかつた。何人目かの女から肺病を貰つて洋三郎は、すつかり體が悪くなつてから妻の懷ろへ歸つて來た。知枝は、默つて、良人といふ名だけをもつてゐる人を入院させた。

その入院費と、日本への送金と、親子三人の生活費は、ドレス屋に働くだけでは足る筈がなかつたから、時間の都合のよいサモン工場に働きに行つた。日、白、支、黑人の人種が、朝の六時が開門といふのに、五時過ぎには、長蛇の列を作つて居た。八時までの二時間に、二ドルの金になる此の仕事は知枝には大切なものであつたから、色々の人種の人と喧嘩もせねばならなかつた。

夏は、まだよかつた。今頃のやうに寒くなると、工場で荒れた手に、絹の切れ地が引つかゝつて涙の出る程痛かつた。それを見て多くの日本人は冷笑した。彼等は、日本での生活が貧しければ貧しい程、此處での生活をブルジョア化さんとした。彼等は過去の慘めな生活の影を追ひ出さうとして「働くこと」を嫌つた。其の良人も妻の小さい虚榮を充してやつた。

女の少い移民地であり、アメリカの女尊を鵜飲みにして居る彼女達は、美貌であり女學校まで行つた知枝が、生活の爲に働くのを冷笑したが、知枝は働くことに誇りを感じて平然として居た。そんな強い意志も戀人の感化であつた。

リチャード加納は混血兒だつた。彼の父親は、邦人間では唯一の公認醫師加納正吉で、彼は移民の古顏であつた。其の長男のリチャードは、現在の母親が——勿論日本人……の戀に人種的反感を持つ事を嫌つて、一人で生活して居た。

リチャードが、知枝と愛し合つてから三度目のクリスマスがもう近づいて居る。去年のクリスマスの前々日、廣告燈の明滅するグランビル街を二人は買物に歩いた。ガン市一流の本屋の前で、リチャ

ードは、愛人の讀みたがつて居るシンクレアの「プライス、チェック」を買つた。そして、シンクレアの暴露小説の裏面について、知つて居るだけの事を狹學の知枝に話して聞せた。

本屋から出て、十間も歩かない時であつた。

『僕は、お願ひしておきますよ。僕と逢つて居る間だけでも、僕一人の貴女であつて下さい。貴女は、僕とかうして歩いて居る時でも、お子さんの事ばかり考へて居るのですね。』

其れがあまり突然であつたから、知枝は返事に困つた。

『僕は、お逢ひして居る間だけは、貴女の後にある家庭といふ影から貴女を解放して考へたいのです。そんな僕の心を察つしないで子供のドレスの心配をして居る。』

彼は、憤りと、或る寂寥を感じながら低くさゝやいた。

本屋の一二軒先きには子供洋服店がある、ユリ子のコートを一枚買つてやりたいと思つて居たので、一足立ち止つてウヰンドを覗いた事が、青年の心に苦痛を與へるとは思はなかつた知枝は、格好のよい後姿に謝つた。

『僕の我がまゝかも解りません。けれど、此んなに二人限りで居る間は、完全に僕一人の貴女のやうな氣がします。』

だから、僕は、貴女の家庭を訪問する事は苦痛ですと、彼は心の中でつぶやいた。

出つた街は暗かつた。機嫌をなほした青年は、シンクレアに對する多くの同志の意見を説明した。

三

佐賀洋三郎は、白い天井を見ながら、訪ねて來ない妻を待つて居た。一年あまりの病院生活は、洋三郎からあらゆる慾望を奪つた。そしてたゞ食べることだけが唯一の慰安であり慾望であつた。

昨日の午后に妻に依賴した日本のウドンを今朝からたのしみにして居るのに、八時が廻つても妻は姿を見せなかつた。朝からの希望を破られた洋三郎は、天井に向つて叫んだ。

『何が忙しくて來ないのだ。明日持つて來てももう食はんぞ。』

其の聲があまりに大きかつたから、同室の病人は、驚いて振り返つた。來春までは保つまいと宣言した白人醫師は、日本料理を食べる事を許可した。

毎日想像しては妻がやつて來ると、色々の料理を注文した。其んな我がまゝの云へる洋三郎ではない筈だ。その事をよく知りながら生活苦に窶れて行く妻を見守りながら、洋三郎は唯一の慰安である食慾を抑制する事が出來なかつた。

丁度、其處へ一人の白人が入つて來た。此の病室は日本人ばかりであると、そんな不審の瞳を投げて居る輕病患者も居た。白人は、洋三郎の枕元へ坐つた。

『ミスター、今日はミセスが、讓さんの病氣で來られないさうです

から、僕がお寄りしました。』

拓(ひろ)げられたドンブリから馳走が出た。邦人間でも有名なドクトルの子息が見舞つて呉れた事は洋三郎の氣を明るくした。美味しさうに食べ始めるのを、同室の人々は羨しく見守つた。此の病室には、高野といふ青年の外は、貧しい獨身者ばかりであつたから妻の心盡しを食べられる洋三郎に嫉妬さへ感じて居た。

『加納さん、僕は少し話がありますが。』

日本の「戰旗」か何かを讀んで居た高野が呼んだ。

彼は一ケ月前、右足のカヽトを怪我をして入院して居た。彼け、神道(かみも)徹の組合に加入して領事の無能を呪ひ、同胞會の名士を罵倒し新らしい我々の世界を夢見て居る青年であつた。

『加納さん、今度のステブストン事件ですね。彼れに、僕達は欺かれたやうなものですよ。同胞會一派の奴と、日本人の資本家の利慾が最大原因なのです。我々八百人の漁師の死活問題ですからな、一日だつて安閑としては居られないのです。今日になつて、ロンドン迄裁判に出かけても、勝つ見込みはないと思ひます。裁判といふ道具で我々の眼を迷はさうとする資本家のやり方も、結局自己の利慾が主ですからね。其の巨大な裁判費だつて、我々漁師の汗の結晶を絞り出されるのです。貴方のお父さんのピカデリーの費用に消えるのが落ちでせう。』

高野け憤慨口調で語つた。同室の人はハツとした。リチヤードは、此んな狂犬を相手にして何にならうと腹も立たなかつた。

『高野君、僕は君と見解が違つて居ます。貴方のいふ資本家とは今田の事でせうが彼の人個人の利慾から今度の事件が起きたのではありません。此問題の裏にはもつと巨大な敵があるのです。』

『それは何者です。』

『白人です。白人資本家です。彼等は、被支配階級の者へ對する恐怖と、人種的偏見の暴虐から、下層階級の人の反感を煽つた結果が日本人の漁業權取り上げとなつたのです。又、僕の父に對する貴方の御意見も違つて居ます。父は階級意識に目覺めては居ませんが、同胞八百人の死活問題を兩肩に乘せて居るのですから、父が人間なら、其の重大さを識つて居るでせうから、最善を盡して、屹度勝つて歸ると思ひます。貴方のおつしやるやうに神道君が宣傳して居られるやうですが今田との私恨を根に持たないで、共同して、白人資本家と鬪ひたいと思ひますがね。』

『さうですかね。』

高野は何か云ひ足りなささうであつたが、リチヤードは、洋三郎の枕元へ歸つて行つた。高野の隣りのベツドに盲腸炎で入院して居る男はやはり移民の古顔で、働く事が忙しくて結婚を忘れた佐伯(さえき)といふ五十近い男である。

『高野、君の所の親玉は書く事だけは實に美事なものだ。俺達貧乏人の喜びさうな事ばかり書いてるが、其通り實行して居るかい。』

『やつてゐるとも。先生は此の土地であまりに微力なのだ。領事や同胞會の金持の壓迫から現在は非常な苦境に居るのだ。だから先生に大きい力を與へたら、日本人間はもつと向上するだらう。』

『神道に力を與へるつて、どういふ意味なのだ。』

『現在、資本階級層から出來て居る同盟會を先生一派が、やつて行くのだ。』

『アハ……こいつは大笑ひだ。加納さん神道は惡い奴ですな、此んな若い者をうまく欺いて居るんですね。』

『貴方のやうなチ、イに何が解るかい。』

『チ、イだから、よく解るのだよ。お前の先生さまは、此の土地で同胞會をやつて居た時代があつたんだよ。俺もミールに居て組合へ加入して居たが、隨分と色々の口實で絞られたものよ。貧乏人の味方をして呉れるといふ人間が、貧乏人を泣かせたり、貧乏人の大切な金を何んとかいふ事、さうだ教育事業に名を借りて八千ドル以上の金が今だに行方不明よ。そんな事をしながら、貧乏人の味方がをかしいわい。成功した日 人の惡口ばかり云はないで、折角ある組合をもつと貧乏人の爲になるやうに使つて呉れ、と、さう云へ、ノミのやうな日本人の成功者は敵ぢやないんだ、俺達を迫害するのは白人資本家ぢやないか、お前の先生さま……』

『佐伯、もう止せ、高野が泣いて居る。』

『貴方みたいな馬鹿者に先生の眞の價値が解るか？』

『同胞會の奴は野心の結晶、お前の先生一派は赤大根、其間に挾まれた貧乏人はどうすればいゝのだ。日本ぢや、勞働者は……』

ベルがけたゝましく鳴る。リチャードは、佐伯達にも挨拶をして苦笑しながら歸つて行つた。

四

領事館の書記生屋代は、しきりにペンを走らせて居た。

『……………實に勞働と勞働との反撥が、此の度の事件となつたのである。同階級層の人間が何故に反撥するやうになつたかといふと、それは資本主義國家制によるものである。具體的にいふならば資本主義經濟組織の私有財産制度……』

此處まで書いて居ると、リチャードが來た。

『何を書いて居るのだ？』

『邦字新聞に匿名で、今度の事件を出さうと思つてね。御存じの如く在米同胞勞働者の無智ときたら情なくなるからね。こんなものでも書いて、少しでも啓發して行こうといふ僕の老婆心だよ。』

『二三日前にも病院で、高野といふ青年から色々と迷論を聞されたよ。佐伯つていふ君の村の爺さんは、面白い男だね。』

『アハ……、ノミの如き邦人資本家と巨大なる白人資本家といつてやつだらう。』

屋代は笑ひながら友人の煙草にも火を付けて、氣持よささうに煙

りを吐いた。

『此の事件の根本原因は、私有財産制度に依るものであると結論しやうと思つて居るのだが、解つて讀む奴は、やはり神道と、君も知つて居る御用新聞の土橋(つちはし)位なものだと思ふと悲觀するよ。』

『‥‥‥‥て居る事を誇りにする領事の下に、君の如き人物が働いて居るといふ事が解つたら、氣絶するだらう。』

『アハ‥‥領事が氣絶するのはまあいゝさ、うつかりすると、僕の首問題だからね。官費で生活させて戴(いい)けなくなると、僕の父親(ファザ)の海軍少將殿が切腹するだらうよ。すると問題が大きくなり過ぎる。』

屋代は、笑ひながら、友人の蒼ざめた顏を見た。屋代はメキシコ領事館に勤務して居る時、黨(とう)の用でやつて來たリチャードが同縣人の加納正吉の長男であるといふ事を識ると、二人は直ぐ友人になつた。其の頃のリチャードは驚く程元氣の溢れた美靑年であつた。だからメキシコの支部の人々は、皆、リチャードを愛した。それが二年目に屋代がパン市に榮轉して逢つて見ると、驚く程悴れて居た。リチャードの親友のフランクから悴れた原因も聞いた。フランクは扱ひかねた友人の戀を笑ひながら話してから屋代に云つた。

『戀といふのは、ブランデーのやうなものだね。醉つぱらふと、實に他愛がないからね。醉つぱらひの足元を見て居ると危つかしくて腹立しくて仕方がないものだが、本人は、あれで確つかりして居る心算だからね。ディックも今醉つた盛りだよ。然し此のブランデーはディックには少し強過ぎたのかも知れないね。』

『戀をブランデーに例へたのは嬉しいね、しかしだね、無理に飲まれたブランデーだと相當苦しいよ。僕はだからブランデー、いや戀さはやらないのだ。』

『お互ひ、戀なんてブルジョアの玩具に精力を消耗するのは惜しいからね。しかし、ディックの醉ひもいゝ加減醒させないと危いよ。』

『僕からも、注意しやう。』

と、二三日前も話したのであつた。

『ディック、いやに暗い顏をしてゐるね。』

『淸算しなきやいけないねつて、いひたいのだらう。』

『さうだよ、もういゝ加減醉(かげんよひ)もさめる頃だよ。女つて奴は、いつもいふ通り相手の長所を一つ見つけ出しては、戀をするものだよ、つまり何かの目的なしには戀をするものぢやないのだ。君は、ミセス佐賀の一番弱點を知つてゐる筈だ。その弱點をついて見給へ。君は屹度、僕の言葉を肯定するだらう。』

リチャードは、默つて、煙草ばかり無暗に吸つてゐた。

『まあ、うんと考へ給へ、さあ、僕は原稿書きだ。エゝと、つまり日本の資本主義政策と‥‥』

何處かのルームでジャズに合してダンスをする白人の男女のさんざめきに、眉をしかめながら、屋代は、ペンを走らせた。

五

譲の病氣が快くなるまでは行くまいと約束しながら、やはり逢はないで居られないリチヤードであつた。病兒の看護に眼のふちに輪の出來る程瘦(やせ)た知枝は、一週間振りの愛人を喜んで迎へた。

『すつかり弱つてヘト〳〵ですわ。でも不思議なものね、どんなに眠(ねむ)くても子供がちよつと身動きすると直ぐ氣が付きますのよ。』

知枝は、人なつこい微笑を堪える愛人の手を愛撫した。

『僕は、お願ひがあつて來たのです。』

知枝は彼の眞險さから、云はうとする事を讀みとつた。

『デイツク？ 私を苦しめないで下さい。私は子供の病氣で一杯なのです。子供の病氣の間だけは、そつと、おいて下さい。』

『僕は、貴女を完全に得なくては、何んにも出來ないのです。僕は……』

『私が譲とユリの母である事を忘れないで下さい。二人の子供が感情的に獨立出來るまで見守つてやるのが母の義務だと思ひます。どうか此のまゝで我慢して下さい。』

知枝は抱擁から逃れやうとあせりながらいつた。

『貴方は、病兒を捨てろと仰しやるのですか。誰からも扶養してもらへない良人を捨てろと、仰言るのですか。貴方は、そんな利己的な方ではなかつた筈です。私が良人と子供から解放される日をお待ち下さいね。その間に昔日の貴方になつて、うんと仕事をして下さい。私だつて、屹度貴方のいゝ友人になれますわ。』

リチヤードは、知枝の熱情に動かされて來た。

『僕は、どうかして居ますね。貴女を苦める事ばかりいつて濟みません。僕は、近々一ケ月位の豫定で旅行して來ます。フランクと一緒に行くのです。』

『それが、いゝでせう。』

知枝は彼の健康の爲にも旅行する事がいゝだらうと考へた。

『昨日の邦字新聞に、例の事件を書いて居らつしやるのは、屋代さんですか？』

『さうでせう、何か書いて居ました。』

譲がむづかり出したので、知枝は隣室へ入つた。

『リチヤード、此處に居らつしやい。』

譲(ゆづる)は、大好きな「小父ちやん」を見ると、喜ばしさうに話した。

リチヤードはポケツトから、譲に買つて來た玩具を出して病人を笑はせた。

『昨日、譲のよく眠つて居る間に、病院へ行きましたら、加納さんは白人だのに、白人の悪口を云つて高野と大變議論したといつて良人が話して居ましたが、どうなさいましたの。』

『議論ぢやないです。高野君が、ステブストン事件を誤解して居るので、ちよつと喋べつたのですよ。僕は、いつも思ふのです、彼の

人達がいゝ加減に目覺めて與れるといゝのですがね。一昨年の船會社のストライキですね、彼の時は實際、僕は悲觀しましたよ。從業員千二百名の內五百名は日本人でせう。お互ひ從業員であれば、資本家は共同の敵である者です。それを日本人從業員の四百九十名は白人從業員の固い團結を他に、ストライキ破りの惡德を犯したのですからね。その爲に資本家の爲に有利になり、血の出るやうな持久戰をやりましたからね。此處だけぢやないのです。アメリカの邦人勞働者も全部ストライキ破りの常習者ですから、白人が反感を持ち、侮蔑して結局排日化するのです。僕の同志は皆、日本人勞働者を、敎養がない、團結力がない、目覺めて居ない、だから我々は、我々同志の爲にも、資本家と鬪ふ爲にもストライキ破りの惡德者を排斥しなければいけないつて云つて居ますよ。同階級層の人間からそんなに嫌はれて得た報酬が二等乘船だけでせう。これも昔は、人種差別から同賃銀で乘船させなかつたのを普通にしてもらつたからといつて、無條件で感謝して居るのですから助かりませんね。』

先刻とはすつかり變つて、仕事の話になると冷靜になる愛人の顏を知枝は默つて見守つて居た。此の人は決して仕事を忘れない人だ、今に屹度、昔日の加納リチヤードになつて與れるだらう。

『さうですわね。其の點は、私も情ないと思ひます。此れといふのも、邦人勞働者が、完全な組合を持たないからですよ。そして又移民地に來て居る日本人は根本思想が違つて居るのです。出稼ぎに來て居るのだから、どんな事をしても金を得ればいゝと考へて居るのです。其れに、長い間封建時代の壓迫に慣れた、貧しい人達が搾取階級の前では、無條件で、頭を下げるやうに慣らされて居るのです。けれど結局は無方針な移民政策の結果ですわ。』

『アハ…貴女の政府彈劾が始まりましたね。そして下層階級の同胞は、どうすればいゝのです、と結論するのでせう。』

『オホ…、よく覺えて居らつしやるのね。』

『日本に居る良い指導者をうんと招聘するのですね、そして組合を作るのです。でなけや、向上する見込みなしですね。僕は、此んなだから、變に反感を持たれるのですよ。最も、何かの物質的交渉の際は、碧眼を利用されますがね。』

リチヤードは、知枝の額が病的に熱つぽい事に氣が付いた。

『少しお休みなさい。熱がありますよ。ユリちやんが歸つたら、僕が夕食の支度をして上げますよ。だから二三時間、ベッドにお入りなさい、讓さんもよく眠つて居るから。』

『今日は貴方に甘えませう。もう我慢にも起きて居られないのですけれど…。』

『其の上僕が來ては意地惡を申しますからでせう。』

『それも大いにありますわ。六時に病院へ行くのですが…。』

「ユリちやんが歸つたら、交替して僕が行きますよ。何んにも心配しないで休みなさい。素的に美味しいビフテキの燒き方を知つて居

るんですから、食べさせますよ。』
知枝は、微笑して居る碧い瞳にみつめられると、ふと涙ぐましくなつて慌てゝフトンをかけた。ベッドに入ると、一週間分の疲勞が骨の間からにじみ出るやうであつた。
リチャードは、蒼ざめて苦しさうに眠つてゐる知枝の長いマッゲをいつまでも見つめて居た。

六

多が來て、正月も過ぎた。議論家の高野も、面白い佐伯も、泣虫の山田も退院して、洋三郎の周圍には新らしい患者が寢て居た。
洋三郎は咯血後の疲れでボンヤリとして居た。枕元に見覺えのある妻の白い顏と、可愛らしいオカッパのユリ子に、茶目らしい讓の三人の顏を意識して、話さうと思ひながら口がきけなかつた。
毎日、同じ藥ばかり飲まして洋三郎のカンシヤクを起させるドクター、の巨大な體格も映じた。何んだつて、子供達は、やつて來たのだらう。肺病が染るからと、あれ程喧しく妻に云ひきかせたのにと、洋三郎は一人でイライラした。
洋三郎は、たまらない孤獨感におそはれて來た。何かにすがりたい、さう思つて手を動かさうとしたが、自由にならなかつた。

七

知枝は、珍らしい天氣を幸ひ洗濯物を干して居た。すると、そつと肩を抱く者が居た。ニコ〳〵と明るく微笑して居るのは、一ケ月程見なかつたリチャードであつた。
『何日お歸りになりましたの。』
『今朝の三時です。今、やつと解放されたので、飛んで來ました。』
洗濯を干して窓を閉めながら、知枝は、低く、禮を云つた。
『その節は、有難う。屋代さんから……』
リチャードは、出發前に、長い間仕事を休んだので辭めさせられた知枝の生活費を屋代に預けておいたのだ。
『何んですか心苦しくつて……』
『變に他人行儀ですね。』
知枝は、ふと、リチャードの姿を見た。
『オヤ、どうしてそんなスタイルをして居らつしやいますの、又、御旅行ですか。』
『さうです、今夜の十二時にロンドンへ出發します。今日は、歸つた通知とお別れの通知を持つて來たのです。』
『ロンドンへ？　遠方ですね。』
『今度は、少し長くなります、或は……十年か、三十年か、今の所未定です。』
リチャードの瞳の眞劍さは、知枝に或る不安を感じさせた。
『フランクや屋代の云つた通り、一ケ月の旅行が、僕を健康にして

吳れましたよ。そして、もつと嬉しい事は、貴女の御希望通りに大きい仕事に行けることです。』

同志は、皆、死を覺悟して居ます。僕も、ロンドンで、黒いブレードを食ふやうになるか、或は、死ぬか解りません、と、知枝に話さうと思つたが、たつた一ヶ月見ない中に、知枝は驚く程悴れて、黒い眼ばかりが大きくなつて居た。だから、何んにも云ふまいと思つた。

『お別れに、御自慢のレモンパイを燒いて下さい。二時までは、時間がありますから。』

『ぢや最後のレモンパイを燒きませうか、腕を振つてね。』

ストウブの前で材料を混ぜて居る、知枝の腕に氣がついた。

『ミセス、其れは？』

『良人が死にましたの。』

『エツ、主人が？』

リチャードは、ぢつとして居られない衝動にかられた。良人が死んだら、と、二人は、二人だけの約束があつた。

『何んといふ事だ、聞かねばよかつた。今になつて、今になつて……』

リチャードは、危く一ヶ月前の愛慾のルツボに再び喘ごうとする自分に氣が付いて、蒼くなつた。

此のまゝ行こう、此のまゝで。』

知枝は、リチャードの心の爭鬪が直ぐ反射した。

『先刻の話、ほんたうでせうか。』

『勿論。』

『もうお逢ひ出來ないなんて、私には考へられない事ですわ。屹度歸つて來ると、約束をして下さい。』

知枝は、話して居る間に自分にも解らない激情にかられた。

『貴女は、今になつて、そんな事をおつしやるのですか。個人愛から人類愛へと、敎へたのは誰です。』

『それは、貴方が、どんなお仕事に居らしても、屹度歸つて居らつしやるといふ事が解つて居たからです、でも此度のは、もう解らないなんて、私には堪えられませんわ。私、何も彼も捨てます。どうか連れて行つて下さい。』

『一緒に行くつて……』

知枝は默つて肯づいて見せた。此の人を、全然失ふなんて、自分はどうして出來やう。

リチャードは、洋三郎の死と知枝の嘆願に氣が狂ひさうであつた。やつと長い間待つた時が來たのだ。愛人は、兩手を擴げて自分の胸へ飛び込んで來た。

『もうおそい。』

リチャードは、知枝を腕から離して、ルームを步き出した。

『知枝さん、今になつては駄目です。それに僕と一緒に逃げても、

貴女の心には永久にお子さんの姿が消えないでせう。そして、屹度後悔します。僕も貴女の心に存在して居る子供さんに嫉妬を感じて、前より烈しく苦しむでせう。現在、大きい犠牲を拂つて逃げる事は、結局は昔のあの苦惱へ飛び込むやうなものです。そして……』

『そして、貴方には御仕事があります。解りました、もう御無理は申しません。』

知枝は、心の苦しみをおさへてやつと、謝つた。

どうか、レモンパイを忘れないで下さい。』

リチャードは、何時まで空間を凝視して居る知枝を氣づかつて云つた。

『すつかり忘れました。』

知枝は笑ひながら、オーブンに入れた。ともすれば、涙で見えなくなるのを意識しながら……。

リチャードは感情のハケ場を求める爲に絶えず口を動かした。

『父から電報が來ましたよ。裁判は勝つたさうです。明朝の邦字新聞には發表するでせう。』

『それは、お目出度う。』

『二十斤もやせたが裁判に勝つた、此れが電報の全文ですよ。彼の貧弱な父が二十斤も痩ると、歸つて來たら、早速スーツを新調しなけゃならないでせう。』

二人は、お互ひの苦痛を察しながら、笑つた。

『今日は、どんな日か、御存じですか、ロシヤ革命の……』

『解りました。カール・リープクスネーヒトとローザ・ルクセンブルグの慘殺された日でせう。』

『其の記念日に僕達が偶然出發するのですが、屹度、歸つて來られますよ。』

かつてきかされた二人のロシア革命家の悲慘な死と、愛人の仕事を連想すると、知枝は、形容出來ない戰慄が全身をおそつた。

燒けたレモンパイや、知枝の心盡しの晝食がテーブル一杯に列べられた。リチャードは、ともすれば沈む知枝の氣を引き立てながら生活の事等も話した。

『屋代君も來月早々歸朝しますよ。××狀に泥が付くさうですから大變ですね。』

『領事さん、やつと今頃、氣が付いたのですね。』

『もう二時半ですね、出發まで忙しいので歸ります。』

三階の、二階の、階段を下りて行くリチャードの足音をドアーにもたれて、一つも聞き落すまいと知枝はじつと立つて居た。愛人の何も彼もを、心にきざみつけておかうと……。

一九三〇—五—十一—



消え殘る生活

平林英子

一

自然は一せいに春の衣裳がへを始めた。

冬の間、頑丈に地殼を守つてゐた氷も、なまめかしい四月の風と太陽とのために、急にあはたゞしく解け始めた。地面からは絶えず水蒸氣が潔癖に發散してゐた。そして、雨樋のない家の軒場には、雪解けの雫がピシヤピシヤと跳ね飛んでゐる。

永い冬籠りを强ひられてゐた利吉は、垢じみた體を炬燵から引き離して、のび〳〵と背伸びをした。ながく使用されない赤さびた機械のやうに、油氣の拔けた關節がひどく氣怠るかつた。

緣側の障子を開けはなつて、娘達が竹行李に着物を詰めてゐた。傍で母親のおかくが、かき餅や煎豆の袋をその間へ入れて手傳つてゐる。末娘のすみゑが、凍傷のまだ癒えない手で、其處らの土手からあさつて來たらしい蕗の薹を、障子口から亂暴に投げ込んで、又何處かへ驅けて行つた。

煙草代がなかつたので、利吉は卵とでも代えてこようと、鷄小屋を覗いてみた。だが、卵は二つしか產んでなかつた。あやめの五匁袋を買ふためには、四個の卵が必要だつたので、彼は、夕方まで待つ事にした。鷄たちは、餌がないので、畑の方まで遠征して、積み上げた堆肥を足でかき廻してゐる。傍の豚小屋を覗くと、二匹の仔豚が前足をませ棒にかけて、玩具のラッパのやうな口を揃へて、氣味惡るい聲で飢を訴へ出した。

「馬鹿野郞めが、おとなしくしねえか」

彼は舌打ちをして、人間にでもするやうに手を振つた。

さて？と、彼は煙草がないと余計に物忘れをする。思考力がぼやけて中心的なまとまりがなく、矢鱈に腹立たしかつた。

「べら棒な話だ！」

彼は、ほつたての木小屋の、焚き殘された貧弱な薪が目にとまると、思はず立ちどまつた。暮に主家の周圍に積み上げた分も、もう僅しか殘されてはゐなかつた。家の周圍に薪の積まれてゐない農家なんてものは、着物を着て帶をしめない人間のやうにだらしがなかつた。おまけに、それは見る目にひどく慘めだつた。この有樣では、どう贔負めに見積つても、あと一月分にも足りさうもなかつた。

娘が二人とも製絲場へ行くやうになつてから　彼の家では薪の使用量がぐつと增加した。冬中、家に歸つてゐる娘達は、一年中の着替へを仕立て直すために、茶釜で湯ばかり沸かしてゐた。薪の事などを余り念頭におかない娘達のお客氣分が、彼には氣にくはなかつた。だが、娘達の稼ぎが、一年中の彼等一家の最も主要な收入である事を考へると、大ていの事は我慢強く忍ばねばならなかつた。

「あの、今夜あれ達になにか御馳走を食はしてやりていが……」

女房のおかくが、緣側から降りて彼の處へ相談に來た。

「彼のことか？一文だつてありやしねえよ」

次でに、煙草も買へやしないと言ひかけて、彼はあわてゝよして仕舞つた。

「ねえつても、ねえでは濟まされまいで、あれ達だつて、あしたから又一年も稼ぎに行くんだで……」

「さうさなあ」

だが、無い金で御馳走しろといふのは、泥棒しろと言ふのと同じだと彼は思つた。その曲、女つて奴は泥棒でもして來た日には、頭の毛に火のついたやうな騷ぎをやらかすに違ひないのだ。

「何か採つてこようかな」

彼は臆病さうに女房の顏色を見た。あと一日だから、腹の立つ事も辛棒して、氣嫌よく娘達を送り出さねばなるまい。うつかり余計な惡まれ口をたゝいておくと、いくら娘の金でも、受けとる時に氣がひける思ひをしなければならない。

「もう一月の上もさかなを食はねえに、若いもんは可愛想だでね」

女房は執拗く彼の決斷をせきたてた。彼の家では、この一月とい

ふもの、まるで鹽辛い味噌汁と、纖維の多い菜漬ばかりを食つて來た。女房に責められると、彼は山に育つた者の本能で、地理にくわしい山の縮圖を、頭の中で展げてみた。

昔から、村の人々は、山中を驅けづり廻つて、自然の中から食物をあさる方法しか知らなかつた。人間に追はれて山奥へその生存區域を自らせばめて行つた熊や猿の樣に、文明のサーチライトに追はれて、益々生活方法を消極的にして行くより仕方がなかつたのだ。

「さうだ、よし、これから蟹を堀りに行つて來よう」

「蟹つて、蟹はまだ早いづらに――」

「なあに、早いことがあるもんか、大丈夫とも」

彼は、かるさんをはいて、鍬とバケツを下げて家を出た。

處々の山襞の窪みには、殘雪が白く光つてゐた。水氣をあげ始めた樹木は、生々と艶々しかつた。

山の中腹の、陽當りのよい窪地に湧出する淸水は、小さい澤になつて、透明な水はキラキラと光つてゐた。美しく晒された小石の間から、夥しい根芹が發芽して、わさびの新芽もぽつ〳〵顏を覗かせてゐた。兩側の岡には、花を孕んだ蕗の薹が丸く竝んでゐる。

彼は澤尻の方から、徐々にその砂地を堀り始めた。ざくりと鍬をいれると、瀨切れた小砂利の切斷面から、水と一所に數匹の小蟹が紅色の甲羅に白い腹部をみせて這出してきた。ふいに冬眠を邪魔された蟹たちは、柔い細い足を一刻みに動かしながら、彼の手に拾ひあげられた。時々、ねぼけ面の赤蛙が飛び出しては彼を吃驚させるのだつた。

夕方、一升餘りの小蟹を持つて歸宅した彼は、晴々とした顏で鷄小屋を覗いてみた。そして、兩手に二つ宛の産みたて卵を持つて、堂々と煙草を買ひに行つた。おかくは、垢切れの割目に杉の脂を詰めてから、バケツの中の小蟹を洗つて旅にあげた。餌を食べてゐない小蟹は、甲羅のまゝ眞赤に煎りつけられて味噌あへにされた。

翌朝、白木の駒下駄をはいた娘達は、近所へ挨拶に廻つてから、二三の友達と一所に、募集人に連れられて工場へ行つた。

娘を送り出すと、彼は心の底でほつとした。工場で、一年中蒸される娘の體が心配よりも、家で、よく食べる二つの口が減つたと言ふことは、彼の肩荷を輕くした。彼は、上框に腰を下して、木瘤で作つた煙草入れを腰からはづした。すうつと一服、咽喉の奥から煙草を吐き出しながら、久しぶりに落ちついた氣持で、これから目の先へ行列のやうに續いてゐる澤山の仕事の手順をゆつくりと考へて見た。

二

雪解けで增水した河は、二三日續いた雨にひどく氾濫して、上流の土場(どば)を突つ切つて、其處に積み上てあつた澤山の薪を流して來た。

村人達は、早朝から川岸に集つて、鳶を振るひながら薪拾ひに熱

中した。茶褐色に濁つた激流は、すざまじい勢ひで川底の石をころがし、轟々と瀬鳴りの音響が、村中の空氣を明るく振動させた。春の氾濫は、村人達の薪のかき入れ時である。

天候が恢復すると、何處の家でも、庭いつぱい流木を乾しひろげた。ゆら〳〵と立ちのぼる陽炎が、人々の顔を晴々と陽氣にした。

一日づゝ、目に見えて減つて行く自家の薪を見ると、利吉はぢつと落ちついてゐる事が出來なかつた。彼は庭へ下りて、まだ乾ききらない薪を割り始めた。

舊式な手斧の薪割は、甚だ能率が上らなかつた。製材所へ賴みさへすれば、安價にどんな材木でもずた〳〵と切つて呉れるのだが、彼等のゐろりには、製材所で切つた薪は、使ひ惡くて不經濟だつた。兵隊のやうに同じ型に切られた四角な薪は、燃えつきも惡るく火力も弱かつた。ゐろりには、どうしても手斧で亂暴にたゝき割つた、突刺さるやうな荒くれた肌の薪が實用的だ。進歩した機械と原始生活とは、甚だ仲の惡るいものである。

古い樫の木を割つてゐると、中から粉糠のやうな木屑と一所に、甲蟲の幼蟲がころげ出て來た。彼は、太い指でつまみ上げて、娘を呼んだ。

「すみや、早く來いよ、ごちそうをやるぞ」

「あーい」と言ひながら、すみゑは片跛の下駄を突つかけて飛んで來た。

「トッコ蟲？」

「さうだ、燒いて食へよ」

一二年も樫の幹を食つて太つた幼蟲は、蠟のやうな光澤をして、體を芋蟲のやうにくねらせながらすみゑの手に渡された。彼女はスプーンレースのやうに、手の平の幼蟲を見詰めて勝手口へ走つた。

三

新綠の山脈の頂が、白く胡粉のやうに霞んで、澁濁つた空氣を、瀬の音がかん高く貫いた。雨上りの風は、晩春の氣力を一ぱいに孕んでさわやかに流れてゆく。銀杏の葉のやうな蝶が、その中をよろめいてゐた。山には小鳥の生殖が始まつて、人々は上簇前の蠶に追ひまくられて狂奔した。

間取りの惡るい利吉の家は、何時も蠶の出來がうまく行かなかつた。だが、その爲に家を改築する事が出來る位なら、誰もこんな利益の少ない仕事にかぢりつく必要はないのだ。蠶を飼ふといふ事は、今年の借金を來年へ押してゆく方便に過ぎなかつた。そして押された借金は、雪だるまの樣に、押せば押す程大きくなるのだつた。

繭の收穫が終ると、利吉は直ぐ借金取りの襲撃に逢つてまごついた。秩序立つたものの言ひ方を知らない彼は、外交なれた集金人達の辯舌にまくしたてられると、たゞわけもなく縮みあがつてしまつた。女房は、默つて出がらしの番茶を進めて、自分を胡魔かした。

「もう三年になりますからね、何とか誠意のある處を見せて貰はないことには……」

大勢の集金人の中でも、酒屋が一番執拗かつた。彼は、古い帳面を展げで容易に腰をあげやうとはしなかつた。亡父の葬式の時の酒代がまだ殘つてゐたのである。

「それはもうごもつともで、ありせいすりや、俺だつて拂つてしまいていのだが……」

「何とか方法はつかないものかね」

區切りのない押問答が、何時までも繰り返された。すると、今まで凝つと默つてゐた女房が、突然、絶望的な癇癪玉を破裂させてしまつた。

「ねえ物はねえだで、いくら言つても、ねえものは仕樣がござんしねえ、どうでもつて言はつしやるなら首でも拔いてもらわずかい」

そして彼女は夫の顏を尻目にかけて、投捨てる樣につけ加へた。

「新屋の勘さで、ねえ手は振れましねえ」

新屋の勘十は、戰爭で左腕を失つたので、村に一人の手無しであつた。

いつもは、女房の短氣な癇癪玉に弱らされてゐる利吉も、この時ばかりは、その癇癪が有難かつた。いくら勇氣を振るつても、この眞似だけは出來さうもない彼だつた。

「ありがたかつた。女房大明神だよ」

酒屋を撃退して仕舞ふと、利吉はほつとして道化た言葉を呟いた。

「お前さんのやうな意氣地なしが二人とあるもんか、よくもそれで男の仲間入りをしてられたもんだ」

女房は、くど〱と利吉を罵倒した。野呂間な亭主を持つた女の、生涯の不幸をかぞへ立てゝは、いつまでも猛り續けた。

入口の土間へ莚を敷いて、おかくは盥の中で眞綿を枠にかけてゐた。眞綿は是非とも春蠶の玉繭から取つておかないと、夏や秋の繭は質が惡るいので、仕立てた着物の布目から、外へ吹き出て仕末に困るのだつた。

彼女は永年の經驗から、玉繭を桑の木の灰汁(あく)で練ることにした。藥品で漂白された純白の眞綿は、粘着力がないので、百貨店の裝飾用にはよいかも知れないが、實用には不向きであつた。

繭の一ヶ所に穴をあけて、指で伸ばす度びに、玉繭の中からは、抱き合つた二つの赤褐色の蛹がころ〱と出て來た。彼女はそれを見ると新鮮な食慾を感じた。

「蛹たんとあるかい？」

小學校から歸つたすみゑが、埃で白くなつた髮を振りながら、母親の後から聲をかけた。

「あるとも、こんなに」

そして母子は笑ひ交した。

一仕事濟ましてから、おかくは娘を手傳はせて、旅に一ばいになつた蛹を選り分けた。

「うまさうだね、こんねに太つてるだもの」

すみゑは食慾的な瞳を輝かした。特別念入りに調味した蛹料理は、彼等の家の毎年の季節の食糧であつた。

四

梅雨上りの太陽は、急激に暑熱を増して燃え狂つた。登山の季節が始まつて、臨時乘合自動車が新鮮な果物のやうな都會の客を滿載して山際の道路の往復を始めた。世間は少しく景氣づいて來た。

だが、利吉の家では、もう三日餘りも米を食つてゐなかつた。僅かばかりの乾うどんと、麥粉のスープだけで暮してゐた。四五日前、製絲場の娘のもとへ出した無心狀の返事を、彼等夫婦は、毎日外出もしないで待つてゐた。郵便配達をもてなすために、氣早なおかくは、茶の準備さへとゝのへてゐるのだつた。だが、郵便屋は今日も亦、彼等の家を素通りした。彼等は、バツの惡るい絶望で、お互に顔をそむけて仕舞つた。

翌日、小豆の鹽煮を晝食に食つてゐる處へ、工場の姉娘から手紙が來た。利吉は、箸を投げ出して、早速眼鏡を出して讀み上げた。辨當がなくて學校を休んでゐるすみゑも、心配さうにそれを聞いてゐた。

お手紙を拜見しました。

お金がなくてお困りの由、私も心配をして居ります。少しでも借りて送りたいと思ひましたが、近頃は不景氣で、工場でも賃銀不拂ひとかで、大ぜいの女工達が同盟して工場長といろ〳〵の交渉をして居りますので、私達も場合によつてはストライキをするかも知れません。

そんなわけで、お金を送ることができませんけれども、何卒あしからずおゆるし下さい。ストライキとは、みんなで仕事を休んで工場主と戰ふことであります……

利吉は、途中まで讀むと、その手紙を投げ出した。

「飛んでもねえ話だ！この不景氣に何のストライキなものかい。全く、何がなんだかわかりやしねえ、工場主と戰ふんだつて？べら棒な……」

そして、彼は腕を組んで默り込んで仕舞つた。

「怒つたつてどうなるわけのものでもねえに。ストライキだつて、あれ達ばかりが惡るいのでもあるまいにね」

「惡いも善いもあるもんか……俺達は飢死して仕舞ふぞ……俺はなにか食ふ物をさがして來る」

彼は、むしやくしやして芋畑へ出て行つた。

畑には、薄紫の陰影をもつた馬鈴薯の花が水々しく咲き揃つてゐた。そろ〳〵、莖を倒して養分を根本へ吸收させねばならない時だ

つた。だが、今はそんな呑氣な場合ではなかつた。彼は、弱りきつた芋の莖を根こぎにして、土の中をかき廻した。黑い土の中からは、まだ腐りきらない種芋と、赤坊のやうな肌をした新しい小芋が三つ四つ出て來た。彼は更に次の莖に手をかけた。

「まあ、利吉さは氣でも違つたかね？今ん頃芋を掘つてしまつてどうする氣だか」

振り向くと、お喋りの近所の運送屋の女房が立つてゐた。惡るい處を見られたものだ。

「何だか、ばかに食つて見たくての……」

「冗談ぢやねえづら、まだ小さい子ぢやねえかい、もつたいねい事をするもんだ」

だが、彼女は、それ以上にはもう利吉を追究しなかつた。しばらく世間話を喋ると、直ぐ向ふへ行つて仕舞つた。彼は、泥棒でもするやうに大急ぎで堀り續けた。貧乏をすると、自分で作つた芋を堀るのにも氣がひける。彼は堀跡の新しい土を、目立たないやうに地ならしをしなければならなかつた。

五

燦々と降る太陽の光をあびて、畑には釣鐘のやうな南爪の花が咲いてゐた。午睡時刻の野良には、何處を見ても人の影さへなかつた。利吉は、畑の畔に陽をさけて、熱心に蜂の動靜に注意をしてゐた。野菊の枝に突刺した蟋蟀の肉には、五六匹のすがれ蜂が集つては、それを齧み切つて彼等の巣の方へ飛んで行つた。

充分餌に慣らしてから、彼は愈々仕事に取りかゝつた。小さい肉の一片に、目標しの眞綿を結びつけて、彼は凝つと蜂の樣子を見守つてゐた。軈て、一匹の蜂がそれを喰へて高く舞ひ上つた。同時に彼も、電氣にかゝつたやうに立ち上つた。蜂は空中で一度方角を定めてから、眞直ぐに巣へ歸つて行く。靑々と澄み切つた空を、白い眞綿がくつきりと浮んで、ひら／＼と舞つて行つた。彼は夢中になつてそれを追つかけた。そして彼は計畫通り蜂の巣を發見することに成功した。

夕方、利吉の家では、近所の人々が集まつて蜂の御馳走だつた。地酒の盃をなめながら、人々は次々に話題を繰展げて行つた。

「貧乏暇なしつて言ふが、貧乏人がいそがしいのは、特別たんと働くつちゆわけではねえんだよ、米の心配や錢の工面で、ちつとも心にゆとりがねえのだなあ」

彼等の話題は、いつも焦點がきまつてゐた。

「全く、こう不景氣ぢややりきれねえよ……むかし、みんなが山で麥や豆を作つてゐた頃には、この村に食ふに困るやうなものは一人もゐなかつたに……近頃ぢや、お蠶を飼つて錢がとれるのに食へねえんだからなあ」

「村が暮し惡くゝなつたのは、あの銀行が出來てからだよ、俺達の

若い時分にゃ、どこへちよつくら無心に行つたつて、一兩や二兩の錢はすぐ借してくれたもんだが、この節ぢや、一兩の金だつて證文を書かなけりや借して呉れねえ有様だ」

老人達は、いつも決つて昔の幸福を禮讃するのだつた。

「さうかも知れねえ、鼻糞ほどの小金でも、すぐ銀行へ持つて行きやがつて、只で融通するやうな親切者は一人だつてありやしねえ……銀行つて奴は、まるで吸上ポンプみてえに、村中の現金を集めてしまふ算段だな」

「銀行の事を言やあ、金作さとこでは、氣の毒に山も畑も近いうちに競賣どつて話だ……落葉松の苗木の思惑はづれで、何もかも擔保流れさ」

「落葉松もいけなんだかい？」

「朝鮮からの五百萬本の口が注文流れさ、どうすることも出來ねえで、畑で燒いてしまつたさうだ」

「現金であきたらねえで、銀行つて奴は、田地も家も吸ひあげるつもりだよ」

「一體、この村に借金のねえ家が何軒あるかなあ！」

彼等は、四十三軒の家を片つ端から批評し合つた。そして結局、借金のない家が五軒しかない事を發見して、寂しく安堵した。

酒が少し廻ると、年の若い源十は、荒つぽい句調で利吉に食つてかゝつた。

「貴公、一兩や二兩の金にのろけて××黨の奴等をかつぎ上げたつて、租稅はちつとも安くなりやしねぞ」

利吉は默々と、蜂の子を摘まんでは盃をなめてゐた。

「考へても見ろよ、どだい、百姓が住んでる家の下まで稅をかけやがつてさ……今に鍬や鎌にもかゝるつちゆう話だが、それでも俺達は默つて縮こまつてゐろつてのかい」

「さう理屈ばかり言つたつて仕方がねえよ、全體、今時の若けえ者達や意氣地がねえんだよ。俺等の若い時には、朝飯前に一草刈るのはお茶の子だつた」

源十の老父が、傍からその伜をたしなめた。

「草だつて？ふん、どこへ刈りに行くんだい……今ぢや共有地もみんな政府に買取られて仕舞つたぢやねえか」

眞赤な顏をして、源十は父親を眠んだ。この時、源十の傍にゐた清人が口を開いた。

「言つちや濟まねえが、みんな達は井の中の蛙だよ。人間と生れたからにや、一ぺんは東京の眞中へ行つて十文字の風に吹かれて來る事だね」

彼は、震災をあてこみに荷馬車を持つて上京したことがあつた。

「今日も俺は、區長さんとこの新聞を讀んで來たが、俺はこの村へ農民組合をつくらうと思つてゐるよ。日傭人夫だけが同盟しても、田植やお蠶がいそがしい時にや、今までよりずつと良い日當になる

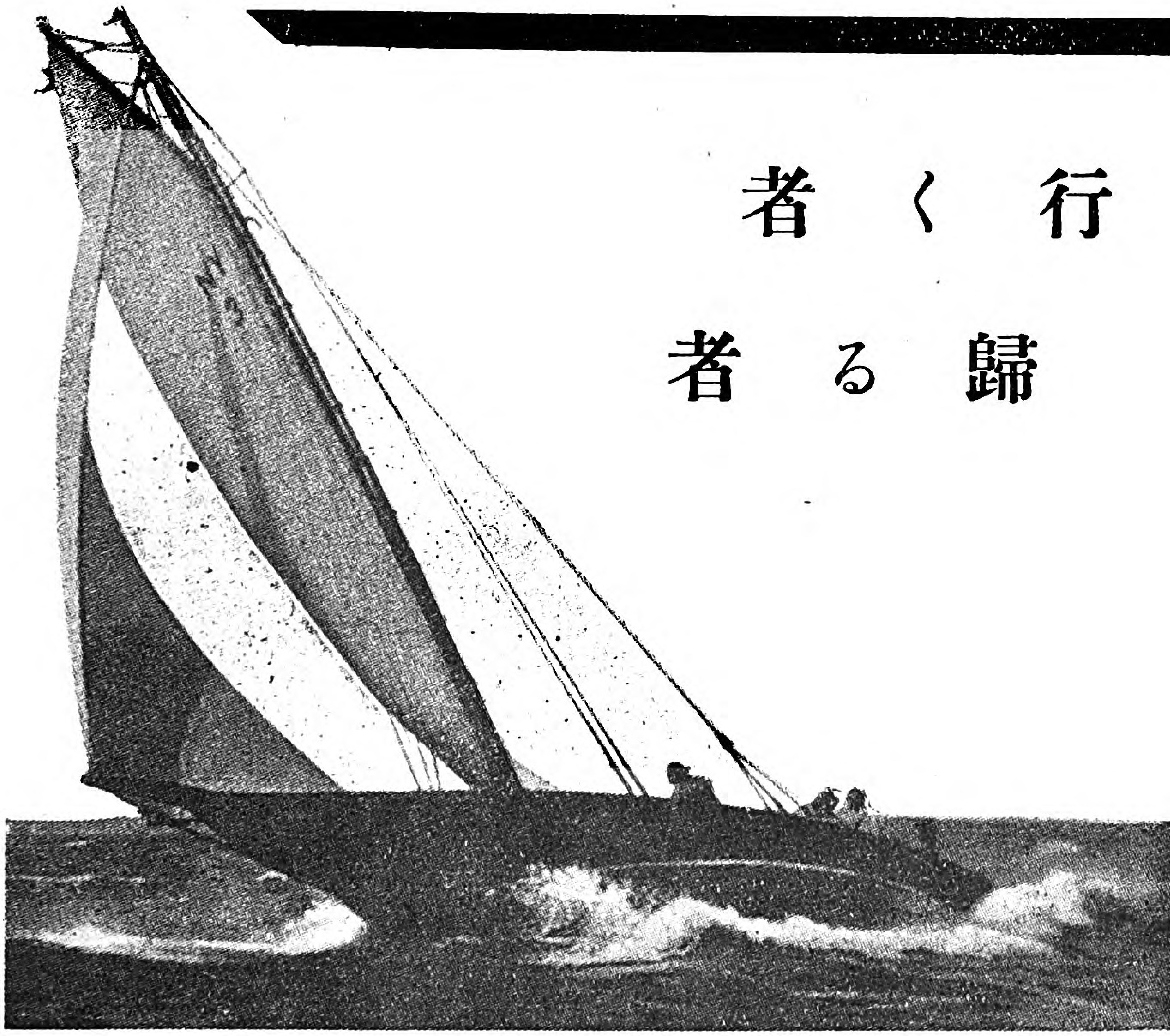
と思ふね」
　そして、清人と源十とは、益々理屈つぽい話に深入りして行つた。利吉は、若い者達の話をきゝながら、その後たよりのない娘の事を考へてゐた。組合だとかストライキだとか、世の中は益々物騒になるばかりだつた。
「糞面白くもねえことだ……俺は先きに歸る事にしるよ」
　源十の父が、煙草入れを腰にさして立ち上つた。

六

「ゐるかい」
　野良仕事の服裝で、清人が勝手口から聲をかけた。
「あがつたらどうだね」
　利吉は、せまい蠶棚の間で、おかくと向き合つて夏蠶の掃立ての最中だつた。手拭を冠らないおかくの髮の毛には、ぶら〳〵と藁屑が引つかかつてゐた。
「何か、うまい話はねえかい」
「相變らずさ……どうも弱つたもんだ」
　喋りながら臺所へ出て來た利吉に、清人は用件を話し始めた。
「實はこの間の晩の話だが、源十ともよく相談して、小作人の組合をつくることになつたんだよ、どうだね、貴公も仲間にはいつて見ねえかい？」
「組合つて……」
　利吉の返事は澁つて仕舞つた。工場の娘達のことが氣がかりだつた。もう十日にもなるのに、一向何の消息もなかつた。
「どうだい、やつて見ねえかい、今からそろ〳〵と秋の準備をして置くんだよ」
　清人は利吉の躊躇を見ると、その不決斷を詰る樣に聲を勵ました。
「俺も體が弱つてね、近頃は少し無理をすると汗が目に入るんだよ……人間もこうなつたらお終ひだね」
　利吉は、出來るだけ話の焦點をさけてゐた。
「どうだね、氣の弱いことを言はねえで、お前も仲間になれよ」
「俺にはよく解らねえんだよ、そんな事は學問があつてちつとは理屈も言へなけりや出來ねんぢやねえか」
「そんな事があるもんか、貧乏な小作人達が、みんなで一つ腹になつて仕舞へばそれでいゝんだよ……町の製絲でも、愈々ストライキらしいね」
「困つた事だよ……お陰であれ達は金を送つてくれないし……」
　利吉の愚痴と溜息を見ると、彼はそれ以上その話を續けるのをやめた。そして、半時間程すると歸つて行つた。
「まだ間のあることだから、よく考へて見るんだね」
　歸り際に、清人はもう一度念をおして出て行つた。

烈しい暑熱が續いて、すみゑが消化不良のために床に就いて仕舞つた。
「何か藥でもなかつたかいね」
おかくは、母親らしい氣遣ひで利吉に話しかけた。
「そんな事は俺に訊かねつて、お前の方が知つてる筈だ」
利吉だつて、そんな事はとうに考へてゐたのだつた。彼は女房の言ひ方が氣にくわなかつた。
「それぢやお前さん、あの娘を見殺しにする氣かね」
「一體、俺にどうしろつて言ふのだ？」
「お前さんだつて親だもん、あの娘の病氣のことを苦にしねえつて法はねえずらに」
一言でも、喋れば喋る程、お互の感情は益々こじれて行つた。彼は默つて蠶室へ立つた。そして、棚の蠶を見廻りながら、下痢止藥を考へてみた。
「さうだ、蟇を食はせるんだつた」
夕方、畑の畔の草の中から、彼は一匹の大蟇を捕へて來た。蟇は桑の木の皮で後足を縛られて、四肢を踏ん張りながら不平さうに引立てられた。
翌日、仕事の手隙を利用して、利吉は蟇を小川の端へ連れて行つた。皮膚に刄物を入れて、一皮くるりと剝ぐと、蟇は全身櫻色になつて突然利吉の手から跳ね出した。そして勇敢に水を切つて泳ぎ出すのだつた。
「こらつ、そんなざまで何處へ行きやがるんだ！」
逃げ出した蟇を、周章てゝ摑みあげると、彼は器容にその臓腑を剔り出した。
「手紙が來たよ」
おかくが急ぎ足にやつて來た。利吉は血に染まつた手を洗つて、それを受けとつた。手紙は町の製糸場主から來たのだつた。
「こりやいけねえ、直ぐ工場へ來てくれつて言ふんだが……惡いことがなければいゝが……」
ぱつたりと風がやんだやうに、彼は急に暑さを感じ出した。
「直ぐつて、このいそがしいさ中に、誰がゆかれるだらず」
「どうしたもんかなあ……」
「淸人さとこへでも行つて相談をしたらどうかと思ふが……」
おかくの言ふやうに、これは淸人にでも相談するより仕方のないことだつた。
「ぢや、俺はすぐ行く事にするよ……ほら、これは下痢止だ、もつてつて燒いて食はせろ」
利吉は、蟇の仕末を女房にまかせると、急いで立ち上つた。

——一九三〇・五・二三——



行く者 歸る者

松田解子

巨大な白鳥の翼に似た曉の雲が海の眞上にある。やがて太陽。金色に波打ち搖れる椿の繁みは、滴る紅の花を咲かせてゐる。娘達は水桶をさゝげ、薪をさゝげ、肥料をさゝげ、腰をゆらめかして紅椿の間を縫ひ歩く……

『なあ、おふぢ姉え…トチカ姉は役場の戸川さんといゝ仲だつて云ふが……』

『そうづらで。一方は金持だし一方は、金が無ふても女振が良らもの……』

『うたてやな。なんぼ金持ちだつて、あの强慾の助平じや……』

『案外惚れてんづら……』

『嘘づら……トチカ姉は心から嫌つてるだつて云ふ人もあんが……』

『それじや、俺がゆづつて貰ふべえよハハハハ……』

陽氣な笑ひ聲が、ひつそりと澄んだ野道をふるはせる。

先刻みんなと別れたトチカは、庭におろした薪の大束をほぐして庇の下に積み重ねてゐた。上り口の土間で茅や藁屑に

埋まり乍ら炭俵を編んでゐた母親が氣附いたと見えて聲をかける。
『早あ行つて來たよな……?』
『おうよ。』
トチカは進まない返事のまゝ同じ仕事を續けつゝも、午後からの草刈はひかげの山にしやうか、ふもとの澤にしやうかなどと考へてゐた。――そうだ、飯が濟んだら潮工合が良いから、磯へでも行つてひじきを取つて來て置かう。草刈はそれからだつて間に合ふづら昨日餘計に取つて置いたんだし……又母親が話しかける……
『爺はな、今日もさつぱりしないつて、見られないしかめ面だが……えゝ、俺まで病氣なる樣だ。男病人を飼ふのは骨が折れて……』
深い溜息をホッと吐いて、今日も亦降りさうもない蒼空を見上てゐる。
嘗ては村有數の船持ちだつた彼等の家は、三度に重なる沈沒の不幸が元で、借金が嵩みその心配から永い間病み續けてゐる父親は、もう、半ば毀れた道具の樣に、立居も獨りでは出來なかつた。母親は、草履や炭俵を作つては、二十錢三十錢の金に代へ、二十になつたばかりのトチカは、牛乳屋の草刈、村有林の手入、てんぐさ乾し等の手間取仕事や、僅か許りの畠の手入、水汲み、薪とり。さゝえひじきの採取等、男も變らない海山の、激しい勞働に日を送つてゐたのである。

『えゝ、うたてやな。又肺病が一人殖えてゐたよな、それでは……』
日曜である。小綺麗に撫でつけた髮をテラテラさせ乍ら、若い上席書記の戸川はニヤついてゐた。魚賣のおきん婆は、カヒカメの腹にグザと庖丁を刺し込み乍ら、未だ顔をしかめてゐる。
『それにな、あいつはとても變ちきな考へを持つてるんだ。身の毛のよだつ樣な、つまりキケンシソウだよ。』
おきん婆さんは解り兼ねた。
『まあよ、第一あの蒼面が氣に喰はねえよ俺には……』
慾張つた眼にお追從笑ひを浮べて歸つて行く。彼は上機嫌だつた。婆の姿が石垣の外に消えると、ステッキを持つてブラリと濱の方に歩き出した……口八丁のおきん婆は、きつと立派な宣傳家になるだらう……思はず笑ひが口元にこみ上げる……遠い海面は、全で紺色の縮緬を敷きつめた樣に動かなかつた。赤茶けた火成岩の打ち續く濱の彼方に、磯のものでも取つてるらしい娘の姿が仄見える。彼は怪しい胸さわぎを覺えて、ゆつたりと、產毛の樣に伸びた芝生から腰をもたげた。

ザァーッ、ザッ、ザァーッ……濃藍の深みが、すぐ足元に覗いてゐる。凄まじい勢で打ち寄せる白い波頭を危ぶみつゝ、ひじきをむしつては身をかはし、身をかはしてはむしり取る。あの波頭は打ち付ける、この波頭は大丈夫だと、頭の中では本能的な智慧が、敏い

動作と一緒に働いて…トチカはやがて、脚も背中もぐつしよりと潮に濡れて、海藻の香がしみ込んで、炎天に暖もる火成岩(いわ)の磯つゞきを、冷い素足で歸りかけて居た。

『おゝ、トチカ姉(ねえ)、とれたかい？』

『おや、戸川さんの…』

新らしい單衣にステッキで、磨いた戸川が立つてゐる。トチカは思はず身をひいた。

『何だつて逃げるんだい…？』

『逃げもかくれもし無あが…』

彼女はもう、見返りもしないで籠のひじきを絞つてゐた。鹽からい滴りが、足元の岩にこぼれかゝる。

『トチカ姉(ねえ)』

『何だよ。』

二人の聲は波に消された。遠い松林の間から、新らしい菓子屋の屋根が見えかくれる。海面には小舟の影さへ見出す事が出來ない。いたづらな男の子の樣に、利島が三角の頭を伸ばして覗いてゐる。

『何だよ、じやないよ。まあこゝに座れ。』

彼女は、逃げ切らない自分が腹立たしかつた。投げ出した脚を岩の凹みに委せて、すて鉢な調子になつて、もう一度聞き返した。

『何だよ。』

…決心するのもさせるのも今だ。と、彼は肉體全部に云ひ聞かせた。蒼白い手頸に力をこめて、豐かに肉づいた娘の肩を、後の方から抱きすくめた。

『止して呉れよ。俺(おら)あな、一ぺんだつてまだ男が欲しいと思つてやしなあだに！』

奪はれやうとする唇に、毒をふくんでトチカは喚いた。荒々しい息づかいも、ねちねちした手も足も、全で一匹の蛇の樣に、ゾッと彼女の魂に寒氣を傳へる…

『嘘云へ…俺が嫌ひだつて云ひたい所なんだらう。』

『冗談…そんな立派な人を何だつて…。』

『お前のお父さんもお母さんも、萬々承知なんだよ。』

『肝心の俺が頼んでゐるじやなあか。』

戸川は、頬も眼も血走らせて、嘆願する者の表情から、奪ひ取る者の表情に變つた。

『なあトチカ！　これがお前の本心かい？』

彼女は急に激 い恐怖におそはれた。眩みさうな苦しさを堪えて、ひじき籠を抱えると氣狂ひの樣に走り出した。――馬鹿にしてるのだ。恰度俺をも、波浮の女郎だと思つてるのだ。――林道に出て振り返ると、かゞみ腰で何かやつてる男の姿が小さく見えた。トチカの胸には、裏返しになつた巾の廣い桐下駄の片方が、憎々しく思ひ出された。

金故に三十前で上席書記に漕ぎつけた戸川は、やつぱり金故に島嶼町村制による天下り村長に祭り上げられた鍋山からの信用を一手に收めて村政の切り盛りから、女郎買のお伴まで、申し分なくやつてのけるのであつた。村會等では全で洋行歸りの樣に取り済して、歯切の良い東京辯で先づ一座を呑む、と云つた所に、村有力者の信望が、いとすらすらと集つて來る、その戸川が、今又一村の平和の爲め默過し難き痛痕事を嗅ぎ出したと云ふのである。

働いてゐるのは柱時計だけの正午近い役場で…彼は故意と更たまつた口調で、ポツリポツリ話し出すのであつた。

『確か、額田といふ奴が影になつて煽動してゐるんです。警察でも未だ氣が付かない樣だけれど。夜など補習學校のある日は必ず、その、危險思想の研究會を開いて、故意に、學校へはよこさない樣に仕向けるんですね。一寸すれつからしで、理窟つぽい事を云ふもんだから、今時の若い者は、大概だまされて了ひますよ。』

事情はもう底の底まで承知だし、その善後策だつて、ちやんと持ち合せてゐるんだと、云はんばかりの確信を眼にふくませて、相手の顔を見守るのだ。

『うゝむ、其の件では校長も大分困つてゐるらしいんだ。何かいゝ方法を考へておく事にしやう。この島にまでそんな者が入つて來る時代になつたかなあ…どうも女郎買ひの出來ん方の連中は、そんな變ちきな思想てなもので間に合せるらしいだね、ハッハッハ。』

離れ過ぎた眉毛を、層廣げて村長は、何か大した眞理でも吐いた者の樣に得意だつた。差し迫つてゐる全島自轉車競爭に出やうといふ青年達が、矢鱈に警鈴を鳴しながら、役場前の廣場を乘り廻してゐる。

時折り東京邊の事業家がやつて來て、植林や乳製品等のプランを立てゝは見るものの、貧弱な資源と所要動力の缺乏から、いつも採算立たずに手を切つて了ふ…で、未だに幼稚な手工業と、半農半漁の原始的生產に埋もれてゐるこの島では、米野菜すら鉄に實らない代りに、彼等の云ふ「危險思想」にとつては、立派な處女地であつたのだ。内地から來た大漁船が、目の前で網をおろしても、村人は唯呆然と見とれるだけであつた。彼等には、歯ぎしりして口惜しがるだけの元氣さへなかつたのだ。けれども、やがて錨を卷く時分前と後に大きな半圓の波紋を描きつゝ、ポンポンといふ威勢よい響きを、海にも空にも反響させて歸る時、青年達は、ハタと異樣な胸さわぎを感ずるのだつた。

『そんな思想に興味を持つ奴なんかより、あつさり夜這ひでもやる方が、未だ始末がいゝじやないか…』

村長が又、ポッツリと云ひ足した。初夏のむせ返る樣な溫かさに誰も彼も怠惰な眠けを誘はれる樣な正午である。

戸川は、其の晩も酒息い息を吐き乍らトチカの所へやつて來て、

一晩中話し込んだ。

『額田つて奴、實に怪しからん。渡り者の癖して若い者をとんでもない事におだてやがる。なあトチカ、お前も知つてるんだらう。その額田つて奴、貧相の、肺病の、危險思想の……』

『惡う病氣でもまいて行くづらで。』

母親が、弛んだ眼瞼をしば〳〵させ乍ら相槌を打つた。

『此の項の若い者の傲漫になつたつたら、話にならねえんだ。俺に會つても帽子をとる奴あ一人か二人きりだ。……トチカ！　何だつて默つてるんだ。それとも、何か俺に話したい事でもあんんかい。よお。』

『何も話なんかないよ。』

てんぐさ乾しで、疲れ切つてゐたトチカは——帽子をとる奴がないか、フンと云ひたいところだつた。

『だからさ、誰がお前にそんな難儀して呉れと賴むんだ。さつさとなる樣になつて了へば、いくらでも樂に活せるんだに。』

トチカはぎくりと考へさせられた。母親の腹の中から背負はされて來た、此の重たい貧苦は、みんな戸川一家のやつた事だ。百度詣りの借金取、裁判所、執達吏、今となつては俺の肉體を狙つてる！彼女は分つた。更ためて分らされた。

漸く醉がさめ切ると、戸川は物足らなさうに歸つて行つた。

『トチカえ、親の身にもなつて考へて呉れろよなあ……』

床に入つて了つてから、母親が嘆願する樣に云ふのであつた。

『……爺を見ろ、呑みたい藥も買ひ得ず、虱には食はれつ放しだ。俺もな、俵を編む度に手の節々が病んで病んで……。』

トチカは、胸一杯に思ひが詰つて、返す言葉さへ持たなかつた。

ドドーッ、ドドーッ——波が枕元までひゞいて來る。やがてゆつたりと目をつぶると濱の芝生や街道で、いつも見かける額田の姿が戸川の惡罵に反撥する樣に彼女の腦裡を掠めては消えていつた。

三箇月近く逗留してゐるうち、額田はすつかり周圍の無刺戟に飽きてゐた。けれど、もう一度起ち上る爲めには、そんな我儘に負けて居られない。靜かな日は海で寢そべつた。雨の日には、一人二人と知合になつた、村の若い衆と話し合つた。情熱家で、眞面目な倩兄つこは、すつかり額田に引きつけられてゐた。

『面白い話を聞くには差支へないが、惡う病氣でも移されんなよ。』

ブツ〳〵小言を云つた果てには斷念めて、こつそりと息子にさう注意した彼の母親も今では、額田といふ內地の人の話を聞く樣になつてゐた。降りさうで降らない雨もよひの空がかかつてゐた。暗い物置小屋で、キツキツといたちが鳴き、垢じみた疊には、むかでが這ひ上つて來る。

『何て思ひ切りの惡う空だよ。……どうせ雨が降つたつてな、內地の兄さんえ、雨水は良う家の井戸にだけしか溜らないだものなあ。』

『本當だね。どんなものだつて今の世の中は、金持の所にだけしか轉んで行かないね。』

額田はさう答へてニッコリし乍ら、粘土細工の樣な色けの惡いさつま芋に手を出した。外の若い者達も、何故か信兄のこの母親の、今云つた言葉にピンと胸を打たれて、沈默の中に微笑み合つた。中には、東京に出て組合に手を染めた事のある源も居た。彼は、どうにも立ち行かない故郷の家を立ちゆかせる爲めに舞ひ戻つて見たものの、やつぱり『どうにもならない。』といふ事をしみぐ\話すのであつた。

『…それでも行く時は、幾らか宛仕送りする積りだつたんだから厚かましいよ。』

一句一句、千切つて打ち付ける樣な調子で舊道の繁が話し始めた。

『島嶼町村制といふやつも困つた代物だと思ふんだ。極く狹い範圍での自治制さへはぎ取られてるんだものな、それがあつたら村々の役場員の品定めも、村民の手でもつと嚴重にやれるづるが…てんぐさなんかの單價だつて安過ぎらあ、村當局が買ひ取る時は馬鹿安で賣値は相當なもんだといふから、利益が役場に殘る筈なんだ…なあ、その內幕は、傍からだつて見えすいてゐるじやないか。あんなちつぽけな、濱の工事にさへ、臭い噂が立つんだもの…。』

『それにお巡りはお巡りで――未成年者だらう、どれ、罪金だぞ――つて譯で、吸つてるバットでも朝日でも取上げてゆくし…。』

一番年下の淸が云ふ。決つた題目はなかつた。バラバラの、而し、生々した反抗の言葉が、若い者達のカッカッになつてる胃の腑から絞り出されるのだ。お互ひに唯それだけでも大きな慰めであつた。慰さめの中から澤山の不平が束ねられて、同じ方向に動いて行かうとする氣持ちが產れて來る…額田はそれをしつかりと摑まうとした。

『問題はやはり組織だらうね。然し、唯考へてゐる丈けだつたり本を讀んでると云ふ丈けじや仕樣がないね。兎に角一番手近な事から始める樣にしたら…僕は餘り事情にも通じてゐないし、はつきりした事は云へないけどそう思ふね。此處は內地の樣に、大資本家對プロレタリアート、大地主對貧農小作人と云つた風に眼の前に、はつきりした對立物を見出せない樣なものの、炭燒にしろ漁民にしろ小自作農にしろ、みんな拔き指しならぬ貧乏の泥沼に追ひ込まれてるんだからね。つまりは資本主義日本の一部なんだから、やつぱり金融資本の支配は受けてる譯なんだ。源君なんかゞ內地に出て組合や警察に關係が出來る樣に、こつちの金持だつていざとなれば、內地の裁判所を通れて來て差押へをやつたり、銀行と結び付いたりすると云ふ工合にね。』

『トチカとこもそれで戸川にやられたんだ。隨分古い借金だが…。』

信兄つこが言葉を挾んだ。

『畑地や山林など何時の間にか二三人の金持ちに見えない糸でたぐり寄せられてる様なもんだ。鍋山だの、新井だの、白川だの……』

『たゞ、考へて掛らなくちゃならない事は、血族關係がとても複雜な綾を織つてるといふ點だね。』

それから額田は、少し宛昂奮の色を增して自分の經驗した大工場の組織や鬪爭の話に移つた。もう全くの夜である。とう／＼雨はやつて來ない。先刻まで雨戸を叩いてゐた生暖い風もひつそりと凪ぎた。何時の間にか婆が寢床に入つていびきをかいてゐる。彼等は何も知らなかつた。唯熱心にきゝ入つた。額田の顏は愈ゝ冴えて、脣や頰が、昂ぶつた血に赤らんでゐる。

『何時頃まで島に居る豫定なんです！』

源は話手の健康を氣遣ふ餘り言葉を入れた瞬間、額田はバッの惡さうな表情になつたがホッとしてゆつくりと息をした。

『成る可く早く元氣になつて歸りたいと思つてるけど……しかし此處に來ても、かうして話合ふ事が出來るんだからなあ……。』

屋内一ぱいに、ほぐれない情緒がむすばれてゐた……この和やかな喜悅は、又明日からどんな苦しい勞働にも生活にも堪えてゆかうとする、どつしりした決心の上に淀んでゐた。

『いよ／＼あいつらしいね。結核のばいきんだけなら村醫でも始末がつくが、どうも思想てやつには蓋がたたんて……。』

午前中派出所で碁を打ち乍ら入智慧されて來た村長が、おかしい程椅子にそり返つた。

『……戸川君、君はその道の經驗者なんだから、少し考へておいて呉れよ、松村君とも會つてな……。』

『さうですねえ、全く思想には戸が立たないから……僕一個の考へじや、やつぱりあいつを追ひ出すのが差し當り一番の近道だと思ふんですがね。島の人間は一體に人が好過ぎるんですよ。何でも新らしさうな事だつたらゾロ／＼ついて行くと云つた風に……要するに淺薄な靑年達が、あんなやつのたいこもちをやつてるのだから、其の本人さへ居なくなれば、又ひつそりしちまひますよ。きつと。』

『うん、まあさうだらうね。どうしたもんだらう。どうも肺病と危險思想はつきものらしいね。』

戸川は、最近問題になつてゐる××事件の逆統計を思ひ出して馬鹿／＼しかつたけれど、上手に相槌を打つ必要を感じた。

『さうですとも。あゝ云ふ不具な思想の持主は、どこか身體にも孔があいてるに極つてまさあ。』

柱時計が、ヂーンと一時を知らせた。簡閱點呼の豫習が始まらねばならない時刻であるヒステリックに、二度目の鐘が打ち敲かれてゐる。けれど、笑へば奧歯まで覗き出す模範靑年永江が、しよんぼり校門に佇んでゐるだけで、校庭は未だひつそりとしたものだ。彼等も思ひ切つて腰を上げた。

『補充兵役陸軍歩兵川村清二！』
校庭では、軈て後備軍曹の前に順々にシャチホコ張つた。熟れた櫻んぼで眞黒に染つた舌を出し乍ら、子供等が喋り合つてゐる。猿の様に木の股から小便を落してキャッキャッ騒いでゐる。廿人位の便衣の兵士が、幾度も『もとへ』を命ぜられた。
『今度あな、山田先生だの、戸川さんだのもやるんだで……。』
子供等はそれが何より待遠しかつた。

身體は、はかばかしくもなかつたが、村の噂を氣にしてゐるらしいおもん婆に、さも云ひ難さうに婉曲な話を持ち込んで來た。それだけではない。彼は再び、待たれてゐる部署に着かねばならない時期に逢着してゐた。あらゆる意味で必要だつたいんとんの短い時間が終りを告げてゐた。いざ行かれるとなつて見れば、婆も何となく淋しかつた。
『兄さんえ、內地へ行つてもな、この婆にハガキだけは下されよ。』
婆は、三人の子供にみんな死なれた上、たつた一人力にしてゐた末弟は五年も前に內地(くに)に出たきり行方が分らないと云ふのであつた。鼻水を啜り上げながら、いつもの通り、一旦鋭くなつた眼元に、すぐ心配の涙をにじませて、その弟が東京でタチンボウになつてゐるとか、キチン宿に居たとか『命の縮まる様な』人の噂を亦繰返すのであつた。

『…おたけ婆家(ばあげえ)の孫は看護婦なつてるだつて云ふが…與八の兒息は、川崎ちう所で活してるし…仕事が無はつたら無あで、とつとと戻つて與れゝば心配は無あでよ。んだに俺家(おげえ)の馬鹿はな…えゝ、今でも此處にあの面を出して見ろ、据えておいて俺が說教聞かせてやんに…。』
額田はトランクなど整理してゐた。彼が拂つた僅かの宿錢で、たつた三ヶ月ではあるが『米の飯が食へて有難い』と云つてた婆は、再び、あしたぼとさつま芋と麥の雜炊に戻らなければならなかつた。
『本とうにハガキをよこすよ。それから、その弟さんも氣をつけて見る事にし様ね。廣くても狹い世の中だから…。』
『頼むだい、兄さんえ、本とうに…良う凪にやり度あがな…。』
晝間は歩けない程街道の埃がひどかつた。半島の方で雷が鳴つても、三原の山頂まで雲がしのび寄つても、雨はちつとも降らなかつた。
『俺あ(おー)茶水を貰つて來るに。』
婆は鐵瓶を下げて出て行つた。明日の船でたつ筈の彼に、お茶でも汲んでやらうと云ふのである。
『居ますか…？』
久し振りで錢湯を浴びて來たらしい源が聲をかけた。
『…もう仕度ですか。』

『あゝ、明日の船に決めやうと思つて……。』
『私は又、もう少しは居られるだらうと思つてゐたが……何でもいい凪に出なくちや損ですよ、ボロ船だから、ボロ船の癖に運賃は痛い程取られるし……。』
『貨物船だつてね、Ｈ港通ひは。實際運賃は高過ぎるね。』
源はふと云つて了ひたい慾望にかられた。
『未だ、はつきりどうつて所までは行つてないけどね。其のボロ船の運賃値下げで一つやつて見やうと云ふんですよ。何しろ始めてゞはあるし……何か相談に乗つて貰ひたいと思つて。』
『そいつはいゝ。まあしつかりやり給へよ隨分これからは、内地(ないち)の勞働者仲間と色んな點で提携してやらなきやならないと思ふんだ……東京方面にも可成り出てゐるらしいね。』
『それは多いんですよ。島で食へなくなつて出て行く奴、東京で食へなくつて島に歸つてくる奴と云ふ風にね。』
『まあ見ろ！ トチカ姉に一手桶大儀して貰つてよ。』
おもん婆が大喜びで歸つて來た。その後から、水桶をさげたトチカが、滴る水をせはしく右手で拂ひながら入つて來る。
『まあ休めよ！ あゝ良かつたなあ…休んで行けよ。若あ者だつて取つて食ふべえとは云ふまあし……。』
トチカは此處までやつて來た事が、何か圖々しい企みであつた樣に思はれて、立つてゐられない程顏がほてつた。
――トチカさんは、美しくもあるが力もあるね――ふと、そんな額田の聲を聞いた時、彼女は歩きながら全身をゾクッと抱きすくめられた樣なはにかみを覺えた……あれが戸川の旦那つこに貰はれるてうトチカだが……とおもん婆が云ひはしないかしら、源はそんな事大丈夫だけれど…彼女はドキドキする胸の中に額田の言葉を繰返しながら、『あの桶をもつと重さうに運べばよかつた』と思つた。

長い旱魃で、使ひ水は勿論、村大半の完備した天水貯溜井戸を持たない家では茶水にさへ困つてゐた。（島には湧水といふものが殆どなかつた）米やおつけはみんな海水で炊くし、錢湯は疾うに海水(うしほ)の風呂を立てゝゐた。毎日毎日力無い平和が、濱の果てから三原山の麓までをどんよりと浮き立つ埃に包んでゐた。畑の物は全で乾上つて了つても、かけてやる水がない。さつま芋さへ呑氣に食ひ飽きる事が出來なかつた。
バラ、バラ、バラ……雨では無からうか、トチカ母子は、其の日もあしたばを捜した居た。バラ、バラ、バラ……振り仰いだが、澄み渡つた空には、白い千切れ雲さへ見當らない。バチッ……バチッ小銃でも撃ち出す樣な音に變つた。二人はぢつとき耳を立てた。半鐘だ。
『おつ母さんえ。』
母は身振ひしながら鉢をつつたてた。

ぎつちりと母の手を握り、鎌もあしたぼも抛り出して山を下つた。灌木にはびこつた蔦や葛が意地悪く足にからみつく。村はもう椿林の蔭だつた。走れば走る程、小銃で撃ち砕く様な音は近づき、半鐘は、恐ろしい速さで胸に叩き返る。漸く村外れに出た時、坂道を息せき切つて上つて來たおうめ婆が、わなゝく指で風下をさし告げた。

『村が半分無あが、おゝどうすんべ。』

『おゝ』

二人は走つた。爺はどうなつた事だらう。……山に無かつた烈風が、こゝではむしり取る勢で吹いてゐる。錢湯屋の裏の竹藪まで燃え移つた火の手を其の勢で高々と打ち開いた。ぼーむ。ぼむ。飽く事無き惡魔の爛れ舌が、地上のもの一切を、刺ある手を以てかきむしつてはなめづり廻してゐる。

『おつ母さんえ。もう錢湯屋が燒け落ちたが……。』

『健家(おらげえ)の爺は死んだゞな……。』

母親は、兩手で顏を掩ふて、意氣地なく打ち倒れた。トチカは咄嗟に身體中の勇氣をしぼつて立ち上つた。

『おつ母さんえ、此處に居るだよ。此處に俺がお父ちやんを連れて來るでな。』

トチカは下側の道から現場に駈けつけた。が、もう彼女の家は近づく事の出來ない熱灰の中でプスプス燻つてゐた。腰を拔かした様な女達が、泣き騷いでゐる。

『馬が死んだ。』

『どうすんべ。俺家(おれげえ)の隱居が居なあが。』

『俺家のお父つちやんをば知らなあな?』

『他人(ひと)どこの騷ぎぢやなあが、家が全燒けだもの。』

『死んだあな?』

『死なずになあ……巡査が連れてつて了つたが。』

魚寶(ほてい)のおきん婆が冷やかにそう云つた。トチカは此の、動かす事の出來ない不幸、取返しのつかない悲しみを、じり〳〵睨み返してやりたい様な、激しい怒りに身を燒いた。けれど、張りつめた希望の破れ目からは、どうしても涙が、溢れるのだ。

あらゆる方向から風はいよ〳〵群がり吹き募つた。

『管が短いで、とても濱から直きには上らない。』

『汲むだな。仕方がない。』

『やれ、やれ!』

多角な火成岩の堆積を踏み越えて、列をなして女達は磯に下つた。男といふ男は、村にたつた一つしかない、一抱え位の小さな押上ポンプを押し、燃え移る火焔に砂を打つかけ土を打ち付け、バケツの水を叩きつけた。子供達は、擂鉢や、やかんで天水井戸の水を運んだ。島内の村々からは非常組が駈けつけた。風力は人力に倍

し、風の卒伍は愈々猛烈に猛んだ。娘達は水桶をさゝげてポンプに向ふ。上汐が彼女達の足から首筋まで冷いしぶきを散す。けれども全身は、より汗に濡れ、沈默の中に結ばれた協同の勞働を果してゐるのだといふ責任に張り緊つた。

もう、太陽は明日の灼熱を宣しつゝ海へ沈まうとしてゐる。半日にわたつて村半分を舐めつくした火も、今はぐつたりと地を這つて深創を負ふた大蛇の樣に、最後の息を引き取らうとしてゐる。

トチカはあれから、眞直ぐに巡査の家に駈けつけたが、既に遲かつた。庭に面した板の間に、父は燒き倒された桴杭の樣に轉がされてゐた。今の今迄最後の望みをかけてきた母は、ペッタリ尻をついて、涙が凋れるかと思ふ程泣き續けた。恰もそれによつて、死んだ夫の、餘りにも永かつた不幸な生涯を慰めてやる事が出來るものの樣に。

其の晩のうちに、村外れの叔母の家に引き上げて、貧しい葬ひの金を工面したり、つけとどけの菓子を注文したりしなければならなかつた。

『俺等(おいら)子供の時分にはな、死んだ時はみんな自分の家で餅をついて人間の格恰に餡えて親類や近しい家に配つたものだがなあ。』

そう誰にともなくつぶやき乍ら、泣きはらした眼に、母親は遠い昔を描いてゐた……そうだ。あの頃は貧乏しても活しは出來た。村欲しい物と取替て貰ふ事が出來たのだ。それが今では全で金だ。金がなければ本とうに生きられない、作り草履だつて店ではいゝ顏して與れないし　衣食も値下り　一方だし、牛乳屋の草刈も、麓じや間に合はなくなつた……

『あゝあ、トチカえ、さつぱりしてまつたなあ……全ですつ裸になつて。』

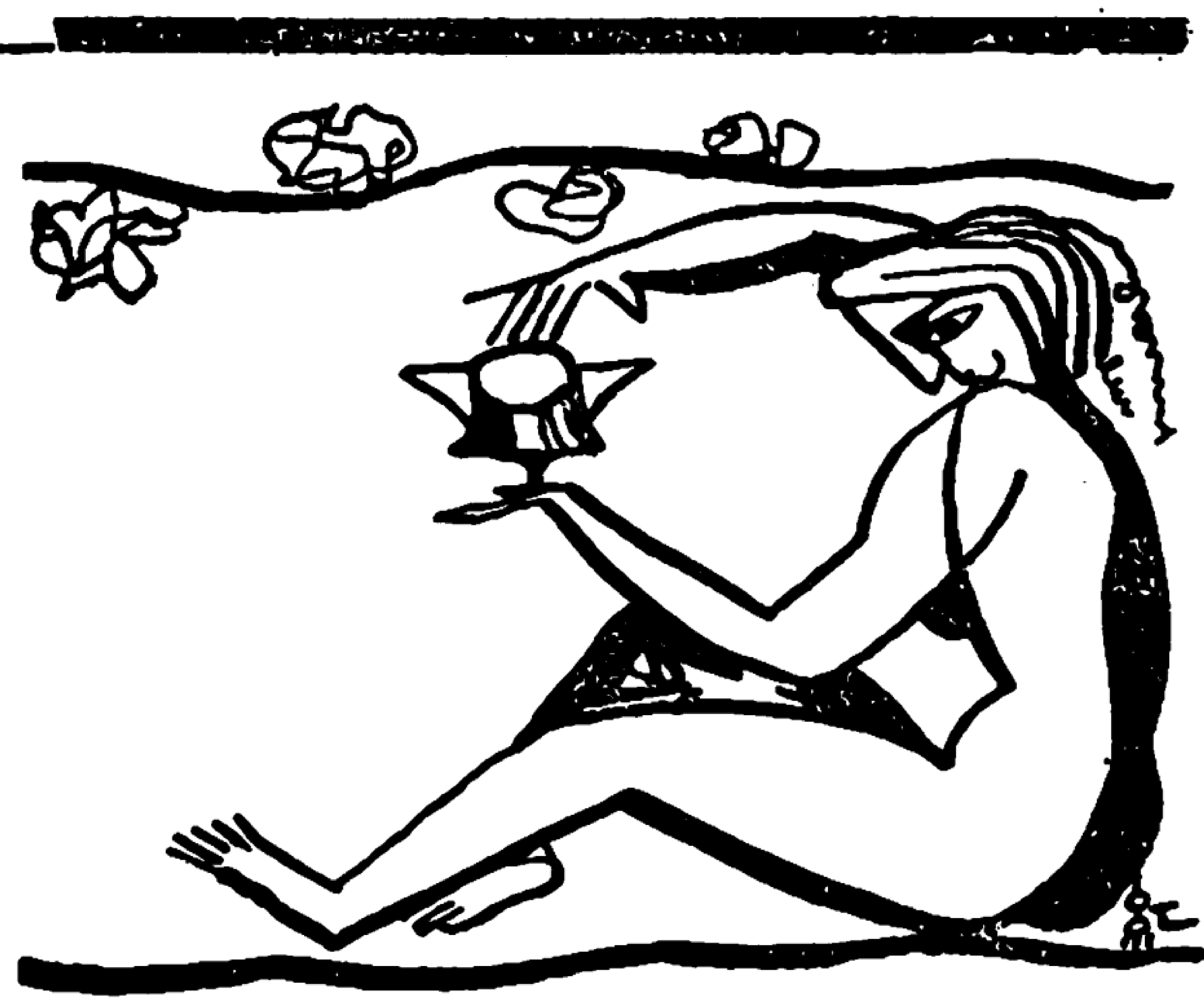
だが、首の廻らない借金と老ひさらばえた母親とを遺されたトチカは、いよ〳〵決心すべき時だと思つた。

『おつ母さんえ、俺をば東京へやつて與れんづらな。うんと働いて金を送つてよこすに……。』

母親は何も云はないで、一人になつてから又ヂクヂクと泣き出すばかりであつた。

火事後の窮乏と組み合つて、T汽船會社を相手とする運賃値下の問題が青年達の間に頻りに論議される樣になつてゐた。

トチカはそれとなくおもん婆を訪ねて、萬一の用意にと、額田のハガキを借りたり、東京の遠い親戚を確かめたりして、青年達の呪ひの的、そのボロ船で夜逃げ同樣の出帆を決行したのである。



結婚地獄（みちづれ）

ヴイクトオル・マルゲリット作
望月百合子譯

第二章——七

『それにしても、ルボオは誇張してるわ！』とアニックは手にしてゐた新聞を落し乍ら言つた。サロンが開かれてから殆んど毎日、ラッペル紙はメルカンチスとヂナンドルに對して挑戰した。ルボオが書かない時は、皮肉な美術批評が載せられた。シモンヌは、フランス婦人の貞操をふりかざしてこの『破廉恥漢』を罵倒した。

アメデエは、いま砂糖をかき混ぜたばかりの小さな匙をコーヒー茶碗の上に引き上げたなり言つた。

『また何かルウソオに對する文章が？』

『えゝやつぱり！まあお聞きなさい……

（猥校長よ、身の安全を思ふな、何故なら未だ制裁は加へられてゐないからだ！ ジヤン、ルウソオは、外國人の眼に、吾々の風習を淫猥化した繪によつて、フランスの美はしい名譽を傷つけて見せんとして再び罪を犯した。彼は既に、かの有名なるマンショウの三曲畫に依つて光榮ある國體を汚したではないか？ 汚泥の中から黄金をかき集めることにしか興味を持たない彼が、道學者たらんとする自負は、この悲慘な輕擧盲動に於て、最も自分の心を痛ましめるものである……）』

『ちえつ！ それやまつたく酷い！ だが、ルウソオと、彼の無慾恬淡さを知つてゐる者にとつては、それや莫迦々々しいよ』とアメデエは言つた。

『まあおきゝなさい！ まだおしまひぢやないんですから……（加ふるに、かの淫逸なるメルカンスは、大膽にもその商品を理想の旗で掩つてゐる！……政府は只、風俗紊亂の廉に依つて、この公安侵害者を輕罪裁判所に引き立てる前にまづ他の制裁をも加ふべきである。既に夥しい告訴が検事局と同時に文部省にも到着してゐるとい

ふ。この無頼の畫描きが、これ以上まだ美術學校で、公然と毒素をふりまくことを自由に續けることが出來るだらうか？ 彼が次の害毒を流し始めないうちに追ひ出すべきだ。吾々は、文部大臣、司法大臣、及び共和國の大統領が、これ以上ある關係を恐れて逡巡せざらんことを望む！ 倫理、政治學會員ヴィルフォー氏が、道德的義務をのみ思ひ出して、政治的言行を忘却せられんことを望む！……』

『莫迦な！ ピエール、ルウソオの胃袋には！…若し貴様でなけや、貴様の兄弟がこんなことをさせるんだ！』

デレッタントの彼はこの苦い塊を餘す處なく味はひ盡した。彼の考へでは、こんな攻撃では、第一ルウソオは何とも思はないし、かうした書き方では、世間の輕蔑しか惹き起さないのだ。

『さうだ！ 一切が明白だよ！ この暴論は――初めは分り難いが――。ともかくあの馬鹿者は利口だよ…ならず者には違ひないが、利口だよ！ この暴論にはたつた一つの目的しかないのだ。それはルボオが第九區に提出した立候補に對して投票を集めるためだ！ たうたう彼も本音を吐いてしまつた…おや、呼鈴が鳴つてゐるね？ 誰か來る豫定だつたかね？』

『えゝ、ブルウサ夫人とゼロノフが、丁度三人でルウソオの處へ行かなければならなくて。貴方にそれをお話するのを忘れてゐましたわ…貴方はお暇ぢやないことが分つてましたから』

彼はからかつた。

『何？ ぢや今日は司法省ぢやないんだね？』

彼女は彼の面白からぬ氣持ちを感じたので簡單に答へた。

『いいえ、ルウソオの家の歸りに、サンシュルピスの事務所に相談を受けにゆくだけです…司法省にはゆきません！』

『氣晴らしに、お友達に會ふとは幸ひなことだ！…さもないと、あなたは退屈する』

丁度そこへゼロノフとブルウサ夫人が入つて來たので、彼女は手を差しのべ乍ら彼等を出迎えた。そしてアメデェの云ふことを何んにも氣にかけてくれるなといふ顏をしてみせた。彼女には、彼の針で刺すやうな辛辣な觀察も、同じ職業を持つ彼女の活躍に對する彼の、輕い調子の下にかくされてはゐるが益々增大してくる敵意もよく分つてゐた。

『ラッペルか！』とゼロノフは足で汚い雜巾か何かのやうに新聞紙を蹴とばし乍ら言つた…『ルボオの書いたのを讀まれましたか？…何んといふ汚い奴だか！ おかしなことには、今晩私はあの男に會ふんですよ。私はサン、ヴァレンタン伯爵夫人の晩餐に招ばれてゐるもんですから。』

アニックは最近の社交會報で讀んだので彼女の名を覺えてゐた。

『公爵、たんとおしやれをなさいませ！』と彼女はからかつた。

彼はおどけて挨拶して言つた。

『申上げておかなければなりませんが、この伯爵夫人は――ベルギイの貴族ださうですが――面白い婦人です…それにたとへ動いてゐるとは言へ、可成り古い繪のやうな婦人です。私の最近の繪を買ひました。――もつともたゞで、まだ支拂つてはゐませんが――あそこに行くと巴里中の人に會へるんです。今日はロンシャールも、レイクメイヤアも（下らない人間共だが！）行く筈です。――まだ…數えたらいくらでもあります。モルヴァアル夫妻もですよ、君！…それからと？ 司法大臣のソルムウも、ルルダル夫妻も、それら勿論ルボオも…』

『何んといふ取り合せでせう！』

『ロシヤでは…私はかう云ふいろ〳〵な人々の混つた會合を可成り好きです。毎晩では困るが！』とゼロノフはブルウサ夫人に微笑し乍ら言つた。…

『では、貴女お一人ですね？　ぢや私達と御一緒に晩餐をおとりなさいよ。そしたらゼロノフさんがお迎えにいらつしやるでせうから』とアニックが言つた。

『さうしませう！』とゼロノフは眼でブルウサ夫人の承諾を求めたのちに言つた…

『貴女方も時々社交界に出て御覧なさい。隨分面白いことがありますよ』

『どのサン、ヴアレンタン伯爵夫人も似通つてゐるんですよ。だからどの晩餐だつてやつぱり！　それを一つ見たなら…』とブルウサ夫人が言つた。

『それ等を想像するだけで、私は吐きたくなりますわ…』とアニックは起ち上り乍ら言つた。

『相變らず過激ですな！』

　アメデエは靜かに、彼女が調子だけの友情しか持つてゐないのだといふやうな眼でぢつとみつめてゐた。その非難の色は彼女の心を打つた。彼女はそつと彼を見た。彼が怒つてゐるので、たとへ心ならずにしろ――少くともさう彼女は想つた――凡てが彼の苦い悲しみを刺戟する口實となつた。

『では、もういらつしやるんですか？』とアメデエは訪問者を送つて行つて、アニックを抱擁しながら言つた。

　アニックは訪問者達が既に少の間に出てしまつたのを幸ひに、急いで事務室にとつて返した。

『貴方もお出かけになるんでせう？』

『まだすぐにではない』

『えー　でも貴方は三時に中央委員會でランデエ、ヴウをなさるんだつたわ…』

『四時に行けばいいのさ…それまで、仕事がある』

　彼は手紙や、訴訟記錄や、書物の堆積を示した。

『私が家に殘つてゐる方がいいんですの？』

『そんな必要はない。午後は、貴女がゐないことに慣れてしまつたから…』

『貴方だつて、決して家にゐらつしやらないくせに！』

『僕が家にゐる時は、貴女が居ないのさ』

『ではどうしたらいいんです？』

『どうしたらつて？　それやいろんなことが原因なのさ…司法省だの、貴女の仕事だの、友達だのつて…それだ。まあ、まあ、そんなことは何んでもありやしないよ。僕はそれを認めてゐるよ』

　彼女は急いで彼を抱擁した。彼女はブルウサ夫人に一緒に外出することを斷りたい欲望と、さうすれば、切角、都合のいい時間をめつけたのにルウソオを慰さめにゆくことが出來ない殘念さに迷つた。だが彼女はやつぱり出かけることにした。

『では晩に。お歸りをお待ちしてゐるわ』

　否、何んの意味もない氣紛れに決して讓つてはいけないのだ。それが大きな危險を伴はないかぎりは！　新らしい脅威が、勿論渾沌たるものではあるが、だん〳〵とはつきりしてくるのを見て彼女は恐怖した。

美術學校では思ひがけないことが起つてゐた。彼等が行つた時、ルウソオは引越しの最中だつた。……彼に對する餘りに亂暴な攻撃に氣を腐らせて、彼は前日文部大臣に辭表を提出したのだつた。

『今迄我慢して來たんだけれど！……おゝ！　私は彼等の言ふだらうことを知つてゐる……ルボウが明朝の新聞に書くことだつて、今から分る（この彼の外面輕蔑してゐるが如き態度は、要心に過ぎない……ジャン、ルウソオは辭表を文部大臣の鼻先に叩きつけたやうな風を裝つたが、實は彼は不名譽な免職を受けたのである……いかに巧妙に化けても何人をも欺くことは出來ない……）とね。それから、エ・セトラ、エ・セトラさ……」

『でも、何んて悲しいことでせう！』とアニックは叫んだ。

『豚共が！』とゼロノフも呟やいた。

『まあ放つときなさい！……私はいま迄首に鎖をつながれてゐたんです。それが今自由になつたんだから』

パイプをくわえて、彼は快活に荷造の指圖をした。彼は荷造の高い箱が散亂してゐるアトリエを早く片づけようとして急いでゐた。……友人達が手傳つてゐた。ゼロノフもすぐシユミイズの腕をまくり上げて手傳ひ始めた。マレショウの三曲畫を取り去つてしまつてから、全く壁がむき出しになつた廣々とした室內は空虛のやうに思はれた。その三曲畫はデンマアクの商人にではなく、有名な古物商のシルジユマンといふ男に賣られたのであつた。彼はひそかに狡猾な、要心深いレイクメイヤアのために働らく、男であつた。だからルウソオは薔薇の花の名譽章を與へられないだらう！……

『世間で言つてゐることは！』とルウソオは嫌惡の唾を吐き乍ら言つた『みんなある一つの、うまく作り上げた計劃によつて振り撒かれた噂ですよ……何んて阿呆共が多いことか！　ともかく、彼等の挑戰の最初の効果は、私に賣りたいものをみんな賣らせることですよ……ヂナンドルのスケッチまで！……五百法ではいけないが、千法なら手離すつもり！　だがあの二つの大壁畫は保存しておきます……後で、もう一度展覽會に出すつもりだから……三枚目を描き上げたら……そら、アタムとエヴのですよ！……未來の都市へ向ふ行進です……その時こそ彼等は、若し見たいと欲するなら見るでせう！……それまで、さようならだ！……モオルの海岸には健康な空氣がある……貴方がたは私の小さな地所を御存知ありませんね？……キルクの樹や、松や、太陽や、海や……それに三曲畫を描くにも十分に廣いアトリエと！……是非私を訪ねて來て下さいよ。天國！　あそこを知つてから三年になりますが、私は、一年の半分を巴里で暮らすなんてお前は馬鹿だ！　と自分で思ふんですよ……だがいまは何んにも私を引き止めるものはないのだから……』

クレベエル街以外の處に住み得るといふことを考へもしないゼロノフは叫んだ。

『巴里を去られるんですつて！……それや間違つてゐますよ！　第一、貴方はまだあんな攻撃を防ぐことがお出來になるんだから……』

ルウソオはパイプに火をつけるに用ゐた半分燒け殘りの紙片を指さして言つた。

『輕罪裁判に引つぱられるかも知れないんですよ、さうなつたら大變だが……いや、そんなことを彼等がなし得るとは思ひませんが！……昨日弟の話では、ソルムウが各方面の僞善的團體の懇請に對し

て、（追窮だつて？　あの輩が無罪になることは諸君も御存知だらうが！　いまはかうしたものに對しては刑罰を科さないんだ！）と答へたといふことです。それに、若しかうしたものが罪になるなら、同時に、私のためにモデルになつた凡ての人々も、やはり論理上牢獄に入れられなければならないんですからな！　さうなつたら大變な處まで波及する……』

『まつたくです。だが十年このかたといふもの、おかしな事件にばつかりぶつつかりますな！……あの大戰爭は吾々に迚も激しい震動を與へたものです。そのおかげで、到る處で底に沈み込んでゐた糟が表面までも浮び上るのです……』

　アニックは彼をブルウサ夫人に任せて、ルウソオにお別れのキスをさせてくれるやうにと願つた。彼女は、自分の上にこんな驚ろくべき出來事が偶發したルウソオ自身よりも强く感動してゐた……何んといふ陰險さだらう！……凡てが、思つただけで、彼女の怒りを煽つた。大殺戮の責任者共が罰しられないことも、その殺戮を軍隊力を用ゐて長びかせた野心家や、無能力者共が罰しられないことも、民衆の滅亡に依つて肥えたり、間違つた平和恢復に依つて懷ろを肥やした惡商人共が罰しられないことも……。上層は、猛烈な利益と眼がくらむ程の廢頽だ。下層は、疲勞と、さんざんに惱み苦しんだ揚句の無氣力だ！……　內に包まれてゐる怨恨は次第に增大しつゝある……而も惡黨共の仲間はその僞善道德を眞向にふりかざして彼等を助けてゐると思つてゐるかも知れない？　何んといふ愚弄だ！……

　面會の約束がしてあつた二人の婦人の相談を受けてゐるうちに、――急いでアメデエより先に家に歸るために、アトリエを去つたのち――やつと平常の晴れ晴れした氣持ちになれた。彼女の不斷の詮索傾向はいつも、天性の活動癖に讓つてしまふ。

　その夜は一晚中彼女とブルウサ夫人が盛んに話した。十一時頃になつて夫人を迎えに來たゼノロフは一層話の火を搔き立てた。彼は短かいが荒々して言葉で、晚餐會の話をした。そして食後、（勿論、婦人はサロンで、男子は喫煙室でだが）馬鹿騷ぎをしたことを話した。

『他に言ふべき言葉がないんですよ！……まつたく！　絕對的權力を持つロンシヤアルは、海軍設備に誇つてゐるセッソンと、功利的な戰爭論をしてゐるし！……』

『セッソンと？』とアメデエはアントアネットと誘惑事件を思ひ出して微笑しながら言つた。

『あの男は免訴になつてさぞ喜んでゐるでせうな！』

　大戰中に創立した數多の會社の虛構の配當分配のために、輕罪裁判所に引致されたこの船泊管理人は、最近放免されたのであつた。

『併し一番おかしかつたのは、レイクメイヤアがソルトムの前には頭が上らないんだ、ソルムウはルボオの前に頭が上らないんだ！…いや、まつたく笑止千萬ですよ！　司法大臣で賞勳局長が背骨を屈げて全くの侫人になりすまし、ラッペルが司法大臣の平身した體を讃賞しながら、追窮させようとする……レイクメイヤアの言ふことをきく時のソルムウの眼は險しくて、ルボオの言ふことをきく時はやさしく微笑してゐるんですよ！……つまり大臣にとつては、このルウソオの問題は好事件なんです……あの人々はラッペルが勢力を持つてゐるものだから、その意見に贊成するんです。そして政治上の敵に對して卑劣な行爲をしようとしてゐるんですよ』

『さうしたらピエール、ルウソオは國民團に對して左傾團を組織するやうになるでせうよ！』とアニックが言つた。

『併し何よりも酷いことは、フロオベエルがルウソオに就てあんなことを書いたのは――みんなルボオの卑劣手段なんですよ！　あの男は、君の父上と僕の前で、サロンに行つてみもしなかつたことを白狀したんです！　あの男は見もしない畫のことを云々したんですよ！……で僕は『それなら少くとも貴方は公平無私でゐられますな！』と言ふと、まあ彼が何んと答へたと思ひますね？……（ゼロノフは嗄れ聲を眞似て）

『勿論さ！　私は畫の影響を受ける危險を冒さない。何人もその權威を否み得ない處のモルヴル氏はルダル夫人の前で御意見を述べられたが、それで私の信條には十分ですよ。公爵、それに――勿論ソビエットのキユビストの聲は別だが（それは僕のことですよ！）ヂナンドルが最も汚らはしい醜畫であるといふことを認めるためには唯一つの聲しかないんですよ。幸ひなことに、モスコオも――世界中のあらゆるルウソオと同樣――まだ吾々にその獨裁を以つてあゝ云ふ醜畫を强制するまでになりませんからね！……』と云ふんです。併し私が仄めかしたヂナンドルはピエールのではなくてジヤンのだつたのです！……といふと彼は哀れむやうな眼で私をみつめ乍ら『凡て、政治に於ても、藝術に於ける如く相關聯するものです。今日はたつた一つのフランス、勝利のフランスしか存在してはならないのですよ。私は私が手を伸し得るかぎりのあらゆる地盤で、フランスの威光を弱めるやうな危險を冒す奴等と戰ふことによつて、民衆の健全のために義務を盡すのです……』と言ふのです。いやはやまつたく！』

アメデエは叫んだ。

『畜生！　彼奴は一昨日もパンテイエーヴルの會場でさう言つたんです。その繰返しだ』

ブルウサ夫人は胸をむか〳〵させて言つた。

『ロンシヤアルにも、ソルムウも、ルボオも、嘘僞で生きてゐる人々です！　不幸なことに萬人があの人々の踏臺にされてゐることですわ！』

『毛を刈り取られるまゝになつてゐる羊達のためには可哀さうでも仕方がありませんわ！　羊飼を取り代へればいいのに』

『そのために働らいてゐます』とアメデエが結末をつけて、思はずも欠伸をした。それを機會に友人達は歸つて行つた。

『貴方はあんまりお疲れになり過ぎるのよ』と、數日後のある朝、アメデエが頭痛がするとこぼしたので、アニックが言つた……『今日はみんなを散歩にでもおやりなさいな……選擧！　選擧つて！　まだ早すぎますよ。それは十月ぢやありませんか。まだたつぷり二ケ月もあります……みんなのやうに休暇をお取りなさいよ』

『みんなの樣にだつて！　僕の選擧人達が休暇を取ると思ふかね！　勞働者には休暇はないんだよ』

『だつて議會には休暇があるぢやありませんか。貴方だつて一二週間はお休みになれますわ……貴方があまり遠くまでいらつしやりたがらないんですから、暫らく、ヴェルサイユにでも行つて住みませんか？私達はほんとにあそこが好きなんですもの！……トリアノンの散歩はどんなに愉快でせう！　貴方のためにはブランシエがゐるし……私にはメレットも、モニックもゐるし……』

彼はさうすることに依つて彼女自身を說得することが出來ると思

つたので、すぐ彼女の意見に贊成した…平常の生活を變へて、一日中一緒に暮らすことは完全に親しみを增して…若しかすれば容易に、頑な彼女を征服して、決定的に彼女を彼のものにすることが出來るかも知れない？…

彼等は忙しい仕事の後に、打ち捨てられた後園の壯嚴な並木道の綠の陽を浴びて溫泉か何かのやうに樂しんだ。プチ、トリアノンのメランコリックなイギリスの庭園を持つた、小さな館の裏に――そこはかつて王朝の崩壞をよそに、マリイ・アントアネットが住んでゐた館で、この廢居の裝飾は落ちかゝつてゐる――彼等は忘れられたやうなグラン・トリアノンを見出した…ルノオトルのデッサンは、『太陽王』の時代の如く、その星光形の辻と共に、いま尙見分けることが出來る。併し到る處、自然がその上に、掩ひかゝる雜草と、深い藪とを以て甦生しつゝある。

彼等は彼等の聖地を巡つて見た。野生灌木は常に寺院の圓柱に沿つて、綠葉を增して行く。去年と同じ場所に、同じ晝顏の靑い花が咲いてゐた。何故、淸らかにもかつての思ひ出を彼等が再現しようとしても、彼の日程滿ち滿ちた幸福になり切れないのであらうか？何故、二人の合一を行はうとせずに、子供の出現は（アニックの胎内にいま現はれてゐる）彼等の最初の希望とは全く反對に、彼等の間に無理解の溝を深めつづけるのであらうか？…

マドモアゼル・アルデイの賢明な影響も、穩健な哲學も――彼女を非常に絕望させて――お互に讓步し度いと思ひ乍らさう出來ないでゐる彼等二人をよりよく理解させ合ふことは出來なかつた。アニックは保存本能をそのまゝ、アメデエは遺傳的支配欲をそのまゝ、むき出しにして互に讓らうとはしなかつた。彼等は互に卒直に告白し合ふことが出來ないで潛在的對抗を同じやうに苦痛に思つてゐた。

ブランシェの家を訪問すると、それは思ひがけなくも苦しい場面の最中だつた。それはアニックに決心をしつかりと確めさせ、同時にアメデエには謀叛心を唆つた。

『あゝ！ いい處へいらして下さいました！』とジョルジュ・ブランシュは芝生の奧から彼等を見付けて叫んだ。

旣にもう幾度も、アニックは、彼等の家庭生活がすつか ちぐはぐになつてしまふだらうといふ感じを持つた。メレットの考は正しかつた。彼等の家庭生活は困難であるばかりではなく、もう劇的にまで切迫してゐるのだ！…只體裁を重んずる爲に、モニックとその夫の間に言ひ爭ひが起らなかつただけなのだ。併し今度は夫婦とも頑張り合つてゐる。苦しい沸騰の氾濫だ。

『君を裁判官にするよ！』ブランシェはアメデエの腕を取つて、自分とモニックの間に据えた…『貴方がたも御存知の通り、いつまでたつてもシャルドン・ブルウの問題です！…モニックは、事業が不振になつたのと、適當な支配人が見付からないといふ口實を以つて、どうしてももう一度事業を自分でやると言ふのです。若し事業に眞劍に身を入れれば、吾々の家庭生活は壞れてしまふのです。第一モニックは子供に乳をやることも出來なくなるでせう…』

アニックは、本能的に自分の友達の傍らに腰かけて、力づけるやうに優しく抱擁した。彼女自身ひそかにモニックに味方した。若し働らきたいなら働らくことはモニックの權利だ。絕對的權利で、而もそれは尊重さるべきものだ。殊にまた、自分の利益を管理する最も確實な方法である以上は…

『惡くお考にならないで下さい！　私のお乳が少なくなつてしまつたことは貴方も御存知ぢやありませんか。どうしたつてシルヴエストルはお乳を離さなければならないんですよ』とモニックが言つた。

『とにかく、モニックは子供達の世話も少しも出來なくなるでせう‥‥そして、自然に夫は‥‥。シャルドン・ブルウは、あれ程大きな事業だからどうしたつてモニックの時間を全部消費してしまふでせう』

『一日に三時間だけですわ、午後に。だつてマドモアゼル・アルデイが迚もいい副支配人を見付けて下すつたんですもの‥‥』

『さう言ふものさ！　そのうちにすぐ、午前中もう二時間、夜も時間といふことになるだらうさ‥‥生活が臺なしになつてしまふ！そんなに金を儲ける必要がどこにあります？　あんな事業なんか賣つてしまひなさい。五十萬法にはなるんだから。あの事業から今日上る利益は二萬法しかない。賣れば吾々の收入を增し、吾々の安息を確實にする‥‥』

『貴方のを』

ブランシェは蒼白めた。

『僕はお前の財產には手をつけずに生活して來た。そして吾々が結婚してからといふ　の、吾々は、僕が得た金で生活してゐるぢやないかそれはお前の財產からの收入と同　だ。さうぢやないか？』

『まあ！　ジョルジユ、そんな風にお考へになるもんぢやありません‥‥私は只、貴方が、私の働らくのを妨げなさつて、始終、無制限に私を貴方のものにしてお置きになりたいんだと云ふんです‥‥‥』

『その上、分割されることなしにだ』

彼女は惱ましく蒼白めた。

『貴方は、貴方御自身がお仕事に熱中してゐらつしやる時間に、私が私の仕事にもう一度心を向けることが出來るつてことを考へては下さらないんですか？』

『それや考へる。だがさうしたら、僕はどうしても、お前の生活內にあるお前の息子だの娘だのといふ新らしい要素だけでは、お前にはもう十分でなくなつたのだと認めるより他に仕方がないよ』

『貴方を育てたルイズは私がシャルドン・ブルウに行つてゐる間、子供達を見てゐることが出來ます‥‥』

『よき乳母も、母親には劣るといふ事がある』

『何んといふ御冗談を仰有るんです！　ジョルジュとミルヴエストルの年で‥‥いいえ、子供達は母親を女中代りにする必要はないんです‥‥問題をそらさないで下さい』

『では、僕は父親ですか、さうではないのですか？　僕は僕の思ふやうに、吾々の生活を組織立てる家長ではないかね？』

『それや貴方はお父樣ですよ。併し家長ではありません。貴方の奴隷も人間だつてことをお考へにならなければいけません』

彼女は起ち上つて友達に詫びた。

『失禮しましたわね。オランジエードでも召上りにいらつしやいませんか。何んにもお氣にかけないで下さい。三週間以來、かうなんですの‥‥あの人は氣違ひのやうになつて‥‥』

ブランシエは、モニックが思はず平靜を失つた程意地惡く嘲笑した。

『何、言つてるんだ！‥‥ぢや、お前のその言ひ分の本當の動起を言へるなら言つてみろ！　言つておくが、氣をつけろ！‥‥お前を

愛し始めてから、この見つともない疑ひに一ぺんだつてお前を強制したことはない！…若しお前がそれを告白するだけ謙遜になれたら、僕は…』

アニックは彼の威脅を止めた。そして言つた。

『モニック、默つてゐらつしやい！ 貴女自身をいとしみなさい……』

『あの人は私をいとしんでくれますか？』

彼等はみんな立つてゐた。ブランシュは夢中になつて叫んだ。

『お前がこの不條理な計劃を止めて、僕に從ふか、否かに依つて、吾々が別れるか否かゞ分るのだ…』

『君も默り給へ！』とアメデエが押へつけた。

彼はブランシエの腕を掴んで、冷靜に話を分らせようとして引つぱつた。アニックとモニックは二人の男が遠ざかつてゆくのを眺めてゐた。ブランシエは身振りをしながら、ジヤクマンは一方の腕をブランシエの肩にかけて、彼をなだめすかし乍ら…街の角を二人が曲つてしまつた時、モニックは、賴りなげにアニックの胸に身を投げかけた。そして涙が乾いてしまつた時言つた。

『あゝ？ 過去は…過去は！ ジヨルジユはいい男ですの、あの人は私が無上に愛してゐることを知つてゐるんです…でも、シヤルドン・ブルウの仕事と同時に私が、昔の人々に會ふかも知れないし、またいろ〳〵な誘惑に遭つたりするだらうと思ふと…馬鹿な！…ありもしないことを苦に病んで…一ぺんだつて何んにもありもしなかつたことを…私はこの苦しみを前にも苦しんだんですよ…もう一人の、あの人よりも寛大でない男が私を同じやうに苦しめたんです…あゝ？ アニック！…男といふものは、一番いい人達でさへも、愛し、殊に愛されてゐると感ずる時、暴君になります。そして愛さない時は亂暴です。私はどうしたらいいでせう？ 若し貴女だつたらどうなさつて？』

アニックは、過去の苦しみにも拘らず、優しくて、純な彼女が、心の底に隱してゐるものを探るやうに、ぢつとモニックをみつめた…賢明で正しいと信ずることを實行するだけのエネルギイが十分にあるか知ら？ 愛の前には、夫の意志に對する叛逆よりも、弱さの方が大きくはないか知ら？…

『私だつたら讓歩しないでせう』と彼女は呟やいた。『でも貴女は、讓歩なさるでせうよ！』

モニックは深い溜息をした。

『それや貴女は丁度アメデエさんと、同じ心で仕事にとりかゝつた時に知り合つたからですわ…生活にまだ傷がつかなかつたからですわ！…あゝ！ 私は貴女のやうにやり直せるものなら何んだつて手離してしまひますわ！ 私は今日、もつと元氣に…』

『誰も、完全に自分の生活の主人ではないよ、モニック』

だがアニックは考へた。『私自身のことのために何んといふ敎訓であらう！』

『私だつて結婚しなかつたら、貴女のやうに、自由で、どんな誤謬を犯したといふ後悔もなかつたでせうに…でも貴女もやがてお母さんにおなりになる…貴女もやつぱり、讓歩なさるでせう。お考へになることゝは別に…』とモニックは言つた。

アニックは默つて彼女を抱擁した。



廣島女人聯盟講演會

大谷藤子

五月廿二日　午后七時半
廣島市立町崇德教社

プログラム

一、開會の辭　合屋梢氏
一、聯盟員の挨拶　住岡香月野氏
一、必要に迫られた表現　葵イツ子氏
一、婦人職業の二つの使命　新妻伊都子氏
一、旋風の中に立ちて　馬場孤蝶氏
一、婦人の社會的地位の變遷について　織本貞代氏
一、閉會の辭

聽衆五百。大部分が女性でしたことは非常に心强い事でした。眞面目な向上心が會場に充ち〳〵た事が感じられ、女人藝術と女人聯盟の存在がハツリと水郷廣島に深い根を下した。この第一聲は驚くべき大きな波紋を描いて人々に叫びかけた事を信じる。

講演會雜記

廿一日の朝。明日の發會式と講演會の準備に緊張しきつてゐた支部へ長谷川先生御病氣との電報。合屋さんの顔色がさつと青ざめる。支部員一同、呆然と言葉もない。早速お見舞と御相談のため長距離電話を女人藝術社へかける。第一に合屋さんがベソをかきはじめる。宣傳の氣力を拔かれて、しよんぼり椅子に腰かけてゐる住岡さん。松村さんが大きな目をむき出してなげく。

それでもどうやら活動をはじめた。東京から織本氏が御來援下

讀者通信

京都　牧綾子

去年の四月頃からの讀者です、此の頃では自分で一冊の「女人藝術」を持つていますが、去年などは、聯盟員の長谷川さんにいつも借りていました。私は現在は京都××につとめてゐますが、澤山愛讀者をこしらへましたから喜んで下さい。私の友達は全部讀者です。みんな貧乏人の娘ですが、くぢけないで働いてゐます。中でも四人程が一番話しあへるのです。勤務中は話をすることが出來ませんから午後六時半頃仕事をおへて歸へり道に四條高倉から出町までボツボツあるきながら四人で大いに氣エンをあげて思ふ存分話しあふのです、大分道程がありますのでお腹がへるとお金を四人とも若し持つていたら十錢のキツネうどんをたべます、うどんはおいしいです、けれどここには店員の數に比較して話せる人はほんとに少いです、男の店員などわけのわからない奴が多いのです。女でも十分の一程しかありません、私はよく女人藝術にレポを送つてもらつたとか、なんとか書いてあるので私もほし

さる事になりすつかり元氣づく。丁度馬場孤蝶氏が廣島に御滯在中なので新聞社を通じて氏の御講演をお願ひする。これで華々しくなつた。何もかも具合よく進行、宣傳にも活氣がつく。こゝで自慢しなければならない事は支部員の協力と熱誠だ。實に氣持よく働いて下さる。

廿二日夜。七時頃から聽衆がゾロ〳〵と押しかける。會場の前を丸髷の婦人が二三人連れで歩いてゐる。この人たちは素通りかなと思つたら會場へ吸ひこまれる。嬉しくて握手したくなつた。

警察から正服三名、私服一名、出張して意地の悪い眼をギロ〳〵光らせる。あの人達にも血が通つてゐるのだらうか。通つてゐるとしたら、どんな土色をしてゐるだらうなどと考へる。何しろ入口の正面で椅子へ腰かけて反りかへつて威張つてゐるのには弱つた。裝飾品としては、あまり殺風景なのでどこかへつまんで持つて行つてやれたらと嘆息する、本部から寄贈の繪葉書（女性進出行進曲）を會衆一同に進呈した。そして蓄音機で行進曲を奏し、和やかな氣分になる。

合屋さんの開會の辭を聞く時、横顔をみたら何だか目がくぼんでゐるやうな氣がした。無理もない。この何日かの間合屋さんの心勞と云つたら言葉につくせないほどだつた。眠れない〳〵とこぼしてゐた。だから眼がくぼんだのだらう。住岡さんの講演は上出來。悲憤慷慨と云つた熱があつた。葵氏の講演に盲目××の「中止」が投げられる。いきなり「中止」と云つたので、葵氏は暫らくぼんやり立つて居られた。「官憲横暴」「かよはい女性を虐めるな」等々の野次がとぶ。こゝにおいてもう一度つまめるものなら××をつまんで何處かへ捨てゝやりたいなあと考へる。この時から會場に一脈の鋭い緊張味が漂ひはじめる。織本氏が遅れていらつしやつたので横暴な盲目が講演を妨げる事を注進に及ぶ。「では氣をつけませう」と靜かにおつしやつた。昂奮してゐた支部員の心を靜めるやうなお言葉だつた。新妻氏、馬場氏、織本氏の御講演は、靜粛な中に大きな迫力をもつて滯りなく終つた。この講演會には隨分遠方から出て來られた方がある。塚本さんなどは自動車で二時間もかゝるところから來て下さつた。

廿三日。諸先生を中心に支部員一同、茶話會を開いた。午后から馬場氏、新妻氏、織本氏（支部から數名）宮島へ行かれる。

終りにのぞんで御來援下さつた諸先生並びに女人藝術社に厚く御禮申上げます。

大阪支部記

先月三十一日に新らしく入つて來られた方々とお近づきの意味で懇親會を支部事務所で開きました。全女性進出行進曲のレコードをかけまして皆さんと歌つてみました。なかなか調子が高いので高音のところへゆくと聲がかすれて出てきません。元氣のいゝ變化にとんだ大變面白い歌ですが少しむづかしい樣に思はれました。支部は毎月徐々に充實した會をもち皆まじめに勉强しております。（絲川靜枝）

いのにどうして、頼めばよいのかわからなかつたのです、これからはどうか下さい、私はまだ理論的には社會問題のことをよく知りません。政見演説のあつた時河上肇先生や、奥甚さんの話で大分わかりました。女人藝術の中の小説などに書いてある貧乏さ加げんが私の家のとスッカリ同じなのでいつも親しい氣持で讀んでゐます。

大阪　大橋　英子

私は或る市内の女學校に在學してゐる未熟なものでござゐますがこの女人藝術が出來た時からずつと今まで愛讀して來たものでござゐます。今回女人職盟加入申込票が入つて居りましたので、早速加入したくなつた次第でござゐますどうぞこの未熟な一學生を、御指導下さる事をお願ひいたします。

東京　金子　夏子

我等が女人藝術社の方々、その後も益々御健在のお樣子、何よりおよろこび申上げます。私儀永い間の讀者の一人でありましたが、あまりにも多忙の職業に就いて居りまして、聯盟の一人に加入したく思つて居りましたが、思ふ樣になりませんでした。然し、此度少し體にも暇が出來ましたので、不束な者ではござゐますが、新しく聯盟の一人に加入したくおねがひ致しました。

婦人彙報

▲松澤病院の勞働爭議

芦原將軍で名高い松澤村の府立精神病院にも浮世の風が吹き込んで勞働爭議が持上つた。同院の男子看護人百二十余名からなる親和會の代表が四月十八日副院長に、茶及びかつをぶし代月十錢、同一回の公休、組長の成績秘密報告中止の三ケ條に徹夜手當三錢五厘は安すぎる——の冷遇改善歎願書を出したのを發端とし、病院の拒絶及び主唱者の解雇、親和會の解散命令に對し、七日解雇絕體反對、親和會再興承認なる强硬態度を指示し十六日看護婦八十名も之に合した。同病院看護人の給料は初任日給六十錢で、半ケ年を經てやつと十錢の昇給、勤務時間は十二時間平均寄宿の食事は三食二十五六錢の粗惡なものである。

▲私服に持たす目潰し催淚彈

切捨御免の世の中に丸腰で持兇器犯人逮捕に向ふ私服警官は全く生命がけとあつて、催淚噴射彈を持たすことに　つた。一間半の距離を以てチユーブをおすと三尺四寸內にある相手は目潰しを食ひ數時間は無抵抗狀態になるといふ。之を丸腰の和服でもない正服が五月二十六日復職回答要求で、持兇器犯人でもない市電從業員と衝突した際使用し、女車掌を負傷させ一般の非難を招いた。東京交通勞働組合では內務大臣に抗議を出し、警視總監及日比谷署長を相手に傷害罪で告訴することとなつた。

▲日本大學のストライキ

專門部學生八百名盟休中の日大は廿七日午前工學部學生千名も決議文を作成し、學校設備不完全、圓谷學監不信任、學友會自治徹底を要求し、學校當局の一蹴によつてストライキに入つた。

▲細民街に訪問婦

細民家庭を訪ね直接の種々な相談相手となる爲市の社會局では三十二名の專門學校大學出の若い婦人を訪問婦として六月初旬から三十二地區の方面事務所に配屬して仕事にとりかゝることになつた。

▲產兒制限相談所報告

やうやく眞摯に考へられてきた產兒制限問題の實地指導の目的で馬島僴氏等に依て創設された芝公園內の愛兒女性協會產兒相談所の開設以來四月迄の三ケ月間の成績は經濟上五割八分、多產三割二分、病弱一割といふ數字の要求率で、經濟的地位の類別は月收百圓以下の薄給者が多く以上のものは僅かに二割一分にすぎない。年齡上類別は二十六歲三十五歲が六割、產兒の多寡は四人——七人產んだ人が半數を占めてゐて、非常に多い者や又少ないものは僅く少數である。

▲木賃宿値下げ競爭

一泊二十五錢の宿泊料もとどこほりがちな深川本所方面の木賃宿は、江東橋際に市營無料宿泊所が出來てからそちらに客を奪はれるので、組合幹部が寄合ひ十錢値下げの協議をしたがまとまらず、少數幹部は勝手に五錢値下げをしたので他の連中がそれに對抗するため十五錢値下げをして十錢の宿泊料にしますがと兩國署にとゞけ出したが、署では之に對して干涉はしてゐない。

▲新興劇團と市內劇場の提携

松竹の大劇場封鎖に依て手足をおさへられた新興劇團が最近松竹の系統に屬しない市內各劇場主からの提携申込みによつてこの方面に進出しはじめた。之は松竹が役者並に映畫の獨占を目的としてゐるため小屋はあつても興行のしにくくなつて來た劇場主たちの自分自身をもたすける一つの方法で、之によつて兩方の道を開いてゆく事になつた。

▲朝鮮間島の暴動

三十日午後咸鏡北道對岸頭道溝、二道溝、三道溝、龍井村に朝鮮人の暴動が起つた、之はその數日前領事館警察が朝鮮人を檢擧したことからうつ積してゐた反感が爆發したもので、參加人員は約三百名各隊に分れ電信電話を破壞し朝鮮との連絡を斷ち、頭溝道では朝鮮人民會公立普通學校及民家半數を燒拂ひ各所に宣傳ビラを散布し龍井村では東拓支店へ爆彈二個を投じ、三道溝、龍井、局子街間の橋三ケ所破壞し天圖線は一時不通になつた。

▲退職辭令取消しの訴願

小學校令第五十條には「免職又は免許停止の場合には訴願を許す」とありながら、退職休職について訴願を許す旨の明文がない爲從來不當な退職又は休職に對しても行政訴願をした者はなかつたが今度八王子第一尋常小學校及加住尋常小學校の元教員三名は、布施辰治氏他二名の辯護士を代理人として十四日牛塚東京府知事を相手どり田中文相に「退職辭令取消し」の裁決要求の訴願をした。若し之が認められゝば從來泣きね入りの教員連にとつては重大な事で、その成行は頗る注目されてゐる。

▲帝都非常時總動員の演習

帝都非常の變災に備へるために市民團體的訓練方法は最近具體案が出來、明年度、東京府、市、警備隊司令部、憲兵隊、警視廳の五機關が協力して一大總合的大演習を行ふ事になつた。その豫備訓練として本年中に部分演習をする。參加團體は在鄕軍人靑年團少年團女子靑年團靑年訓練所の五團體。

▲最初の調停法成功

日本最初の調停法に依る湯淺伸銅會社の爭議は、二十日午前調停成立し我國勞資紛爭史上に一新紀元を劃した。

▲榮養不良の寄宿舍職工

最近都下の大小工場は不景氣のため極端に消極的經營方針を以て人件費の節約につとめ、寄宿舍を持つ工場では職工のその日〳〵の食物にまで手加減するやうになつた。元來職工の食費は一日二十錢足らずでたゞお腹がはるといふだけで職工の總ては動物性の脂肪缺乏で健康上恐ろしい狀態に置かれてゐる。警視廳工場課もおどろいて食糧改善を警告した。

▲ナイヅ女史補はる

ガンヂー氏及びチャブジ氏の後を承け印度の反英抗爭運動を指揮してゐた詩人ナイヅ女史も廿一日ダルサナに於て官憲に逮捕された。女史の後をついで運動の指揮者として立つのは多分當年六十一歳のガンヂー老夫人である。

▲空中の勇婦

二十二歳の若い英國娘アミー・ジョンソン孃は父親から買つて貰つた中古の飛行機に單身乘つて、クロイドンの飛行場から一萬哩を突破してカルカッタに着き、英濠飛行のレコードホルダー、ヒンクラーの記錄より二日間短縮した時日でアミー、アミーと英國中の女をうならせてゐる。

▲七萬人に達した海上失業者

海運界不況でマドロスの失業地獄は想像以上で現在船員手帳を持ちながら陸上にある者は七萬人で急遽救濟を要する者一萬人近くに達してゐるので日本海員組合は五月の組合大會後具體運動に入り、遞信大臣に船員失業救濟事業促進運動を陳情すると共に全國各港に海上失業者大會を開催した。

▲全國に三越の大分店網

最近の不景氣を逆に當込んで三越では更に尨大な計畫を立て、橫濱、京都、名古屋、札幌、仙臺、廣島、臺北、基隆等全國主要都市四十八ケ所に大分店を建設し三越大百貨店網を全國に張る理想に着々準備中とある。

▲赤ン坊救助の實際運動

恐るべき子供殺しが頻發するので、內務省社會局內中央社會事業協會では兒童監護會を興し、暗から暗に葬られる兒童保護救濟の實際運動をはじめる事になつた。この會の目的はもらひ兒に出されるやうな不幸な子供を引取つて各種の社會事業團體及び篤志の家庭にあづけ養育するので、子供の處置に困つてゐる者などには適當の方法を講じる。

▲聞いて樂園見て地獄

宣傳と實際の相違に失望して引揚げるブラジル移民が漸く多くなつてきた。最近歸國した二家族の話しによると、移民のみじめさは、卅年者一日の賃銀三十錢で生活費は南京米の粥に鹽をなめても四人家族五十錢はかゝる。働いても之では食へないから、コソドロやかつぱらひが多く百鬼夜行の有樣である。今の移民に歸國の二百圓を與へれば九分迄引揚げるであらうと、海外移民組合ではそんな筈はないと打消してゐる。

▲ソヴエートの敎育展覽會

產業に敎育に滔々效果を上げつゝあるソヴエート聯邦は七月一日から八月十五日までレニングラードに於て全聯邦敎育展覽會を開催する。參觀希望者に對しては一般に便宜をはかつて、低廉な經費で觀光をさせるといふから希望者は至急申込む事、レニングラードは個人、團體共に自由だが、その他は十人以上の團體である事、敎育家、學生、初等敎育關係の社會的活動家等を希望してゐる。主として左の五種の日程による。

一、レニングラード七日二五弗

二、レニングラード五日モスクワ五日で四五弗

三、レニングラード五日キーエッ二日五〇弗

四、レニングラード五日モスクワ(鐵道)五日クリミヤ八日ベフチサライ、ヤルタ、セワストポール、見物海路オデッサ二日途中五日、二五日、で一二五弗

五、レニングラード五日 モスクワ(鐵道)キスロヲドスク(自動車)コーカサス二日 ナクチック二日ヴラヂカフカス(自動車)チフリス(鐵道)二日 ベトウーム(海路)二日 オッサ(鐵道)一日 キーエフ二日 途中九日 三〇日で一六五弗

▲「國際消費組合デー」

七月五日第四回組合デーのアピールを市外大崎町關東消費組合聯盟から發表した。「天降り產業組合反對」「必用品にかゝる消費稅・關稅撤廢」「資本家の獨占的價格釣上げ絕對反對」等々。

編輯後記

石の上にも三年といふ諺がある。三年たてば生れた子も三つともいひ、商業は三年が食ひ込みともきいてゐる。本誌もここまで歩んできたが富士山登りとすれば漸く裾野を越え一合目に辿りついたのである。これから息切れしたりへタばつてしまつては何にもならない。愛讀者よ金剛杖とも强力ともなつて引つぱりあげて下さい。

先輩方のよき理解と同情にも感謝を捧げる。私事ではあるが三上氏に負ふ恩も深い。執筆家、編輯部、女人聯盟各支部に負ふ努力はもとより大きい。

だが、これは私一人の仕事ではない全女性諸氏の肩にかかる性質のものだ。お禮を述べるのは却て潜越な氣がする。そしてこの「女人藝術」一個の存在すら確固なるものとなし得ないでは、新興日本の女性の恥辱だと言ひたい。

本號記載諸氏からの御回答は短文だが寸鐵である。中村武羅夫氏のは「不同調」などで御經驗があつた思ひやりがあふれ辱けなく、堺眞柄氏の紬だとの評は考へなければならないと敎へられた。

國民大不況の時ではあるが、本誌は女性の心の糧であることの宣傳を新日本の健康なる女性諸氏にすすめて下さい(時雨)

女人藝術が難かしいとハふ言葉を時々聞くが、ある點にてこれからの人は難かしい用語も讀みこなす必要がます〳〵多くなると思ふ。で、讀み惡い論文と尤も一般的な啓蒙的な文章にひらがなをつけて見た。これは三週年紀念の大きな改革の一つのつもりである。ソビエットグラフは一寸手に入り難い最近のものばかりで勞働者と農民の國になつて十二年ソビエットの順調な發展をうかゞふ一端になつて、支配階級の彈壓と、合理化の洩らした生活の喘ぎの中にも常にこぶされるはるかにかゞけられた赤い灯の役目を務め得れば幸である。(素子)

本箱に「女人藝術」の合本が一つ又ふえたぞ。三つの誕生日を迎へるよろこびで、編輯室は一ぱいだ。あしたに持つのぞみときのふに持つた思ひ出で、隅から隅までに充ちてゐる空氣のどよめき、校正の忙しさと、三週年紀念に朝日講堂で開催される講演會の準備にキリキリクルクルのみんなの顔のよさ。出無精の社長さんからが珍らしくとび廻つてゐるのをみると、私達みたいに健康ぢやないのに、ほら若いものしつかりやれよとつつかれると思ひ。それから今度の紀念號は、特別編輯號でも現在の深刻な不景氣に、一寸の高さのお金でも買ひにくいでせうと定價はいつもの通り、特別拂込みの濟んでる方は次に繰込みます。聯盟員で住所變更なさつた方達はどうか葉書一枚はりこんで番地を通知して下さい、それから五月八日東京中央局消印で長谷川氏宛に御手紙をよこされた汪梅梅氏及び女子商業學校卒業某氏恐入りますが社宛御住所御知らせ下さい。(みどり)

はげしい世相の變化の中で、さま〴〵の批難や攻擊に抗してその位置を守りつゞけ飛躍しつゞけてきた女人藝術が、今三週年をむかへると云ふ事實は驚異ににたものを私にあたへる。この三年間いろんな障害にもひるまなかつた一つの力!その力が示すであらう今後の進展を誓ふために、この際讀者諸氏の堅實な、熱烈な支持を期待したい。單なる、なぐさみやお道樂氣分からでなく、眞劍な力を女人藝術のためにつくしてくださるやうに切に希望する。(美子)

日比谷音樂堂で催された一週祀念藝術祭の青天井が懷しいと思つてゐるまに、素晴しい發展振を見せて三歳の誕生日を迎えるのだ。友よ叫ばう、心からの萬歳を!胸底から迸る喜びを握つて、明るく堅實に進む希望に燃立ちながら、進歩のない自らが憂鬱になる。だが、階級戰線に立つて勇しく消え去つた魂を偲ぶ時云ひ難い涙と共に秘やかな力が偲びこんで、强くなれ强くなれと私のハートは一ぱいだ。(美智子)

校了近い日、今日は流星群の中へ地球が頭をつつこむと空ばかり眺めてゐた人もあつたが變な雲が現れて雨が降つて來たお蔭で空氣はさつぱりしたがアマチュア天文學者は一せいに空をにらんだ事だらう。十時過ぎ私達が歸へる頃にはもう雨はやんでゐたが空は暗かつた。(優子)

昭和五年六月十五日印刷
昭和五年七月一日發行(毎月一回一日發行)

送料一部壹錢五厘

定價	
1部	40錢
6部	2.40錢
12部	4.80錢

誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ
郵便切手代用は一割増の事。

發行印刷者——長谷川ヤス
編輯者——素川絹子
印刷所——秀英舍
大賣捌——東京堂 北隆館——大東館 東海堂

發行所 東京市牛込區左内町三十一番地 女人藝術社
振替東京七五八二五 電話牛込(24)一七八九

實際經濟問題講座

私共の日常生活に一番關係の深い經濟問題が一番大衆化されてゐない。その機構が組入つてゐて複雑だからである。本講座は此の點に留意し適任者を撰擇し、生きた常識問題許りを講話したもので、絶對に類書の追隨を許さない。

1 最近日本經濟史 慶大講師 高橋龜吉
2 我國の財政と經濟 東洋經濟新報主幹 石橋湛山
3 日本金融資本論 中外商業經濟部長 小汀利得
4 國際經濟と日本 讀賣新聞經濟部長 山崎靖純
5 日本工業經濟論 前九州帝大助教授 小島精一
6 日本工業技術論 明治大學教授 倉橋藤治郎
7 新産業科學 發明工業社社長 小野俊一
8 日本産業組合實勢 産業組合中央會理事長 千石興太郎
9 我國勞働農民問題 日本大衆黨 河野密 慶大教授 那須皓
10 投資と投機 野村證券調査部長 飯田清三
11 財界を動かす人々 時事新報經濟部長 森田久
12 現代不景氣論 講師共同執筆

豫約規程

全十二巻 六千餘頁 四六判五〇〇頁以上

會費
毎巻拂 一圓 申込金一圓
一時拂 十一圓 申込金不要
送料 一冊 十四錢

（第一回配本）最近日本經濟史

（第二回配本）現代不景氣論

發行所 東京麹町下六番町 平凡社 振替東京二九六三九

昭和三年九月六日第三種郵便物認可
昭和五年六月十五日印刷納本
昭和五年七月一日發行（毎月一回一日發行）

第三巻第七號

定價金四十錢（送料金一錢五厘）

